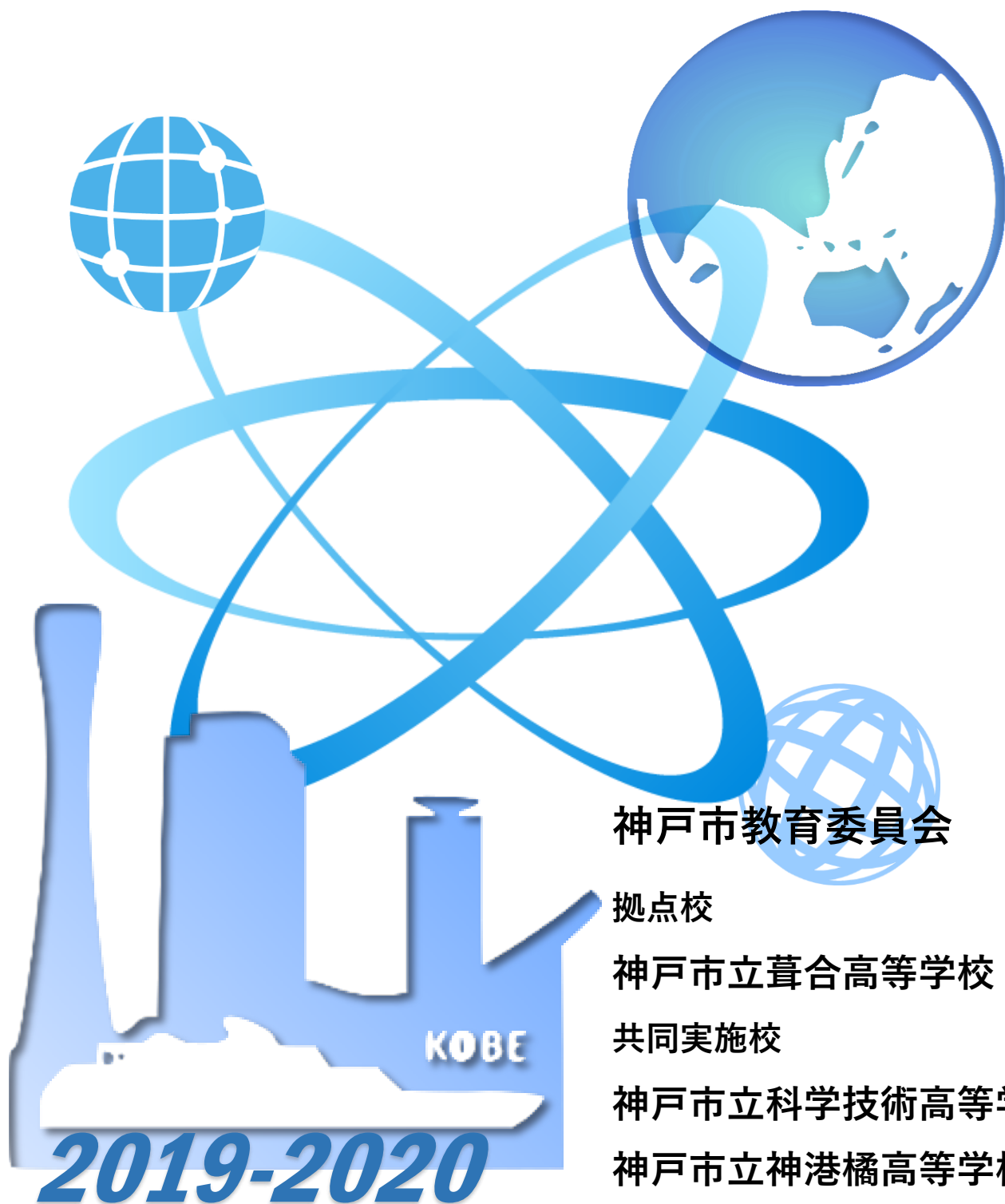


令和元年度
WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）
コンソーシアム構築支援事業

研究報告書

第1年次 令和2年3月



神戸市教育委員会

拠点校

神戸市立葺合高等学校

共同実施校

神戸市立科学技術高等学校

神戸市立神港橘高等学校

神戸市立須磨翔風高等学校

「令和元年度WWL研究開発報告書」刊行に寄せて



神戸市教育長
長 田 淳

「令和元年度WWL研究開発報告書」の刊行にあたり、日頃より、神戸市立高等学校WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業に、一方ならぬご尽力をいただいております皆様に厚くお礼を申し上げます。

文部科学省が実施している、WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業において、今年度、全国で10校の拠点校の1校として神戸市立葺合高等学校が選ばれ、7月にはアメリカ、スウェーデン、オーストラリア、台湾、フィリピンから高校生を招聘し、高校生国際会議「インターナショナル・コンファレンス」を、12月には課題研究や探究活動に取り組んでいる高等学校が、互いに発表し学び合う「WWL等課題研究交流発表会」を実施しました。

今後、WWL事業拠点校である葺合高校が、スーパー・グローバル・ハイスクール事業（文部科学省指定事業）で培った、国際機関や海外の大学教員による英語での講義やワークショップ、高校生国際会議「KOBE 四大陸高校生サミット at Fukiai」の開催といった成果を踏まえ、共同実施校である科学技術高校、神港橋高校、須磨翔風高校と国内外の事業連携校、事業協働機関とともにAL（アドバンスト・ラーニング）ネットワークを構築していきます。またその集大成として、令和3年度にはALネットワークでつながった国内外の生徒を招聘し、「ワールド・ワイド・コンファレンス（WWC）」を開催する予定です。

神戸市教育委員会としましては、「Society 5.0にとどまらず、その先にあるSociety 5.2の世界を見据えることができる超未来型グローバルリーダー育成」を目的として当事業に取り組んでいきますので、引き続き温かいご支援をいただきますよう、よろしく願いいたします。

令和2年3月

目 次

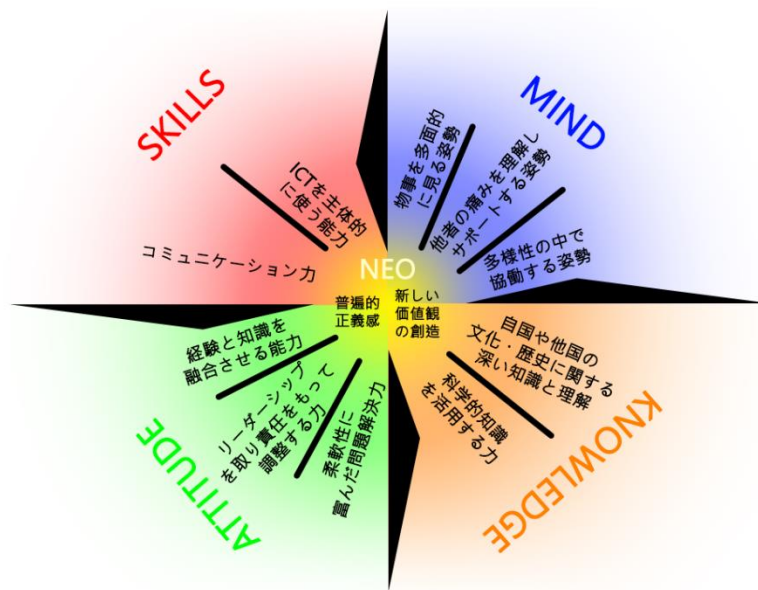
	巻頭言「令和元年度 WWL 研究開発報告書」刊行によせて WWL KOBE 構想図 1年の軌跡（写真）	1 2
I	2019年度 WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築 支援事業構想計画書（概要）	6
II	研究開発完了報告書	9
III	AL ネットワーク 1 共同実施校の取組1 神戸市立科学技術高等学校 2 共同実施校の取組2 神戸市立神港橋高等学校 3 共同実施校の取組3 神戸市立須磨翔風高等学校 4 2019年度全国高校生フォーラム 5 第1回 WWL 等課題研究交流発表会 6 第1回 WWL フォーラム	25 29 30 31 32 33
IV	学際カリキュラムの開発 1 本年度の取組概要 2 家庭基礎 3 情報の科学 4 グローバルスタディーズ I A（GSIA） 5 グローバルスタディーズ II B（GS II B） 6 グローバルスタディーズ II C（GS II C） 7 グローバルスタディーズ III C（GS III C） 8 第1学年 総合的な探究の時間 9 第2学年 総合的な探究の時間	35 38 40 42 44 46 48 50 52
V	高度な学び 1 本年度の取組概要 2 Forefront of Global Health（WHO 神戸センター） 3 JICA 関西 高校生インターンシップ 4 英語スピーチ・プレゼンテーションの技法（神戸市外国語大学） 5 NPO 講座 赤ちゃん先生 6 グローバルスタディーズ研究会(GSS)の活動と活躍	54 55 56 57 58 59
VI	協働グローバル創造活動 1 本年度の取組概要 2 2019 KOBE International Conference at Fukiai 3 オーストラリア短期海外研修 4 イオンワンパーセントクラブ アジアユースリーダーズ 2019 5 ラグビーワールドカップ 2019 交流会 6 第4回神戸コミュニティーフォーラム 7 臺中市立臺中第一高級中等学校との交流 8 ワン・ワールド・フェスティバル for Youth 2019	61 62 66 69 71 73 75 76
VII	成果と課題 1 WWL プログラムの検証 2 高校生のリスクに備え対応する能力を育てる 3 令和元年度 WWL 事業取組の進捗状況の検証について	77 82 83
資料	1 平成 31 年度教育課程表 2 WWL フォーラム授業指導案 3 課題研究 4 葦合高等学校取組一覧表 5 文部科学省視察記録 6 運営指導委員会記録 7 検証委員会記録 8 メディア報道	84 93 96 114 122 125 133 135

WWL KOBE 構想図



WWL が育成を目指す
超未来型グローバルリーダーとは
ゆるぎない
「Neo MAKS」を持った人材

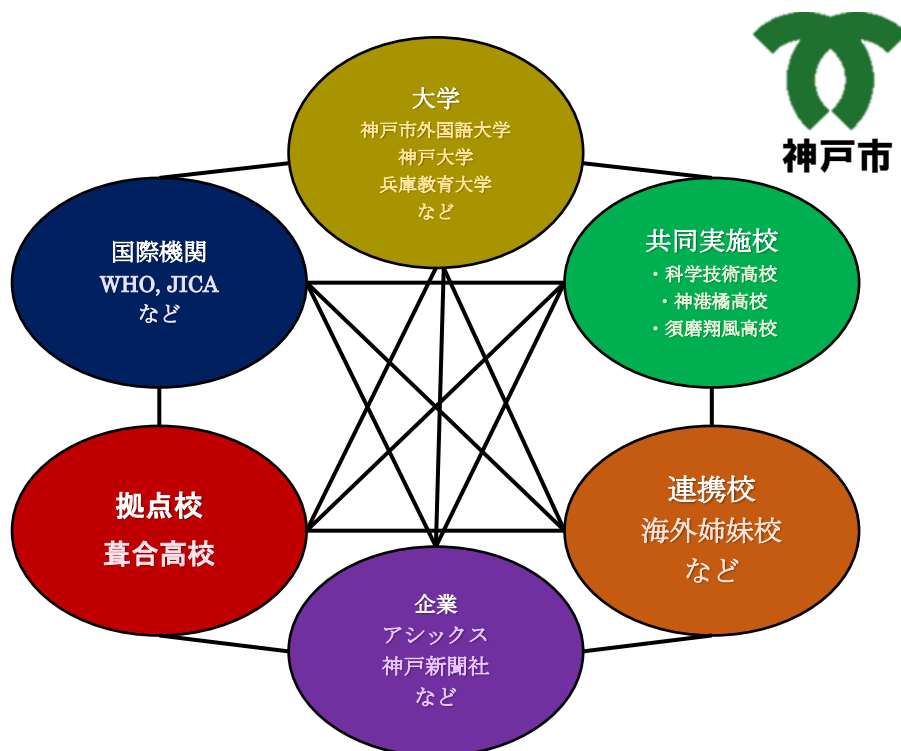
Neo MAKS 12 の力



3つのアプローチ

- 学際的
学び
- 高度な
学び
- 協働
創造活動

AL ネットワーク図



1年の軌跡

5月



フェニックス(Sweden)高校来校



WHOワークショップ

7月

International Conference



8月

JICA インターンシップ





アジアユースリーダーズ



9月



ウエストボーングラマースクール(Australia)来校
(プレゼンテーション)



神戸市外国語大学 野村先生講義
(スピーチ・プレゼンテーションの技法)



神戸市外国語大学 中島先生講義
(課題研究のHop Step Jump)

10月



神戸フィールドワーク



赤ちゃん先生



ラグビーワールドカップ

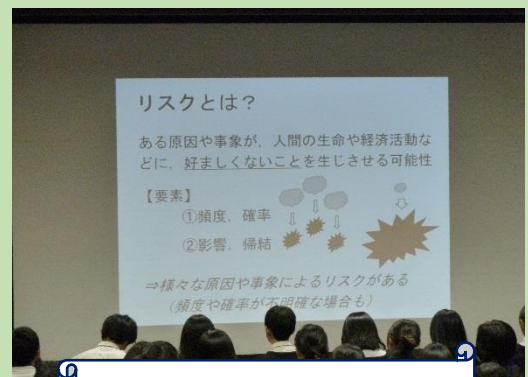
11月



バルセロナ研修



道徳の日



兵庫教育大学西岡先生講演
(リスクマネジメント)

12月



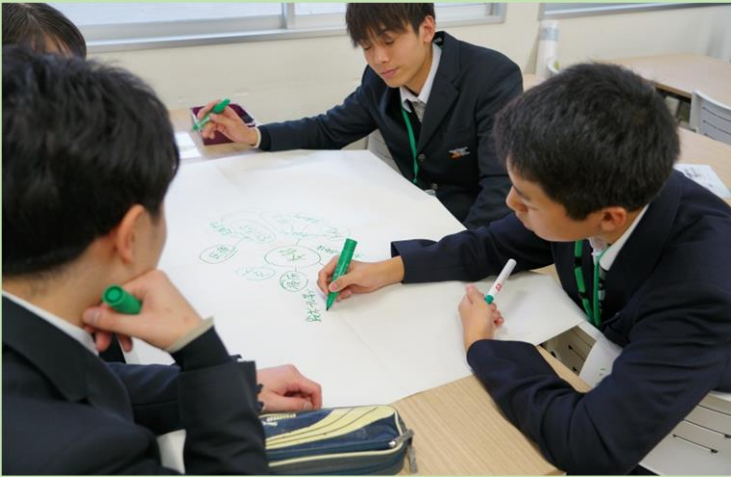
神戸コミュニティフォーラム



台湾修学旅行
(ディスカッション・フィールドワーク)



**全国高校生フォーラム
(3校合同発表)**



**WWL等課題研究交流発表会
(11校参加)**



1月

WWLフォーラム



1. 2019年度WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム

構築支援事業構想計画書(概要)

期間：2019～2021

管理機関：神戸市教育委員会

事業拠点校：神戸市立葺合高等学校

実施都道府県：兵庫県

1. 構想名

Society 5.2 の世界を見据える超未来型グローバルリーダーの育成

2. 構想概要

SGH の成果を踏まえ、新たな資質・能力を加えた「超未来型グローバルリーダー」育成を目標とする。Society 5.0 において、かつて経験のない課題と対峙する局面では、普遍的な正義感を抱きながら、新しい価値観を創造できる人材が必要である。その人材には AI などの最先端技術を駆使しながら、新しい発想に基づく産業などを創造する力が求められているのではないだろうか。本事業では、若竹のようなしなりを有し、受容・批判・主張を高度なバランス感覚で、他者との協働をリードできる人材育成を目指すものである。そのために新カリキュラムとネットワークを設定し、国内外の各機関と協力し、それらを有機的に結びつける形で AL を構築することを考えている。その集大成として、「ワールド・ワイド・コンファレンス (WWC)」を開催したい。目指すは Society 5.0 にとどまらず、その先にある Society 5.2 の世界を見据えることができる超未来型グローバルリーダー育成の場である。

3. 研究開発・実施体制

		機関名・学校名・情報						代表者・校長名	
管理機関		神戸市教育委員会							
事業拠点校		神戸市立葺合高等学校 (公立)						大野 毅	
			学科・コース名	1年	2年	3年	計	学校規模	1080
		対象:	国際科	80	80	80	240	1080	
			普通科	280	280	280	840		
対象外:					0	0			
事業共同実施校		神戸市立科学技術高等学校 (公立)						高島 日出男	
			学科・コース名	1年	2年	3年	計	学校規模	1080
		対象:	機械工学科	120	120	120	360	1080	
			電気情報工学科	80	80	80	240		
			都市工学科	80	80	80	240		
		対象外:	科学工学科	80	80	80	240		
					0	0			
①		神戸市立神港橋高等学校 (公立)						谷口 元備	
			学科・コース名	1年	2年	3年	計	学校規模	960
		対象:	みらい商学科	320	320	320	960	960	
							0		
対象外:					0	0			
②									
			学科・コース名	1年	2年	3年	計	学校規模	960
		対象:					0	960	
							0		
対象外:					0	0			

	③	神戸市立須磨翔風高等学校					(公立)	川畑 達雄	
			学科・コース名	1年	2年	3年	計	学校規模	
		対象:	総合学科	280	320	320	920	920	920
		対象外:					0		
事業協働機関 (国内外の大学, 企業, 国際機関等)	①	神戸市外国語大学						学長 指 昭博	
	②	神戸大学						学長 武田 廣	
	③	兵庫教育大学						浅野 良一	
	④	大阪大学 高大接続部門						部門長 進藤 修一	
	⑤	京都大学東南アジア研究所						山本 博之	
	⑥	兵庫県立大学 大学院減災復興政策研究科						青田 良介	
	⑦	甲南大学						学長 長坂 悦敬	
	⑧	アテネオ デ マニラ 大学						Dr. Jayeel Cornelio	
	⑨	アシックス マーケティング統括部						マネジャー 伊藤 卓郎	
	⑩	日本イーライリリー株式会社						広報課長 仁井 幸江	
	⑪	神戸新聞社 阪神総局						総局長 金居 光由	
	⑫	WHO 神戸センター						上級顧問官 野崎 慎仁郎	
	⑬	JICA 関西						所長 西野 恭子	
	⑭	兵庫県ユニセフ協会						事務局長 福井 康代	
	⑮	神戸ユネスコ協会						会長 加藤 義雄	
	⑯	神戸市役所						市長 久元 喜造	
	⑰	KIC (神戸国際協力交流センター)						理事 伊藤 正	
	⑱	兵庫国際交流会館						館長 米川 英樹	
	⑲	アメリカ ベルビュー市消防局						防災監 Montanana	
	⑳	NPO 法人 フキックスコルプス						代表 西尾 勝	
	㉑	認定 NPO 法人 ソルトパヤタス						事務局長 井上 広之	
	㉒	認定 NPO 法人 テラルネッサンス						理事長 小川 真吾	
	㉓	Table for Two						代表 小暮 真久	
	㉔	CODE (海外災害援助市民センター)						事務局長 吉椿 雅道	
	㉕	認定 NPO 法人 Future Code BYCS						学生代表 小野 智博	
	㉖	開発メディア Ganas						編集長 長光 大慈	
	㉗	NPO 法人 ママの働き方応援隊						理事 合田 三奈子	
	㉘	神戸親子療育サークル						代表 竹下 あきこ	
事業連携校 (国内外の 高等学校等)	①	横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校					(公立)	栗原 峰夫	
	②	台中市立台中第一高級中学校 (台湾)					(公立)	陳 木柱	
	③	FENIX 高校 (スウェーデン)					(私立)	Martin Alkemark	
	④	Westbourne Grammar School (豪)					(私立)	Meg Hansen	
	⑤	Sammamish High School (アメリカ)					(私立)	Scott Powers	
	⑥	アテネオ デ マニラ 高校 (フィリピン)					(私立)	Maria Victoria Panlilio Dimalanta	
	⑦	Grove Academy グローブアカデミー (スコットランド)					(私立)	Graham Hutton	
	⑧	Goenka Public School コエンカ高校 (印)					(公立)	Neeta Bali	

4. 事業体制

課題項目	実施場所	事業担当責任者
(1)文理融合を踏まえた拠点校の学際的なカリキュラム・マネジメントの構築	神戸市教育委員会 兵庫教育大学 葺合高等学校	蔵本 朗 西岡 伸紀 (カリキュラム・アドバイザー) 長谷川 伸
(2)事業共同実施校とのネットワーク作り	神戸市教育委員会 兵庫教育大学 葺合高等学校 共同実施校・科学技術高等学校 共同実施校・神港橘高等学校 共同実施校・須磨翔風高等学校	蔵本 朗 西岡 伸紀 今池 康 橋口 徹 清家 豊 渡邊 孝子
(3)大学・企業・自治体・国際機関等との連携を基盤とする社会に開かれた高度な学びのネットワークの構築	神戸市教育委員会 葺合高等学校 神戸市外国語大学 神戸大学 WHO 神戸センター JICA 関西	仲野 学 茶本 卓子 中嶋 圭介 山下 晃一 野崎 慎仁郎 西野 恭子
(4)事業共同実施校・国内外の連携校と実施する協働グローバル創造事業（ワールド・ワイド・コンファレンス）に向けての準備	神戸市 神戸市教育委員会 葺合高等学校 共同実施校・科学技術高等学校 共同実施校・神港橘高等学校 共同実施校・須磨翔風高等学校 海外等を含む事業連携校 神戸大学	内藤 康史 福岡 浩明 仲村 智子 橋口 徹 清家 豊 渡邊 孝子 グリア ティモシー ショーン (海外交流アドバイザー)
(5)超未来型グローバルリーダーに必要な資質 12 の力「NeoMAKS」による評価及び検証	神戸市教育委員会 神戸大学 兵庫教育大学 葺合高等学校	福岡 浩明 山下 晃一 西岡 伸紀 村上 ひろ子

(別紙様式3)

令和2年3月 日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住 所 兵庫県神戸市中央区東川崎町 1-3-3-4
管理機関名 神戸市教育委員会
代表者名 教育長 長田 淳 印

令和元年度 WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和元年5月16日(契約締結日)～令和2年3月31日

2 拠点校名

学校名 神戸市立葺合高等学校

学校長名 大野 毅

3 研究開発名

Society 5.2の世界を見据える超未来型グローバルリーダーの育成

4 研究開発概要

SGHの成果を踏まえ、新たな資質・能力を加えた「超未来型グローバルリーダー」育成を目標とする。Society 5.0において、かつて経験のない課題と対峙する局面では、普遍的な正義感を抱きながら、新しい価値観を創造できる人材が必要である。その人材にはAIなどの最先端技術を駆使しながら、新しい発想に基づく産業などを創造する力が求められているのではないだろうか。本事業では、若竹のようなしなりを有し、受容・批判・主張に対して高度なバランス感覚を保ちながら、他者との協働をリードできる人材育成を目指すものである。そのために新カリキュラムとネットワークを設定し、国内外の各機関と協力し、それらを有機的に結びつける形でALを構築することを考えている。その集大成として、「ワールド・ワイド・コンファレンス (WWC)」を開催したい。目指すはSociety 5.0にとどまらず、その先にあるSociety 5.2の世界を見据えることができる超未来型グローバルリーダー育成の場である。

(2) 実績の説明

【実施体制の整備】

- a. 管理機関の下、拠点校を中心として組織的に研究開発・実践に取り組むための「WWL 推進委員会」を毎月開催した。また年度当初共同実施校との情報共有と連携を促進するために、管理機関と拠点校担当者が共同実施校3校を訪問し、WWL 概要、共通テーマ「リスク」、課題研究を中心としたカリキュラムマネジメントについて説明した。8月8日に兵庫教育大学の西岡伸紀カリキュラムアドバイザー、各校教頭、担当者等を招集し、12月26日葺合高校において開催した「第1回 WWL 等課題研究交流発表会」の実施にむけて、事前に「運営委員会」を開催した。次年度からは連携校、協働機関との情報共有と連携を促進するために、各団体の担当者等を招集し「神戸ALネットワーク会議（仮称）」を実施する。連携校である横浜市立サイエンスフロンティア高等学校はSSH 事業指定校であるが、6月に拠点校校長と WWL 担当者が訪問し、12月の第1回 WWL 等課題研究交流会への参加や相互交流を依頼した。
 - b. 毎月開催される神戸市立高等学校長会において、管理機関より、拠点校と共同実施校における、WWL 事業の取組の進捗状況等の情報共有がなされた。また拠点校より、連携校等への情報共有がなされる体制を整備した成果として、12月に拠点校葺合高等学校において、「令和元年度 WWL 等課題研究交流発表会」を開催し、拠点校、共同実施校、連携校、及び近隣の SGH・SSH 指定校等が共に学びの成果を発表し、交流することができた。
 - c. 学校教育課長を中心に構成した「WWL 推進支援チーム」において、以下のような支援を行った。
 - (1) 文部科学省からの情報の提供
 - (2) 文部科学省へ拠点校、共同実施校の取組に関する連絡
 - (3) 他の神戸市立高校・中学校への拠点校、共同実施校の取組の広報活動
 - (4) WWL 運営指導委員会の開催準備
 - (5) WWL 検証委員会の開催準備
 - (6) 拠点校、共同実施校の実践に関する助言
 - (7) 令和元年度開催の「インターナショナル・コンファレンス」、「World Date Viz Challenge 2019-Workshop on Date Visualization」に向けた予算措置、さらに、12月17日（火）兵庫県教育委員会主催の「ひょうごグローバル・リーダー育成推進懇話会」に学校教育課長が委員として参加し、県内 WWL、SGH 校、アソシエイト校、地域協働事業実施校との情報交換を行い、拠点校、共同実施校の取組がさらに充実したものとなるよう支援を行った。拠点校の校長は、校内教員向けに、管理機関による WWL 事業の説明会、大学教員による探究活動の研修会などを開催した。また、バルセロナ研修にも引率者として同行し、訪問したバルセロナ市 INS の高校（Institute Vila de Gracia）と授業等での交流を行う約束を交わした。
 - d. 「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業実施要項」（平成31年1月23日文部科学大臣決定）における事業の運営に関して専門的な見地から指導、助言を求めることを目的として、「神戸市立高等学校 WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業運営指導委員会」を発足し、令和元年度は2回（第1回10月15日、第2回1月30日）開催した。委員会において、(1) 事業の内容及び研究方法に関すること (2) 事業の研究成果と課題に関すること (3) その他事業の目的を達成するために必要な事項に関すること等について、それぞれの観点から神戸市立高等学校の取組がさらに充実したものとなるよう、運営指導委員から助言等を得た。また、事業の実施状況を検証する目的として、「神戸市立高等学校 WWL コンソーシアム構築支援事業検証委員会」も発足し、令和元年度は2月7日に開催した。検証委員会において、(1) 取組の進捗状況に関すること。(2) 評価検証のための観点・基準に関すること。(3) 取組の成果に関すること等について助言を受けた後、報告書を作成して頂いた。
- 検証のために、拠点校では、Neo MAKS 力に関する4件法を中心とした調査を1年生対象に7月と2月、2年生対象に2月、3年生対象に12月に実施した。それぞれの取組の後には、生徒の

振り返り文章を記録として残している。

- e. 卒業生が近況報告のために母校を訪れることは度々あり、中には、アメリカやイギリスなど海外の大学に入学し、グローバルに活躍している卒業生もいる。しかし、管理機関がこういった卒業生の成長過程を追跡調査する仕組の構築にあたっては、個人情報に関する神戸市のセキュリティーポリシーと照らし合わせ、慎重に対処する必要があり、その方法については現在模索中である。
- f. 神戸市教育委員会は、外国人児童生徒及び保護者等を対象に、日本の学校制度や進学などの情報について、日本の学校への就学についての悩みなどの相談に応じる目的で、「外国人児童生徒にかかわる就学支援ガイダンス」を実施した。

【財政等支援】

- a. 神戸市は、データの利活用やオープンガバメントの分野の先進的都市として、世界的に知られている姉妹都市バルセロナ市と連携して、主に若者を対象としたワークショップ「World Date Viz Challenge 2019-Workshop on Date Visualization」を開催しており、今年度はWWL事業拠点校である葺合高校と、共同実施校である科学技術高校の生徒が参加して、研究発表を行った。国際舞台において発表と意見を交わすことを通して、文理融合の観点から新しい着想を得ることができた。令和2年度についても、交通費以外の費用について、予算化に向けた調整を行っている。
- b. 拠点校葺合高等学校に対して、ALT 配当を増やした。令和2年度もALTの加配を継続する予定である。
- c. 国の委託終了後も、「高校生国際会議」を実施するための海外姉妹校等生徒・教員招聘費用を、また神戸市の姉妹都市バルセロナで開催する「World Date Viz Challenge 2019-Workshop on Date Visualization」に参加するための渡航費用を、事業を継続的に実施するため、神戸市教育委員会及び他部局とも協議しながら予算化に向けた調整を行っている。

【AL ネットワークの形成】

- a. 今年度は神戸市立高等学校拠点校、共同実施校の実績づくりを第一目標とした。具体的には神戸市教育委員会 WWL 推進支援チームの下、情報共有と連携を促進するために、西岡伸紀カリキュラムアドバイザー、拠点校、共同実施校担当者等を8月8日に招集し、12月26日葺合高校において開催した「第1回 WWL 等課題研究交流発表会」にむけた、「運営委員会」を開催した。
- b. 12月26日葺合高校において開催した「第1回 WWL 等課題研究交流発表会」を開催し、普通科、国際科、商業科、工業科、総合学科という各校の特色に基づいた研究発表をすることで、教員と生徒の学びを深めることができた。また神戸市 市民参画推進局 スポーツ振興部 国際スポーツ室ラグビーワールドカップ事業担当と連携し、「ラグビーワールドカップ2019 日本大会出場チームとの地域交流イベント」を実施した。また、神戸市企画調整局産学連携ラボとは、「World Date Viz Challenge 2019-Workshop on Date Visualization」において神戸市の姉妹都市バルセロナ市における交流会で協働し、参加生徒はプレゼンテーションを通してバルセロナ市のデジタルガバメントやオープンデータの取組について学んだ。バルセロナでICTを活用したまちづくりを推進する参加者と国際舞台で意見を交わすことで、教員と生徒は未来社会における課題と可能性の着想を得ることができた。
- c. 連携機関による講義やワークショップを通して生徒が社会課題について取り組むことで、法律や経済学などの視点から解決法を模索しようとする動きが見られた。また、被災地や災害現場での医療に携わりたいと、防衛大学などの看護学部への進学も目立った。また、拠点校では令和元年度も10名ほどの生徒がアメリカ、オランダ、カナダなど海外の大学への進学を希望した。海外の大学進学が多くなっている傾向は、近年顕著にみられ、これは WWL のテーマの1つである SDGs をはじめ様々な国際問題にあたるにつれ、課題研究をまとめる過程で『開発学』など日本の大学には未だ馴染みのない専門分野の学問を求める生徒がいることがあげられる。これらの生徒に対して

TOEFL や IELTS などの英語能力試験準備、推薦状の作成を初めとする各種手続き、ひいては、奨学金の申請など多岐にわたって、学級担任や教務担当者、そして ALT などが様々な支援を行った。

- d. 兵庫教育大学教授 西岡伸紀氏をカリキュラムアドバイザーに委嘱し、拠点校及び共同実施校に対して定期的に研修・協議・指導助言を仰いだ。内容としては、拠点校で新たに設定する魅力的な学際的カリキュラムの開発と、共通テーマである「リスク」に関する調査研究であった。
- e. 令和元年7月に行われた国際・コンファレンスにおいては、5つのテーマ（教育・環境・健康・人権・持続可能性）で探究を進め、インターネットを通じ海外姉妹校と事前の打ち合わせを重ね、研究発表と解決策の提案を行った。探究活動に当たっては、連携機関にも協力を願い、特に健康分野では関係機関への訪問を重ねた。令和元年度に特筆すべきは、啓発活動を行うためのビデオやパンフレットの作成・配布、コンファレンス後の新たな実態調査など、実際に生徒達が決めた草の根の社会貢献活動を進めることができたことである。また、コンファレンスでは、大阪大学の川嶋教授から基調講演“How to Be an Innovative Global Citizen”をいただき、未来社会に必要な資質について造詣を深めた。
- f. 令和元年度の取組を校内外に発表することを目的に1月30日に第1回WWLフォーラムを拠点校で開催した。6限目は、学際的科目である、家庭基礎（1年）、情報の科学（1年）、グローバルスタディーズ2C（2年）の授業を公開した。7限目は探究活動の発表として、1年生は、神戸市内フィールドワーク発表、2年国際科は、英語によるSDGsに関するポスター発表及びディスカッション、2年生普通科は台湾修学旅行に関する発表そして、WWL 拠点校・共同実施校生徒によるバルセロナ研修報告を行った。その後、管理機関、拠点校、共同実施校が取組について発表を行った。神戸市役所市長室国際課、企画調整局産学連携ラボ、教育委員会、WWL 運営指導委員の来賓方、県内外の学校関係者、拠点校の保護者など参加者数は総計60名であった。
- g. 国際・コンファレンスに加え、令和元年度は、連携関係にある神戸市外国語大学・関西学院大学などの大学、アシックスを初めとする企業、JICA・WHOなどの国際機関などによる、グローバル社会や高齢化社会などをテーマに、31講座にわたるワークショップを開催した。特に2年後の世界・ワイド・コンファレンスを主催する1年生対象については、「探究の日」を設けグローバルな課題の解決に取り組む国際機関・NPO・企業・自治体によるワークショップを開催し、多くの生徒にリスク（社会課題）に対する知識や関心を持たせることに努めた。
- h. ・神戸市は、国立大学法人神戸大学と連携協定を、甲南大学、神戸学院大学とは包括連携協定を締結している。
・葺合高校は、ウエストボーングラマースクール（オーストラリア）、グローブアカデミー（スコットランド）、サマミッシュ高校（アメリカ）、フェニックス高校（スウェーデン）、台中第一高級中等学校（台湾）と、姉妹校協定を締結している。

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目												
拠点校	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
①学際的カリキュラム・マネジメントの構築 学際的科目実施 1年：探究・家庭基礎・情報の科学・GS1A 2年：探究・GS2B・GS2C 3年：探究・GS3C	ICテーマ等決定(3年)			学際カリキュラム 教員研修	探究講義(1年)	神戸フィールドワーク(1年探究)	リスクマネジメント講義(1年) 台湾留学生探究参加(2年)	探究の日(1年) 探究発表(2年) 台湾留学 台湾修学旅行(2年)	WWLフォーラム(学際的科目公開) 探究発表(1,2年)			フィリピンフィールドワーク(1年) [中止]
②事業共同実施校・連携校とのネットワーク作り	共同事業計画			課題研究 合同研修				共同/連携校事前練習	WWLフォーラム 活動報告			
③社会に開かれた高度な学びのネットワークの構築	国際機関(WHO)講義(2年)	法人(銀行協会)WS(1年)		国際機関(JICA)インターンシップ(1年)		NPO(ママの働き方応援隊)講座(1年)	大学(兵教大)課題研究(1,2年) 大学(神外大)課題研究(2年)	NPO講演(1年) 大学(神外大)英語スピーチ講演(1,2年)		NPO講演(1年)自治体WS(1年)		海外大学(アテネオデマニラ)教授講義(1,2年) [中止]
④協働グローバル創造事業	姉妹校(スウェーデン)生徒とプレ会議(3年)		IC(5つの姉妹校:アメリカ,オーストラリア,スウェーデン,台湾,フィリピン招聘)	姉妹校(オーストラリア)研修派遣(1,2年)	姉妹校(オーストラリア)生徒とプレ会議(2年)	ラグビーWC交流(1,2年)	道徳の日(3年) バルセロナ研修派遣(2年)	姉妹校・台湾修学旅行(2年) 神戸コミュニティフォーラム(1,2,3年) WWL等課題研究交流発表会(1,2年)				姉妹校・アメリカ研修派遣 [中止]
⑤「Neo MAKs」力の検証(事業毎に振り返り)	調査項目作成		調査(1年)					比較調査(3年)	調査(1,2年教員)分析・検証			

IC(国際的な国際的・コンファレンス) WS(ワークショップ)

(2) 実績の説明

a. 設定テーマ

本事業では「リスク」が共通テーマであるが、「社会的課題全般」と広義に定義づけ、探究活動、学際的科目、国際・コンファレンス等でそれぞれテーマを設定した。1年の総合的な探究の時間では地元神戸の経済活性化のための「修学旅行誘致」2年生の総合的な学習の時間では、修学旅行先である台湾についての探究、2年生のグローバルスタディーズ2B（英語で行う課題研究）ではSDGs（本年度は教育、環境、健康、経済、人権）の中からテーマを設定している。7月に開催した高校生国際会議(International Conference)では“Local Action for Global Impact”をスローガンに「教育」「健康」「環境」「人権」「持続可能性」をテーマに課題と解決策について議論した。拠点校、共同実施校、海外の連携校で参加した「2019年度全国高校生フォーラム」（文部科学省、国立大学法人筑波大学主催）では、「リスクマネジメント」を共通テーマとして3校で共有し発表に臨んだ。文系、理系、文理融合の課題研究に取り組む11の高校が参加した第1回WWL等課題研究交流発表会（拠点校で12月に開催）においては、「教育」「公共」「人権」「健康」「環境」「科学」「防災」「資源」の8つをディスカッションとワークショップのテーマとして設定した。

b. イノベーティブなグローバル人材育成に資する体系的かつ先進的なカリキュラム研究開発

SGHで育成を目指したMAKS(16の力)を基にイノベーティブでグローバル人材に必用な資質をNeo MAKS(12の力)即ち、「Mind」①物事を多面的に見る力 ②他者の痛みを理解しサポートする力 ③多様性の中で協働する力、「Attitude」④経験と知識を融合させる力 ⑤リーダーシップを取り責任をもって調整する力 ⑥柔軟性に富んだ問題解決力、「Knowledge」⑦自国や他国の文化・歴史に関する深い知識と理解 ⑧科学的知識を活用する力、「Skills」⑨ICTを主体的に使う力 ⑩コミュニケーション力、「Neo」⑪普遍的正義感 ⑫新しい価値観を創造する、を養うカリキュラムとして学際的科目と探究活動について研究を進めた。

学際的科目については、月1回開催のWWL推進委員会における協議や、8月の管理機関主催の研修会においてカリキュラム・アドバイザー（兵庫教育大学大学院教授）の助言のもと、令和元年度に開始した科目の進捗状況、次年度実施の学校設定科目（学際国語、学際リサーチ）の準備を進めた。1月に実施した第1回WWLフォーラムでは、家庭基礎は「食と環境」、情報の科学は「プログラミング」、グローバルスタディーズ2Cは「英語と日本語による政策論争」の公開授業を実施した。

参照：資料1 第1回WWLフォーラム公開授業指導案（家庭基礎 情報の科学 GS2C）

c. 設定したテーマと関連した外国語や文理両方の複数の教科融合内容

(1) グローバルスタディーズIA

2年次に行う課題研究に向けた基礎学習を行う科目で、「言語」「宗教」「人口」「教育」「文化」「貧富の差」「政治」「経済・産業」を題材とした。日本人英語教員とALTが担当した。

(2) グローバルスタディーズIIB

SDGsの17の目標より絞り込んだ5つの分野（教育、環境、健康、経済、人権）から、各自が関心のあるテーマを選び、課題研究に取組、論文作成を行った。英語科教員、ALT、外国人講師等が担当した。また、ポスター作成やプレゼンテーションも実施し、校内外での発表に向けての指導も

担当教員が行った。

(3) グローバルスタディーズⅡC

地歴公民科教員、英語科教員、ALTによる日・英2か国語の教科統合型授業である。地歴公民科教員主導の講義により知識を深め視野を広げた上で、英語科教員、ALT主導で類似の内容をスピーチやプレゼンテーションの形で扱った。インドの高校と歴史、ICT、芸術教育の比較や民話についてオンラインボードやビデオレターで意見交換をするなど協働学習も行った。

(4) グローバルスタディーズⅢC

英語科教諭3名とALT2名が担当する3年生対象の選択科目である。7月のInternational Conferenceでは“Local Action for Global Impact”をスローガンに「教育」「健康」「環境」「人権」「持続可能性」をテーマにプレゼンテーションの準備を行った。会議の後は、ポスター・冊子・ビデオの作成など問題解決のために実際に行動を起こした。

(5) 学際国語（令和2年度実施）

国内・世界における「課題」について、日本語で書かれた文章または資料を総合的に読解し、新たな視点からそれらの問題を考察する。ティームティーチングを予定している。

(6) 学際リサーチ（令和2年度実施）

地歴公民科と理科による教科間連携授業である。人権・環境・経済に関する問題を大きく社会的視野と科学的視野から考察することにより、本質的な解決方法を考え、社会に提案することを目標とする。

d. 短期・長期留学や海外研修のカリキュラム体系的な位置づけ

1年次の探究活動での学びを3月のフィリピンフィールドワークで実践するために、参加生徒（16名）は分野別グループに分かれ、昨年の参加者や連携機関のアテネオ・デ・マニラ大学教授、海外交流アドバイザー等の助言や指導を受けながら事前準備を進めたが、新型コロナウイルスのため令和元年度は中止となった。1年次での取組は2年次の探究活動へと継続していく。2年次の、オーストラリア研修（姉妹校）、バルセロナ研修（神戸市主催）、台湾修学旅行（姉妹校）、アメリカ研修（姉妹校）においても、課題研究や探究活動について姉妹校の生徒と意見交換をして、その後の研究に活かした。本年度は、7月に実施する高校生国際会議に向けて、参加校の1つであるスウェーデンの姉妹校生が来校した時にはテーマについて事前の意見交換や、5つの姉妹校とのオンライン上でのやり取りをGS3Cの授業の中で行った。また、オーストラリア姉妹校生徒の訪問の際は、次年度のインターナショナル・コンファレンスを見据え、GS2Bの授業で意見交換を行った。

e. 体系的なカリキュラムの編成（各教科バランス）

学際的な学びの中心となる総合的な探究の時間を3学年に設定。家庭基礎(1年)情報の科学(1年)科学と人間生活(2年)に探究的要素を取り入れた、学際的科目とし、既存の学際的教科グローバルスタディーズに加え、文理融合テーマを扱う学際国語(2年)学際リサーチ(2年)学際フードデザイン(3年)を学校設定科目として設置した。連携機関による講義やワークショップ(高度な学び)を年間計画に組み込んだ。また、SGH(国際科対象)でグローバル人材の育成への効果が検証された課題研究での取組(専門家による助言・フィールドワーク・発表の機会)を普通科の探究活動にも取り入れた。

学年	学際的科目	
	必修	選択
1	総合的な探究の時間 家庭基礎 情報の科学 グローバルスタディーズ IA (国際科)	
2	総合的な探究の時間 学際国語 (普通科・英系, 文系) 科学と人間生活 (国際科) グローバルスタディーズ 2B (国際科)	学際リサーチ(普通科・英系, 文系) グローバルスタディーズ 2C (国際科)
3	総合的な探究の時間	グローバルスタディーズ 3C (国際科) 学際フードデザイン (普通科・文系)

普通科探究活動 (1年生は国際科も含む)

学年	探究テーマ	専門家による助言	フィールドワーク	発表の機会
1	神戸への修学旅行 生誘致	探究活動について (高校教諭) リスクマネジメント (大学教授) 旅行会社社員	神戸	クラス内発表 代表グループ発表
2	台湾事情 (歴史・ 食・教育・音楽・ スポーツ)	台湾事情 留学生会館職員・台湾留学生	台湾 (修学旅行)	テーマ別発表 代表グループ発表

f. 学習活動と構想目標の達成

Society 5.2 (Society 5.0 の先) で必要とされる力 (Neo MAKS) を育成するために、SGH 研究でグローバル人材の育成に成果があった国際協同学習と社会貢献活動に創造的要素を加えた協働グローバル創造事業を計画、実施した。7月の5校の姉妹校生徒を招聘した高校生国際会議では、プレゼンテーションやディスカッション活動だけでなく、歓迎行事や全体会の計画や運営も生徒中心に行った。運営には総勢約200名の生徒関わった。10月のラグビーワールドカップ交流会(神戸市主催)は4つのラグビー海外チームと4校の小学校との交流事業であり、8名の生徒が英語と日本語による司会運営を担当した。事前の研修や担当者との打ち合わせ、会場確認など綿密な準備を行い当日に臨んだ。後日には神戸市長から感謝状を授与される活躍であった。11月の道徳の日(WWL共同実施校:神港橋高校主催)では8名の生徒が英語の通訳者として参加し、災害時の備えについて学びを深化させた。12月の神戸コミュニティフォーラムでは外国人も含めた神戸市民が英語で語り合うことを目的としており、4名の生徒がキックオフプレゼンテーション、6名の生徒が英語のディスカッションのファシリテーターを務め計21名の生徒が参加し活躍した。12月の全国高校生フォーラムには、拠点校と共同実施校、海外連携校(臺中市立臺中第一高級中等學校)が、「リスク」を共通テーマに、合同チームとして参加し、審査委員長特別賞を受賞した。共同実施校、連携校や近隣の高校が参加した第1回WWL等課題研

究交流発表会においても、全体会の司会・運営、テーマ別ディスカッションやワークショップの司会進行の役割を約 20 名の生徒が担った。準備や運営には各学年が関わるようにして、後輩が先輩から学べるような組織作りを行った。

事業名 (参加学年)	主な活動や必要な資質	Neo MAKS
姉妹校(スウェーデン)生徒とプレ会議(3年)	意見交換・記録	①③④⑤⑩
高校生国際会議(1, 2, 3年)	司会・運営・発表・意見交換・文化紹介・交渉・提案・時間管理・臨機応変な対応	①③④⑤⑥⑨⑩⑫
姉妹校・オーストラリア研修派遣(1,2年)	異文化交流・自国文化紹介・発表・意見交換・現地調査	①③④⑦⑩
姉妹校(オーストラリア)生徒とプレ会議(2年)	発表・意見交換・記録	①③④⑤⑩
ラグビーワールドカップ交流(1,2年)	司会・通訳・運営・意見交換・交渉・時間管理・柔軟性	①③④⑤⑩
道徳の日(3年)	通訳・時間管理・柔軟性	①③④⑤⑩
バルセロナ研修派遣(2年)	研修・発表・意見交換・文化交流	①③④⑧⑨⑩
姉妹校・台湾修学旅行(2年)	異文化交流・自国文化紹介・発表・意見交換	①③④⑦⑨⑩
神戸コミュニティフォーラム(1,2,3年)	司会・運営・発表・意見交換・交渉・提案・時間管理・柔軟性	①③④⑤⑥⑨⑩⑫
全国高校生フォーラム(2年)	発表・意見交換・交渉・提案・時間管理・柔軟性	①③④⑤⑥⑧⑩⑫
WWL 等課題研究交流発表会(1,2年)	司会・運営・発表・意見交換・交渉・提案・時間管理・柔軟性	①③④⑤⑥⑧⑩⑫
姉妹校・アメリカ研修派遣(2年) <u>新型コロナウイルスのため令和元年度中止</u>	異文化交流・自国文化紹介・発表・意見交換・現地調査	①③④⑦⑩
フィリピンフィールドワーク(1年) <u>新型コロナウイルスのため中止</u>	現地調査・発表・意見交換・柔軟性	①③④⑤⑦⑩

参照：資料 2 生徒の感想

g. 大学教育の先取り履修

複数の連携大学の職員や教員と先取り履修の可能性について協議を行った。

h. より高度な内容を学びたい高校生が学習できる環境の整備

国内外で行われる課題研究や留学プログラムを紹介した。トビタテ!留学 JAPAN は説明会を設け、担当者を決めて対応した。令和元年度はタンザニアやフィンランドなど、11名の生徒が支援を受けた。

課題研究や探究活動を授業以外でも取り組みたい生徒は、SGHを機に発足された研究会 GSS(グローバルスタディーズ研究会)で活動し、大学主催の研究発表会等に率先して参加し活躍した。

プログラム (主催)	参加人数	結果等
国際公共政策コンファレンス (大阪大)	発表 3 見学 1	優秀賞・個人の部・チーム部
リサーチフェア (関西学院大学)	発表 5 見学 13	口頭発表 奨励賞
リサーチフェスタ (甲南大学)	発表 19 見学 34	ビッグデータ賞
One World Festival for Youth (関西 NGO 協議会)	発表 8 見学 10	優秀賞 (2 チーム)
国際問題を考える日 (WHO、大阪大他)	発表 20 見学 5	最優秀賞
大阪教育大附属平野学舎探究成果発表会	発表 4	
探究甲子園 (関西学院大学他)	発表(予定) 4	<u>新型コロナウイルスのため中止</u>
アジアユースリーダーズプログラム (イオン)	4 (開催地ベトナム)	最優秀賞グループ
トビタテ!留学 JAPAN プログラム (文科省他)	11	留学先: アメリカ イタリア カナダ タンザニア フィンランド他

i. 留学生のための学校体制の整備

毎年ヨーロッパなどから年間に2~4名程度の長期留学生を受け入れている。留学生担当者が学校の規則を説明したり、時間割作成を手伝った。英語の授業を中心に受講科目を決定し、英語の課題研究にも取り組んだ。本人の要請に応じて滞在時の活動報告書を作成している。

j. 他に特筆すべきこと

1年生の普通科の化学基礎の授業では部分的に、ALTとの共同授業を実施している。海外姉妹校ではないが、タンザニアの高校と総合英語の授業の中で手紙を通じて文化交流を行っている。また、両校の生徒同士によるプロジェクトなど、アフリカの高校とのネットワーク構築を開始した。

8 目標の進捗状況, 成果, 評価

a. 育成すべき「Neo MAKS」力の検証イノベティブなグローバル人材

WWLプログラムの目的であるイノベティブでグローバルな人材に必要な資質について、生徒対象に質問紙調査を実施した。調査項目は、「高校生 - 関心SGH意識調査」(筑波大学SGH 研究班)等を参考に、Neo MAKS力に、グローバルマインドセット、グローバルコンピテンシー、21世紀スキルに関する項目を加えた質問を28個作成した。回答方法は「あてはまらない」「どちらかといえばあてはまらない」「どちらかといえばあてはまる」「あてはまる」の4件法とした。生徒の興味分野に関する質問(質問1と2)は、複数選択を回答方法とし、質問31として記述回答を設定した。1年生を対象に、7月(プレ調査)と2月に調査を実施した。比較対象として2年生は2月、3年生は12月に調査を実施した。教育課程が異なるため、国際科と普通科に分けて分析を行った。回答数は1年生7月国際科71、普通科258、2月国際科78、普通科278、2年生国際科77、普通科266、3年生国際科77、普通科119であった。ここでは、本校が生徒を育てる力として重点的にあげた「Neo MAKS12の力」に関する検証を示す。

質問紙内容

	質 問	Neo MAKS
1	興味のある分野を全て選んでください。 1 科学技術 2 数学 3 生物 4 医療・保健 5 教育・福祉	
2	興味のある分野を全て選んでください。 1 言語・文化 2 歴史 3 政治・経済 4 芸術・創造 5 その他	
3	今住んでいる地域の行事に参加している	
4	地域や社会で起こっている問題に興味がある。	
5	地域や社会で役に立つ人になりたいと思う。	
6	世界で起こっている問題に興味がある。	
7	世界で役に立つ人になりたいと思う。	
8	自分のやりたいことを見つけ、それに情熱を傾けたい。	
9	将来、新しい分野を研究したり、新しい産業を創り出したい。	
10	自分で計画して学習に取り組んでいる。	
11	物事を様々な角度から見ることができる。	M ①
12	困った出来事に直面した時、複数の視点から問題の原因を考える。	
13	人には思いやりをもって接している。	M ②
14	自分は人のために役に立つことができる人間だと思う。	
15	複数の人数で話し合うと（一人より）良い考えが生まれると思う。	M ③
16	人の意見を聞いたとき、自分はどうか、どうするかを考えている。	
17	何か問題が生じたとき、解決するために自分の知識や経験を生か（そうと）している。	A ④
18	議論の際、自分だけが意見を述べることなく、参加者それぞれの意見を聞くことができる。	A ⑤-1
19	集団での問題解決場面では、率先してリーダー的な役割を担うことができる。	A ⑤-2
20	複雑な問題に直面しても、問題の要点や構造を整理しながら考えることができる。	A ⑥-1
21	問題解決などで、自分のやり方が、目的に合っているのかどうか途中で確認している。	A ⑥-2
22	日本の文化や歴史について興味がある。	K ⑦-1
23	世界各国の文化や歴史について興味がある。	K ⑦-2
24	科学的に考えたり、調べたりすることに興味がある。	K ⑧-1
25	関心のある事柄について、その問題の本質を発見したり、原因を考えることができる。	K ⑧-2
26	ICT(コンピューターやインターネットに関連する情報通信技術)に興味がある。	S ⑨
27	人に伝えるときに、分かりやすく説明しようとしている。	S ⑩-1
28	よく知らない国の人たちと親しくなれる自信がある。	S ⑩-2
29	何かをするときは、自分で判断して行動している。	
30	自分とは異なる立場の人の価値観を尊重する。	

○内の数字はNeo MAKS 力の番号を表す。 [M] Mind 「A」 Attitude [K] Knowledge [S] Skills

質問31

1年生7月： 次の語句の続きを自由に書いてください。 「私の考える正義とは」 「新しい価値観とは」

3年生12月：3年間の高校生活で自分の考え方や行動、進路に影響を与えた授業や行事、体験などを書いてください。

1・2年生2月：1年間の高校生活で、自分の考え方や行動に影響を与えた授業や行事、体験などを書いてください。

(2) 結果1 興味分野

質問 1 と 2 では生徒の興味分野を調査した。結果の数値は選択した人数を総数で割った割合である。1 年生は 7 月 2 月の両調査において、「医療・保健」「教育・福祉」「言語・文化」「歴史」「芸術」分野への興味が高い結果となった。1 回目と 2 日目で約 10% 下がった分野は、国際科では「科学技術」「数学」普通科では「生物」であった。

2 年生の普通科は、英系 2、理系 1、文系 4 クラスの結果であるが、3 年生の普通科は英系、理系、文系各 1 クラスずつの抽出調査であるため、興味分野が分散された結果となった。2、3 年生の国際科の上位 2 分野は「言語・文化」「教育・福祉」であり、3 年生は「歴史」「芸術」「政治・経済」の割合が 4 割を超えた。その他を選択している生徒が一定数存在するので、今後は記述欄を設ける。WWL の文理融合の観点から、文系における理系分野の興味、理系における文系分野の興味を今後注視していく。

1 年生の結果

	7 月		2 月			7 月		2 月	
	国際	普通	国際	普通		国際	普通	国際	普通
科学技術	25.4	23.3	16.7	15.5	言語・文化	80.3	50.4	83.3	42.8
数学	22.5	24	12.8	17.3	歴史	38	33.7	38.5	27.3
生物	19.7	23.6	21.8	13.7	政治・経済	31	30.6	32.1	23.7
医療・保健	25.4	34.1	24.4	30.6	芸術	43.7	32.9	42.3	33.5
教育・福祉	60.6	41.9	53.8	37.8	その他	7.04	5.43	6.4	13.3

	2 年		3 年			2 年		3 年	
	国際	普通	国際	普通		国際	普通	国際	普通
科学技術	11.7	17.7	19.5	26.1	言語・文化	76.6	42.5	83.1	42.9
数学	15.6	15.4	10.4	18.5	歴史	27.3	22.6	45.5	25.2
生物	6.5	12.4	16.9	23.5	政治・経済	39.0	26.3	41.6	26.9
医療・保健	20.8	21.1	26	19.3	芸術	33.8	26.3	42.9	29.4
教育・福祉	52.0	42.9	50.6	26.1	その他	9.1	15.4	7.79	12.6

(2) 結果2 Neo MAKS の力

30 の質問の内、Neo MAKS の「Mind」「Attitude」「Knowledge」「Skills」に関する質問、項目を 16 設定した。回答方法は 1～4 の 4 件法で、1 は「あてはまらない」2 「どちらかといえばあてはまらない」3 「どちらかといえばあてはまる」4 「あてはまる」とした。1 年生は 7 月実施を①2 月実施を②とし、各学年の国際科と普通科の平均値を算出した。

1 年生国際科で 7 月よりも 2 月の値のほうが 0.1 以上高くなったのは、⑥「複雑な問題に直面しても、問題の要点や構造を整理しながら考えることができる。」「問題解決などで、自分のやり方が、目的に合っているのかどうか途中で確認している。」で、0.1 以上低くなったのは⑨「ICT(コンピューターやインターネットに関連する情報通信技術)に興味がある。」であった。普通科では②「人には思いやりをもって接している。」の値は 0.1 以上高くなり、0.1 以上低くなった項目はなかった。3 学年を共通して⑧「科学的知識を活用する力」と⑨「ICT に興味がある」の値が他項目と比べて低いので、今後 WWL プログラムの内容を考える際の指針とする。⑤「リーダーシップを取り責任をもって調整する力」に関しては、生徒の強

みである調整力を生かしながら、リーダーシップを発揮できる機会を設けていく。

3 学年 MAKS の平均値

MAKS	1 年				2 年		3 年	
	国際①	普通①	国際②	普通②	国際	普通	国際	普通
①	2.82	2.55	2.90	2.65	3.03	2.62	2.97	2.64
②	3.58	3.33	3.48	3.43	3.32	3.31	3.23	3.18
③	3.69	3.45	3.68	3.37	3.53	3.29	3.55	3.22
④	3.37	3.17	3.46	3.15	3.51	3.11	3.47	3.10
⑤-1	3.55	3.37	3.54	3.31	3.57	3.23	3.52	3.19
⑤-2	2.61	2.37	2.67	2.34	2.69	2.28	2.33	2.13
⑥-1	2.68	2.57	2.82	2.57	2.92	2.61	2.87	2.45
⑥-2	2.92	2.81	3.09	2.83	3.06	2.76	2.84	2.73
⑦-1	3.24	2.91	3.17	2.85	3.21	2.63	3.30	2.46
⑦-2	3.47	2.89	3.42	2.82	3.30	2.68	3.48	2.79
⑧-1	2.30	2.37	2.36	2.29	2.36	2.14	2.26	2.34
⑧-2	2.87	2.63	2.89	2.68	2.97	2.54	2.97	2.51
⑨	2.54	2.43	2.35	2.37	2.43	2.24	2.39	2.22
⑩-1	3.38	3.17	3.46	3.19	3.41	3.20	3.36	3.03
⑩-2	3.10	2.41	3.16	2.41	3.14	2.39	2.96	2.48

(3) 結果 3

予測のつかない社会となる Society 5.2 で必要とされる資質として「普遍的正義感」と「新しい価値観の創造」を設定した。WWL の様々なプログラムが与える、物の見方や経験により、生徒の正義感や価値観がどのように変容していくのかを確認するために、1 年生対象に 7 月に実施した。

私が考える正義とは(Neo 11)

国際科、普通科に共通して見られる意見

- 自分が正しいと思うことをつきとおすこと、自分に正直に生きていくこと
- 各個人によって異なり絶対的に正しいものがないもの
- 皆が平等（公平）であること皆に平等な対応をすること
- より多くの人（または皆）の幸せが得られるよう行動すること

国際科のみに多く見られる意見

- 自分が正しいと思うことに加え本質的に正しいかを見極めたうえでの行動

普通科のみに多く見られる意見

- 誰かのためになる行動をすること、行動が誰かのためになること
- 人のことを考える・人を思いやること人を大切にできること
- 正しいと思うことを正しく保つこと正しいことを選択し続けること

考察

誰が主体であるかということが意見の分かれ目になっている。国際科生徒の多くは自らが正しいと

思うことや自分に正直に行動することなど「自己」が主体になっている傾向がある。それに対し、普通科生徒は相手のためになる行動や人のことを思いやることなど「相手」が主体になっている傾向がある。

新しい価値観とは (Neo 12)

国際科、普通科に共通して見られる意見

- 今までになかった（新しい）物事の見方・考え方のこと
- 自分が思っていた常識・価値観と違うもの
- 広い世界の一員として物事を見ること
- 個性・他人を尊重する価値観のこと

国際科のみに多く見られる意見

- 様々な視点から物事を見た結果
- 知らなかったことを知ること新しい世界を知ること
- 長所・短所・違いを個性として認め合い、理解していくもの

普通科のみに多く見られる意見

- 相手を知って尊重すること人から尊重されるもの
- 他人から影響を受けて得る価値観

考察

国際科生徒、普通科生徒ともに、いままで自分になかった見方や考え方が身につくことと考える生徒が多数であった。それを得る方法として、国際科生徒は様々な視点から物事をみた結果など「自己」が主体である。普通科生徒は他人から影響を受けることなど「相手」から受ける影響が多いと考える傾向にある。

b. AL ネットワークが果たした役割等について、簡潔に記載

- ① 高度な学びの実践 連携機関である大学、NPO、国際機関による講義やワークショップを実践できた。
- ② 協働活動の充実
- ③ 共同実施校と連携校との繋がり強化とそれぞれの強みの活用

c. 短期的、中期的及び長期的に設定した目標の進捗状況

短期的な目標は、AL ネットワークインフラ整備、カリキュラム開発、協働グローバル創造活動の実施であった。拠点校、共同・連携校間の関係は、合同会議や事業を通じて共同体としての連携を強固なものにすることができたが、情報の共有・交換のための情報共有ネットワークの構築は、個人情報に関する神戸市のセキュリティーポリシーと照らし合わせ、慎重に対処する必要があり、今年度は確立することはできなかった。カリキュラム開発においては、カリキュラム・アドバイザーの助言のもと、学際的科目の開始、令和2年度実施予定の学校設定科目の準備を進めることができた。令和元年度のWWLフォーラムでは、学際的科目と探究活動の公開授業を実施した。協働グローバル創造活動では、計画（インターナショナル・コンファレンス、ラグビーワールドカップ交流会）以上の活動を行うことができた。バルセロナ研修では拠点校と共同実施校、全国高校生フォーラムでは拠点校、共同実施校、海外の連携校が参加し、3校合同で審査員長特別賞を受賞する等、それぞれ大きな成果を残すことができた。第1回WWL等課題研究交流発表会では、拠点校、連携校、近隣の高校から148名の生徒が参加し、文理融合の探究活動の発表の機会を提供することができた。

中期的な目標はAL ネットワークを活用した令和3年度実施予定のWWC(ワールド・ワイド・コンファレンス)の実施と探究活動の深化、学際科目を取り入れた新カリキュラム開発である。WWCに向けて、令

和2年度のインターナショナル・コンファレンスでは、拠点校普通科生徒、共同実施校の生徒が参加できるプログラムを実施する。申請時点では、開催場所として神戸市会の議場を予定していたが、連携機関等の助言もあり、より収容人数の多い会場を検討する。令和元年度にラグビーワールドカップ交流会で連携した神戸市 市民参画推進局 スポーツ振興部 国際スポーツ室と協力し、オリンピック・パラリンピック関連の交流会の実現も図っていく。

長期的目標は、新時代の AL ネットワークの構築である。事業指定終了後も成果を活かすために、カリキュラムマネジメントで開発された学際科目を新カリキュラムに反映させる。2025年に開催される大阪万博で、AL ネットワークで育成した「Neo MAKS」力を駆使した高校生による神戸パビリオンの開催を目指す。

9 次年度以降の課題及び改善点

- ・大学教育の先行履修の可能性について、連携大学と管理機関との間で話し合いを今後も継続する。
- ・連携機関のうち、大学や国際機関(JICA、WHO 等)とは連携が進んでいるが、企業との連携をより深めて、AI 等最先端技術に関する学びを提供する。
- ・インターナショナル・コンファレンスへの参加をワールド・ワイド・コンファレンスにむけて、葺合高校普通科の生徒、共同実施校の生徒に広げる。
- ・WWL 事業終了後も、構築されたコンソーシアムを維持し、この事業で取り組んでいた諸活動をどのように持続可能にしていくのか模索していく。

【担当者】

担当課	神戸市教育委員会事務局 学校教育部学校教育課	T E L	078-984-0716
氏 名	福 岡 浩 明	F A X	078-984-0717
職 名	指 導 主 事	e-mail	hiroaki_fukuoka2@office.city.kobe.lg.jp

Ⅲ AL ネットワーク

1 共同実施校 科学技術高等学校の取組

教諭 千葉 章世

1. 本校の概要

科学技術高校では、工業に関する専門高校として「課題研究」という授業が設定されている。ここでは、機械工学、電気情報工学、都市工学、科学などに関する専門的なテーマや、それらを横断する学際的なテーマについて、少人数のゼミ形式で取り組んでいる。また、リスク・マネジメントという観点から、学校設定科目「都市防災」を設定し、日本初の防災士養成高校として数多くの防災士を輩出している。このように、専門的または学際的な探究活動や、防災を軸とした科学技術的アプローチでのリスクマネジメントについての教育実践の十分な経験を基盤とし、WWL として展開している。

2. 今年度の取組および成果

コンテスト・発表会	日時	場所	発表テーマ・内容など	参加者
高校生クリエイティブキャンプ 2019	7/24~28	秋田市	『秋田で安らぎのひとときを』	科学工学科 2,3年
総合治水展	10/13~14	バンドー青少年科学館	『神戸の総合治水対策と地域における啓発活動』	都市工学科3年
デザセン 2019 決勝大会	10/25~28	東北芸術工科大学	『スマホ体操』	科学工学科3年
サイエンスショップ 高校生・私の科学研究発表会	11/23	神戸大学百年記念 六甲ホール	『一般家庭における一年間に消費する魚の消化管に含まれるマイクロプラスチック』	科学工学科 2,3年
WORLD DATE VIZ CHALLENGE 2019	11/16~21	バルセロナ市	『BLE タグを用いた長距離トレーニングの可視化』	科学工学科3年
WWL 課題研究合同発表会事前指導	11/27	神港橋高等学校	カリキュラムアドバイザーによる発表指導	都市工学科3年
全国高校生フォーラム	12/22	東京国際フォーラム	『神戸の総合治水対策と地域における啓発活動』	都市工学科3年
甲南大学リサーチフェスタ	12/22	甲南大学	『一般家庭における一年間に消費する魚の消化管に含まれるマイクロプラスチック』	科学工学科1,2,3年
WWL 等課題研究交流発表会	12/26	葦合高等学校	課題研究発表・グループディスカッション・ワークショップ	全科3年
大教大付属高等学校 SGH 発表会	1/11	大教大付属高等学校	『一般家庭における一年間に消費する魚の消化管に含まれるマイクロプラスチック』	科学工学科1,2,3年
兵庫県警察フェニックスレスキュー競技大会	1/26	兵庫県小野市	防災イベントでの普及啓発活動	都市工学科3年
イザ！美かえる大キャラバン！2020	2/2	JICA 関西/ 人と防災未来センター	防災イベントでの普及啓発活動	都市工学科3年
高校生国際シンポジウム	2/13~14	鹿児島県文化センター	『一般家庭における一年間に消費する魚の消化管に含まれるマイクロプラスチック』	科学工学科2年
灘区総合防災訓練	2/29	灘区	地域防災訓練での普及啓発活動	都市工学科3年
西区総合防災訓練	3/22	西区	地域防災訓練での普及啓発活動	都市工学科3年

3. 主な活動内容

(1) 令和元年度 高校生・私の科学研究発表会

日程：11月23日

主催者：神戸大学サイエンスショップ・兵庫県生物学会

会場：神戸大学百年記念館六甲ホール

参加者：科学工学科 3年1名、2年1名

テーマ：『1年間に消費する魚の消化管に含まれるマイクロプラスチック』（兵庫県生物学会奨励賞受賞）

概要：自然環境や生物に関する研究について高校生が口頭発表やポスター発表を行う。本校はポスター発表部門に参加し兵庫県生物学会奨励賞を受賞した。

参加生徒感想：本研究での初めての学外でのポスター発表で大変緊張しましたが、たくさんの方からアドバイスや質問等をいただき研究への更なる意欲が高まりました。また、兵庫県生物学会奨励賞をいただくことができ、研究の成果に評価をいただけたことが大変嬉しかったです。

(2) World Data Viz Challenge (WDVC) 2019 Barcelona Round 参加

日程：2019年11月16日(土)～21日(木)

参加者：科学工学科3年1名、葦合高校 国際科2年1名

テーマ：データの可視化をテーマとした国際的なワークショップでの研究発表や現地での学校交流を通して、学校で身に付けた技術や知識、そして文化や自身の価値観について、国際的な観点での位置付けを明確化する。



○生徒の感想

私は課題研究の研究成果をスペインのバルセロナ市で行われたWDVC(World Data Viz Challenge)2019で発表しました。発表内容は「BLEタグを用いた長距離走トレーニングの可視化」で、校舎外周を使ったトレーニングを情報処理技術を使って分析しました。この研究を行っていく中で、ASICS やNTTドコモに研究機材の提供や分析方法の提案などでお世話になりました。これらたくさんの方々との協力を得て四カ月をかけて研究を進めました。

WDVCでの発表は通訳の方を通じて話す形式で、言語も文化も違う人たちに自分の言いたい事がどうやったら上手く伝わるか、通訳の方との事前の打ち合わせで相談しました。そこで、冒頭の挨拶をスペイン語で話すことで場を和ませるという提案を頂きました。実際に実行するのは緊張しましたが、上手く伝えることが出来たという手ごたえを感じ嬉しかったです。他の参加者の発表を通してバルセロナが抱えている問題、また神戸市が抱えている問題を知ることができ、自分の知識の幅を広げることが出来ました。そしてどのように発表すれば自分のやってきたことを伝えやすくするのも学ぶことが出来ました。バルセロナでは現地の高校を訪問して、同年代ぐらいの学生たちと意見交換する機会がありました。そこで、学生たちの発表内容を聞いて私は驚きました。移民(観光移民)と地域別平均収入の関連性についての発表内容だったのと、自分が住んでいる地域を良くしていきたいという強い気持ちを感じたからです。彼らと出会えたおかげで、自分ももっと神戸のことを知って何が出来るのかを考えていかなければならないようになりました。

この経験を活かして、人の役に立ち、神戸市で起こっている問題のことを考え改善できるような活動をしていきたいと思いました。

○引率教員より(生徒の変容等について)

WDVC参加における成果について、現地での体験の重要性は当然のことながら、参加に向けた課題研究の過程での学びが大きかったと言える。WDVCはデータの可視化をテーマとしたワークショップであるため、科学技術高校では神戸市が市民向けに提供していた実証事業であるスマートランニングサービス(2019年にサービス終了)と連携し、「長距離走トレーニングの可視化」をテーマに研究を行った。ランニングデータは研究開始当初はCSVデータとして得られる情報について数行を解読するにも苦労していたが、不要なデータを自動的に削除するプログラムの開発や数式を使ったグラフ化などを駆使して研究を前に進めて行った。また、研究のサポートとしてアシックス、NTTドコモと情報交換を行いながら、データの不具合を修正していった。これらの過程で、生徒は専門的に高度な技術や知識を身に付けることができた上に、社会人との交流で俯瞰した考え方を身に付けられたように感じる。

さらに発表資料の作成にあたっては、研究対象である「部活動」が、それに馴染みの無いスペインに住む人に伝えるためにはどうすればいいかと、インターネットを使ってスペインの文化や学校スポーツの状況を研究するなかで、学校スポーツとクラブスポーツの関係や、学校における体育の位置付けの違いなど多くの発見を得ることができたようである。また、現地で通訳の方との打合せを通して、言語の違う方に伝わりやすい言葉の選び方についての様々な気付きを得られたようである。

以上のように、今回の取り組みを通じて生徒が得たものについて枚挙に暇がないが、現地での内容は生徒の感想に任せるとして、総じて非常に実りある旅となったのは疑いようもない。この体験を生涯の財産として進路先においても成長を続けてもらえると期待している。

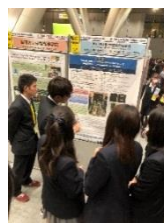
(3) SWG 全国高校生フォーラム 参加

日 程：令和元年 12 月 22 日（日）10：00～16：30

主 催：文部科学省、筑波大学

会 場：東京国際フォーラム

参加者：都市工学科 3 年 5 名



概 要：全国の高校生と留学生が、英語でのポスター発表により日頃取り組んでいるグローバルな課題の解決や提案等を発信する。また、それらをテーマとして交流し、新たな気づきを得たり、ネットワークを作ったりする場である。本校では、工業という専門的な視点から特に“防災”をテーマに、下記のような内容で発表した。

テーマ：「神戸の治水対策と地域における啓発活動」

我々の住む神戸のまちは、海と山に挟まれており、あらゆる水害のリスクがある。

そこで洪水や土砂災害を防ぐ対策がわかる模型を作成したうえで、小学生を対象に神戸市内を流れる身近な河川に潜むリスクと、河川に流れ出る流量を減らすための工夫を実感できる簡易実験を行い、防災・減災に興味関心が高まるような普及啓発活動を実施した。これらを踏まえ、防災・減災への意識向上、治水対策の重要性について考察する。

○参加生徒感想

全国高校生フォーラムに参加するにあたり、今までにはないさまざまなことを経験することができました。

まず、防災の啓発活動の成果や反省点を改めて振り返り、それを日本語で文章にして、英語の先生の協力のもと、英文にしていきました。それをもとに英語のポスターを作成し、発表の練習を重ねてきました。さらに、11月のプレ発表でご教授いただいたことをもとに、12月の発表では、ポスター発表は練習どおりにできたものの、心配していたとおり、質疑応答は大変難しく、英語力を高めていく大切さを身にしみて感じました。生徒交流会では、英語でのやり取りは難しかったけれど、なかなか出会うことのない人たちとも会話を重ねることで話し合いが深まりとても良い経験ができました。一方で、もっと英語でのコミュニケーション能力を高めないといけないこと、わからないことがあったら自分から聞いたり、どうしたらいいかをもっと考えたりしなければならないと思えました。

全国高校生フォーラムへの参加は、自分たちの視野をより広げることのできるいい機会となりました。

当初、想像していたよりも他の高校生の英語力が素晴らしく圧倒されましたが、私も追いつけるように勉強しようと思うよきっかけになりました。このように英語でプレゼンテーションする経験を高校生のうちに経験できて本当によかったです。この経験をこれからの進路で活かして行きたいです。ありがとうございました。

○引率教員より

今年度、WWL 共同実施校として、市内に留まらず幅広い視野で全国の高校の特色や取組を見られたのは、大変貴重な経験となった。さまざまな活動に取り組んでいる全国の高校生との交流によって、自分たちの取組が地域社会に与える影響が大きく、一定の評価を得られるものだという自信や達成感が得られたこと、そして、現在自分たちが持つコミュニケーション能力のレベルや課題が明確になったことも、今後の目標を掲げるうえでいいきっかけとなった。“英語でのコミュニケーション”という生徒たちが最も苦手とするものに対しても、物怖じすることなく準備段階から一生懸命取り組み、発表時も今自分たちにある力を最大限に発揮し、どうにかして聞き取ろう、思いを伝えようという姿勢が見られたことは、ひとつの成果であり、また彼らの生きる力であり、本校の生徒像をよく表すものであった。一方、英語力、プレゼンテーション力の育成にはさらに重点的な指導の必要性を感じた。来年度以降、この取組をさらに専門的かつ学際的に発展させていきたい。

(4) WWL 等課題研究交流発表会 参加

日 程：令和元年 12 月 26 日（木）12：30～16：30

会 場：神戸市立葺合高等学校 国際交流棟 フェニックスホール、GS ルーム、CALL 教室

参加者：機械工学科 3 年 9 名 都市工学科 3 年 5 名

科学工学科 3 年 4 名 2 年 1 名 1 年 2 名 計 21 名

テーマ：「レーザー加工を用いたものづくりについて」



「一般家庭における一年間に消費する魚の消化管に含まれる

マイクロプラスチックについて」

「神戸の治水対策と地域における啓発活動」(全国高校生フォーラム発表)

「BLE タグを用いた長距離走トレーニングの可視化」(WDVC 2019 Barcelona Round 発表)



○参加生徒感想

- ・他の学校や本校の他の学科の研究内容についても知ることができて良かった。また、様々な学校の3年生の課題研究の成果を知ることができ、今後自分の課題研究やその他研究活動の大きな参考となった。さらに、英語での発表もあり発表や文献を読む際に英語はとても重要となってくるのでしっかりと勉強したいと思った。
- ・各テーマに関して、同じような観点でも全く違う結果になっていることが最も面白いと思った。
- ・各校の発表と研究内容がよく、興味を持ったものが多かった。来年は、今回のように興味を持ってもらえそうな研究をし、発表してみたいと思った。
- ・ディスカッションが特に面白かった。他校の人たちとの意見交換で交流も深まり、とても楽しかったし、印象に残っており、素晴らしい時間を過ごすことができたと思う。
- ・発表内容もそうだったが、プレゼンテーションをしている人がみんな自信をもってしゃべっているのを見て、自分も頑張っていこうと思った。
- ・他校の人がどんな取組をしているのか、どんなことを考えているのかを知ることができて楽しかったし、いろいろなことに興味がわいた。ただ、すべての班の発表を聴けなかったのが心残りです。また、グループディスカッションでは、同じ学校の人だけだったので、物足りなさを感じました。次はぜひ他校の人とも話をしてみたかったです。
- ・他校の発表を聴き、新たな課題点に気づくことができたのでよかったです。ワークショップはたくさんの意見交換ができて充実していた。

○引率教員より

各校、生徒の皆さんのレベルが非常に高く、今後の指導の参考になった。

“課題研究＝ものづくり”という観点から、例年は作品が完成したら課題研究の目標は達成であったが、製作と並行して発表の指導やポスターの準備をすることで、生徒のみならず指導する教員にも新たな発見や学びがあり大変いい経験になった。今年度は準備への時間があまり持てなかったことが課題となったが、そのような状況でも当日の発表は生徒たちが自ら工夫して行っておりよくできたと感じている。そして、今後の生徒の活躍につながるいい経験となったことは間違いない。来年度は今年度の経験を活かし、さらに素晴らしい技術や知識を発表できるように指導していきたい。

4. 今後の課題

これまで本校の「課題研究」では、「工業＝ものづくり」から社会貢献することを重点的に、技術、知識の定着に取り組む傾向にあった。そのため、工業に関する専門知識やハイレベルの技術を身につけてはいるものの、どのように社会に還元していくか、メリットだけでなくデメリットまで考慮するといったことを“伝える力”、“考える力”の育成に課題があった。さらに、指導する側にとっても、専門分野以外の内容やプレゼンテーション指導などには苦勞している背景もある。このような課題点を改善・解決する上で、WWL 指定校と共同実施校の連携、それに関連する諸機関の支援は、今後本校が目指す生徒の育成には欠かすことができない。校内という枠を超え、他校や地域社会との連携を深めていくことで、課題点の改善が見込まれる。さらに、WWL として展開していくうえで欠かせない“英語表現力”の育成は、今後さらに重点的に取り組むべき課題である。今年度の全国高校生フォーラムでの発表の成果を一つの突破口にして、さらなる専門的なリスク・マネジメントや学際的な探究活動に取り組んでいきたい。

2 共同実施校 神港橋高等学校の取組

教頭 清 家 豊

1. 本校の概要

本校は、国際都市神戸にふさわしい、新たな商業高校の創設を基本構想として、平成28年に開校した商業高校である。創設のコンセプトとして「ひと」を「たから」ととらえ、神戸を愛し、支える「人財」を地域とともに育てる」を掲げ、地域に貢献できる人材の育成を目標とし、課題を自らの力で解決する「人間力」の育成を目指している。

2. 共同実施校としての取組

○「道徳の日」：本校教育の要の一つ「モラルジレンマ学習（課題解決型道徳教育）」の取組

「道徳の日」とは、毎年テーマを設定し、全学年で取り組む行事である。今年度は「防災」をテーマに基調講演、モラルジレンマ学習、4つのプログラムに分かれての体験学習を行った。そのプログラムの一つ「言葉が分からない体験ゲーム」では、神戸市勤務のALTや、近隣在住の外国人の方々に参加していただいた。この行事に、WWL指定校の葺合高等学校生8名を招待し、本校の取組の補助（主に外国語でのコミュニケーション支援）を依頼した。

平素の授業・行事レベルでの神戸市立高等学校間の交流はこれまでにない取組で、参加した葺合高生にも好評であった。今回の取組を、今後の神戸市立高等学校間の連携を深めていくきっかけにしていきたいと考えている。

○高校生国際ESDシンポジウム視察（東京 R1. 11. 07）

筑波大学附属坂戸高等学校が主催した課題研究発表会である。全体発表では、国内だけではなく、海外の連携校もその特徴を生かした取組を発表し、研究発表会として非常にレベルの高いものであった。ポスターセッションでは、使用言語が日本語の発表もあったため、本校生徒も来年度参加を視野に入れて指導していきたい。

○高校生フォーラム視察（東京 R1. 12. 22）

SGH・WWLの指定を受けている高等学校から生徒が集まり、各自の課題研究に対するポスターセッションが行われた。内容はSDGsに基づいたもので、テーマは多岐にわたっていた。その後、テーマごとにディスカッションを行い、代表生徒が課題と解決法について発表した。今回の取組を本校の課題研究に生かしていくには、まず国際問題についての知識のインプットが不可欠である。そのうえで、様々な教科が横断的に連携し、多面的に物事を捉えて課題解決につながる提案にたどり着けるよう指導していきたい。

○課題研究交流発表会（葺合高校 R1. 12. 26）

本校から、全体会で「こべっこマップ - 防犯・防災と通学路の安全 - 」とポスタープレゼンテーションで「震災遺構 - 万年カレンダー - 」の取組を発表した。両取組とも、これまでの先輩たちの取組を継続発展させてきた、長年にわたる調査・研究内容だったため、参観していただいた方からも高い評価をいただいた。また、参加した本校教員も、他校の取組を見て期すものがあつたようである。今後も本校の教育活動の特徴を生かした取組を展開していきたい。

3. 専門科目「課題研究」と「取組の課題」

本校の「課題研究」は、専門学科の「教科 商業」における科目として取り組んでいる。その指導項目が学習指導要領にて設定されているため、普通科で展開されている「課題研究」とは多少質を異にする点がある。しかし「取組の課題」については同様で、指導する側の「守備範囲」があげられる。指導教員にとって造詣が深い内容であればよいが、そうでない分野の支援の際、非常に苦勞する。また、本校生徒にとって、成果発表の場が限られていることも課題の一つである。これらの「課題」を解決するには、WWL指定校及び共同実施校の連携が欠かせない。学校という枠を超えての支援を展開することで、「守備範囲」の問題はかなり改善されると考えられる。そして、今年度も葺合高等学校が開催した課題研究交流発表会等を、多くの学校で開催し、生徒が参加する機会を増やしていきたい。他校の取組を見て刺激を受け、情報交換することで取組に深みが増すのは、生徒だけではない。指導する教員側のレベルアップも期待できる。今、求められる力「人間力」を大きく伸ばす教育活動の一つが「課題研究」である。生徒が様々な力を伸ばす機会を増やし、「人間力」育成の支援を行っていきたい。

3 共同実施校 須磨翔風高等学校の取組

教頭 渡邊 孝子

1. 学校概要

本校は、平成 21 年 4 月、須磨高等学校と神戸西高等学校との発展的再編・統合のため、単位制総合学科として須磨区名谷駅前に新校舎を構え誕生した。兵庫県内で 15 校目、神戸市立高校初の総合学科高校として開校し、昨年度創立 10 周年を迎えた。校訓「進取・協調・責任」のもと、「人・社会・希望につながる学校」をコンセプトに、「充実したキャリア教育」によって育てられた夢の実現のための「徹底した学力の伸長」の取組、保育所・幼稚園・小学校・大学や市役所・区役所等との「積極的な地域連携」、活発な部活動やボランティア活動、科目「人間関係」による「豊かな心の育成」の 4 つを教育目標に掲げ、総合学科の仕組みを十分に活かした教育活動を行っている。

2. 「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」と「課題研究」

1 年次 ● 「産業社会と人間」 2 単位で「キャリアプランニングⅠ」を実施
職業インタビュー、自分だけの時間割づくり、フューチャープラン作成

● 「総合的な探究の時間」 1 単位で授業「人間関係」を実施
構成的グループエンカウンター カタリ場 ピアカウンセリング 手話講座

2 年次 ● 「総合的な探究の時間」 1 単位で「キャリアプランニングⅡ」を実施

前期 ディベート、ワン・ステップ・フォワード (職業・福祉・看護・公務員体験、オープンキャンパス)
後期 課題研究スタート、中間発表

3 年次 ● 「総合的な探究の時間」 2 単位

前期 「キャリアプランニングⅢ」 課題研究ゼミ別発表会と年次発表会
後期 「後期科目」実施 金曜講座 (受験対応)・翔風講座 (教養講座)

★ 2 月初旬の総合学科発表会 代表生徒の発表・展示



3. WWL 共同実施校としての取組み

(1)校内研修「大学入試改革と探究活動について」 R1.12.6(金) 本校大講義室

大学入試改革・高校教育改革の中、探究活動の教育的意義について理解を深めるため、Glocal Academy 代表理事の岡本尚也博士より「今なぜ課題研究が必要なのか～その意義と指導法～」をテーマにご講演をいただいた。社会の変化による大学入試と課題研究との関わり、資質・能力ベースの具体的な教育目標の設置と共有による校内体制づくり、自分事としての課題設定・マジックワードではない言葉の理解・「問い」にひもづいた知識技能、キャリアプランニング集大成としての課題研究という捉え方から、入試や教科指導での探究活動という認識を共有できた。また、学校教育課、事業拠点校、共同実施校の先生方のご参加もあり、連携を深める機会となった。教員指導用の参考図書「課題研究メソッド～より良い探究活動のために～」(岡本尚也博士著 啓林館)を、来年度は 2 年次生徒全員が購入予定である。



(2)課題研究交流会 R1.12.26(木) 葺合高等学校

本校からは、ポスタープレゼンテーションで 4 名が「日本の漫画・アニメが海外で人気になった理由」「それが君の幸せ～未来の君にアンパンチ～」 「ゲノム編集食品への見解」「部活動の副部長はなぜ厳しいのか」を発表した。本校では、キャリアプランニングⅠ～Ⅲでパワーポイントによる個人発表を全員が行うため、パワーポイント作成能力とプレゼンテーション能力の高さは評価をいただいている。今回、対話型ポスタープレゼンテーションに参加し、他者の考えや視点を受入れる経験をしたことは、教員・生徒ともに 次へのステップに繋がる好機となった。

(3)第 23 回総合学科研究大会・第 1 回 WWL 研究大会 R2.2.14(金)～15(土) 筑波大学附属坂戸高等学校 参加予定

主題：総合学科における SDGs の学びと高校改革に果たす意義～SGH5 年間の成果を WWL へ～

内容：「SDGs を教室へ」「総合学科における WWL の取組とグローバル人材の育成」「1～3 年次合同発表会」

4. 今後の課題

本校はキャリア教育を柱としているが、キャリアプランニングの為の課題研究という捉え方から脱却し、探究活動は通常の教科指導や大学入試に繋がるという共通認識の上で、課題研究によって育成したい力を全体で共有し、課題研究の指導や評価の研究や実践と共に、WWL 拠点校や共同実施校、大学や地域社会との連携を積極的に進めていきたい。

4 2019年度 全国高校生フォーラム

日 程：令和元年12月22日(日)

場 所：東京国際フォーラム

主 催：文部科学省、国立大学法人筑波大学

プログラム：

時 間	内 容	時 間	内 容
10:00-10:20	開会式・全体説明	14:15-14:35	生徒投票
10:30-11:55	ポスターセッション/テーマ別分科会	14:35-15:20	生徒交流会
11:55-12:50	昼食	15:30-15:55	優秀校による発表
12:50-14:15	ポスターセッション/テーマ別分科会	16:05-16:30	表彰式・閉会式

内 容：全国の「スーパーグローバルハイスクール (SGH)」、「WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業」及び「地域との協働による高等学校教育改革推進事業 (グローバル型)」の計118校の代表生徒が一堂に会した。英語でのポスターセッションやテーマ別ディスカッションを通して、様々な考えを共有すると同時に、日頃取り組んでいるグローバルな社会課題の解決に向けた提案等について英語で発信した。臺中市立臺中第一高級中等學校、神戸市立葺合高等学校、神戸市立科学技術高等学校は、「リスク」を共通テーマに合同チームとして参加し、審査委員長特別賞を受賞した。(神戸市立科学技術高等学校の取り組み頁参照)

発表タイトル：How Women's Sense of Beauty Affects Onset of Anorexia

Kobe Municipal Fukiai High School

Aging Society: From the Caretakers' Viewpoints A Focus on Family with Dementia Elders

Taichung Municipal Taichung First Senior High School

Flood-control measures by Kobe city and its enlightenment activities

Kobe Municipal High School of Science and Technology

参加者感想 ~抜粋~

- ・この課題研究では初めて英語でプレゼンをして英語で細やかな表現をする難しさを感じた。プレゼンを作る過程やQAの対応など、様々な場面で困難があったが、それらを通して新たに学べることや、見つめ直すきっかけとなることがあったため、非常に良い経験となったと思う。自分の英語力を外部で発揮することができ、そして同じ高校生の違う視点で見た考えが非常に面白く勉強になるので、このようなイベントにはまた参加したいと思う。(葺合高等学校2年)
- ・参加してよかった。もっとコミュニケーション能力を高めないといけないし、分からないことがあったら自分から聞いたり、どうしたらいいかをもっと考えたりしなければならなかったと思う。全員が英語でコミュニケーションをするようなイベントに参加することはなかなかできないからいい経験になった。(科学技術高等学校3年)
- ・I was impressed by the education system in Japan when I saw that so many high school students gathering at Tokyo International Forum and sharing their research. There is no such opportunity for students in Taiwan from different schools to exchange knowledge and thoughts. So this event really opened my eyes. (臺中第一高級中等學校1年)

5 第1回 WWL 等課題研究交流発表会

日 程 : 令和元年 12 月 26 日(木)

場 所 : 神戸市立葺合高等学校

参 加 校 : 神戸市立科学技術高等学校 神戸市立神港橋高等学校
 神戸市立須磨翔風高等学校 横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校
 神戸市立六甲アイランド高等学校 兵庫県立神戸高等学校
 兵庫県立御影高等学校 神戸大学附属中等教育学校
 武庫川女子大学附属高等学校 神戸龍谷高等学校
 神戸市立葺合高等学校

目 的 : 文部科学省事業である「ワールド・ワイド・ラーニング・コンソーシアム構築支援事業 (WWL)」「スーパーグローバルハイスクール (SGH)」「スーパーサイエンスハイスクール (SSH)」の指定を受けている、または課題研究や探究活動に取り組んでいる高等学校が、互いに発表し学び合う場とする。

プログラム :

時 間	内 容
12:30	全体会 1 開会式 挨拶 参加校学校紹介
13:00	パワーポイント発表 ①横浜サイエンス ②神港橋 ③葺合
13:40	ポスタープレゼンテーション①
14:00	ポスタープレゼンテーション②
14:35	グループディスカッション / ワークショップ
15:15	全体会 2 グループ発表
15:45	講評 兵庫教育大学教授 西岡伸紀先生
16:15	閉会式 記念撮影 アンケート記入

参加生徒アンケートより

準備や当日で努力したことや工夫したこと	PPT プレゼンやポスター発表、ディスカッションで参考になったこと	興味が出たこと・今後取り組みたいこと
<ul style="list-style-type: none"> 話し方・伝え方 ポスター、PPT、原稿作成 発表練習、発表 情報の取捨選択 調査、実験 自分の研究課題への取組自体 会の進行確認 英語の発音 ジェスチャー 	<ul style="list-style-type: none"> 問題分析時の着眼点 自分にはなかった視点 解決策を多角的に考える 抑揚の付け方 視線等 ポスター・パワポのまとめ方 研究・調査の仕方 自分の中で意見をまとめてどんな言っていく 意見交換できたこと 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の分野を深める 専門分野からのアプローチ 防災・減災 インタビューの実施 アドバイス・指摘を取り入れる 学んだことを伝える (今年が最後なので) 研究をした結論からの実践 複合テーマ

参加教員感想

- 高校生同士、刺激しあえるとてもいい機会だと思います。是非次年度以降も継続して参加し続けたいです。
- 事前に論題とグループを提示したうえでディスカッションをすれば、より有意義な議論ができる。
- 即興で高度な英語のディスカッションをしていることに感銘を受けた。

6 第1回 WWL フォーラム

日 時：令和2年1月30日（木） 14:00~16:40

会 場：6限 調理実習室・第1コンピューター室・地歴公民室

7限 多目的室・フェニックスホール・大会議室・CALL1・CALL2・GSルーム

16:10 フェニックスホール

概 要：

神戸市役所市長室国際課、教育委員会、WWL運営指導委員の来賓方、県内外の学校関係者、本校の保護者など総計60名のご出席、ご参観をいただき盛大な発表会となった。

プログラム

14:00 6時間目 公開授業（学際的科目）

- ・ 情報と科学（情報）1-1
『プログラミング実習』

会場：第1コンピューター室

- ・ 家庭基礎（家庭科）1-9
『食と環境』

会場：調理実習室

- ・ GSIIC（地歴公民・英語の連携）2-1, 2-2 選択
『日本語と英語による政策論争』

会場：地歴公

15:00 7時間目 探究活動発表

- ・ 神戸市内フィールドワーク発表 1年生代表グループ
- ・ SDGsに関する発表・ディスカッション 国際科2年
- ・ 台湾探究発表 普通科2年代表グループ
- ・ バルセロナ派遣発表 国際科2年 科学技術高校3年

会場：フェニックスホール

会場：多目的室・CALL1,2・GSルーム

会場：大会議室

多目的室 HUMAN RIGHTS（人権）

Visualization” of TITP and Role of Local Community（外国人技能実習制度の『見える化』と地域の役割）

Better Labor Environment for Handicapped People（障がい者の働くより良い環境）

The Needs of Foreign Workers and Difficulty of Living in Japan（外国人労働者の必要性和共生の課題について）

EDUCATION（教育）

The Mistranslations on Public Documents（公文書における誤訳）

Current Situation of Depression in Japan.（日本でのうつ病の現状）

Better Support for JSL students in KOBE（神戸市のJSL生徒への日本語教育支援）

CALL 1 ENVIRONMENT（環境）

Saving Abandoned Dogs in Japan（日本の捨て犬を救うために）

Culling of Pets in Japan（日本のペットの殺処分）

The Effect of Ocean Plastic on Marine Worms（海のプラスチックが多毛類に与える影響）

The possibility of using river water at the time of natural disasters（災害時における川の水利用の可能性）

CALL 2 HUMAN RIGHTS & ECONOMY（人権 & 経済）

The Gender Gap of Soccer in Japan（日本サッカー界における男女格差）

Sports Participation of LGBT people in Japan（日本におけるLGBTのスポーツ参画）

Bullying of LGBT students in Japan（日本国内におけるLGBTの生徒へのいじめについて）

GS ルーム HEALTH (健康)

How Women's Sense of Beauty Affects the Onset of Anorexia (女性の美意識と拒食症)

Health Risks of Transportation Truck Drivers (物流業界の長距離ドライバーの健康問題)

Community Support for the Housebound Elderly (閉じこもり高齢者のための地域支援)

7 時間目後半 15:25~15:45 グループディスカッション

会場：多目的室 (人権・教育) CALL 1 (環境) CALL 2 (人権・経済) GS ルーム (健康)

	Human Rights 多目的室	Education 多目的室	Environment CALL 1	Human Rights / Economy CALL 2	Health GS ルーム
議題	職場における 外国人労働者・ 障がい者の地位向上	高校における 文系・理系の 融合の促進	兵庫県において、 犬の殺処分を 減らすには	障害者スポーツに おける 多様性の促進	高校生の ストレス管理

第 1 学年 総合的な探究の時間

- 神戸市内フィールドワーク発表 1 年生代表グループ 会場：フェニックスホール

発表順	内 容
9 組	劇場版 KOBE ROADSHOW
7 組	神戸市ブライ旅
5 組	癒しを求めて有馬散策
4 組	震災と神戸を知るツアー ～自然から損害と恩恵～

- SDGs に関する発表・ディスカッション 国際科 2 年 会場：多目的室・CALL 1, 2
GS ルーム
- 台湾探究発表 普通科 2 年代表グループ 会場：大会議室

発表順	内 容
3・4・5・9 組合同	台湾の地理
3・6・7・8・9 組合同	台湾と日本をつなぐ
6・7 組合同	Child Food

バルセロナ派遣発表

国際科 2 年

「メンタルヘルスケアにおいて行政の持つ役割について」

科学技術高校 3 年

「GPS・スマートシステムを活用してスポーツ競技や運動の記録を簡単に分析するシステム」

16:10

報告会

WWL 1 年目の取り組み

神戸市教育委員会・拠点校・共同実施校

会場：フェニックスホール

○感想 (来賓・保護者・他校教員)

- 各ブースの研究テーマが多岐に渡り、各グループの発表者が準備段階で様々な知識を身につけ、問題意識が高まるとともに、それを英語で表現するために生徒は喜々として取り組んでいる様子が十分に伝わりました。
- 公開授業だけでなく探究活動の発表テーマが興味深いものばかりで見切れずに残念に思います。
- いつか自校の生徒と意見交換などができたらいいなと思いました。

IV 学際カリキュラムの開発

1 本年度の取組概要

拠点校である葺合高等学校では、文理融合もしくは教科横断の学際的要素をもつ科目として、1年次には、全員履修の「総合的な探究の時間」「家庭基礎」「情報の科学」、国際科履修の「科学と人間生活」「グローバルスタディーズⅠ」を設定する。本校2年次には、全員履修の「総合的な探究の時間」、国際科履修「グローバルスタディーズⅡ」、普通科文系・英語系全員履修の「学際国語」、同選択履修の「学際リサーチ」を設定する。3年生では、全員履修の「総合的な探究の時間」、国際科選択履修の「グローバルスタディーズⅢ」、普通科文系選択履修の「学際フードデザイン」を設定する。GSS（グローバルスタディーズ委員会）の活動や個別の課外活動を通じ、普通科英系や理系の生徒の探究活動のニーズに応えるものとする。

令和2年度より実施予定の学際科目・学際的科目 (GS=グローバルスタディーズ)					
	国際科	普通科			共通
		文系	英系	理系	
1年	GSⅠ	情報の科学 家庭基礎 (学際的科目)			総合的な探究の時間
2年	GSⅡB 科学と人間生活 GSⅡC (選択)	学際国語 学際リサーチ (選択)			総合的な探究の時間
3年	GSⅢC (選択)	学際フードデザイン (令和3年度から)			総合的な探究の時間

このうち、グローバルスタディーズ (GS 科目) については、SGH 事業で行った授業の質的向上に取り組んでいる。GSⅠ、GSⅡB では、SDGs をテーマとした社会問題に関して基礎的な事柄を学び、生徒自身が関心の高い社会課題について課題研究を行い、最終的には、英語での発表活動を学校内外で行っている。選択科目である GSⅡC では、ディスカッション、ワークショップ、ロールプレイなどの活動を通じ、多角的に問題を分析・考察する姿勢を育てている。また、GSⅢC の授業では、インターナショナル・コンファレンスに向けて海外の姉妹校と共にテーマに関する意見交換やプレゼンテーションの準備を行うなど、更に発展的な探究活動を展開している。

令和元年度は、GS 科目以外の科目のシラバスや年間計画の作成も行った。平成31年3月に提出された構想計画をもとに、各教科・科目で具体案を文書化し8月にカリキュラムアドバイザーの兵庫教育大学西岡伸紀教授から助言を仰いで改定を重ねた。その後、文科省関係委員の方々からのご指摘を考慮し、内容を精査した。以下が各教科の授業年間計画である。

学際科目授業年間計画(国際科)

科目	家庭基礎(2単位)	情報の科学(2単位)	科学と人間生活(2単位)
対象	1年 国際科全員	1年 国際科全員	2年 国際科全員
1 学期	<p>1 オリエンテーション 1時間</p> <p>2 自分らしい人生を作る 10時間</p> <p>① 自分らしい人生をつくる 講義、個人ワーク「O才の私にインタビュー」</p> <p>② 青年期の発達課題 講義、個人ワーク「私の大切なもの」</p> <p>③ 家族と法律、これからの家庭生活と社会 講義、ペアワーク「男女で担う家庭生活」</p> <p>3 衣生活を作る 8時間</p> <p>① 被服の役割、入手、管理 講義、観察実習、洗剤実験</p> <p>② 被服と環境 グループワーク「このTシャツはどこから来るの」 被服実習「東袋を作ろう」</p> <p>4 経済生活を営む 8時間</p> <p>① 計画的に使う 収入と支出を知る 講義、グループワーク「家計管理アドバイザーになろう」</p> <p>② キャッシュレス社会と契約 講義、個人ワーク「リボリング払い、一括払いの比較」</p> <p>③ 様々な決済方法の利点とリスク 講演(日本銀行協会)</p> <p>5 一学期まとめ、ホームプロジェクト計画 1時間</p>	<p>1 オリエンテーション 1時間</p> <p>2 タイピング練習オリエンテーション 1時間</p> <p>3 インターネット検索とメディアリテラシー 4時間</p> <p>① 情報検索の技術の向上 ② 正しい検索態度の育成</p> <p>4 文書作成ソフトでの情報発信とデジタルリテラシー(写真加工技術) 10時間</p> <p>① Microsoft Wordの基礎知識と技能習得 ② 画像編集ソフトウェアの基礎知識と技能習得 ③ 情報収集 ・Beautiful Japanをテーマに日本の伝統美を海外に伝えるための情報収集 ④ Wordの利用(英語で作成) ⑤ 画像編集ソフトウェアの利用</p> <p>5 情報とコンピュータ 12時間</p> <p>① 情報の表し方 ・アナログとデジタル、情報量、2進数と16進数論理回路 ② コンピュータでのデジタル表現 ・文字の表現、音の表現など</p>	<p>1 オリエンテーション 1時間</p> <p>4 〈生物:プランナリアの性質と生態〉 8時間 プランナリアの生態について学習し、その再生能力を実験を通して学習する。 水質と生態の関係を学習する。 生物分野まとめ 1時間</p> <p>3 〈物理:重力加速度の測定〉 8時間 物体の自由落下速度を測定しデータを収集し、重力加速度を求める。 また、それに伴う誤差について分析し原因を考察する。 物理分野まとめ 1時間</p> <p>2 〈化学:元素の定性分析〉 8時間 元素の性質を学習し、炎色反応や沈殿生成反応から未定元素を特定する。 化学分野まとめ 1時間</p> <p>5 一学期まとめ 1時間</p>
夏季休業期間中	ホームプロジェクト		
2 学期	<p>1 ホームプロジェクト相互評価 2時間</p> <p>2 子どもの育つ環境を考える 8時間</p> <p>① 子どもの育つ力を知る 講義、視聴覚教材、個人、グループワーク「おてて絵本を作ろう」</p> <p>② 親として共に育つ 講義</p> <p>③ これからの保育環境 講義、グループワーク</p> <p>④ 子育ての現状と課題 交流、体験活動「赤ちゃん先生プロジェクト」</p> <p>3 食生活から、環境、人権問題を考える 10時間</p> <p>① 食生活の課題について考える 講義、個人ワーク</p> <p>② 食事と栄養・食品 講義、観察実習「トランス脂肪酸表記について」、調理実習</p> <p>③ これからの食生活 講義、グループワーク「フードマイレージを知ろう」</p> <p>4 共生社会のあり方について考える 8時間</p> <p>① リスクに備える 講義、グループワーク</p> <p>② 障がいのある人の暮らしについて考える 講演(神戸親子療育サークル代表)</p>	<p>1 職業インタビューデータ打ち込み 2時間</p> <p>2 プレゼンテーションによる情報発信とデジタルリテラシー(動画撮影と編集) 14時間</p> <p>① プレゼンテーションの基礎知識と技能習得 ・PowerPoint基礎演習</p> <p>② 動画編集ソフトウェアの基礎知識と技能習得 ・動画の撮影方法と保存 ・動画編集(キャプション挿入、音声挿入等)</p> <p>③ プレゼンテーション準備と情報収集 ・Kobeをテーマに神戸の新しい魅力を海外に発信するための情報収集</p> <p>④ プレゼンテーション実習(英語で実施)</p> <p>⑤ フィードバック</p> <p>3 問題解決のためのコンピュータ活用 12時間</p> <p>① 問題解決 ・ブレインストーミングとKJ法</p> <p>② アルゴリズムとプログラミング ・基本的なアルゴリズム、フローチャート ・VBAを利用したプログラミング ・Scratchを利用したプログラミング</p>	<p>1 二学期オリエンテーション 1時間</p> <p>2 〈神戸市の水質調査〉 26時間</p> <p>① 神戸市の水源を調べ水道水との関係を調査する。</p> <p>② グループで水源を一つ決め、その水源及び、周辺の環境を調査する。</p> <p>③ 水源の水質を採取し、水質調査を通してデータ分析をする。</p> <p>④ グループ毎のデータを集約しその違いから見える課題を検討する。</p> <p>⑤ 課題について原因と解決策を考察する。</p> <p>⑥ グループ毎に発表を行う。</p> <p>3 二学期まとめ 1時間</p>
3 学期	<p>1 高齢社会のあり方について考える 6時間</p> <p>① 高齢期を理解する 講義、インスタントシニア体験学習</p> <p>② これからの高齢社会 グループワーク「ケアプランナーになってみよう」 社会福祉協議会 認知症サポーター養成講座受講 地域社会福祉についての講演(神戸女子大学出張講義)</p> <p>2 住生活から、環境、人権問題を考える 6時間</p> <p>① 住生活について考える 講義、平面計画実習</p> <p>② 住生活の計画と選択 講義、個人ワーク「一人暮らしを考えよう」</p> <p>③ これからの住生活 講義、グループワーク「私の学校が避難所になったら」</p> <p>3 学際家庭まとめ 2時間 個人ワーク「私のライフプラン」</p>	<p>1 情報技術と社会 6時間</p> <p>① 社会を支える情報技術 ・GPS、RFID、UD、ユビキタスなどの学習</p> <p>② 知的財産権・産業財産権・著作権</p> <p>③ 個人情報の保護と情報公開</p> <p>2 データリテラシーの基礎知識 8時間</p> <p>① モデル化とシミュレーションの基礎 ・モデルの種類、モンテカルロ法</p> <p>② ビッグデータの基礎知識 ・ビッグデータとは ・「AI」とビッグデータの関係の理解</p> <p>③ シミュレーションの活用 ・Excelの基本 ・学校食堂の時間別、曜日別、商品別における売り上げデータを用いて、マーケティングシミュレーションを行う。</p> <p>④ AI・IoT・ビッグデータに関する講演(株式会社オプティム代表)</p>	<p>1 三学期オリエンテーション 1時間</p> <p>2 地球や宇宙の科学 13時間</p> <p>① 地球の概観 46億年前の地球誕生から現在までを考える。 地球のかたちと大きさ内部の状態について学ぶ。</p> <p>② 地形の成り立ち 岩石の風化、水の循環、流水の作用について学ぶ。 地層の成り立ちから、過去を結び付ける。</p> <p>③ 変動する大地 マグマと火山噴火、火山が作る景観について学ぶ。 日本の地形と地震について考える。</p> <p>④ 自然災害とその防災 流水による災害、地震による災害、火山噴火による災害について考える。 近隣のハザードマップを利用して、防災について考える。</p>

学際科目授業年間計画(普通科)

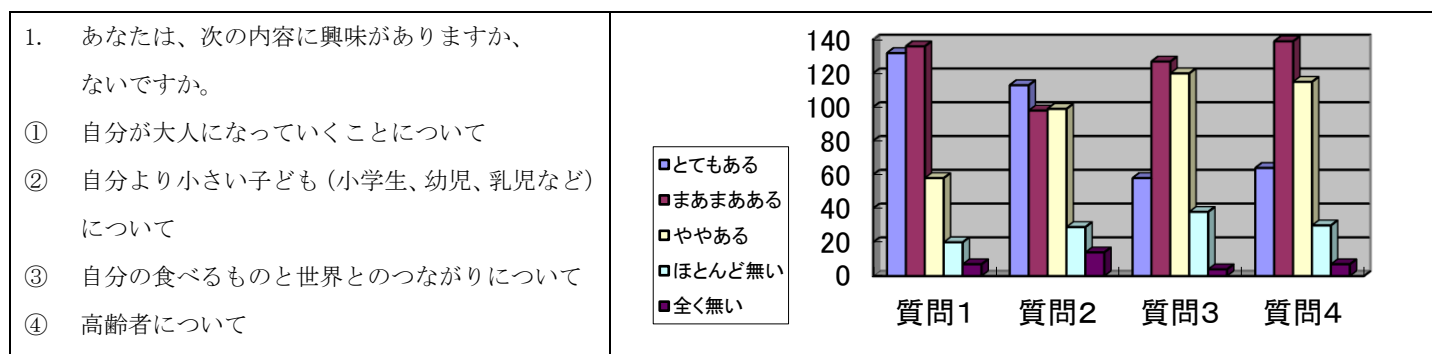
科目	家庭基礎(2単位)	情報の科学(2単位)	学際国語(2単位)	学際リサーチ(2単位)	学際フードデザイン(2単位)
対象	1年 普通科全員	1年 普通科全員	2年文系・英語系全員	2年普通科選択者	3年普通科選択者
1学期	1 オリエンテーション 1時間 2 自分らしい人生を作る 10時間 ① 自分らしい人生をつくる 講義、個人ワーク「Oオの私にインタビュー」 ② 青年期の発達課題 講義、個人ワーク「私の大切なもの」 ③ 家族と法律、これからの家庭生活と社会 講義、ペアワーク「男女で担う家庭生活」 3 衣生活を作る 8時間 ① 被服の役割、入手、管理 講義、観察実習、洗剤実験 ② 被服と環境 グループワーク「このシャツはどこから来るの」 被服実習「東袋を作ろう」 4 経済生活を営む 8時間 ① 計画的に使う 収入と支出を知る 講義、グループワーク「家計管理アドバイザーになろう」 ② キャッシュレス社会と契約 講義、個人ワーク「リボ払いとキャッシングの比較」 ③ 様々な決済方法の利点とリスク 講演(日本銀行協会) 5 一学期まとめ、ホームプロジェクト計画 1時間	1 オリエンテーション 1時間 2 タイピング練習オリエンテーション 1時間 3 インターネット検索とメディアリテラシー 4時間 ① 情報検索の技術の向上 ② 正しい検索態度の育成 4 文書作成ソフトでの情報発信とデジタルリテラシー(写真加工技術) 10時間 ① Microsoft Wordの基礎知識と技能習得 ② 画像編集ソフトウェアの基礎知識と技能習得 ③ 情報収集 ・Beautiful Japanをテーマに日本の伝統美を海外に伝えるための情報収集 ④ Wordの利用(日本語で作成) ⑤ 画像編集ソフトウェアの利用 5 情報とコンピュータ 12時間 ① 情報の表し方 ・アナログとデジタル、情報量、2進数と16進数、論理回路 ② コンピュータでのデジタル表現 ・文字の表現、音の表現など	1 オリエンテーション 1時間 2 国内における「課題」 9時間 ① 各自が考える「課題」を1つ挙げ、カテゴライズする ② 関連する新聞記事を探す ③ 「課題」をめぐる文章、資料等を読解し、グラフィックオーガナイザーを用いてまとめる 3 国内「課題」における「海の問題」 8時間 「海の問題」に焦点をあてた文章、資料等を読解する 4 「SDGs」講演 2時間 5 世界における「課題」 10時間 ① 講演を経て得た知識も含め、各自が考える「課題」を1つ挙げ、カテゴライズする ② 国内「課題」と世界の「課題」について、重なる部分と異なる部分を比較する ③ 「SDGs」の中の海の豊かさに焦点をあてた文章、資料等を読解し、文章でまとめる	1 オリエンテーション 1時間 2 <環境問題テーマ> 9時間 「プラスチックゴミは本当に悪なのか」 ①: 地歴・公民教師による講義(1.5時間) ~ 歴史的背景と社会的側面より~ ②: 理科教師による講義(1.5時間) ~ 科学的な視点より~ ③: 各自による調べ学習(2時間) ④: グループディスカッション(2時間) ⑤: レポート作成・提出(2時間) 3 <経済・環境問題テーマ> 9時間 「原子力発電所のある世界、ない世界」 以下、環境テーマに準じる 4 <人権問題テーマ> 9時間 「日本の移民受け入れ拡大は是非か」 以下、環境テーマに準じる	1 オリエンテーション 1時間 2 食生活と健康 12時間 講義、グループワーク(食糧自給率) 調理実習 3 栄養素の働きと食事計画 11時間 講義、個人ワーク(食事計画) 調理実習、調理実験 講演・調理実習(株式会社マルヤマナギ) 4 食を通じて社会貢献を考える 4時間 世界の食糧事情について知る *テーブルフーズの仕組みについて知る 講義、調理実習、講演(馬淵商事) 課題説明 *世界の食の不均衡問題を解消する活動
	夏休	ホームプロジェクト		世界の「マイナースポーツ」を調べてみよう	
2学期	1 ホームプロジェクト相互評価 2時間 2 子どもの育つ環境を考える 8時間 ① 子どもの育つ力を知る 講義、視察実習、個人、グループワーク「おて絵本を作ろう」 ② 親として共に育つ 講義 ③ これからの保育環境 講義、グループワーク ④ 子育ての現状と課題 交流、体験活動「赤ちゃん先生プロジェクト」 3 食生活から、環境、人権問題を考える 10時間 ① 食生活の課題について考える 講義、個人ワーク ② 食事と栄養・食品 講義、観察実習「トランス脂肪酸表記について」、調理実習 ③ これからの食生活 講義、グループワーク「フードマイレージを知ろう」 4 共生社会のあり方について考える 8時間 ① リスクに備える 講義、グループワーク ② 障がいのある人の暮らしについて考える 講演(神戸親子療育サークル代表)	1 職業インタビューデータ打ち込み 2時間 2 プレゼンテーションによる情報発信とデジタルリテラシー(動画撮影と編集) 14時間 ① プレゼンテーションの基礎知識と技能習得 ・PowerPoint基礎演習 ② 動画編集ソフトウェアの基礎知識と技能習得 ・動画の撮影方法と保存 ・動画編集(キャプション挿入、音声挿入等) ③ プレゼンテーション準備と情報収集 ・Kobeをテーマに神戸の新しい魅力を海外に発信するための情報収集 ④ プレゼンテーション実習(日本語で実施) ⑤ フィードバック 3 問題解決のためのコンピュータ活用 12時間 ① 問題解決 ・ブレインストーミングとKJ法 ② アルゴリズムとプログラミング ・基本的なアルゴリズム、フローチャート ・VBAを利用したプログラミング ・Scratchを利用したプログラミング	1 夏休み課題の発表 2時間 夏休み課題を発表し、相互評価する 内容: 競技名、競技内容、生まれた地域、どう広まったのか(広まらなかったのか)、なぜマイナーなのか... 答えのない場合は自分で推測して 2 「オリンピックの光と影」講演 2時間 3 オリンピック、スポーツへの多様なまなざし 11時間 ① オリンピック、スポーツに関する、観点の違う論文、文章を読解し、観点を整理する ② ディベート 論題例 「〇はオリンピック競技にすべきである」 4 日本語の変遷から見える社会 13時間 ① 「日本語の歴史」、「ことばをめぐる日本の歴史」、「外国語としての日本語」等に関する文章、資料等を読解する ② 日本語をめぐる社会的な課題	1 2学期オリエンテーション 1時間 2 <各自選択テーマによる発表> 25時間 ・「My News」: 1時間の授業で2名発表 人権・環境・経済のうちから、自分の興味を持つ新聞記事を選択し、①選択した理由、②記事を社会的側面と科学的視野を意識しながらの解説、③記事の問題を解決するための方策を提案、④質疑応答を行う。その後、地歴・公民教師と理科教師から助言を受ける。 ・「My News」発表後、表にコメントを記入して提出。 3 2学期まとめ 2時間	1 テーブルフーズスペシャルウィーク献立検討 4時間 相互評価、調理実習 2 日本と各国の食事情について考えよう 16時間 講義、グループワーク(調査) 調理実習 3 食育活動に参加しよう 8時間 講義、個人活動(食育提案) 調理実習
	3学期	1 高齢社会のあり方について考える 8時間 ① 高齢者を理解する 講義、インスタントシニア体験学習 ② これからの高齢社会 グループワーク「ケアプランナーになってみよう」 社会福祉協議会 認知症サポーター養成講座受講 地域社会福祉についての講演(神戸女子大学出張講義) 2 住生活から、環境、人権問題を考える 8時間 ① 住生活について考える 講義、平面計画実習 ② 住生活の計画と選択 講義、個人ワーク「一人暮らしを考えよう」 ③ これからの住生活 講義、グループワーク「私の学校が避難所になったら」 3 学際家庭科まとめ 2時間 個人ワーク「私のライフプラン」	1 情報技術と社会 6時間 ① 社会を支える情報技術 ・GPS、RFID、UD、ユビキタスなどの学習 ② 知的財産権・産業財産権・著作権 ③ 個人情報の保護と情報公開 2 データリテラシーの基礎知識 8時間 ① モデル化とシミュレーションの基礎 ・モデルの種類、モンテカルロ法 ② ビッグデータの基礎知識 ・ビッグデータとは ・「AI」とビッグデータの関係の理解 ③ シミュレーションの活用 ・Excelの基本 ・学校食堂の時間別、曜日別、商品別における売り上げデータを用いて、マーケティングシミュレーションを行う ④ AI・IoT・ビッグデータに関する講演 (株式会社オプティム代表)	1 学際国語のまとめ 14時間 ① 1~2学期で取り組んできた中で最も興味を覚えたテーマを1つ選び、新たに自分のテーマを設定して調べ、深める テーマの例 「グローバル化によるリスクとしての少数言語の消滅」 「社会保障制度の崩壊」 「温暖化による想定外の災害」 「オリンピックの肥大化による弊害」 ② 簡易なポスタープレゼンテーションを行う (文章とグラフィックオーガナイザーの融合型) または科学論文の形式にそって文章で表現	1 3学期オリエンテーション 1時間 2 <各自選択テーマによる課題研究> 6時間 ・各自テーマによる「My Research Task」(課題研究)を行い、ポスタープレゼンテーション形式にまとめる。 3 <ポスタープレゼンテーション> 3時間 ・4~5人グループに分かれ、それぞれポスタープレゼンテーションを行い、グループ代表を選出。 ・グループ代表7名が全体にポスタープレゼンテーションを行い、投票により上位2名を選出。WWW発表会において学際リサーチ代表としてポスタープレゼンテーションを行う。 4 <「My Research Task」レポート作成・提出> 3時間 5 一年間のまとめ 1時間

2 家庭基礎

1. 家庭基礎の取組概要

家庭基礎では、人の一生と家族・家庭及び福祉、衣食住、消費生活などに関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、家庭や地域の生活課題を主体的に解決するとともに、生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てることを目標としている。さらに、学際カリキュラムとしての本科目では、「Neo MAKS12 の力」のうち、「①物事を多角的に見る姿勢」「②他者の痛みを理解しサポートする姿勢」「④経験と知識を融合させる能力」「⑦自国や他国の文化・歴史に関する深い知識と理解」「⑩コミュニケーション力」「⑪普遍的正義感」を育成することを目標として取り組んだ。このため、家庭基礎の内容を踏まえた上で自己の暮らしと世界の課題を結びつけ、新たな価値観や行動を生み出せること、また、企業や大学などとの連携も構築することを目的としてカリキュラムの検討を行った。

授業を計画するにあたり、毎年年度当初に行っている中学校までの学習状況調査と合わせて、今年度は家庭科に関する興味関心、生活経験、生活知識を問うアンケート調査を行った。質問項目の一部とその結果は以下の通りである。



その他の質問も含めてその解答傾向を分析すると、経験の無い項目についての関心は低く、また知識や理解もすすんでいないことがうかがえた。そこで今年度は協働学習を多く取り入れ、より生徒の経験に結びつくような授業内容を展開したいと考えた。また、各クラスの授業の中で取り入れにくい企業、大学との連携については総合的な探究の時間を利用し、学年の先生の協力も得ながら進めることとした。

2. 授業実践

(1) 年間の授業計画

1学期は家族・家庭分野、被服分野、経済生活分野、2学期には保育、食生活分野、3学期は共生、住生活分野を配当した。二時間連続授業のうち、基本的に一時間は教科書内容の講義、もう一時間は協働学習を組み込むようにカリキュラムを配置した。

(2) 協働学習の例

ペアワーク「男女で担う家庭生活」について

この活動では、ペアでシチュエーションカードを引き、模擬夫婦となって家事分担を話し合いながら決めていく。シチュエーションは合計9パターンあり、夫婦とも有業、一人が有業、結婚しない、子どもがいる（一人、二人、三人）、いないなどの各シチュエーションごとの家事分担を比較することで、性別役割分業意識や結婚すること、子どもをもうけることへの興味・関心を持つことを目的としている。ペアは男女とは限らず、男子同士、女子同士でのペアで夫婦役にもなって、ペアワークを行った。それぞれの家事分担内容、家事に費やす時間の結果についてはクラス内で共有した。最後に、自分が将来どのような暮らしを選択したいと考えるか考察させた。ペアワークの後には教科書の該当分野をまとめたプリントを配布し、さらにはジェンダーギャップ指数の統計資料やデンマークの保育事情などの資料も併せて添付することで、考察する課題を設けた。

グループワーク「このTシャツはどこから来るの」について

被服分野で行うこの活動では、NPO法人ACEが出版しているグループワークのための教材を活用し、繊維の原料栽培から生産、販売、購入に至るまで繊維産業に関わる様々な人物のロールプレイングを通してエシカルファッションへの

理解と共に、ファストファッションなど自分が身近に利用している商品の背景と社会とのつながりについて気づくことを目的としている。6人1グループで、ロールプレイングと検討資料（視聴覚教材、配付資料）を組み合わせ、授業を展開した。グループワークの最後には解決策を考え、発表する一連の活動を通して、自分自身の行動をどう決定していくか考察させた。グループワーク後の講義では、衣生活が環境に与える影響を生産・消費・廃棄の観点からとらえることに主眼を置き、まとめとした。

（3）企業、大学との連携

1学期、消費生活分野の学習が終了した時点で、総合的な探究の時間に日本銀行協会から講師を招いてキャッシュレス社会についての講演を行った。2学期には総合的な探究の時間にNPO法人ママの働き方応援隊から、母親と乳幼児が講師となる「赤ちゃん先生」を行った。さらに、2学期の後半ではNPO法人親子療育サークルに講演をしていただき、障がいのある子どもを育てることについて、さらには共生社会について学習した。3学期には、神戸市社会福祉協議会による認知症サポーター養成講座、神戸女子大学佐々木先生による「子ども福祉の現状と課題」についての講演を行った。

3. 成果

協働的な学習の時間を多く取り入れることで、生徒の授業への参加意欲は確実に高まっているのではないかと考える。また、個人、ペア、グループとワークの種類を変化させることで飽きることなく授業に取り組むことができた。講義と比較して、生徒の生き生きとした姿を見ながら行う授業になることは嬉しい成果であった。また、協働学習の内容の中に学際的要素を取り入れることで、自己の家庭生活が社会とつながっていることを少しずつ気づききっかけになりつつあるのも成果の一つと言える。

また、外部との連携を積極的に図ることで立場の異なる人々へ思いをはせる機会も格段に増えたと考える。特に長年取り組んでいる赤ちゃん先生に加えて、親子療育サークルの講演を聴くことで、共生社会への意識づけ、他者理解に取り組もうとする姿勢には変化が見られた。

4. 今後の課題

（1）授業時数

今年度は特に10連休の影響で、授業時数が少なく、その中でカリキュラムを検討すること自体に課題が多かった。例えば1学期の場合、時間をかけて取り組みたい経済分野の時間数が非常に少なくなってしまった。今年度でなくても、1年間の家庭基礎の実時間数とこちらが教えたいと思う内容と、どこで折り合いをつけるかについては解決策を見つけることはかなりの困難が伴うと毎年感じている。

（2）知識の定着

協働的な学習を取り入れると、必然的に講義形式の授業時間は減少する。生活に関する知識に乏しい生徒が多い現状を踏まえ、一定の知識を得てほしいと考え、自宅での反転学習にも取り組んだ。教科書をまとめたプリントを用意し、自宅で学習した上で教室で教師が解説を行い、知識の定着をはかることを狙った。しかし、実際には他教科とのバランスからか、取り組みに生徒個人の差が大きく、結果、定期考査での点数が例年と比較して伸び悩んだ。また、授業ごとに関連する時事的なトピックを紹介し、その感想を記述するような課題をほぼ毎回課しているが、これについても生徒の取り組みの個人差が大きく、精選が必要だと考えている。

（3）連携授業の難しさ

企業や大学との連携授業については、銀行協会、赤ちゃん先生については授業内での実施が難しく、総合的な探究の時間での実施となった。また、神戸市社会福祉協議会、神戸女子大学の講演では、9クラスそれぞれの授業時間に講演を行っていただくことが出来ず、教務部の先生のお力をお借りして、他教科に多くの時間割変更をお願いすることとなってしまった。200人、360人に対して外部の講演者1人の授業ではなかなか伝わりづらいところもあり、来年度以降の課題だと考える。

3 情報の科学

(1) 科目「情報の科学」について

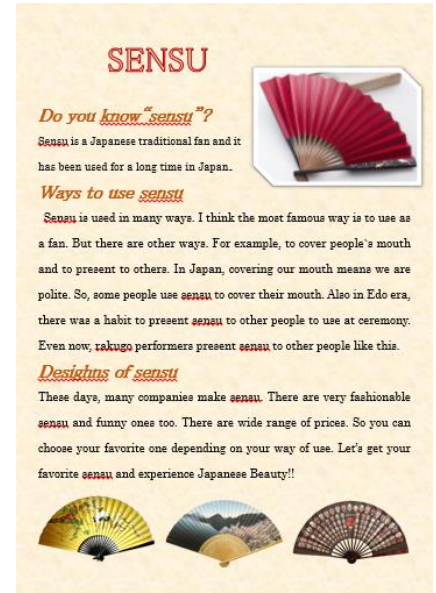
「情報の科学」は学習指導要領での教科「情報」の科目として、本校では現行カリキュラムがスタートして以来、開講をしている。教科「情報」としての教育目標は、情報社会を構成する一員として、社会の情報化の進展に主体的に対応できる能力と態度を育成することであり、科目「情報の科学」では、問題解決を行うために情報と情報技術を効果的に活用する学習活動やそのために必要となる科学的な考え方を身に付けさせ、さらに情報社会を支える情報技術の役割や影響の理解及び情報モラルを身に付ける学習活動を重視している。本校でのWWL学際カリキュラム研究における「情報の科学」は、上記の学習指導要領の内容に加え、WWLコンソーシアム構築支援事業で謳われている「イノベティブなグローバル人材」にとって必要とされるグローバルな諸問題を解決する能力の向上のために、膨大なデータを正しく処理する能力「データリテラシー」と、情報に対し正しい態度で接する能力「メディアリテラシー」を習得した上で、画像や動画を効果的に作成・利用できる能力「デジタルリテラシー」の育成および習得させることを目標としている。

(2) 授業の概要（学際カリキュラムの内容）

(a) 1 学期：Word を利用した情報発信・・・「デジタルリテラシー」「データリテラシー」の育成

「Beautiful Japan」をテーマとし、海外の人々に「日本の美」を伝えるA4サイズ1枚のポスターを作成させた。インターネット上の膨大な情報やデータから正しい情報を取得し、わかりやすく文書化し、さらに写真やイラストを加工・編集する方法を習得させた。

< 作品例 >



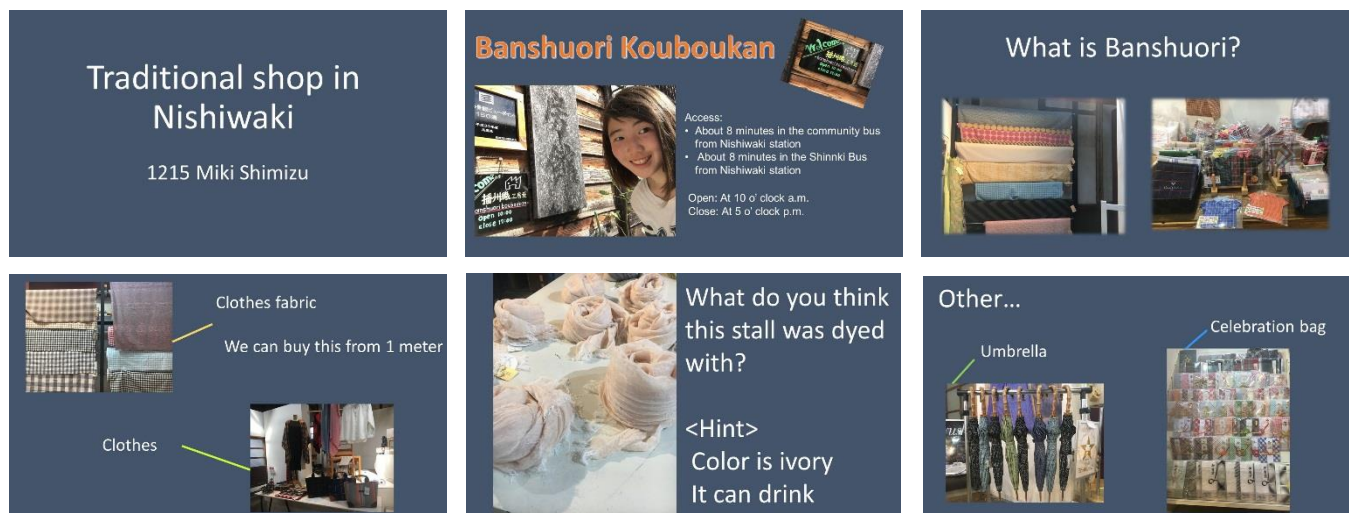
(b) 2 学期：PowerPoint を利用したプレゼンテーションの実践

・・・「デジタルリテラシー」「メディアリテラシー」「データリテラシー」の育成

「私だけが知っているあの店・この店」をテーマに、自分自身がよく利用している店舗を利用者の視点から紹介し、その店舗の魅力を伝えることを目的としたプレゼンテーションを行った。取材はインターネットへの依存度を下げさせ、自分自身でその店舗への取材を行わせた。店舗での取材・写真撮影・ビデオ撮影は勝手に行うのではなく、店舗へ許可をとり行わなければいけないことを意識させた。また、PowerPoint でのスライド作成では、文字の大きさと文字数・効果的な背景やアニメーション設定などを習得させた。さらにプレゼンター

ションの基本技術（声の大きさ、セリフのプロミネンス、しぐさ、目線など）のトレーニングを行わせた。（すべて英語でのプレゼンテーション）

<作品例> (PowerPoint のスライド)



(c) 3 学期 :

○Scratch (スクラッチ) を利用したプログラミングの実践

・・・「デジタルリテラシー」「データリテラシー」の育成

問題解決の方法として、2 学期に「問題解決のためのコンピュータ活用」という単元の中の「問題解決のための手段」で『アルゴリズムとプログラミング』を習得させた。その中では、アルゴリズムとフローチャートの基本と、VBA (VisualBasic for Applications) によるプログラミングを習得させた。その発展としてオリジナルゲームの作成を課題として、Scratch を利用したプログラミングを実践させた。その中でUI (ユーザーインターフェイス) やアクセシビリティの基本も習得させた。

○知的財産権・個人情報の保護と情報公開・・・「メディアリテラシー」の育成

現代の情報化社会において、インターネット上にあふれたコンテンツや情報は、様々な企業や個人・グループが作成・配信していることを意識し、そのコンテンツや情報には数多くの権利が発生していることを理解することが必要である。授業の中で産業財産権・著作権を学び、自分自身の普段の情報に接する態度が、その権利に抵触していないかを意識させた。

(3) 課題と改善

1 学期の Word、2 学期の PowerPoint の実習の中で写真、イラスト、ビデオの作成と編集を取り組ませたが、初歩的な拡大や縮小、トリミング程度のことしか習得させられなかった。来年度は年間計画を見直し、デジタルリテラシー分野を単独に早い時期に時間配当して系統的に学習させたいと思う。

また、今年は取り上げることができなかった「ビッグデータとAI」という正に最先端の情報技術と現代社会の関わりを学ばせる授業の時間を確保したい。

4 グローバルスタディーズ I A (GSIA)

GSIA の取組

GSIA では、2年次に行う課題研究に向けた基礎学習を行った。この科目の授業形態は、CALL 教室で日本人英語教員と ALT がティーム・ティーチングで1クラス40人の生徒への一斉指導である。本科目で生徒につけさせたい力は、「Neo MAKS(12の力)」のうち、「①物事を多面的に見る力」「④経験と知識を融合させる能力」「⑥柔軟性に富んだ問題解決能力」「⑧科学的知識を活用する力」「⑨ICTを主体的に使う能力」「⑩コミュニケーション力」の6項目である。これらの力を育成するために、1, 2学期は、「言語」、「宗教」、「人口」、「教育」、「文化」、「貧富の差」、「政治」、「経済・産業」などのテーマに沿った英文を読み背景知識の構築を行いながら、英語で意見を交流することに主眼を置き、リサーチプレゼンテーションを行った。1学期は世界の基本的な情報を調べ、PowerPoint を用いた発表 (Country Study Presentation) を、2学期は、授業で扱った各テーマに沿って各自の担当の国・地域についてリサーチを進めプレゼンテーションを行った。2学期に行ったプレゼンテーションにおいては、プレゼンテーションだけに留まらず聴衆とのインタラクションやディスカッションを取り入れた発表をすることで、Neo MAKS の力のうち①⑩の育成に重点を置いた活動を行った。

1学期は、Neo MAKS の力のうち①④⑩の力を育成することをねらいとして、テーマに関する記事を読み、そのあとに Discussion Question についてペアやクラス全体で意見を交流させた。まず初めに導入として、*If the World Were a Village of 100 People* (『世界がもし100人の村だったら』) を用いて世界についての全体像を把握した後、「言語」「人口」、「宗教」、「教育」について英字新聞の記事を取り上げ、内容理解と現状把握を行った上で意見交換を行った。

1学期の最後は、扱った4つのテーマの視点から1つの国を調べ、PowerPoint を使ったプレゼンテーションを行った。この活動で身に付けてもらいたい力は、「視点」をもって調べることと、それを相手にわかりやすく伝えることにある。高校での初めて使用する PowerPoint のプレゼンテーションは必ずしもうまくいくとは限らなかったが、他のグループのプレゼンテーションから学び、自分のプレゼンテーションを振り返ることで、自分たちの課題が何かを考えさせる良い機会となった。

2学期当初は、「経済・産業」「文化」「政治」「貧富の差」などの項目について関連した英文を読んだり、ALT によるミックスにより知識や理解をより深めた。そして2学期後半において、1学期行った復習を兼ねて、グループごとに担当国・地域を決め、それぞれの国・地域における現状や問題点について PowerPoint を用いて発表した。

3学期においては、1学期から学んだスキルを使い、また2年次に行う課題研究に向けて、SDGs に関連する発表を行った。具体的には、SDGs にあげられている17のテーマから自分のグループが関心のあるものを1つ選び、各テーマに関する国内外の抱えている問題、原因、解決策を、個人でリサーチするところから始めた。各自でリサーチしたものをグループ内で発表し、さらにグループで1つの問題点、解決策に絞り込み、考察を深めていった。個人だけでは1つの観点しか見られないものを協同学習によって別の視点から気づきを促し、多角的な視点で調べることを目的とした。また、プレゼンテーションにおいては、各グループが取り上げた SDGs のテーマに関する問題に続いて、個人として何が出来るかについて考え、発表することで、聴衆とその妥当性について考察を深めた。

1年間を通してこのような調べ学習を行うことで、生徒たちは学年当初に目標としていた「Neo MAKS (12の力)」の6項目うち、全ての生徒が、「①物事を多面的に見る力」「④経験と知識を融合させる能力」「⑥柔軟性に富んだ問題解決能力」「⑧科学的知識を活用する力」「⑨ICTを主体的に使う能力」「⑩コミュニケーション力」を習得できたと回答していた。グループ内で意見交換しながら1つのプロジェクトを作り上げることで、協働学習の大切さ、最初は困難と感じていたデジタルツールの使用もリサーチ力を高めるとともに向上させることができた、多くの生徒たちが達成感を感じているようである。

年間の学習内容

学期	内容	重点項目	評価	Neo MAKS
1	<p>導入： <i>If the World Were a Village of 100 People</i> (『世界がもし 100 人の村だったら』)</p> <p>世界の諸問題について知る I 「言語」「人口」「宗教」「教育」</p> <p>Country Study Presentation I (グループごとに 1 つの地域を担当し、そこから各生徒が 1 つずつ担当する国を選び、その国の基本情報にふれながら、「言語」「人口」「宗教」「教育」について絡めつつパワポイトを使い発表)</p>	<p>世界の諸問題について基本的な知識を身に付ける</p> <p>自国と他国の文化理解</p> <p>物事を多面的に見る力</p> <p>英語の資料の読み取り・分析</p> <p>意見を論理的に主張できる能力</p> <p>協働する姿勢</p> <p>リーダーシップ・調整力</p> <p>ICT を主体的に使う能力</p> <p>コミュニケーション能力</p>	<p>表現：口頭発表</p> <p>Content</p> <p>PPT スライド</p> <p>Delivery</p> <p>理解・知識：</p> <p>ワークシート</p> <p>定期考査</p>	<p>①</p> <p>④</p> <p>⑤</p> <p>⑦</p> <p>⑧</p> <p>⑨</p> <p>⑩</p>
2	<p>世界の諸問題について知る II 「経済・産業」「文化」「政治」「貧富の差」</p> <p>Country Study Presentation II (グループごとに 1 つの地域を担当し、そこから各生徒が 1 つずつ担当する国を選び、その国の現状や抱える問題について考察し、各自の分析をふまえて発表)</p>	<p>世界の諸問題について基本的な知識を身に付ける</p> <p>自国と他国の文化理解</p> <p>物事を多面的に見る力</p> <p>英語の資料の読み取り・分析</p> <p>意見を論理的に主張できる能力</p> <p>協働する姿勢</p> <p>リーダーシップ・調整力</p> <p>ICT を主体的に使う能力</p> <p>コミュニケーション能力</p>	<p>表現：口頭発表</p> <p>Content</p> <p>PPT スライド</p> <p>Delivery</p> <p>Interaction with the audience</p> <p>理解・知識：</p> <p>ワークシート</p> <p>定期考査</p>	<p>①</p> <p>④</p> <p>⑤</p> <p>⑦</p> <p>⑧</p> <p>⑨</p> <p>⑩</p>
3	<p>SDGs (持続可能な開発目標) について学ぶ</p> <p>“sustainable”の意味について考える</p> <p>SDGs からわかる世界の諸問題について再確認し、2030 年の世界・社会について考える</p> <p>Presentation・Pledge to support UN SDGs (SDGs にまつわる世界の諸問題についてふれながら、その目標の達成のために高校生としてできることを考察し、発表)</p>	<p>世界の諸問題について基本的な知識を身に付ける</p> <p>自国と他国の文化理解</p> <p>物事を多面的に見る力</p> <p>英語の資料の読み取り・分析</p> <p>意見を論理的に主張できる能力</p> <p>協働する姿勢</p> <p>リーダーシップ・調整力</p> <p>ICT を主体的に使う能力</p> <p>コミュニケーション能力</p>	<p>表現：口頭発表</p> <p>Content</p> <p>Delivery</p> <p>Interaction with the audience</p> <p>理解・知識：</p> <p>ワークシート</p>	<p>①</p> <p>②</p> <p>④</p> <p>⑤</p> <p>⑦</p> <p>⑧</p> <p>⑨</p> <p>⑩</p> <p>⑫</p>

5 グローバルスタディーズⅡB (GSⅡB)

(1) GSIIBの取組

本年度のGSIIBは、過去5年間のSGHの研究活動を発展させることを念頭に置き、課題研究を中心に、校内外での発表・交流活動に取り組んだ。課題研究の指導においては、過去の積み重ねの所産である優秀論文集や論文の項目ごとの説明資料、評価方法実践等を活用することでより効率的に進めることができた。姉妹校との交流活動としては4月のスウェーデン・フェニックス高校からの訪問、7月の国際コンファレンス、8月のオーストラリアへの海外研修および9月の来校、12月の修学旅行時の台中一中での交流等、多くの研究内容を発表する機会を設けた。今年度の課題研究は、1学期に研究の背景とリサーチクエスションの設定、2学期は1学期の内容に加え、集めたデータとその分析、3学期は研究をまとめたポスター発表を一人ひとりに課すことで、段階的に進めることができていた。Neo MAKS 12の力のうち、①物事を多面的に見る姿勢 ④経験と知識を融合させる能力 ⑥柔軟性に富んだ問題解決力 ⑨ICTを主体的に使う能力 ⑩コミュニケーション力を向上させることをGSIIBの目標として設定し、生徒と共有した。研究は二人組を基本とし、国連が提唱しているSDGsの17のゴールを参考に、生徒自身の興味関心に基づいて決定した。その後、担当教員で話し合い5つのテーマに分類した。リフレクションとポートフォリオに関しては、随時記入の形態を引き継いだ。

参考：GSIIBの変遷

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
テーマ	Education (SDG 4) Environment /Natural Disasters (SDG 7,12,13) Health (SDG 2,3,6,11) Justice (SDG 1,5)	Education (SDG 4) Environment /Natural disasters (SDG 7,12,13) Economy (SDG 9,11) Health (SDG 2,3,6,11) Human Rights (SDG 1,5)	Education (SDG 4) Environment (SDG 7,12,13) Sustainability (SDG 1,3,11) Health (SDG 2,3,6,11) Human Rights (SDG 1,5)	Education (SDG 4) Environment (SDG 7,12,13) Economy (SDG 8,9,12) Health (SDG 2,3,6,11) Human Rights (SDG 1,5)
形態	1～3名で1つの課題研究	1～2名で1つの課題研究	1～2名で1つの課題研究	1～2名で1つの課題研究
リフレクション	プレサミットや中間発表、課題研究提出後に実施	プレサミットや中間発表、課題研究提出後に実施	4大陸高校生サミット、課題研究提出後に実施	International Conference 課題研究提出後に実施
ポートフォリオ	課題研究について毎時記述	課題研究について随時記述	資料まとめ中心に随時記述	資料まとめ中心に随時記述
評価	ループリック作成、教員による評価、生徒間評価	ループリック作成、教員による評価、生徒間評価	ループリック作成、生徒間評価	ループリック作成、教員による評価、生徒間評価
大学教員 講義・助言	5月(講義)9月、2月 (指導・助言)	5月(講義)10・11月、3月 (指導・助言)	11月、3月(助言) 2、3学期(指導・助言) インターンシップ大学生	5月(講義)、11月(指導・助言)、3月(指導・助言)[中止]

(2) 英語論文の進め方

論文を書き始めるにあたって、英語論文の形式を学び、必要項目(Abstract、Introduction、Methodology、Data & Analysis、Discussion、Recommendation / Suggestion、Conclusion、Reference)を確認した。先輩生徒の代表作品を読み、ループリック(章末参照)を使って学習した。その後5つのテーマとSDGsに関連した具体的な課題(リサーチクエスション)を設定した。教員側も担当テーマ、対象生徒を決め、それぞれ評価や助言を行った。デジタルポートフォリオなどデータの保存方法、剽窃の禁止などの説明も行った。1学期はリサーチクエスションの

設定やリサーチ計画を立てることに主眼を置いた。文献（本を必ず含むこと）探しを夏季課題とした。2学期にはまず、データ収集の方法を決定し、文献に加え、質問紙やインタビューシートを作成した。次に、リサーチクエストに対する調査とその結果（Data & Analysis）、分析結果(Discussion)を完成させ、担当教員が評価や助言を行った。11月には希望生徒が2回にわたりリサーチの途中経過を大学の教授の前で示し、課題設定や研究の流れに対して助言を受けた。また、同月、アメリカの姉妹校であるサマミッシュ高校の教員3名の前で希望生徒がそれぞれ発表を行い、助言や励ましをいただいた。他の生徒も担当教員が聞き手となり、発表を行った。冬季休業の課題としては Suggestion (Recommendation)とポスター作成を課した。1月末の WWL フォーラムでは、4つの会場に別れ16のポスター発表を参加者の前で行い、テーマに関連するディスカッションも行った。参加者からは貴重な質問や助言をもらうことができた。また、2月中旬には、全員がポスタープレゼンテーションを実施し、3月には希望者の中から選ばれた代表生徒が海外の大学の教授の前でポスタープレゼンテーションを行い、プレゼンの方法や研究について助言を受けた。

昨年度と同様、論文の各部分に取り組む前の準備段階として、ALTによるミニレクチャーを実施した。テーマは、「リサーチペーパーの書き方」「リサーチプロポーザルについて」「グラフの作成方法」「データ分析について」「レファレンスの書き方」などとし、具体的な演習を取り入れた。

(3) 評価

GSIB の評価は、英語論文と口頭発表を中心にルーブリックを用いて評価基準を担当教員で共有し行った。

課題研究評価（参考：年度により変更有）

学期	評価対象	配点	学期	評価対象	配点	学期	評価対象	配点
1	Mini lesson check	5	2	夏季課題	15	3	冬季課題	10
	Research Design	30		Summit Reflection	5		Abstract	6
	Introduction	15		Methodology	5		Introduction, Methodology,	8
				Data & Analysis	10		Data & Analysis, Discussion, Suggestions	30
				Discussion	10		Conclusion	6
				PPT Presentation	20		Reference, Format	15
							Poster Presentation	30

現在、多くの学校で課題研究活動が実施され、その重要性はますます認められるようになってきた。本校では平成26年度から5年間の指定を受けた SGH 以前から課題研究に取り組んできた。今年度 WWL の指定を受け、この課題研究活動は国際科だけでなく、普通科にも広げられていく方向である。本校では毎年試行錯誤を繰り返しながら、また、多くの方々の協力を得ながら研究活動を進め、生徒からのフィードバックをもとにだんだんと課題研究の指導法の基礎ができてきたように感じられる。生徒にとっては高校生活の2年目に設定されているこの GSIB はかなり「重い」ものに違いない。テーマ設定から文献の読み込み、専門家へのインタビュー、アンケートの実施、その過程で最初のものとは全く違う研究課題になる生徒も少なくない。指導側からしても、多岐に渡る生徒の研究テーマは教員が今まで全く知らなかった事柄ということもあり、指導者としても「重い」科目である。ただ、年々複雑になっている現代社会の様々な問題を生徒が新鮮な視点で見つめ、その解決策を考えていくプロセスを共有できるということは喜びであり、新たな発見も多い。今後、この課題研究が、世の中の事象に関する生徒たちの視野を広げ、自ら考え、自ら行動する人間となるための一助になってくれることを願う。

6 グローバルスタディーズⅡC (GSⅡC)

1 概要

地歴公民科教諭、英語科教諭と ALT の3名が担当する教科間連携科目であり、10名（1名は8月よりカナダ留学のため2学期からは9名）の生徒が履修した。SGHにおけるCLIL(内容言語統合型学習理論)の実践を基に、題材を地歴公民分野から幅広く選び、主にロールプレイを用いて日本語と英語を交互に、時には同時に使用する設定にした。インドの高校との協働学習や大学教授による特別講座も実施し、日本や外国に関する知識を深め、批判的思考、問題解決力、協働性、新しい価値観の創造、日英のコミュニケーション力を高めることを目標とした。

2 今年度の取組

1学期は、政治をテーマに選挙、政策について教師と生徒のやり取りを中心に授業を展開した。日本については地歴公民科教諭が中心となり、海外との比較では ALT が中心となった。ロールプレイで市民となり、社会問題についてそれぞれの立場で意見を述べる活動の後、1学期末には「地球帝国の皇帝」選挙という設定で「経済」「防衛」「環境」「宗教」の観点で政策論争を日本語と英語で行った。また、7月に開催されたインターナショナルコンファレンスでは、歓迎セレモニーの準備や運営を担当した。

2学期は、人狼ゲームを取り入れ、「政治家」「有権者」の役割を体験した。インドの高校との協働学習では、専用のオンラインボードを準備して自己紹介を実施した。テーマを教育として、「歴史」「芸術」「情報」の3分野についてそれぞれの国における学校での取り組みについて説明した PPT を交換した。それぞれの発表の内容を受けて、ビデオレターを通じて意見交換を行った。

3学期は生徒と協議し、人狼ゲームを政策論争に発展させて継続し、日本における「二人っ子政策」を題材にした。この授業は第1回 WWL フォーラムにおいて公開授業の1つであった（巻末指導案参照）。また、高度な学びの一環として、神戸市外国語大学教授大石高志先生による講義「近現代のインド」を実施した。インドの高校との協働学習のテーマを文化として、民話や神話を通して風土や思想の分析について発表し、意見交換を行った。

3 協働学習実施校

学校名	所在地	担当教諭	内容	協働期間
Summer Fields	New Delhi	Shivani Meera	Education	2019/11~2020/ 1
Bal Bharati	New Delhi	Deepali Sharma	Folk Tales	2020/ 1 ~ 2



Bal Bharati PPT



葺合 PPT

4 年間の予定

学期	内容	重点項目	評価	Neo MARKS
1	導入：政治とは/ What's politics? (日・英) 政治家 選挙 投票率 年代別投票率 (日・英) ロールプレイ：市民 (それぞれ) の意見 大学学費無償化 9月入学 原子力発電所廃止 ロールプレイ：地球帝国皇帝の立候補演説 政策：経済 防衛 環境 宗教 インターナショナルコンファレンス歓迎セレモニー企画・運営	基本事項を身に付ける 物事を多面的に見る力 体験を通して題材へのかかわりを深める 英語の資料 (データ) から現状を読み取る 意見を論理的に主張できる能力 解決方法を柔軟に考える リーダーシップ・調整力 企画力・実践力を伸ばす	表現：発表 理解・知識： ワークシート 期末考査：論述	①⑤⑥⑦ ⑩
2	夏休みニュース [個人・世界] (日・英) 人狼ゲーム [悪い政治家を見抜く] (日・英) クロウン人間 難民受け入れ 保護貿易 二酸化炭素排出規制 最低限所得補償 インドの高校と協働学習1 (英) 教育：歴史 芸術 ITC ①自己紹介 ②PPT説明 ③Video Letter	意見を論理的に主張できる能力 基本事項を身に付ける 物事を多面的に見る 自国と他国の文化理解 意見を論理的に主張できる能力 協働する力	表現：発表 理解・知識： ワークシート 期末考査：論述 PPT原稿	①③⑥⑦ ⑨⑩⑫
3	人狼ゲーム (政策論争) (日・英) 日本の出生率の現状と原因・影響 (講義) 政策：二人っ子政策(WWL フォーラム公開授業) 神戸市外国語大学 教授 大石高志先生 講義 「インドの現状と文化」 インドの高校と協働学習2 (英) 風土：神話・民話・童話 ①物語紹介 (PPT 英語) 解説 ②Video Letter	意見を論理的に主張できる能力 専門的な知識を身に付ける 物事を多面的に見る 自国と他国の文化理解 意見を論理的に主張できる能力 協働する力	表現：発表 理解・知識： ワークシート	②⑨⑭⑯

協働学習生徒振り返り

“What are the two most important things you learned from this experience?”

葺合高校

- I thought Japanese need to know more about India, because Indian students know about Japan.
- The difference of pictures, Indian music, the life style of Indian students, socializing
- The real situation of education in India and in Japan (I re-learned)
- How to make a video which correctly tells our message (we are not sure if we could do though).

Summer Fields HS

- We learnt about the Japanese culture 2. We learnt how even miles apart there were some similarities between us and them.
- Team work, respecting each others' thoughts, time management
- It's so easy develop a bond even though we were so far and there are more similarities than we assumed.
- They focus on their work sincerely They are very polite.

7 グローバルスタディーズⅢC (GSⅢC)

(1) 概要

GSⅢC は学校設定科目グローバルスタディーズ (GS) の一つで、英語科教諭3名と ALT 2名が担当する3年生対象の選択科目である。該当生徒達が1・2年次には、スーパーグローバルハイスクール (SGH) の指定を受けていたので、育成する「16の力」の内、6つの力を伸ばすために授業が行われていた。今年度 WWL の拠点校としての指定を受け、育成すべき力が新たに「12の力」にまとめられた。その中で、スーパーグローバルリーダーの育成を目指して、主として培う力は、①物事を多面的に見る姿勢 ③多様性の中で協働する姿勢 ④経験と知識を融合させる能力 ⑥柔軟性に富んだ問題解決力 ⑨ICT を主体的に使う能力 ⑩コミュニケーション力 ⑫新しい価値観の創造 である。さらにこの科目では、GS の3本柱である、「課題研究」「国際協働学習」「社会貢献活動」に取り組んでいて、2019 KOBE International Conference (高校生国際会議)においては、企画・運営の中心的な役割を果たした。本年度は44名の生徒が履修した。

(2) 今年度の取組

1学期は、7月に本校で開催する International Conference の準備を行うことが、主要な活動であった。大きなテーマを“Local Action for Global Impact (LAGI)”と決めた。これまで3回行ってきた高校生国際会議では、海外姉妹校の生徒たちと、問題解決のための共同宣言を行ってきたが、その宣言を実行に移すための活動にまで進めることはほとんどできなかった。本年度は、生徒たちが計画を立てて、草の根活動を実践することを2学期の目標の一つにした。

4月に、昨年の課題研究を基に生徒たちは5つのカテゴリー (Education, Environment, Health, Human Rights, Sustainability) に分かれ、各トピックを設定し、現状や問題点、その原因をグループで調査し、パワーポイントを作成した。5月に国際科3年生の前で発表をして、質疑応答や助言を得たり、専門家への取材を行ったりして、Research Question を修正し、内容を改良し、代表のプレゼンテーションを完成させた。インターネット上の掲示板やメールを通じて、姉妹校生徒とそれぞれのリサーチに関して意見交換を行い、ディスカッションやファイナルプレゼンテーションの準備をした。また、ポスター発表や運営の準備も並行して行われた。担当教員もカテゴリーに分かれ、指導助言を行った。

テーマ: Local Action for Global Impact (LAGI)

分野	トピック
Education (教育)	Improving Education for People with Disabilities (特別支援教育の向上)
Environment (環境)	The prospects of E-waste Recycling (電子機器廃棄問題)
Health (健康)	High School Students' Mental Health (高校生のメンタルヘルス)
Human Rights (人権)	Cyber Bullying (ネットいじめ)
Sustainability (持続可能性)	Fast Fashion (ファストファッション)

2学期は、International Conference の振り返りから始め、各カテゴリーの課題解決のための草の根活動の計画と実践、報告書の作成が主要な取り組みである。さらに後輩に引き継ぐために、1年生対象の「課題研究の進め方」についてのプレゼンテーション(2月に発表)、2年生対象の「次年度の高校生国際会議への助言」「課題解決を目指した私たちの草の根活動」についてのプレゼンテーションを(3月に発表)を作成した。また、新入生を迎えるにあたり、葺合高校国際科での学びをまとめた7分間のビデオクリップの作成も行った。

昨年度に引き続き、グローバルな視点を養うために Global Development として ALT が中心となり講義を行った。英語圏の大学での講義や Discussion を体験する目的で、1学期に1テーマ(マクロ経済)、2学期に2テーマ、(AI、臓器移植)を取り上げた。経済分野では関税や補助金の基本知識、ビジネスにおける固定費、変動原価、需要と供給の関係を学び、それらが社会に与える影響について学んだ。AI 分野では、人工知能の基本的概念を学び、将来日常生活においてどのような可能性が広がるか、またどのような問題が生じるかについて考えた。さらに医療分野で

は、臓器移植の背景知識を学び、倫理を取り上げ、未来の代替臓器について意見交換をした。どの授業も基礎知識の構築、現状の把握の講義に加えて、リスク面にも焦点を当て、意見の交換の活動を取り入れ、社会課題をより現実的にとらえることができた。

(3) 年間の学習内容

学期	内容	重点項目	評価	Neo MAKS
1	2019 KOBE International Conference に向けて <ul style="list-style-type: none"> ・共通トピックの選定・決定 ・調査・アンケート実施・フィールドワークなどを経て、プレゼンテーション作成 ・ディスカッション準備 ・姉妹校生徒と意見交換 Global Development 1: マクロ経済の基礎知識	物事を多面的に見る力 柔軟性に富んだ問題解決力 データを集め真偽を確認する 仮説を立て、検証する ICTを主体的に使う能力 コミュニケーション力 協働する姿勢 分野別グループ・クラス 海外の姉妹校生徒 高校生会議の運営に関わるリーダーシップ・調整力・企画力、実践力の育成	表現：口頭発表 Content PPT スライド Delivery Essay Writing 理解・知識 ワークシート 論述（期末考査）	① ③ ⑥ ⑨ ⑩ ⑫
2	2019 KOBE International Conference に関して <ul style="list-style-type: none"> ・振り返り ・報告書作成 ・草の根活動の企画、実践 ・後輩への引継ぎ 	物事を多面的に見る力 柔軟性に富んだ問題解決力 経験と知識を融合させる能力 報告書の組み立て・編集 草の根活動の企画・実践 ICTを主体的に使う能力 コミュニケーション力 協働する姿勢 分野別グループ・クラス 後輩へのプレゼンテーション 草の根活動の実戦に向けてリーダーシップ・調整力・企画力、実践力の育成	表現：口頭発表 Content PPT スライド Delivery 表現：報告書 記録 振り返り デザイン 理解・知識 ワークシート 論述(期末考査)	① ④ ⑥ ⑨ ⑩ ⑫
3	Global Development 2: AIの基礎知識とその可能性 Global Development 3: 臓器移植とその倫理	物事を多面的に見る力 柔軟性に富んだ問題解決力 経験と知識を融合させる能力 報告書の組み立て・編集 草の根活動の企画・実践 ICTを主体的に使う能力 コミュニケーション力 協働する姿勢 分野別グループ・クラス 後輩へのプレゼンテーション 草の根活動の実戦に向けてリーダーシップ・調整力・企画力、実践力の育成	表現：口頭発表 Content PPT スライド Delivery 表現：報告書 記録 振り返り デザイン 理解・知識 ワークシート 論述(期末考査)	① ④ ⑥ ⑨ ⑩ ⑫

(4) 評価

GSIII Cでは、Neo MAKSの①③④⑥⑨⑩⑫を育成する力として授業を行なった。評価は大きく分けてパワーポイントを作成してグループでおこなうパフォーマンス評価と知識理解を測る筆記テスト、テーマに関して自分の意見を書く論述問題で行なった。一年次から何度もPPTプレゼンテーションを行なっているため、完成度も高く聴衆を意識した発表ができていた。高校生国際会議の振り返りは、的確に実践を分析し、改善の示唆が含まれていた。これらは後輩への助言に生かされた。各学期の期末考査は、ALTの講義に関して学んだ知識やその知識を活用する内容について問題が作成された。授業では活発に意見交換が行われていたが、論述考査の結果をみると、理解の程度や思考の深まりには個人差が大きかった。国際会議や草の根の活動に関しては、生徒達が各自の得意分野を理解して自主的に役割分担をし、企画運営や実践に至るまで協働して行なっていた。国際会議で話し合った改善策が、ポスター・冊子・ビデオの作成など実際の活動につながり、広く校内外の人たちに伝える形が整ったことは大きな進展であった。

8 第1学年 総合的な探究の時間 探究の日について

日 程： 令和元年12月20日（金）1校時～6校時

参加者： 1年生全員

目的： 生き方、あり方を考える機会とする

様々な社会貢献活動等に触れる中で、自分たちの社会について知る機会とする

概要： 全体講演会は、1学年全生徒が参加した。分科会①②は、生徒が13講座の中から第1から第4希望までを選び、教員側でそのうちから2つを決定した。

時間割：

校時	内容	特記事項
1	学年集会	「探究の日」の趣旨説明を含む
2 3	全体講演会	
4	HR	振り返りを記入
5	分科会①	生徒の希望による
6	分科会②	生徒の希望による

講座一覧：

全体講演会					
講師名 (敬称略)	所属先	タイトル	内容	会場	
西側 愛弓	NPO法人DEAR ME	人生の輝きの作り方	生き方あり方を考える	フェニックス	
分科会一覧					
整理番号	講師名 (敬称略)	所属先	タイトル	内容	会場
1	西側 愛弓	NPO法人DEAR ME	私たちが生きる地球と、世界と、ファッションと。	①フィリピンの貧困問題/②ファッション産業問題/③ファッションで社会活動を行うDEAR MEの活動と描く未来	フェニックス
2	有吉 直文	神戸市立科学技術高校	科技高発 空飛ぶ車いす	空飛ぶ車いす研究会のタイ王国での活動	CALL4
3	松下 眞 高田浩太郎	神戸市水道局(前半の部)	「水道」分野の国際協力 -神戸市水道局の取組を例に-	水道の役割 世界の水問題の解決を目指す取組	CALL1
	藤本 英伸	神戸市建設局(後半の部)	「下水道」分野の国際協力 -神戸市建設局の取組を例に-	下水道の役割 世界の水問題の解決を目指す取組	
4	高橋 涼香	理化学研究所 生命機能科学研究センター	理研で研究を仕事にする	理研で働くには？研究したり研究を支えたりする仕事とは？	CALL3
5	曾川 剛志	西宮市立夙川小学校 兵庫教育大学連合大学院(博士課程)	そのとき、あなたは大切な人を守れますか？ -新たな防災の試み-	防災から新しいアイデアが生まれる条件について考える	視聴覚
6	小野 智博 安倍 颯希	Future Code BYCS (神戸市外国語大学学生)	大学生が行なう国際協力	ブルキナファソの雇用創出と医療改善へ	CALL2
7	林 翔太	特定非営利活動法人兵庫子ども支援団体	『NPOの活動で10年後の未来を考える』 ～子どもが笑って過ごせる地域の形成を目指して～	2013年から活動を始めている私たち(兵庫子ども支援団体)の活動や設立の経緯について話をします。話を聞いて「ちょっと先の未来」を考えてみませんか。	選択D
8	斎藤 明子	学会	「外国にルーツのある子ども達をとりまく状況を知らう。」 -教科を学ぶための『やさしい日本語』変換ワークにも挑戦-	まず、子ども達を取り巻く状況に関して知ってもらうためにクイズ形式でQAを行います。次に、実際に子ども達がつまりず日本語の例を出して、それをやさしい日本語に変える練習をします。グループワークです。	選択C
9	伊藤 卓郎	株式会社ASICS	スポーツの力	企業の創業理念と事業活動を通じた社会貢献 グループに分かれてスポーツの力とは何かを色々と考えてもらいます。	GS
10	関山 徹	田辺三菱製薬株式会社	製薬会社の事業を通じて世界の人々の健康に貢献	田辺三菱製薬をご存知ですか？ 創業340年の大阪道修町にある製薬会社です。薬ができるまでの流れなど製薬産業に関わるお話を、私たちの事業が人々にどう 貢献しているかを紹介します。	家庭科 ※妻体館 シューズ
11	関根 理恵	UCC上島珈琲株式会社	生産国にとってコーヒーが魅力ある農作物であるために ～UCCの品質コンテスト～	日本でいつでもどこでも美味しいコーヒーを飲むことができるのは、生産国と消費国の努力の上に成り立ちます。UCCが、コーヒー産業の持続可能性と発展に向け、生産国と共に取り組む、品質コンテストについてご紹介いたします。	調理室 ※妻体館 シューズ
12	吉川 公二	株式会社フェリンモ	ともにしあわせになるしあわせ	企業の創業理念と事業活動を通じた社会貢献 企業の社会的責任と役割には様々な形があります。フェリンモの事例をお話しますので、皆様も一緒に考えましょう。	1組
13	三好 正文	神戸新聞社	地方紙記者の『現場』から	①神戸新聞ができるまで ②新聞の特徴～一貫性・網羅性・信頼性 ③新聞で社会とつながる～時事クイズ ④神戸新聞記者になった理由(わけ) ⑤記者のやりがい・面白味 ⑥震災報道、ハンセン病報道に見る、記者の矜持 ⑦地域連携の現場から ⑧兵庫を知らう ⑨まとめ～自分の意見をもとう、社会参加しよう	2組

評価（自由記述）

生徒

- ・自分は分科会かなり興味ある分野について深く知れたり今までの考えもより深めたりできたので良かったです。疑問点も掴めたので自分で調べていったりしてより知識を深めていきたいです。
- ・一日中講師の方のお話を聞くのは少し大変でした。しかし、良いお話が聞けたので、よかったです。
- ・一日中探究ということで集中力が持つか不安でしたが、ひとつひとつの内容が濃く、また、自分の言葉で内容をまとめて感想を書くことによって話を自分の中で整理しより理解を深めることが出来たなと思います。
- ・自分の希望通り、興味のある分科会に行けたのでとても楽しかったです。今までたくさんの講演を聞いてきたけれど、この日の西側さんの講演が1番心に刺さりました。本当に聞いて良かったです。そして分科会では普段よりも少ない人数で講演を受けたので、講師の方とたくさんコミュニケーションが取れて良い経験になりました。自分も今回の講演をきっかけにアクションを起こしていかなないと強く思いました。
- ・様々な分野で活動してらっしゃる方のそれぞれの生き方や考え方を知ることができて、自分の視野を広げられました。あんな人になりたいと思える人を見つけることができました。

講師

- ・講義の時間は、さすがの葺合生と思うような本質をついた質問を頂けたり、聞く姿勢もとても礼儀があって、生徒の皆様や先生方から私自身学ばせて頂く事が多々ありました。
- ・質疑も含めての50分では、少々忙しく感じました。こちら側の中身の絞り込みも大切ですが、一般的な講演の時間との兼ね合いからも少なくとも60分以上はあった方が良かったかと思います。
- ・できれば内容等について個別に事前打ち合わせをしておく方がよいと思う。(授業内容、Activity、教室選定の件等)
- ・パソコンを持参し、普通の机に置いて立ったままのスタイルで講義とパソコン作動と両方が困難でした。パソコンをかさ上げる台のようなものが必要でした。
- ・生徒の皆さんが講義中に書かれたメモを拝見し、しっかりと話を聞きつつ、あれだけメモを取ることができることに驚きました。地元貢献にもなり、何より社員としても励みとなる時間でした。

教員

- ・事前の打ち合わせは重要だなと感じました。可能であれば全ての事業所で対面しての打ち合わせが必要だと思います。講義内容は次年度もおすすめしたいです。講師の方からは概ね良好な感想をいただきました。
- ・次年度以降もお勧めできる素晴らしい全体会と分科会でした。分科会は全大会規模で全生徒が知るべき内容だと思いました。

9 第2学年 総合的な探究の時間 探究活動

1. 概要

これまで総合の時間としていた授業が、探究の時間となった。本校ではこの1年間、2学年の探究活動を立案、実行した過程を紹介し、探究活動を行った上での生徒の効果・課題について報告する。

キーワード：探究活動、表現、P(計画)D(実行)C(評価)A(改善)、能動的活動、深い学び、課題設定

2. 計画を立案する上で

探究活動を行う上で、「自分を見つめ、表現する。」をテーマにした。そして探究活動を通して、知見を広め、自分自身の内面を知り、将来の自分について考えることで、今の自分を振り返り、将来のために今の自分は何ができるのかを考え、それを表現する事を目標においた。そして年間計画として、次の学習内容を探究学習として行った。

①大学(学部)調査。(オープンキャンパスを通して)(1学期～9月まで)

②台湾修学旅行をバックグラウンドにおいた探究活動(夏休み～1月まで)

2年時から行う学習活動なので、まず「テーマを自分で決める。」「知識を深める。」「実際にインタビューやフィールドワークを行う。」「資料を分析しまとめる。」「自分なりの考察をする。」「考察したものをグループで話し合う。」「全体でプレゼンテーションする。」「プレゼンテーションの中で出た質問やアドバイスを今後活かす。」という流れを①の活動の中で体験させ、②の活動ではさらに発展した活動にすることを心がけた。

3. 大学(学部)調査を通して

1学期、各自希望の大学について、事前に冊子やインターネットを使用して、学部、学科の種類やアドミッションポリシー、進路、入学試験の内容を探究の時間で調べ、どのようなことをオープンキャンパスの中で確認するかを考えた(Plan(計画))。次に夏休み、オープンキャンパスの中でインタビューを行い、レポートにまとめた(Do(実行))。

2学期に入り、クラス内で班に分かれて全員が発表を行い、班代表を決定し(Check(評価))、班代表の発表会を行った。発表時は、各自、評価を行い、評価用紙を発表者に返すことで振り返りを行い、今後の活動の参考にした(Action(改善))。

4. 台湾修学旅行の探究活動を通して

夏休み、台湾のA(歴史)、B(自然科学・産業・交通)、C(日台交流・スポーツ)、D(食文化・観光)、E(芸能)の5つの分野のなかで興味を持ったものを具体的に調べ、レポートを作成させた。2学期に入り、分野別で教室を分け、(ABCDE:各1教室、D:3教室)で1人1人レポートの発表を行い、類似している内容の生徒6～7人でグループとなり、グループ研究を行った(写真1)。

グループ研究では各自のレポートを元に、テーマをひとつにまとめ、インターネットや本を使用した資料収集や話し合いを行った。また、10月31日には台湾の留学生の方を招いての意見交換会を行い(写真2)、これまでの活動の中で疑問に思った事を質問し、アドバイスを受けた。その後、レポートとプレゼンテーション資料(パワーポイント)にまとめ、各分野の教室で班発表を行い、分野代表を決めた。次に、分野代表による学年全体での発表会を行った(写真3)。これまでの研究の中での疑問点や確認したい内容は、修学旅行中の体験を通して理解を深めた。帰国後、3学期には各分野で現地から持ち帰った情報を交換した。



写真1 レポート発表



写真2 台湾留学生の方との意見交換



写真3 学年発表会

5. 最後に（探究活動を通しての成果と課題）

探究活動では生徒は自分で選んだ課題に取り組んでおり、自主的に活動する場面が多くみられた。教科の授業では受動的な活動になることが多いが、探究活動では「自分でやる」という意識のもと、能動的な姿勢での学習活動を行うことができた。また、ディスカッションの中で他の意見を聞き、自分の意見を発信することで、知見を広げることができた。発表する機会を多く持つことで表現力も高まった。また、達成感を感じることで自信にもつながり、以下のような活動に挑戦する生徒も現れた。

① 「青少年のための科学の祭典」、「科学のつどい」への参加

青少年のための科学の祭典や科学のつどいは小中学生に実験や制作活動を紹介し、科学への興味関心を高める活動である。今回、9名の普通科生徒が本校としては初めて参加し、実験教室を催すことになった。最初は、何をどうすればよいかと生徒は悩んでいたが、テーマを決めた後は、小中学生に分かりやすく説明するにはどうすればよいか、どのような工夫をすれば安全で楽しい活動になるかを話し合い、手順のポスターの制作やわかりやすく説明する努力をしていた。また、複数回、実験教室を行ったが、終わるたびにより良い活動にするにはどうすればよいかを考え、工夫し改善に導いた。今回の活動を通して、PDCA サイクルを何回も行うことでより深い活動にしていくことができた。（写真4）



写真4 科学の祭典の様子

② 「水」をテーマにした課題研究

探究活動の活動中、2名の生徒(英語系生徒1名、理系生徒1名)から、「水」について探究活動をやりたいという相談があった。放課後の自主活動なので限られた時間であったが、本校近郊を流れる生田川と住吉川の水質調査を行い、災害時にどのように活用できるかを探究することになった。最初は漠然と水質調査をしていたが、結果から、様々な考えを出し合い、更に調べ、結果をどう解釈するかという活動をなした。（写真5）理系生徒は科学的に水を飲料水になるまできれいになる事を中心に考えていたが、英語系生徒は自分たちや行政がどう活動すれば環境がよくなり、水がきれいなるかを考えていた。そして、科学的手法を使って水をきれいにするという1つの事象を深く掘り下げていく考え方や政策改善という広い視野で物事を解決していく考え方の出し合いから、その2つの考え方をうまく結びつけられないかという議論に発展していった。この議論は物事を深く、そして広く考えていくという活動につながり有益な活動となった。探究の成果を、日本語と英語で発表したのが、グラフの活用やまとめ方の工夫を行い、自分たちの意見をうまく伝えることができ、表現力を高めることができた。（写真6）



写真5 水質調査の様子

以上のように探究活動を通して生徒がより深い学びとなったが、以下のような課題も出てきた。

まず、課題設定の重要性である。今回の探究活動は、教師側が分野を決めた中で生徒に課題を持たせた。課題設定に関しては、意義をしっかり理解し、自ら課題設定を行い、活動すればさらに深い学習につながる。そのための教師の綿密な計画が必要となる。

次に、情報収集の方法である。昨今、インターネットの普及により、欲しい情報が簡単に手に入るが、信憑性に疑いのある情報もある。情報の真偽を見極める力をつける必要性を感じた。また、その情報を鵜呑みにする生徒もおり、実際に確認するためのフィールドワーク（インタビューやアンケート調査、実験・観察など）を行い、更に深い学びにつなげるように活動を促す必要があった。

今回の活動の中で、探究活動を展開にしていく上では「どの場面で何を学ばせるか」を念頭に置いた教師の支援が生徒の活動をより発展させることが分かった。そのために我々の準備や計画を緻密に行う必要性を強く感じた。



写真6 発表会の様子

V 高度な学び

1 本年度の取組概要

(1) 概要

WWL コンソーシアム構築支援事業の課題項目の一つに「大学・企業・自治体・国際機関等との連携を基盤とする社会に開かれた高度な学びのネットワークの構築」がある。「Society 5.2の世界を見据える超未来型グローバルリーダーの育成」のために、本年度は管理機関である神戸市教育委員会と協議し、これまで葺合高校がSGHで培ってきた連携を維持しつつ、「リスクマネジメント」というテーマで研究を進める上で必要な外部団体との連携を広げてきた。「高度な学び」を推進するための連携の具体的相手先として、下記の機関があげられる。

大 学：神戸市外国語大学、神戸大学、兵庫教育大学、大阪大学、兵庫県立大学、関西学院大学、甲南大学
アテネオ デ マニラ大学他

企 業：アシックス、神戸新聞社、UCC、フェリシモ、田辺三菱製薬、大日本住友製薬他

国際機関：WHO 神戸センター、JICA 関西他

自治体他：神戸市、神戸市水道局、理化学研究所、日本銀行協会、兵庫国際交流会館、神戸市社会福祉協議会他

NPO他：ユニカセ、アクセス、DEAR Me、Future Code BYCS、赤ちゃん先生、学ボ会、
ダウン症の子供を持つ親の会他

(2) 本年度の講義・ワークショップの実施内容

1・2年生の生徒対象に本校で行った講義・ワークショップを通して、育成を目指したNeo MAKSの12の力の中で主として、①物事を多面的に見る姿勢 ②他者の痛みを理解しサポートする姿勢 ③多様性の中で協働する姿勢 ④柔軟性に富んだ問題解決力 ⑤自国や他国の文化・歴史に関する深い知識と理解 ⑥コミュニケーション力 ⑦新しい価値観の創造の7つである。また講義・ワークショップの内容は、グローバル社会、高齢化社会、共生社会、リスクマネジメント、コミュニケーション、課題研究の進め方等であった。(国際機関3講座、国内大学13講座、海外大学6講座、企業1講座、自治体・NPO他9講座 計31講座)

12月の期末考査後に1年生の全生徒対象に「探究の日」を設定し、グローバルな課題の解決に取り組む国際機関・NPOや国際・地域貢献活動にかかわる企業や自治体の方々によるワークショップ等を開催した。(企業5講座、自治体・NPO他9講座 計14講座) 大多数の生徒が各自選択した講座に関心を持って臨み、活発な質疑応答を行なった。2年生の全生徒対象には、台湾への修学旅行前に、台湾から日本の大学院へ留学している学生7名から台湾の歴史・現状についての講義を受けた。さらに、夏休みにはJICA 関西での2日間のインターンシップに20名の1年生が参加し、アフリカ10か国からの研修生からSDGsに関する各国の現状について学び、意見交換をすることができた。課題研究を進める中で生徒たちが、数え切れないほどの大学、企業、自治体、NPO等に直接取材に行き、質問に答えていただいた。また電話やネットでの質問にも答えを頂戴した。社会に開かれた高度な学びの仕組みを確立する中で、多くの温かい支援をいただいたことをありがたく思う。

(3) 課題

本年度は、Neo MAKSの力の中の⑧科学的知識を活用する力 ⑩普遍的正義感を育成するための講座を校内で開くことができなかった。大学が関心のある高校生対象に開く科学講座へ本校から参加した生徒はいたが、より多くの生徒にsociety 5.2を目指した世界観を抱いてもらい、IoTやAIといった先端科学技術に関する分野やイノベティブなグローバル人材の育成の分野への理解を広げるため、来年度は、大学、国際機関、企業などと連携授業を計画していく予定である。また、次年度は、医療保健・防災・多文化共生という神戸市の強みを生かした分野にも、学びの機会をさらに広げていきたい。初年度のプログラムを検証し、実施内容、実施時期の検討、テーマや内容によるグループ化などを行う。加えて、複数団体の協働実施による一連のプログラムの設定や、共同実施校・連携校等のALネットワークの中で共催可能なプログラムの開発を目指す。

2 Forefront of Global Health (WHO ワークショップ)

WHO 神戸センター 所長 サラ ルイーズ バーバー博士

日 程：令和元年5月9日

対 象：国際科2年生

講演概要：

昨年に引き続き、WHO 神戸センター所長サラ・ルイーズ・バーバー博士による“Forefront of Global Health”について英語での講演が行われ、日々変遷する世界の保健事情や課題に関する造詣を深めた。

WHO 神戸センターは、1995年神戸に設立され、「持続可能なユニバーサル・ヘルス・カバレッジ(UHC: Universal Health Coverage)に向けた革新的なイノベーションを創出する」という構想のもと、その実現に向けて努力を続けている組織である。バーバー氏は WHO について、Quiz を交え分かりやすく神戸センターがその使命として掲げる UHC について話された。UHC とは「すべての人が、適切な健康増進、予防、治療、機能回復に関するサービスを、支払い可能な費用で受けられること」を意味し、2012年12月12日に国連総会で採択されたと説明された。さらにバーバー氏は「誰が UHC の実現を進めるのか」と質問を投げかけられ、その答えとして、「すべての政府、組織、人々が良好な健康に対する権利の促進に重要な役割を担う。健康は人権である。UHC は公平、公正、社会連帯の重要性を表している。」と述べられた。

また、世界的に大きな公衆衛生問題になっている「たばこ規制」について、生徒は8人程度の小グループに分かれ、以下の4つの課題について議論し、その対策について話し合ったことを発表した。

① 煙草や禁煙が日本や世界の主要な健康問題であるのはなぜか。

生徒の答え (喫煙者だけではなく、受動喫煙による健康被害者もいる。)

② 煙草や喫煙を減らすよい方法はあるのか。

生徒の答え (広報活動、値上げ、課税、自動売機で販売の中止、パッケージに喫煙の危険性を載せる)

③ 煙草や喫煙に反対の立場、または賛成の立場において重要な役割を担うのは誰か。

生徒の答え (WHO、タバコ企業、妊娠中の人、政府、医療従事者、TVドラマ作成者)

④ 学生や市民として喫煙の無い健康な環境をつくるためにどうするか。

生徒の答え (煙草の悪影響を広く知らせる教育)

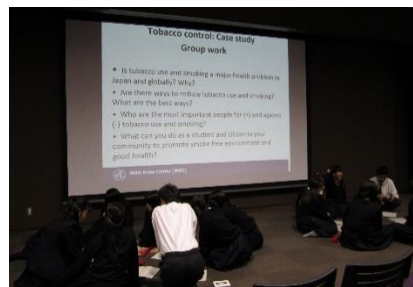
○生徒の感想

- ◆ Before this lecture, I didn't know much about the WHO, so it was really nice to learn how the WHO is trying to help everyone get access to essential health care.
- ◆ I was surprised at the fact that half of the world's population doesn't get access to essential health care.
- ◆ This time, we discussed one public health problem in the group work. In discussion, we could exchange opinions about how to prevent tobacco use, and decided on raising taxes and teaching people about the harms. It was very interesting for me to hear others' ideas. Through this lecture, I realized that there were a lot of things we could do to promote good health habits, so I will try to do what I can do to make a good-health environment.

バーバー博士の講演



ディスカッション



代表者発表



3 JICA 関西 高校生インターンシップ

日 程： 令和元年 8 月 22・23 日（木・金） 10:00～15:00

参加者： 神戸市立葺合高等学校 1 年 20 名（国際科 19 名 普通科 1 名）
近畿大学工業高等専門学校 1 名

目的： 開発途上国の現状を日本に伝え、国際協力の知見と共感をもとに開発途上国の人々と日本人との間の絆を深めて、ODA における二国間援助の実施を一元的に担っている JICA の活動を理解し活動の一部に携わる。また、「都市内道路整備(B)」事業に参加するために来日している研修員の方々と意見交換を通じて、国際協力・地域貢献の意義を体験する。

活動内容： ①JICA 事業の概要説明
②研修員とのランチ交流会
③協力隊員による体験談
④地域貢献活動の一環である「JICA 関西夏祭り・夏休み子どもイベント」の準備

日 程：

8/22(木)		8/23(金)	
10:00~10:30	所内あいさつ	10:00~12:30	夏祭り・イベントの準備 (装飾物、ポスターの展示)
10:30~11:30	JICA 事業概要説明		
11:30~12:30	協力隊員による体験談（1）	12:30~13:30	昼食・休憩
12:30~13:30	研修員とのランチ交流会	13:30~14:30	協力隊員による体験談（2）
13:40~14:40	夏祭り・イベントの準備 (装飾物、ポスターの作成)	14:40~15:00	所内あいさつ
		15:00	終了

生徒の感想：

このプログラムには軽い気持ちで申し込んだが、この2日間は私の意識を変えてくれる貴重なものとなった。ランチ交流会の時に、職業として関わるだけでなく一市民としても国際交流は出来るのだと研修員の方に言われて、今後の私自身もやれることをしながら国際交流に参加できるのだと思って少し気持ちが軽くなった。イベント準備も和気藹々と飾りを作ることができて楽しかった。もっとたくさんの研修員の方々と交流するために、そして食堂の美味しいエスニック料理を食べるために、月に1回は JICA へ来ようと友達と約束した。わたしが世界と繋がっていることを感じ、今よりも繋がっていくための大きな第一歩となった。



4 ワークショップ 英語スピーチ・プレゼンテーションの技法

神戸市外国語大学 教授 野村 和宏 先生

日 程：令和元年9月5日

対 象：国際科1年

講演概要：

○English as an International Language

- グローバル時代といわれる中で、英語はどのようにして現在のような国際語になったのか。世界はますます小さくなっており、科学技術による劇的な変化のため、コミュニケーションの方法にも変化が起こっている。しかしそれでも、人と人との直接の対話（face-to-face communication）に勝るものはない。

● 国際語としての英語

「歴史的に大事なことが起こったとき、英語がいつもそこに存在していた」：ビル・ゲイツが中国語でコンピューター言語を作っていたら、世界の言語事情は変わっていた。

● どんな英語を学ぶか

英語を第二言語として用いる国（ESL Environment）では日常的に用いられている発音を学ぶのがよいが、英語を外国語として用いる国（EFL / EIL Environment）ではアメリカ英語やイギリス英語の標準的発音をモデルとして学ぶのがよい。

○Conversation vs. Speech

- 話すことで意思疎通をする方法には主に「会話」と「スピーチ」がある。

「会話」も「スピーチ」も双方向である。会話やスピーチによって伝えられたメッセージに対して聞き手は feedback を返している。（Nonverbal / Verbal feedback）

○Purposes of Speech / Presentation

スピーチやプレゼンテーションをする際の目的について、代表的な4つを紹介。

○Styles of Speech Presentation

目的に加えてその発表の方法、スタイルにもいくつかの典型的な「型」があります。代表的な4つのスタイルの特徴について理解を深めます。

○What to Practice

- 声にかかわる要素、発表の態度にかかわる要素、言葉・表現の適切さ、姿勢、ジェスチャー、アイコンタクトについて確認する。

○Effective Delivery and Overcoming Stage Fright

- Stage fright の克服法

事前に場所や聴衆を把握する、素材を熟知する、リラックスする、自分の成功をイメージする、言い訳をしない、謝らない、とにかく練習する、など

○Importance of Practice

- スピーチの力を上達させるには練習が必要である。簡単にできて上達の手ごたえが感じられる練習方法を紹介する。

- シュリーマンの音読方法

- A to Z, Days of the Week, Tongue Twisters, Counting 1-100, DJ shadowing

生徒の感想

・野村教授のお話が大変興味深かったので、楽しく英語のスピーチ・プレゼンテーションに関する知識や練習方法まで学ぶことができました。振り返ってみると、私が今までしてきたスピーチやプレゼンテーションは原稿そのままを読んでしまっていたものがとても多く、アドリブや付け加えや差し引きをするといった工夫をするということが少なかったということに気づいた。野村教授自身が、本日の講演の中で、しっかりと準備をしつつもまるで即興であるかのようにお話をされる姿に、私もいつか教授のようにスピーチができるようになりたいという憧れを強く抱きました。

・今回の講演で、スピーチでもたくさんの型があり、時と場合によって使い分けなければいけないこと、会話とスピーチの違い、音読の大切さなどの大事な点をもう一度見直すことができました。野村教授の英語はとても分かり易く、伝わり易かったため、僕も今日教授が教えて下さったことを今後実践していこうと思いました。発表の時の練習の数、アイコンタクト、図のまとめ方によって人に伝わる度合いが全く違うということが分かりました。今日はたくさんのことが学べて本当によかったです。



5 NPO 講座 赤ちゃん先生

日 程： 令和元年 10 月 3 日（木） 6， 7 限

○目的

赤ちゃん先生、ママ講師さんとのふれ合いを通して、自分が赤ちゃんだった頃を振り返り、自己肯定感を高めると共に、一人では生きていけない幼い命への関わり方を考えること、また、「Neo MAKS 12 の力」のうち、「②他者の痛みを理解し、サポートする姿勢」「⑩コミュニケーション力」を育成することを目的として実施した。

○参加団体

NPO 法人 ママの働き方応援隊 ママトレーナー 9 名 ママ講師、赤ちゃん先生（3 歳までの乳幼児）各 36 名
NPO 法人ママの働き方応援隊では、赤ちゃん和妈妈が教育機関や高齢者施設、企業、団体に訪問し、学び・癒し・感動を共有し、人として一番大切なことを感じてもらう人間教育プログラムを実施している。（NPO 法人ホームページより）
本校には上記のスタッフで来校していただき、100 分間の体験プログラムを行った。

○事前指導

9 月 24 日（火） 7 限 場所：フェニックスホール 内容：赤ちゃん先生の概要および諸注意

10 月 1 日（火） 7 限 場所：各ホームルーム教室 内容：お迎えボード、自己紹介カード作成

○当日の流れ

13:50 5 限授業終了後 更衣、移動開始

14:00 集合完了 手指の消毒 諸注意 赤ちゃん先生入場
クラスごとに自己紹介（赤ちゃん和妈妈）
グループに分かれて自己紹介（生徒）育児体験
ママ講師からの話を聞く、等々

15:50 赤ちゃん先生終了



○事後指導

ポートフォリオに当日感じたことをまとめて提出し、赤ちゃん先生に送付

○生徒の振り返りより

① 今回の赤ちゃん先生で学んだことは、教科書に載っていることよりも実際に行うことの方が大変かつ喜びを感じる人が多いということです。赤ちゃんが初めて話した言葉・赤ちゃんが初めてトイレが出来るようになったなど想像しているよりもさらに嬉しく思ったと講師の方はおっしゃっていました。また、銀行などで手が離せない時の赤ちゃんの面倒の見方など、教科書に載っていないようなことも教えていただきました。私たちが思っているよりも、小さな赤ちゃんを連れての方が外へ出かけることは大変なのだと思えて理解することが出来ました。周りの人からの支えでお母さんも赤ちゃんの負担を軽減させることが出来るのではないのでしょうか。このようなことを発言するだけで終わらず、実際に行動に移し、人と人が助け合い、支え合っていける社会になれば良いと思います。

② 今回の赤ちゃん先生で久しぶりに小さな子と触れ合いました。僕たちの班に来た男の子は 2 歳とは思えないほど元気な子でずっと動き回っていました。僕には妹がいて、妹が小さい時はあんなに動き回れるほどの体力はなかったのでこんなに元気な子もいるのだと感心しました。最初の自己紹介で一人ずつ名前の由来を言っていたのですが、一人ひとり名前つけられ方が違い、初めて聞くような名前の付け方を聞いたりしたのでとても興味深かったです。僕がもし将来に赤ちゃんに名前をつけるような機会があれば、その時はよく考えてつけてあげたいです。



③ 私はあまり小さい子と接するのは好きじゃないと最初は思っていました。でも、本当は好きなんじゃないか！？と思いました。小さい子はすごくすごくかわいかったです。赤ちゃんとお母さんの強いつながりを聞いて、この赤ちゃん先生の時間ずっと、自分が自分の両親にどれだけ愛され、どれだけ大切にされていたのかを見させられているような気がしました。

6 グローバルスタディーズ研究会 (GSS) の活動と活躍

概要：GSSとはGlobal Studies Societyの略称で、「グローバルスタディーズ研究会」のことをいう。SGHの指定を受けて始まった葺合高等学校の新設教科GS「グローバルスタディーズ」の内容を授業外でも深めて、課題研究へと進めていく研究会である。今年度は、1年生15名、2年生18名、3年生14名の計47名がメンバーとして活動に参加した。本年度本校はWWL拠点校の指定を受け、対象生徒が普通科にも広がったことから、普通科生徒の入会も勧めていきたい。

育てる力：1 リサーチ・分析力 2 論理的思考力 3 問題発見・解決能力 4 発信・発表する力
5 日本語と英語によるコミュニケーション能力・交渉力 6 協働する力

活動内容：1 課題研究について自分のテーマを持って調査・分析をし、考察を深め、発表する
2 GS Timesの発行【日本語・英語】
3 葺合高校「WWL拠点校」としての取組の広報活動
4 本校食堂で行っているTABLE FOR TWOの取組の広報活動とメニューの提案
5 NPO法人フキックスコルプスの活動継続の支援

活動日：毎週火曜日・木曜日 放課後 15:30～17:30
7限がある場合は、16:30～18:00
週末に校外の発表会や国際理解講演会等に参加する。

活動場所：CALL2 か コンピュータ1教室

担当教員：茶本・榊井・大坂・白崎ほか



個人の部・チームの部 優秀賞

○令和元年度にGSS生徒が参加した大会・活動

A 課題研究

- ① 大阪大学国際公共政策コンファレンス 発表・見学 4月13日(土)14日(日) 大阪大学豊中キャンパス (基礎工学国際棟・国際公共政策研究科棟)
優秀賞 3年 堀越 なる「Bridging the Gap～JSL students と共に創る教育」
2年 猪熊 菜結 木幡 詩菜「女性の美意識と拒食症～ファッションで創る多様性を認め合う社会」
- ② イオン1%アジアユースリーダーズ プログラム 参加 8月17日(土)～8月24日(土) ベトナム
アジア9か国の高校生が集まり、現地で企業訪問をしたり、インタビューを行ったり、「食生活の考察と改善点の提案」についての意見交換をしたりする国際的な高校生会議に出席・研究発表 2年生4名
- ③ 関西学院大学 リサーチ・フェア 発表・見学 11月15日(金)16日(土) 関西学院大学三田キャンパス
国際問題・社会問題について課題研究をまとめ発表を行う(英語・日本語)。課題を発見し、夏休みから研究を進めた。発表1年生1チーム 2年生 2チーム
口頭発表奨励賞 2年生 桜井 蘭歌 吉田 実央 「技能実習制度の『見える化』と地域の役割」
- ④ 全国大学生 マーケティング・コンテスト 見学 12月15日(日) 神戸市外国語大学
「新たな書く(描く)文化の創造 ナガサワ文具」というテーマで、大学生が英語で行なうビジネスコンテストの全国大会の見学
- ⑤ One World Festival for Youth 高校生のための国際交流・国際協力 EXPO 2019 発表・見学
12月15日(日) 大阪YMCA
ポスター発表 ファイナリスト 優秀賞 2年生須多・古川チーム”Support for Teenage Mothers Who Do Not Take Prenatal” 藤川・藤原チーム “The Housebound Elderly”
セミファイナリスト 人気投票 2年生大柳・幅チーム”Supporting Foreign Visitors’ Good Travel”
高校生助成プログラム 成田(2年)高山(1年)”Girls, be Ambitious” 最終審査に進む

- ⑥ 甲南大学 リサーチフェスタ 発表・見学 12月22日(日) 甲南大学
高校生と大学生、大学院生がともにポスター発表形式で自分たちの「研究」や「活動」について発表する。
- ⑦ WWL 等課題研究交流発表会 発表・運営 12月26日(木) 本校 国際交流棟 フェニックスホール
WWL 拠点校・共同実施校・連携校、SGH・SSH 校を中心として近隣の高校生を招き、様々な分野の研究が発表される課題研究交流発表会を運営する。横浜市立横浜サイエンスフロンティア高校・兵庫県立神戸高校・県立御影高校・神戸大学附属中等教育学校・神戸市立六甲アイランド高等学校・市立科学技術高等学校・市立神港橋高校・市立須磨翔風高等学校・武庫川女子大学附属高等学校・神戸龍谷高等学校など 11校 147名の生徒と 55名の教員が参加。パワーポイントを使用した口頭発表やポスタープレゼンテーションを行い、その後テーマによって分かれて、英語か日本語で討議もしくはワークショップを行ない全体会で発表した。GSS が準備・運営を担い、テーマ別の討論を進行し、報告を行なった。
- ⑧ WHC フォーラム 第7回高校生「国際問題を考える日」 発表・見学
令和2年2月11日(祝) 六甲アイランド 神戸ファッションマート
高校生のグローバルな社会課題やビジネス課題に関する研究や実践の拡大、充実、活性化を図り、コミュニケーション能力・問題解決能力の向上を図るポスターセッション(日本語・英語)
発表 10チーム 3年1チーム3名「E-waste(電気電子機器廃棄物)の再利用を促進するために」
2年6チーム12名、1年3チーム6名 最優秀賞 3年 永井夏純・永澤萌絵・渡邊桃子
- ⑨ WWL・SGH×探究甲子園 発表・見学 令和2年3月21日(土) 関西学院大学上ヶ原キャンパス
WWL 校・SGH 校 アソシエイト校・SSH 校、正課の授業で探究活動に取り組んでいる学校 課題研究発表会
英語 口頭発表選考通過 2年2名 英語 ポスター発表予選通過 2年2名 [コロナウイルスのため中止]
- ⑩ The Global Enterprise Challenge 2020 参加 令和2年3月22日(日) 8:00~20:00
世界が共通に抱えているような社会的な課題の課題が 8:00 に HP 上に掲載され、解決方法を 12 時間以内に事業計画書と 3 分の動画にまとめて提出する取組。 2年7名 1年1名

B WWL 拠点校としての広報活動

WWL 拠点校としての取り組み・国際協働学習・海外研修などについてパネルを作成し展示をする。葺合高校の生徒、保護者、中学生、来校者に活動の内容を伝える。

- ① 葺高祭 6月7日(金) 校内祭 8日(土) 一般祭
- ② オープンキャンパス・オープンハイスクール 6月15日(土)・8月21日(水)・22日(木)・10月5日(土)

○生徒の感想

- ◆ WWL 課題研究交流発表会では、準備・運営・進行を GSS メンバーで担当しました。参加した他校の方々に来て良かったと思ってもらえる会にできるよう、自分たちで工夫をして計画を立てました。大変でしたが、イベントを実行する能動的姿勢を身につけることができました。そしてこの姿勢は、自分たちの研究を協働で発展させることにもつながっていると思います。
- ◆ GSS では、生徒一人ひとりが興味を持った社会問題について課題研究を行い、発表します。私は GSS での活動を通し、特に問題解決能力・高いプレゼンテーション能力・論理的に自分の意見を伝える力が身についたと感じています。私が、自分の成長を感じたのは、2年次に SGH 甲子園で英語の口頭発表をした時です。1年生で発表を行ったときに比べ、自信を持って、審査員の先生方や観客の目を見て発表できるようになりました。何度も多くの人の前で発表を繰り返し、どのように発表すれば、自分の研究成果が伝わるのかを学んだ結果だと思っています。又、質問を受けた際にも、慌てることなくはっきり答えることができました。自分が研究している社会問題に対し、いろいろな角度からどのようにアプローチすれば、問題を効果的に解決できるのか考えることができ、かつ、その考えを客観的に見ることができたからこそ論理的に自分の意見を言うことができました。この経験を大学でも生かし、これからも社会問題に取り組んで行きたいです。

VI 協働グローバル創造活動

1 本年度の取組概要

(1) 本年度の活動

Society 5.2 (Society 5.0 の先)で必要とされる力 (Neo MAKS) を育成するために、SGH 研究でグローバル人材の育成に成果があった国際協働学習と社会貢献活動に、創造的要素を加えた協働グローバル創造事業を計画・実施した。

7月に5校の姉妹校生徒を招聘したインターナショナル・コンファレンスでは、プレゼンテーションやディスカッション活動だけでなく、歓迎行事や全体会の計画や運営も生徒中心に行った。運営には総勢約200名の生徒が関わった。また、スウェーデン、オーストラリアの海外姉妹校が来校した際は、インターナショナル・コンファレンスに向けてプレコンファレンスを行った。10月のラグビーワールドカップ交流会(神戸市主催)は4つのラグビー海外チームと4校の小学校との交流事業であり、8名の生徒が英語と日本語による司会運営を担当した。事前の研修や担当者との打ち合わせ、会場確認など綿密な準備を行い当日に臨み、活躍が認められ、後に神戸市長から感謝状が授与された。11月の道徳の日(WWL 共同実施校: 神港橋高校主催)では8名の生徒が英語の通訳者として参加し、災害時の備えについて学びを深化させた。12月の神戸コミュニティフォーラムでは、外国人も含めた神戸市民が英語で語り合うことを目的としており、4名の生徒がキックオフプレゼンテーション、6名の生徒が英語のディスカッションのファシリテーターを務め計21名の生徒が参加し活躍した。共同実施校、連携校や近隣の高校が参加した第1回WWL等課題研究交流発表会においても、全体会の司会・運営、テーマ別ディスカッションやワークショップの司会進行の役割を約20名の生徒が担った。準備や運営には各学年が関わるようにして、後輩が先輩から学べるような組織作りを行った。

葺合高校生は、7月にはオーストラリア、12月には台湾の姉妹校を訪れ、文化交流や社会問題について意見交換を行った。11月の神戸市主催のバルセロナ派遣では、葺合高校生と科学技術高校生が合同で参加し、現地の高校生との交流も行った。ALネットワークを活用した活動を実践することができた。

(2) 今後に向けて

協働グローバル活動に参加した生徒の多くは、また参加したいという思いがある一方で、英語を話す行事には参加を躊躇する生徒もいる。準備をして臨むことができるポスターや、英語が堪能な生徒とペアやグループを組むなどの工夫が必要である。本年度は、神戸市、拠点校、共同実施校、連携校における協働活動が主であったが、令和3年度に実施予定のWWC(ワールド・ワイド・コンファレンス)では、大学教員による授業や、企業や国際機関による講義やワークショップなどを企画し、新しい価値観が生まれ、未来社会を形作る会議としたい。

2 2019 KOBE International Conference at Fukiai

日 程：令和元年 7月11日（木）12日（金）

目 的：

- ・直接交流を通じて海外姉妹校同士の繋がりを強め、学びの輪を広げ、世界市民としての意識を高める。
- ・参加生徒が様々な社会課題について議論し、現在自分たちが取り組む事ができる解決策を提案することによって、あるべき社会の姿を模索し、新しい価値観を創造する姿勢を養う。

テ ー マ：Local Action for Global Impact (LAGI)

分 野： 1) Education, 2) Environment, 3) Health, 4) Human Rights, 5) Sustainability

1) **Education** Improving Education for People with Disabilities （特別支援教育の向上）
What accommodations can be made for students with learning disabilities?

2) **Environment** The prospects of E- waste Recycling （電子機器廃棄問題）
How can high school students contribute to recycle E-waste from school level?

3) **Health** High School Students' Mental Health （高校生のメンタルヘルス）
What can high school students do to reduce the risk of depression?

4) **Human Rights** Cyber Bullying （ネットいじめ）
How cyber-bullying can be prevented among high school students?"

5) **Sustainability** Fast Fashion （ファストファッション）
What should/can each teenager in the Philippines, Sweden and Japan take action to make movements of sustainable clothes consumption with keeping individual fashion/life styles?

参加高校（6校）：サマミッシュ高校（アメリカ）Sammamish High School

フェニックス高校（スウェーデン）Fenix High School

ウエストボーン グラマースクール（オーストラリア）Westbourne Grammar School

臺中市立臺中第一高級中等学校（台湾）Taichung First Senior High School

アテネオ大学附属高等学校（フィリピン）Ateneo de Manila Senior High School

神戸市立葺合高等学校（日本）Kobe Municipal Fukiai High School



7月11日(木) 2019 KOBE International Conference at Fukiai 第1日目

8:20	海外学生・引率教員 集合	
10:00	<p>● 開会式 (Opening ceremony) (運営・進行 国際科2年生)</p> <p>(参加: 123年国際科全員 240名、123年普通科 希望生徒 85名 海外生徒教員 15名、本校教員・委員会・WWL 関係者他)</p> <ul style="list-style-type: none"> • 海外姉妹校生徒・引率者 入場、紹介 (2年) • 開会宣言 (3年) • 学校長挨拶 (通訳3年) • 海外参加5校より、各校・各国の紹介 (各校 5分程度) • 歓迎パフォーマンス (部活動、日本的なもの) • 2日間の日程説明 	フェニックスホール
11:30	午前の部終了	
	昼食	
13:00	<p>分野別 パワーポイント プレゼンテーション セッション テーマ: "Local Action for Global Impact"</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 Education 「教育」: 特別支援教育の向上 2 Environment 「環境」: 電子機器廃棄問題 3 Health 「健康」: 高校生のメンタルヘルス 4 Human Rights: 「人権」: ネットいじめ 5 Sustainability 「持続可能性」: ファストファッション <p>パワーポイント プレゼン発表・質疑応答 (葺合生+海外生徒2名)</p> <p>発表①・質疑応答 (10分+8分) 発表②・質疑応答 発表③・質疑応答</p>	<p>5会場</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 大会議室 2 視聴覚室 3 国数教室 4 2C教室 5 地歴教室
14:00	休憩	
14:15	<p>分野別会議 1</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 Education 「教育」: 特別支援教育の向上 2 Environment 「環境」: 電子機器廃棄問題 3 Health 「健康」: 高校生のメンタルヘルス 4 Human Rights: 「人権」: ネットいじめ 5 Sustainability 「持続可能性」: ファストファッション 	<ol style="list-style-type: none"> 1 大会議室 2 視聴覚室 3 国数教室 4 2C教室 5 地歴教室
15:30	<p>分野別代表者会議 各分野代表者は2日目にむけて final presentation を作成 final presentation 準備 スライドショー</p>	<p>CALL 1 CALL 2 CALL 3</p>
17:00	解散	

7月12日(金) 2019 KOBE International Conference at Fukiai 第2日目

8:20	集合	
8:35	代表者会議 5つの分野別で Final presentation を完成させる	CALL 1・2
9:30	全体会 準備 (分野別) 各分野での最終確認 テーマ: “Local Action for Global Impact” 1 Education 「教育」 2 Environment 「環境」 3 Health 「健康」 4 Human Rights 「人権」 5 Sustainability 「持続可能性」	1 大会議室 2 視聴覚室 3 国数教室 4 2C教室 5 地歴教室
10:15	午後の分野別パワーポイントプレゼンのリハーサル 分野別で、全体会の準備 (final presentation) が終わった グループからフェニックスホールでリハーサルを行う	フェニックス ホール
	リハーサルと並行して	
10:30	ポスター プレゼンテーション セッション (長田教育長来校) 2年生6ポスター / 3年生 14ポスター 各会場で説明 発表8分、質疑応答6分を3回行う。	多目的室 大会議室 3Fホール
10:40	ポスターセッション①	
11:00	ポスターセッション②	
11:20	ポスターセッション③	
11:45	昼食	
13:00	2019 International Conference 全体会 <ul style="list-style-type: none"> オープニング 開式宣言 来賓あいさつ 教育次長 住谷照雄氏 11日の記録 スライドショー上映 	フェニックス ホール
13:20	5分野 Final Presentation (分野ごとに、現状、原因、考察、解決策、提案, 実現可能な活動についてまとめたもの) 各分野 葺合代表1名、海外生徒2名 発表10分・質疑応答5分	フェニックス ホール
14:40	ゲストスピーチ 大阪大学 特任教授 川嶋太津夫先生	フェニックス ホール
15:35	海外姉妹校等教員代表挨拶	
15:40	表彰式	
15:50	閉式宣言 葺合高校生徒1名 姉妹校生徒1名	
15:55	閉会 3年生と海外生徒・教員 合同記念写真	
17:00	解散	

保護者の声

- ・7月11日の教師での学びの後の7月12日のフェニックスホールでの発表、とても素晴らしかったです。WWLに選ばれてとても素晴らしい取り組みに参加できて大変うれしく思います。ありがとうございました。
- ・ポスタープレゼンテーションはすべてを見ることができず残念でした。内容も英語もとても勉強になりました。自分の関心のないこともプレゼンテーションを聞くと興味が出るのもっと多くのプレゼンテーションを聞けるチャンスがあれば発表する側も聴衆者もより楽しめるのではないかと思います。他校にはないこうした素晴らしいものをより良いものにしていただけたらと心から願っています。
- ・今年子どもが国際科に入学し、このインターナショナルコンファレンスがどういうものかわからないままでしたが、せっかくの機会なので出席させていただきました。私の英語力では全てを理解することは難しかったのですが、子どもたちが身の回りの問題から社会問題を外国の学生たちと話し合い、相互理解をしながら問題解決に向けて意見を出し合い、その成果を発表できる素晴らしい経験だと思います。大変勉強になりました。
- ・二日間にわたりありがとうございました。初めて訪問させていただきましたが、生徒と教職員の方の距離が良い意味で近く、自由闊達な雰囲気の中で教育活動がなされていると感じました。何より驚いたのは、生徒の皆様の英語力の高さはもちろんですが、SGHで積み重ねた知識や技術をWWLのステージでさらに昇華させているところです。次に向けた素晴らしい実践例を紹介していただき勉強になりました。

生徒の声

- ・ディスカッションパートはとても有益なものとなりました。海外招待生徒の意見に耳を傾けることが、私たちが事前に考えていた解決策の再考につながり、より良いものにすることができました。
- ・私たちのチームはメンバー間のつながりが非常によく、意見を円滑に交換してディスカッションで導き出された内容をファイナルプレゼンテーションに移すことができました。私たちが実現したい将来像を全員で分かち合える素晴らしい機会になりました。
- ・会議中のモデレーター（司会者）をもう少し助けてあげられたのではと今になって思います。ディスカッションの流れを全体で事前に確認をきちんとしておくことが大事です。
- ・プレゼンテーション原稿の締め切りにいつも追われていました。各パート内でキーポイントになる事柄を早めに決められなかったことがその原因だと思われます。
- ・とにかくコミュニケーションを図ることが大切です。リサーチクエストに対する考察、参加各国による相違点の共有、解決策の実施や運営はすべてそこにかかっています。

3 オーストラリア短期海外研修

日 程：令和元年7月24日（水）～8月3日（土）

参 加 者：生徒20名（国際科2年14名、普通科2年5名、国際科1年1名）
引率教員2名

- 目 的：1) 現地姉妹校の生徒やホストファミリーとの交流を通してオーストラリアの文化を経験し、文化交流の意義を体感し、国際性を養う。
- 2) 日本文化を英語で紹介することで自国の文化を再発見し、現地の人々との交流を通して英語の表現力を高める。
- 3) 葺合高校のWWLでの研究について発表し、意見交換を行うことで研究を深める。

行 程：

	月日	活動内容
1	7/24（水）	関空出発、香港にて乗り継ぎ
2	7/25（木）	メルボルンに到着 メルボルン市内観光 クイーンビクトリアマーケット、セントパトリック寺院、チャイナタウンを観光
3	7/26（金）	学校交流 1 ホストファミリーと対面
4	7/27（土）	週末 ホストファミリーと過ごす
5	7/28（日）	週末 ホストファミリーと過ごす
6	7/29（月）	学校交流 2 各種授業参加、日本文化紹介及び課題研究発表
7	7/30（火）	学校交流 3 全校集会、各種授業参加
8	7/31（水）	学校交流 4 各種授業参加、日本文化紹介及び課題研究発表
9	8/1（木）	学校交流 5 各種授業参加、課題研究発表及びディスカッション
10	8/2（金）	学校交流 6 各種授業参加 メルボルンを出発
11	8/3（土）	関空へ到着

○生徒日誌より

7月30日（火）

「今日は日本語の授業があり、日本について色々質問されました。彼らの日本語はとても上手で驚きました。日本語以外にも色々な授業を受けましたが、ほとんど理解できませんでした。ただ、化学の授業で行なった実験(恐らく鉄などを酸化させる実験)はとても楽しかったです。実験ではコートを着て、手袋をつけ、ゴーグルもつけるなど、とても厳重な格好でした。休み時間はずっと Downball というスポーツをしています。とっても楽しく、昨日は昼ごはんを食べるのを忘れるほどでした。時系列がバラバラになってしまいましたが、朝の全校集会のようなもので、日本文化として盆踊りを紹介しました。案外盛り上がりが出て、とても踊りがいがありました。ホストファミリーの家では、お好み焼きを作りました。気に入ってくれたようで、とても良かったです。明日は折り紙をオーストラリアの生徒に紹介するので、全力を尽くして頑張ります。

8月3日（土）

「最終日なので、今回の研修旅行の振り返りをしたいなと思います。今回の研修旅行で印象に残っている場所はヴィクトリア州立図書館です。蔵書数は200万冊で、外見から内装まで豪華な造りになっており、その荘厳な出で立ちに感動しました。現地の学校については、天然芝のサッカーグラウンドが印象に残っています。水曜日に他校とサッカーの試

合があり、参加させてもらいました。自分は現地の選手と比べ、体格とスピードが劣っているため、苦戦しました。学校の授業では、パソコンを使う授業が多かったです。日本の先生の講義をひたすら聞く授業とは違い、アウトプットする機会が多い印象を受けました。オーストラリアでの生活は様々な苦労もありましたが、それも含め楽しく過ごすことができました。次に、今回の研修旅行で学んだことを綴りたいと思います。オーストラリアで過ごした日々は、「計画性」「積極性」の二面において自分を成長させてくれました。現地で計画性のない身勝手な行動をとると、自分の首を絞めるとともにホストファミリーの方や先生に迷惑がかかります。それゆえ、計画性をもって行動することは現地で生活するのに欠かせないことでした。日本での生活においても同じことが言えると思います。今回の経験を活かし、今後の日本での生活を有意義なものにしたいと思います。



集合写真



日本文化紹介



課題研究発表

活動の概略：

到着初日のメルボルン市内観光を終え、姉妹校の Westbourne Grammar School（ウェストボーン・グラマー・スクール）を訪問し、同校の生徒の家にホームステイし、交流活動をした。姉妹校の Westbourne Grammar School は幼稚園から高校までの一貫校であり、今回は中学3年生から高校3年生までの生徒がホストとなって暮高生を受入れてくれた。

同校の生徒は本当に心優しくフレンドリーで、いつも日本語や英語で挨拶をしてくれ、困ったときは話しかけてくれるなどして、生徒たちは初日からすぐに打ち解けて授業に参加することができた。また同校では生徒にタブレット PC を支給しており、その授業環境の違いに生徒たちは驚きを隠せない様子だった。

滞在中は、基本的に各ホストが受けている授業に参加した。参加した授業は、英語、数学、化学、芸術、家庭、体育などバラエティに富んでおり、授業の内容によっては難しいものもあったが、ホストに助けをもらいながら日々懸命授業に参加していた。

また同校では外国語の1つとして日本語を勉強しており、ペアやグループになって同校の生徒と日本語で会話をするなど、各学年の日本語の授業にも積極的に参加をした。中学生の授業では、自己紹介や家族構成の話だったが、高校生の授業になると日本語で課題研究をして論文を書いているクラスもあり、日本の食文化について日本語や英語で質疑応答する場面も見られた。

授業体験のほかに、こちらから日本文化を紹介するプレゼンテーションをする機会もいただいた。生徒たちは4つのグループに分かれ、それぞれに創意工夫を凝らして「折り紙」、「日本のお弁当にかかわる文化（キャラ弁など）」、「ゆかたの着付け」、「日本の四季」について日本語や英語を交えてプレゼンテーションをし、様々な日本文化を体験してもらうことができた。

さらに、国際科2年生を中心に Internet Addiction（ネット依存）について課題研究に関する発表及びディスカッションの時間も設けていただいた。オーストラリアの高校生と活発に意見交換ができたことは、今後の課題研究に向けて大きなステップとなり、大変有意義な時間であった。

課題研究テーマ： What is Internet Addiction?

○生徒課題研究感想より

- ◆ 今回のオーストラリア夏季海外研修では、様々な文化、生活様式の違いなどを実感できた。しかし、私たちが今回課題研究発表として扱った **Internet Addiction**（ネット依存）という問題については、日本もオーストラリアも現状は似ているなという感想をもちました。どちらの国の中・高校生にとってスマホは所有率が高く、SNSを始めとするインターネットを利用したコミュニケーションも盛んに行われています。そんな中で、いかに自制心をもって使いこなしていくか、という共通の課題についていろいろな意見交換ができたので、とても有意義な時間となりました。



集合写真—ウエストボーンの学生たちと共に

4 イオンワンパーセントクラブ アジアユースリーダーズ 2019

日 程：令和元年8月17日（土）～24日（土）8日間

開 催 地：ベトナム社会主義共和国 ハノイ

テ ー マ：「アジアにおける食と健康の提案」

主 催：イオン1%クラブ

参 加 者：高校生115名、引率・事務局32名 本校生徒2年生国際科4名、引率教員1名

参 加 国：中国、ベトナム、インドネシア、マレーシア、タイ、カンボジア、ラオス、ミャンマーの高校生各国10名

日本参加校：北海道登別明日中等教育学校、秋田県立秋田南高等学校、石川県立金沢泉丘高等学校、お茶の水女子大学附属高等学校、渋谷教育学園幕張高等学校、立命館守山高等学校、関西学院千里国際高等部、広島大学附属福山中高等学校、神戸市立葺合高等学校 35名

- 目 的：
- ・アジア諸国からの高校生が一堂に会し、開催国の環境・経済・社会等の問題についてディスカッション・発表(英語)を行い、多国間交流を通じて価値観の多様性を学ぶとともに同世代の友人ネットワークの構築を図る。
 - ・次代を担う若者の社会・環境意識の向上、並びに、グローバルリーダー育成を目指す。
 - ・現実的な社会・環境問題（今年のテーマ：アジアにおける食と健康）についての学習、視察、チームディスカッションを通じ、解決に向けたロジックを磨くことができるよう支援する。

行 程：

月 日	活 動 内 容
8月17日（土）	日本出国 ベトナム到着
8月18日（日）	オリエンテーション、講義、ウェルカムパーティー
8月19日（月）	講義、関連施設視察
8月20日（火）	講義、体験活動（ヒアリング）
8月21日（水）	課題整理、ヒアリング活動、チームディスカッション
8月22日（木）	チームディスカッション
8月23日（金）	プレゼンテーション発表会・表彰式・懇親会
8月24日（土）	帰国

事前学習：

6月16日 スカイプによるプログラム概要の説明

7月20日 お茶の水女子大学に於いて：レクチャー、質疑応答、ディスカッション、発表

事後学習：

10月2日 GS2Bの授業で国際科79名対象にベトナムで行った研究テーマ課題について PowerPointで発表、報告を行った。

○引率教員より

葺合高校からは昨年のインドネシア大会に次いで2回目の参加となった。4名それぞれがアジアの代表となるリーダーとしての務めを果たし、「食と健康」をテーマとしたディスカッションでは英語をツールとして積極的にディスカッションに参加し、日頃授業などで培ってきたリサーチ力やプレゼンテーション能力を活かし各チームでリーダーシップを発揮することができた。グループごとの発表では葺合高校生が参加した2チームがそれぞれ1位、3位に入賞した。



○生徒の感想

- ◆ 外国9カ国との協働は、想像以上に価値のあるものでした。毎日学校とは違った、新しいことを、新鮮な環境で、新しい友人と学べたことは、大変ではあったものの私の価値観を広げる、夢のような環境でした。実際に初めてグループのメンバーと対面した時、国際色豊かでとても感動しました。今までアメリカとフィリピンに留学したことがあるのですが、その時とはまた異なった英語のアクセントや、雰囲気を感じました。同じグループの人たちと話していくうちに、みんな個性を持っていること、また英語の力がネイティブレベルであること、そして価値観の多様性があることを知りました。私はまだまだ学ばなければならないことが多くあると思ったことに加え、積極的に意見を言うことの重要性を学びました。
- ◆ 国も文化も宗教も異なった中で、口論になった場面もありましたが、目標に本気で向かい合い意見をぶつけ合ったことで、最後には気持ちが一つになり、賞を頂くことができました。みな同じ感情をもち、それらを分かち合うことができる素晴らしい仲間に出会うことができ、本当にこの機会に感謝しています。
- ◆ わたしがこのプログラムを通して学んだことは、リーダーの重要性です。リーダーの的確な指示がチーム全体の活動に大切であることを、実際自分がチームのリーダーをしたことで強く感じました。まだまだリーダーとしての力は足りないけれど、このプログラムは自分を大きく成長させてくれるとても良い機会でした。
- ◆ 今回のアジアユースリーダーズを通して、自分は日本人であり、アジア人でもあることを肌で感じました。日本人として日本の状況や取り組みなどを共有しつつ、アジア人として栄養問題の解決を図るよう考えるなど、将来国際機関で働くことを志す私にとって、とても貴重な経験でした。



葺合アジアユースリーダー



イオンモールでヒアリング準備



チームディスカッション



チームディスカッション



1位入賞



表彰式



日本代表アジアユースリーダーたち



葺合アジアユースリーダー



各国のアジアユースリーダーと

5 ラグビーワールドカップ 2019 交流会

日 程	令和元年 10 月 2 日	アイルランドチーム	西灘小学校
	令和元年 10 月 3 日	スコットランドチーム	明親小学校
	令和元年 10 月 7 日	カナダチーム	大開小学校
	令和元年 10 月 10 日	南アフリカチーム	こうべ小学校

主 催 : 市民参画推進局スポーツ振興部国際スポーツ室

内 容 :

WWL 構築支援事業管理機関（神戸市教育委員会）と市民参画推進局スポーツ振興部国際スポーツ室の共同事業として、ラグビーワールドカップ 2019 の公認キャンプ地である神戸市における小学生対象の地域交流会に、高校生が参加した。4つの代表チーム（アイルランド・スコットランド・カナダ・南アフリカ）と西灘小学校、明親小学校、大開小学校、こうべ小学校との交流会において、9名の生徒が、準備や当日の司会や通訳などを担当した。後日神戸市長より葺合高校宛に地域交流イベントの協力に対する感謝状が贈られた。

参 加 者 : 1, 2 年有志 9 名（放送部 4 名）

プログラム(例) : 南アフリカチームとの交流会 こうべ小学校

Time	Action	Team action	Place	Remarks
9:55	Team arrive	Bus arrive	Kobe elementary school	
10:00~10:03	Welcome speech by facilitator	Sit and listen	Kobe elementary school	
10:04~10:07	Self-introduction by team	Self-introduction	Kobe elementary school	Name and position
10:08~10:18	Question from students to team	Sit, listen, and answer	Kobe elementary school	
10:19~10:39	Rugby experience to representatives	Show, play, interact with students	Kobe elementary school	Pass, tackle, lineout, etc
10:40~10:43	Thanks speech from students	Sit and listen	Kobe elementary school	
10:44~10:50	Autograph session and photo session	Interact with students	Kobe elementary school	Signature on a rugby ball
10:51	Team departure	Bus departure	Kobe elementary school	

事前の取り組み:

- 9月初旬 参加者募集 放送部員に依頼
- 9月10日 ラグビー事前研修（校内）講師：尾久土先生
- 9月13日 明親小学校現地打ち合わせ(管理機関・国際スポーツ室主催)
- 9月19日 大開小学校現地打ち合わせ(管理機関・国際スポーツ室主催)

生徒感想:

- ・打ち合わせ段階から英語の勉強も含め、どのようにしたらスムーズに会が進むかなど、学ぶことがたくさんありました。
- ・小学校の子供たちもとても喜んでいて、一緒になって遊べました。選手も優しくおおらかで、皆一つになってできた活動という感じがしました。
- ・通訳するのが難しかったです。選手の方々はとても親切で、私たちが戸惑っている際にはフォローしてもらったことがとても印象に残っています。
- ・スポーツは世界共通なのだと思います。



6 第4回神戸コミュニティーフォーラム

日 程：令和元年12月8日（土）13:00-16:30
会 場：デザイン・クリエイティブセンター神戸（KIITO）
主 催：神戸市 公益財団法人神戸国際協力交流センター
参 加 者：神戸市民 外国人を含む

本校参加者：キックオフプレゼンテーション（英語） 国際科2年4名
ファシリテーター（英語） 国際科3年2名、2年2名、1年2名
普通科英系3年1名
ディスカッション参加 国際科3年1名、2年3名、1年4名
普通科英系3年1名、2年1名
学校長・引率教員2名

目 的：外国人も含めた神戸市民が多文化を認め合い、人と人、コミュニティ同士のつながりを強めるきっかけにするために、様々な意見やバックボーンを持った人がテーマについて英語で語り合う。

テ ー マ：「多文化に出会える場所づくりを考えよう」 “Creating Multicultural Spaces”

当日プログラム：

時間	活動内容
12:00	会場設営 プレゼンテーションリハーサル
13:00	受付、ワークショップグループ分け
13:30	司会者によるオープニング、神戸市長 久元喜造氏 挨拶
13:40	キックオフプレゼンテーション 葺合高校生4名
14:20	ワークショップ（グループディスカッション、グループ代表者発表）
16:00	パーティー（ネットワーク作り）

キックオフプレゼンテーション要約

Providing Evacuation Information to Support Foreign Tourists

発表者 葺合高校 2年 大柳 智恵子 幅 美萌梨

日本の外国人観光客数は急増しているが、過去の震災時には観光客の母国語による情報発信が行われず、地震を体験したことがない外国人観光客が情報不足に陥ったことが報告されている。震災が起きた時に、観光客を助ける外国人防災リーダーの育成を提案する。

Better Support for JSL Students in Kobe

発表者 葺合高校 2年 角田 万里愛 成田 紗花

“JSL(Japanese Second Language) students”と呼ばれる日本語を第2言語とする生徒は、神戸市に432人、全国では4万人以上在籍している。文部科学省や神戸市教育委員会も日本語支援対策を行っているが、全ての生徒に十分な支援が行き届いていない。彼らが平等に日本語教育を受けられるように、高校生の視点から提案する。

事前の取組

- 10月中旬 1、2年生に神戸コミュニティーフォーラムを案内し参加者を募集
3年生（昨年度参加者を中心）に参加を依頼
- 11月 7日 昨年度参加者による情報提供
- 11月14日 有志生徒（2年生4名）によるふたば国際プラザ訪問
- 11月21日 参加生徒内情報交換
- 11月22日 神戸国際協力交流センター、市長室国際課、神戸デザインセンターによる事前研修会

参加生徒の感想 ～抜粋～

3年間神戸フォーラムに参加して、何も分からずただ参加しただけだった時がとてものつかしく感じました。私は英語が好きだけでも、コミュニケーションは苦手で、最初は自分から積極的になれませんでした。毎年レベルアップしていくフォーラム作りに関わることができ、主催側にもなり、だんだんと楽しさを感じられるようになったのでとても良かったです。(3年ファシリテーター担当)

プレゼンテーションに向けて何回もパワーポイントを作り直したり、問題の重大さの伝え方や見やすさなどに気を付けて当日に備えました。事前に真剣に KIITO の方と意見交換ができたので、フォーラムのオープニングにふさわしい発表ができた(色々な方に褒めてもらったのでこう言えるかもしれません)ので良かったです。(2年キックオフプレゼン担当)

最初は英語でのディスカッションだと聞き、話せるか心配でしたが、自分の考えた意見を伝えることが嬉しくて、とても楽しかったです。色々な人と話すことができたので、多くのことを吸収して学びました。(1年ディスカッション参加)



7 臺中市立臺中第一高級中等学校との交流

日 程：令和元年12月17日（修学旅行2日目）

プログラム：午前 交流全体セレモニー

1. 台中一中校長挨拶・葺合高校校長挨拶
2. 学校記念品交換
3. 台中一中・葺合高校生徒代表挨拶
4. 生徒代表記念品交換
5. 台中一中生徒演技
6. 葺合高校プレゼンテーション
日本文化紹介・創作ダンス

午後 普通科 クラスごとに文化交流

国際科 プレ・インターナショナル・カンファレンス



葺合高校の修学旅行では、毎年、姉妹校臺中市立臺中第一高級中等学校（以下台中一中）を訪問し、交流行事を行っている。今年も修学旅行2日目に台中一中訪問が実施された。

到着後、台中一中全生徒からの熱烈歓迎をうけ、記念撮影後、体育館で交流全体セレモニーが行なわれた。挨拶や記念品交換の後、本校の「日本文化紹介」選択生徒によるプレゼンテーションでは、二人羽織を紹介した。羽織についての説明と余興で披露される二人羽織を台中一中の生徒も交えて実演し、拍手喝采を浴びた。また、ダンス部が創作ダンスを披露し、場を盛り上げてくれた。

昼食をはさみ、国際科、普通科は別プログラムとなり、それぞれの場に移動した。

国際科は相互に課題研究のプレゼンテーションを行ない、質疑応答や活発な意見交換がなされた。普通科はクラス毎にわかれ、台中一中の生徒たちとお互いの文化を紹介しあうかたちでの交流を進めた。

事後アンケートで、修学旅行のなかで台中一中訪問が最も印象に残るものと答えた生徒も多く、生徒にとっても有意義な交流であった。



日本文化紹介（二人羽織）

生徒の感想

台中一中との交流で、台湾の文化や政治について沢山学ぶことが出来ました。台湾の高校生のプレゼンはとても英語が流暢でわかりやすく、興味を引きやすい内容見習うところが沢山ありました。性別に関する人々の固定観念など、身近に感じるテーマを取り上げていたのがとても良いなと思いました。ディスカッションの後は台中一中の生徒が、漢字に関するクイズを出してくれました。同じ漢字でも、日本語と中国語では意味が違う言葉が沢山あることを知ることが出来ました。今回の交流を通じて、お互いの国について新しい発見があったと思うので、この修学旅行はとても有意義でした。

私は、今回の交流会で国際科の司会という大役を任されていました。しかし、会の流れをあまり理解できておらず、不安でいっぱいでした。でも、始まると台中一中のMCの男子生徒2人が、とても優しく教えてくれました。そのおかげで無事に仕事を果たすことが出来たのでホッとしました。交流会で台中一中の生徒は、言葉の意味を充てるゲームを用意してくれました。他にもプレゼントや手作りタピオカをいただき、素敵なおもてなしを感じることが出来ました。

昼食の時間も気まづくならないか不安でしたが、積極的に話しかけてくれ、一緒に写真を撮ったり楽しく過ごせました。学校を去るときも、多くの生徒が手を振り見送ってくれました。もし、彼らが日本に来てくれることがあれば、沢山歓迎したいと思います。日本に帰るとインスタでつながることができたので、また連絡を取り合えたらと思います。

8 ワン・ワールド・フェスティバル for Youth 2019

日 程： 令和元年 12 月 15 日（日）10:00～16:00

主 催： ONE WORLD FESTIVAL for Youth 高校生のための国際交流・国際協力 EXPO 運営委員会
特定非営利活動法人 関西 NGO 協議会

会 場： 大阪 YMCA （大阪市西区土佐堀）

参 加 者： 国際科・普通科 1、2 年生 17 名

全体テーマ：私たちが描く持続可能な社会の未来図

本校は、昨年度に引き続き「ブース展示」、「高校生のためのポスターセッション」に参加した。また、今年度初めて、「高校生助成プログラム」に応募し最終審査に挑むことができた。さらに 2 年生普通科の生徒が高校生実行委員会のメンバーとしてこのイベントの企画運営に携わり、1 年生国際科の生徒が運営ボランティアに加わった。



葺合高校の国際交流・国際協力のブース展示

ポスターセッションでは、86 の応募からファイナリストに 2 チーム、セミファイナリストに 1 チームが選ばれ、当日会場で来場者の前で発表を行った。審査の結果、2 年生の須多・古川チームの”Support for Teenage Mothers Who Do Not Take Prenatal care”（「10 代の未受診妊婦への支援」）と藤川・藤原チームの “The Housebound Elderly”（「引きこもり高齢者」）の課題研究が優秀賞を受賞した。また、2 年生の大柳・幅チームの”Supporting Foreign Visitors’ Good Travel”（「外国人観光客にどのように避難情報を提供するか」）がセミファイナリストの人気投票で 1 位をいただいた。

助成プログラムでは、成田（2 年）高山（1 年）のペアが応募 18 チームの中、当日審査に挑んだ。”Girls, be Ambitious!” と名付けられたプログラムは、トビ立て留学 Japan の国際教育ボランティアで訪問したあるタンザニアの女子高校生とつながり、友情を深め協働活動を行う女子のエンパワーメント事業である。日本とタンザニアの文化交流を行い、インターネットで意見交換をしながら、両国の伝統的な布地を使ってフレンドシップドレスや小物を製作し販売する企画を発表した。

ブース展示では、本校が行っている国際交流や国際貢献活動、WWL 拠点校としての取組、SDG s の達成に向けた生徒の課題研究を紹介し、来場者に説明を行った。掲示したポスターの 1 枚は 7 月に本校で行われて Kobe International Conference at Fukiai（高校生国際会議）について、もう 1 枚は 8 月に夏期研修で訪問したオーストラリアについて書かれたものである。ブースを訪れた一般の方や中高大学生に本校生徒は丁寧に説明し、活動内容や高校生活について質問に笑顔で答えた。

さて今年は、6,000 人の来場者のあるこのイベントを運営する「ワンフェスユース高校生実行委員会」のメンバーとなり、企画運営を行う本校生徒が出てきた。当日ボランティアとして運営を支える 1 年生生徒もいる。京阪神地区に住む高校生が学校という枠を超えて「私たちが描く持続可能な社会の未来図」のテーマのもと、主催者、発表者、来場者というそれぞれの立場で参加し、自分ができることに取り組むことは、貴重な経験である。

◆ 発表者コメント

審査員の方だけでなく YMCA の外国人教員や各国の留学生の方からも様々な意見をいただくことができました。その意見を生かし、現在課題研究を改善しているところです。この経験を通して自らの研究内容を考え直すことができとてもよかったです。

◆ 実行委員会メンバーのコメント

他校の高校生と一緒に、3 か月前から 2 週間に一度大阪で集まって会議をしました。当日のボランティアさんの配置や人数調整、当日配布の資料作成などを行いました。約 130 名のボランティアさんを動かすのは苦労が多く、どうしたら全員が楽しく活動できるかを考えるのが大変でした。当日は朝 8 時から打ち合わせをし、準備やボランティアさんへの指示をするなど目まぐるしく過ぎました。今までこのような大きなイベントを運営するという立場に立ったことがなかったし、とても楽しかったです。私も活動をこれで終わりにせず、次につなげていきたいです。

VII 成果と課題

1 WWL プログラムの検証

(1) 質問紙調査の概要

WWLプログラムが育成を目指すイノベティブでグローバルな人材に必要な資質について、生徒対象に質問紙調査を実施した。調査項目は、「高校生 - 関心SGH意識調査」(筑波大学SGH 研究班)等を参考に、Neo MAKS力に、グローバルマインドセット、グローバルコンピテンシー、21世紀スキルに関する要素を加えた質問を28項目作成した。回答方法は「あてはまらない」「どちらかといえばあてはまらない」「どちらかといえばあてはまる」「あてはまる」の4件法とした。質問1と2は生徒の興味分野に関する質問で、回答方法は複数選択とした。質問31は記述回答とした。1年生を対象に、7月(プレ調査)と2月に調査を実施した。2年生は2月、比較対象として3年生は12月に調査を実施した。教育課程が異なるため、国際科と普通科に分けて分析を行った。回答数は1年生7月国際科71、普通科258、2月国際科78、普通科278、2年生国際科77、普通科266、3年生国際科77、普通科119であった。

Neo MAKS 12の力

- | | |
|------------------|--------------------------|
| 「Mind : 人間力」 | ① 物事を多面的に見る力 |
| | ② 他者の痛みを理解しサポートする力 |
| | ③ 多様性の中で協働する力 |
| 「Attitude : 実践力」 | ④ 経験と知識を融合させる力 |
| | ⑤ リーダーシップを取り責任をもって調整する力 |
| | ⑥ 柔軟性に富んだ問題解決力 |
| 「Knowledge : 知識」 | ⑦ 自国や他国の文化・歴史に関する深い知識と理解 |
| | ⑧ 科学的知識を活用する力 |
| 「Skills : 運用力」 | ⑨ ICTを主体的に使う力 |
| | ⑩ コミュニケーション力 |
| 「Neo」 | ⑪ 普遍的正義感 |
| | ⑫ 新しい価値観を創造する |

質問紙内容

	質 問	資 質
1	興味のある分野を全て選んでください。1 科学技術 2 数学 3 生物 4 医療・保健 5 教育・福祉	
2	興味のある分野を全て選んでください。1 言語・文化 2 歴史 3 政治・経済 4 芸術・創造 5 その他	
3	今住んでいる地域の行事に参加している	2I-1
4	地域や社会で起こっている問題に興味がある。	2I-2
5	地域や社会で役に立つ人になりたいと思う。	2I-3
6	世界で起こっている問題に興味がある。	2I-4
7	世界で役に立つ人になりたいと思う。	2I-5
8	自分のやりたいことを見つけ、それに情熱を傾けたい。	GM-1
9	将来、新しい分野を研究したり、新しい産業を創り出したい。	2I-6
10	自分で計画して学習に取り組んでいる。	2I-7
11	物事を様々な角度から見ることができる。	①

12	困った出来事に直面した時、複数の視点から問題の原因を考える。	GC-1
13	人には思いやりをもって接している。	②
14	自分は人のために役に立つことができる人間だと思う。	GM-2
15	複数の人数で話し合うと（一人より）良い考えが生まれると思う。	③
16	人の意見を聞いたとき、自分はどう思うか、どうするかを考えている。	21-8
17	何か問題が生じたとき、解決するために自分の知識や経験を生か（そうと）している。	④
18	議論の際、自分だけが意見を述べることなく、参加者それぞれの意見を聞くことができる。	⑤-1
19	集団での問題解決場面では、率先してリーダー的な役割を担うことができる。	⑤-2
20	複雑な問題に直面しても、問題の要点や構造を整理しながら考えることができる。	⑥-1
21	問題解決などで、自分のやり方が、目的に合っているのかどうか途中で確認している。	⑥-2
22	日本の文化や歴史について興味がある。	⑦-1
23	世界各国の文化や歴史について興味がある。	⑦-2
24	科学的に考えたり、調べたりすることに興味がある。	⑧-1
25	関心のある事柄について、その問題の本質を発見したり、原因を考えることができる。	⑧-2
26	ICT(コンピューターやインターネットに関連する情報通信技術)に興味がある。	⑨
27	人に伝えるときに、分かりやすく説明しようとしている。	⑩-1
28	よく知らない国の人たちと親しくなれる自信がある。	⑩-2
29	何かをするときは、自分で判断して行動している。	21-9
30	自分とは異なる立場の人の価値観を尊重する。	GC-2

○内の数字はNeo MAKS 力の番号 GM:グローバルマインドセット GC:グローバルコンピテンシー 21:21世紀スキル

質問 31

1年生7月：次の語句の続きを自由に書いてください。「私の考える正義とは」「新しい価値観とは」

3年生12月：3年間の高校生活で自分の考え方や行動、進路に影響を与えた授業や行事、体験などを書いてください。

1・2年生2月：1年間の高校生活で、自分の考え方や行動に影響を与えた授業や行事、体験などを書いてください。

(2) 結果1 興味分野

質問1と2では生徒の興味分野を調査した。結果の数値は選択した人数を総数で割った割合である。1年生は7月2月の両調査において、「医療・保健」「教育・福祉」「言語・文化」「歴史」「芸術」分野への興味が高い結果となった。1回目と2回目で約10%下がった分野は、国際科では「科学技術」「数学」普通科では「生物」であった。

2年生の普通科は、英系2、理系1、文系4クラスの結果であるが、3年生の普通科は英系、理系、文系各1クラスずつの抽出調査であるため、興味分野が分散された結果となった。2、3年生の国際科の上位2分野は「言語・文化」「教育・福祉」であり、3年生は「歴史」「芸術」「政治・経済」の割合が4割を超えた。その他を選択している生徒が一定数存在するので、今後は記述欄を設ける。WWLの文理融合の観点から、文系における理系分野の興味や理系における文系分野の興味を今後注視していく。

1年生の結果

	7月		2月			7月		2月	
	国際	普通	国際	普通		国際	普通	国際	普通
科学技術	25.4	23.3	16.7	15.5	言語・文化	80.3	50.4	83.3	42.8
数学	22.5	24.0	12.8	17.3	歴史	38.0	33.7	38.5	27.3
生物	19.7	23.6	21.8	13.7	政治・経済	31.0	30.6	32.1	23.7
医療・保健	25.4	34.1	24.4	30.6	芸術	43.7	32.9	42.3	33.5
教育・福祉	60.6	41.9	53.8	37.8	その他	7.04	5.43	6.4	13.3

2, 3年生の結果

	2年		3年			2年		3年	
	国際	普通	国際	普通		国際	普通	国際	普通
科学技術	11.7	17.7	19.5	26.1	言語・文化	76.6	42.5	83.1	42.9
数学	15.6	15.4	10.4	18.5	歴史	27.3	22.6	45.5	25.2
生物	6.5	12.4	16.9	23.5	政治・経済	39.0	26.3	41.6	26.9
医療・保健	20.8	21.1	26.0	19.3	芸術	33.8	26.3	42.9	29.4
教育・福祉	52.0	42.9	50.6	26.1	その他	9.1	15.4	7.8	12.6

(3) 結果2 Neo MAKS の力

31の質問の内、Neo MAKSの「Mind」「Attitude」「Knowledge」「Skills」に関する質問、項目を16設定した。回答方法は1～4の4件法で、1は「あてはまらない」2「どちらかといえばあてはまらない」3「どちらかといえばあてはまる」4「あてはまる」とした。1年生は7月実施を①2月実施を②とし、各学年の国際科と普通科の平均値を算出した。

1年生国際科で7月よりも2月の値のほうが0.1以上⑥高くなったのは、「複雑な問題に直面しても、問題の要点や構造を整理しながら考えることができる。」「問題解決などで、自分のやり方が、目的に合っているのかどうか途中で確認している。」で、0.1以上低くなったのは⑨「ICT(コンピューターやインターネットに関連する情報通信技術)に興味がある。」であった。普通科では②「人には思いやりをもって接している。」の値は0.1以上高くなり、0.1以上低くなった項目はなかった。3学年を共通して⑧「科学的知識を活用する力」と⑨「ICTに興味がある」の値が他項目と比べて低いので、今後WWLプログラムの内容を考える際の指針とする。⑤「リーダーシップを取り責任をもって調整する力」に関しては、生徒の強みである調整力を生かしながら、リーダーシップを発揮できる機会を設けていく。

3学年 MAKS の平均値

MAKS	1年				2年		3年	
	国際(1)	普通(1)	国際(2)	普通(2)	国際	普通	国際	普通
①	2.82	2.55	2.90	2.65	3.03	2.62	2.97	2.64
②	3.58	3.33	3.48	3.43	3.32	3.31	3.23	3.18
③	3.69	3.45	3.68	3.37	3.53	3.29	3.55	3.22
④	3.37	3.17	3.46	3.15	3.51	3.11	3.47	3.10
⑤-1	3.55	3.37	3.54	3.31	3.57	3.23	3.52	3.19
⑤-2	2.61	2.37	2.67	2.34	2.69	2.28	2.33	2.13
⑥-1	2.68	2.57	2.82	2.57	2.92	2.61	2.87	2.45
⑥-2	2.92	2.81	3.09	2.83	3.06	2.76	2.84	2.73
⑦-1	3.24	2.91	3.17	2.85	3.21	2.63	3.30	2.46
⑦-2	3.47	2.89	3.42	2.82	3.30	2.68	3.48	2.79
⑧-1	2.30	2.37	2.36	2.29	2.36	2.14	2.26	2.34
⑧-2	2.87	2.63	2.89	2.68	2.97	2.54	2.97	2.51
⑨	2.54	2.43	2.35	2.37	2.43	2.24	2.39	2.22
⑩-1	3.38	3.17	3.46	3.19	3.41	3.20	3.36	3.03
⑩-2	3.10	2.41	3.16	2.41	3.14	2.39	2.96	2.48

(4) 結果 3 「普遍的正義感」と「新しい価値観の創造」について

予測のつかない社会となる Society 5.2 で必要とされる資質として「普遍的正義感」と「新しい価値観の創造」を設定した。WWL の様々なプログラムが与える、物の見方や経験により、生徒の正義感や価値観がどのように変容していくのかを確認するために、1年生対象に7月に実施した。

私が考える正義とは(Neo 11)

国際科、普通科に共通して見られる意見

- 自分が正しいと思うことを貫くこと、自分に正直に生きていくこと
- 各個人によって異なり絶対的に正しいものがないもの
- 皆が平等（公平）であること 皆に平等な対応をすること
- より多くの人（または皆）の幸せが得られるように行動すること

国際科のみに多く見られる意見

- 自分が正しいと思うことに加え本質的に正しいかを見極めたうえでの行動

普通科のみに多く見られる意見

- 誰かのためになる行動をすること、行動が誰かのためになること
- 人のことを考える・人を思いやること人を大切にできること
- 正しいと思うことを正しく保つこと 正しいことを選択し続けること

考察

全体的には、自分のこれまでの経験を基にした理性に従うこと、社会全体の幸福感を「正義」ととらえる生徒が多い。国際科と普通科では、誰を主体と考えるかに差がある。国際科生徒の多くは自らが正しいと思うことや自分に正直に行動することなど「自己」が主体になっており、その上で自分の価値観を客観的に見つめなおすことを考慮に入れている。それに対し、普通科生徒は、社会に対する貢献度や他に対する慈愛の気持ちを上げ「他者」を意識する回答が多かった。

未来社会に生きる人々の1つの指針となる「普遍的正義」について、生徒が考える場面を教員側がどのように設定していくかを今後も検討する必要がある。

新しい価値観とは (Neo 12)

国際科、普通科に共通して見られる意見

- 今までになかった（新しい）物事の見方・考え方のこと
- 自分が思っていた常識・価値観と違うもの
- 広い世界の一員として物事を見ること
- 個性・他人を尊重する価値観のこと

国際科のみに多く見られる意見

- 様々な視点から物事を見た結果
- 知らなかったことを知ること 新しい世界を知ること
- 長所・短所・違いを個性として認め合い、理解していくもの

普通科のみに多く見られる意見

- 相手を知って尊重すること人から尊重されるもの
- 他人から影響を受けて得る価値観

考察

国際科生徒、普通科生徒ともに、「いままで自分になかった見方や考え方が身につくこと」と考える生徒が多数であった。また、「相違を尊重し受容する」柔軟な姿勢もみられる。この項目でも、国際科と普通科では、それぞれの視点に顕著な違いがみられる。国際科生徒は様々な視点から物事をみた結果など「自己」が主体である一方で、普通科生徒は他人から影響を受けることなど「他者」が主体となる回答が多かった。今後の事業展開により、この回答がどのような変容をたどるのか注視したい。

(5) 結果4 Neo MAKS 以外の質問項目について

21 世紀スキル（9 項目）、グローバルマインドセット（2 項目）グローバルコンピテンシー（2 項目）に関して、1 年生の 2 月の結果と、2、3 年生の結果を用いて比較した。3 学年共通で平均値が最も高かったのは「自分のやりたいことを見つけ、それに情熱を傾けたい。」であった。「自分で計画して学習に取り組んでいる。」に関してはそれぞれ、上級生の方が高い平均値であった。1 年生の方が高い結果となったのは、3 学年において平均値が最も低い項目でもある、「今住んでいる地域の行事に参加している」と「地域や社会で役に立つ人になりたいと思う。」であった。国際科の 1 年生の平均値が 2、3 年生よりも高かったのは、「世界で役に立つ人になりたいと思う。」「将来、新しい分野を研究したり、新しい産業を創り出したい。」「人の意見を聞いたとき、自分はどうか、どうするかを考えている。」であり、2、3 年生よりも低かったのは、「何かをするときは、自分で判断して行動している。」「自分とは異なる立場の人の価値観を尊重する。」であった。普通科の 1 年生の平均値が 2、3 年生よりも高かったのは「地域や社会で起こっている問題に興味がある。」「困った出来事に直面した時、複数の視点から問題の原因を考える。」「自分はこのために役に立つことができる人間だと思う。」「人の意見を聞いたとき、自分はどうか、どうするかを考えている。」「何かをするときは、自分で判断して行動している。」であり、2、3 年生よりも低いものは、「世界で起こっている問題に興味がある。」であった。WWL 事業と 21 世紀スキル、グローバルマインドセット、グローバルコンピテンシーの 3 領域との関連性を今後も検証していく。

資質	1 年		2 年		3 年	
	国際	普通	国際	普通	国際	普通
21-1	2.14	2.06	2.03	1.68	1.78	1.53
21-2	3.22	2.75	3.37	2.66	3.19	2.62
21-3	3.65	3.29	3.52	3.22	3.45	3.27
21-4	3.59	2.95	3.64	3.00	3.53	2.97
21-5	3.57	2.89	3.46	2.87	3.44	3.00
GM-1	3.88	3.65	3.89	3.53	3.84	3.55
21-6	2.69	2.28	2.53	2.20	2.47	2.33
21-7	2.71	2.64	2.90	2.68	2.93	2.86
GC-1	3.00	2.76	3.09	2.70	2.97	2.63
GM-2	2.91	2.79	2.93	2.71	2.88	2.69
21-8	3.52	3.17	3.50	3.15	3.33	3.15
21-9	3.14	3.07	3.36	3.04	3.39	2.90
GC-2	3.50	3.21	3.55	3.15	3.58	3.24

2 高校生のリスクに備え対応する能力を育てる

兵庫教育大学大学院学校教育研究科 教授 西岡伸紀

2019年度WWL事業のカリキュラム開発に関わり、成果と課題を述べる。カリキュラム開発では、自尊感情等の“ライフスキル”の育成が目指され、その一環として教科間連携テーマに“リスク”が設定された。ライフスキルは「日常生活の様々な課題に対して適切に対処するための心理社会的な能力(WHO)」とされ、具体的なスキルとしては、例えば、意思決定、目標設定、コミュニケーション、ストレス対処などが、またそれらの基盤にはセルフエスティーム(自尊心)が挙げられる。また、リスクとは、「好ましくないできごとが起こる可能性」である。詳しくは「人間の生命や経済活動にとって、望ましくない事象の発生の不確実さの程度(発生率など)及びその結果の大きさの程度(罹患、負傷、死亡など)」とされる(日本リスク研究学会)。望ましくない事象には、日常的に起こるが結果は概ね重大ではないもの(運動や遊びにおける軽傷など)もあれば、稀にしか起こらないが結果が重大なもの(大規模災害など)様々ある。これらを確率と結果の大きさから俯瞰的に見るものである。

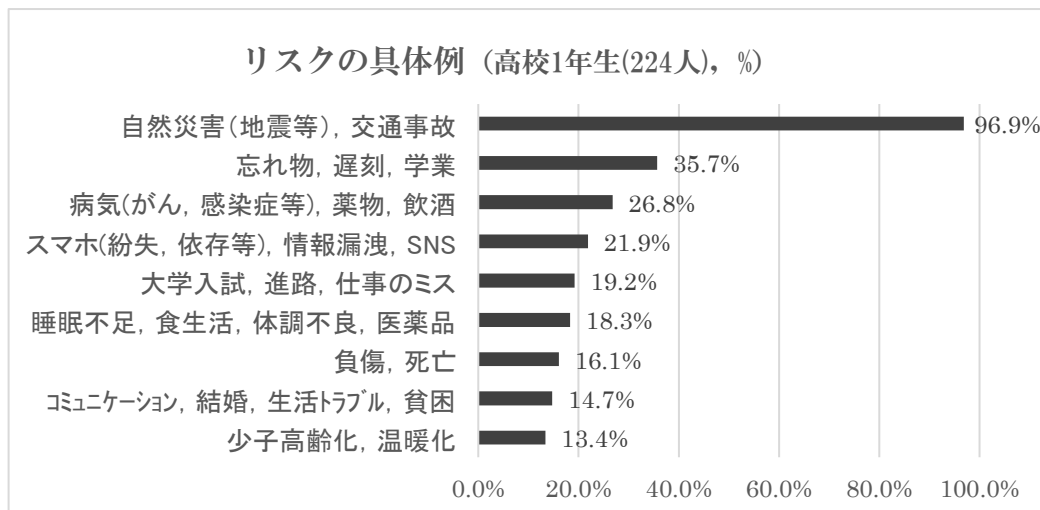
2020年2月現在拡大している新型コロナウイルスはリスクの一例である。ただし、リスクについて、一般的には理解しづらい。そこで、事業に関わり、高校生がイメージするリスクはどのようなものか調べた。具体的には、葺合高校1年生224人に対して、まずリスクに関する講演を行った。講演内容は、リスクの定義、リスクの様々な具体例、対策としては、個人や集団の能力向上(教育)と社会的環境、物理化学的環境の整備等の多面性があることとした。講演後、「大きなリスクと考える事柄」を3つまで挙げていただいた。

図はそれらを集計したもので、例えば自然災害や交通事故などは全体(224人)のうち97%が挙げていた。挙げられたリスクは多様であった。詳しくみると、地震、風水害、交通事故等が特に多いが、学業や学校生活、入試や進路、健康課題や生活習慣、スマホやインターネット、日常生活でのトラブル、環境・社会経済問題など、個人的なものから社会的なものまで、また、安全や健康の課題に限らず、キャリア、将来の生活、社会的問題など多岐にわたった。これらの多くのリスクは、様々の教科等で課題として取り上げられている。リスクは教科横断的に扱える可能性がある。

リスクへの対処や備えの学習には、リスク自体が課題であるためか、課題解決学習がよく用いられる。WWL事業では課題解決学習が重要視されてきており、課題解決に関する生徒の知見は広く深い。その優れた成果は「課題研究交流発表会」で披露され、発表者や聴講者の間で活発な質疑応答や意見交換がなされた。

今後は、経験を活かし、課題の明確化、情報収集と吟味、課題解決における試行錯誤、課題解決のプロセスの記録、きちんとした議論や提案など、課題解決の学びを深め広げていただきたい。その際、クリアで完璧な解決に至らずとも失望することはない。現実の課題解決の難しさは新型コロナウイルスを見てもわかる。このような様々な困難への取組からも大いに学び、それらを振り返りたいものである。

なお、今年度は、学習としてのライフスキル育成には着手できなかった。課題解決のプロセス自体が、意思決定スキルや目標設定スキルの活用と共通点があり、課題解決における対話は、コミュニケーションスキルの向上に寄与すると考えられる。一方、各スキル自体に関する学習(ライフスキル学習)も選択肢の一つと考えられる。



3 令和元年度 WWL 事業取組の進捗状況の検証について

神戸大学 准教授 山下晃一（事業検証委員）

本年度の進捗状況については、下記の理由により、当初の想定を上回る成果を達成したと判断します。

第一に、顕著な具体的成果として、「2019年度全国高校生フォーラム」（文部科学省・筑波大学共催、令和元年12月22日、於：東京国際フォーラム）において、参加校118校中3校（組）にしか授与されない審査委員長特別賞を受賞したことが挙げられます。これは臺中市立臺中第一高級中等學校（台湾）、葺合高等学校、科学技術高等学校の共同ポスター発表に対して授与されたもので、充実した教育活動が本事業によって実現されていることの証左と言えます。また、他の受賞校（本事業以外の10校）を見ても、複数校による共同発表として表彰されたのは本事業だけであり、学校間連携の側面でも成果が上がっていることがうかがえます。本事業の採択時、企画評価会議協力者からは、事業共同実施校や事業連携校の役割等の明確化という課題も指摘されましたが、今回の受賞は、その指摘への応答の第一歩となりうるものとして、大いに注目に値します。このように、事業の主要な取組に対して外部から高い評価を受けた点が、上記検証結果の主たる理由です。

第二に、事業の広がりという点では、まず各校を超えた広がりとして、「第1回WWL等課題研究交流発表会」（令和元年12月26日、於：葺合高等学校）を開催して、県内国公立校10校と横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校も加えた計11校、約200名の参加による大規模な成果発表会を成功裏に終えています。参加した生徒の感想からは、他校の発表等から相互に刺激を受け、学習意欲を大いに喚起されたことが十二分に理解できます。次に、事業共同実施校においても、バルセロナでの研究成果発表（科学技術高等学校）、「道徳の日」（神港橋高等学校）等を通じて、事業拠点校である葺合高等学校との連携の下、各校の生徒が協力し合って主体的に活動に取り組みました。事業初年度に、こうした目に見える連携活動が広く展開されたことは、内外に大きな訴求効果を持つことが期待されます。実際に、本事業の運営指導委員会や当方の実施した教職員ヒアリングからも、これらの活動が決して形ばかりの単発行事（「打ち上げ花火」）に終わっておらず、生き生きとした生徒の姿や成長ぶりを具体的に目の当たりにできたことによって、市民や教職員の意識・まなざしがポジティブな方向へと、着実に変化している様子がうかがえました。

第三に、事業の深まりという点では、以下の諸点が特に高く評価できます。上記の各取組では、各校の強みを活かした相補的連携活動が展開されたこと、事業拠点校では、グローバル課題に対して高校生の立場から実行可能なアクションプランを立案するのみならず、いくつかを実現したこと（動画やパンフレットの作成等）、また、本事業で育成したい資質・能力である「Neo MARKS」を、各取組で強く意識しながら進めたこと等です。特に後者2点は、事業拠点校がSGHの蓄積を効果的に活用したもので、初年度の進捗として重要と言えます。

次年度以降に向けた課題としては、第一に、国際的交流・学校間連携について、新型コロナウイルスの影響等によって困難に直面しているところもあるので、その動向を見定めながら、例えば従来以上にICT・SNSを活用したり、生徒の皆さんの若い力に期待して、対応策のアイデアや試行錯誤を募ったりする等、各校の総力を挙げて、新たな対応策を模索することが求められます。

第二に、事業の広がりの中で、今年度の各校では、意欲的な教職員を中心に、機動力ある少人数チームで運営されることが多かったかもしれませんが、2年目以降はさらにその輪を広げていただきたいところです。同質主義的な全員一致は必ずしも要しませんが、生徒が実際に成長する姿という事実を共有することから出発し、温度差を含みつつも、全体の理解・協力の底上げを図ることが重要と思われます。また、外部の諸団体や大学等との連携についても、生徒の学びの充実につながるよう今年度以上に本格化することを期待します。

第三に、事業拠点校における文理融合型の学際的カリキュラムについては、さらなる考察・試行が求められます。Neo MARKSに関しては各事業でのいっそうの活用を進め、それらの個別効果の調査も丁寧に行い、また、経時変化や他校調査にも視野を広げながら、より丁寧に検証していくことが課題と言えるでしょう。

平成31年度教育課程

神戸市立科学技術高等学校
平成31年度入学生

【機械工学科】

教科	科目	標準 単位	1年	2年	3年	備考	合計
国語	国語総合	4	2	2			4
	現代文A	2			2		2
地理歴史	地理A	2	2				2
	世界史A	2		2			2
公民	現代社会	2			2		2
数学	数学Ⅰ	3	3		f 2		3~5
	数学Ⅱ	4		$\sqrt{2}$	f 2		4
	数学Ⅲ	5		b 2	f/g/h 6		0~6
	数学A	2		c 2			0~2
	数学B	2			i 2		0~2
理科	科学と人間生活	2		2			2
	物理基礎	2	2				2
	物理	4			j/k 4		0~4
保健体育	体育	7~8	3	2	2		7
	保健	2	1	1			2
芸術	音楽Ⅰ	2	a 2				
	美術Ⅰ	2	a 2				
	書道Ⅰ	2	a 2				
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	3				3
	コミュニケーション英語Ⅱ	4		2	2		4
家庭	生活デザイン	4	1	2			3
情報	情報の科学	2				情報技術基礎で代替	
普通科目小計			19	15~19	10~20		44~58
工業	工業技術基礎	2~4	3				3
	課題研究	2~6			3	総合的な学習の時間を代替	3
	実習	4~21		3	3		6
	製図	2~12	2	2	2		6
	情報技術基礎	2~4	2			情報の科学を代替	2
	工業数理基礎	2~4	1	1	1		3
	機械設計	2~8	2	2	j 2		4~6
	機械工作	2~8		2	k 2		2~4
	原動機	2~6		c 2	h 2		0~4
	生産システム技術	2~6		b 2	g 2		0~4
	自動車工学	2~8			i 2		0~2
	電子機械	2~6			g 2		0~2
◎都市防災	2~6			h 2		0~2	
工業科目小計			10	10~14	9~19		29~43
科目合計単位数			29	29	29		87
総合学習	科学技術と私	3				課題研究で代替	
特別活動	ホームルーム	3	1	1	1		3
合計単位数			30	30	30		90

【注1】 同じアルファベットのの中から1科目選択する

【注2】 普通教科「情報」は情報技術基礎で代替する

【注3】 「総合的な学習の時間」は「課題研究」で代替する

平成31年度教育課程(案)

神戸市立科学技術高等学校
平成31年度入学生

【電気情報工学科】

教科	科目	標準 単位	1年	2年	3年	備考	合計
国語	国語総合	4	2	2			4
	現代文A	2			2		2
地理歴史	地理A	2	2				2
	世界史A	2		2			2
公民	現代社会	2			2		2
数学	数学Ⅰ	3	3		f 2		3~5
	数学Ⅱ	4		$\sqrt{2}$	f 2		4
	数学Ⅲ	5		b 2	f/g/h 6		0~6
	数学A	2		c 2			0~2
	数学B	2			i 2		0~2
理科	科学と人間生活	2		2			2
	物理基礎	2	2				2
保健体育	体育	7~8	3	2	2		7
	保健	2	1	1			2
芸術	音楽Ⅰ	2	a 2				
	美術Ⅰ	2	a 2				
	書道Ⅰ	2	a 2				
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	3				3
	コミュニケーション英語Ⅱ	4		2	2		4
家庭	生活デザイン	4	1	2			3
情報	情報の科学	2				情報技術基礎で代替	
普通科目小計			19	15~19	10~16		44~54
工業	工業技術基礎	2~4	3				3
	課題研究	2~6			3	総合的な学習の時間を代替	3
	実習	4~21		3	3		6
	製図	2~12		2			2
	情報技術基礎	2~4	2			情報の科学を代替	2
	工業数理基礎	2~4	1		1		2
	電気基礎	2~10	4	3	j 2		7~9
	電気機器	2~4		2	g 2		2~4
	電力技術	2~6		b 2	i 2		0~4
	電子回路	2~6		c 2			0~2
	電子計測制御	2~6			2		2
	通信技術	2~6			k 2		0~2
	ソフトウェア技術	2~6			g 2		0~2
	ハードウェア技術	2~10			h 2		0~2
	プログラミング技術	2~6			j 2		0~2
	コンピュータシステム技術	2~8			k 2		0~2
	◎電気鉄道	2~6			h 2		0~2
◎都市防災	2~6			h 2		0~2	
工業科目小計			10	10~14	13~19		33~43
科目合計単位数			29	29	29		87
総合学習	科学技術と私	3				課題研究で代替	
特別活動	ホームルーム	3	1	1	1		3
合計単位数			30	30	30		90

【注1】 同じアルファベットのの中から1科目選択する

【注2】 普通教科「情報」は情報技術基礎で代替する

【注3】 「総合的な学習の時間」は「課題研究」で代替する

平成31年度教育課程(案)

神戸市立科学技術高等学校

平成31年度入学生

【都市工学科】

教科	科目	標準 単位	1年	2年	3年	備考	合計
国語	国語総合	4	2	2			4
	現代文A	2			2		2
地理歴史	地理A	2	2				2
	世界史A	2		2			2
公民	現代社会	2			2		2
数学	数学Ⅰ	3	3		f 2		3~5
	数学Ⅱ	4		2	f 2		4
	数学Ⅲ	5			f/g/h 6		0~6
	数学A	2		c 2			0~2
	数学B	2			i 2		0~2
理科	科学と人間生活	2		2			2
	物理基礎	2	2				2
	物理	4			j/k 4		0~4
保健体育	体育	7~8	3	2	2		7
	保健	2	1	1			2
芸術	音楽Ⅰ	2	a 2				2
	美術Ⅰ	2	a 2				2
	書道Ⅰ	2	a 2				2
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	3				3
	コミュニケーション英語Ⅱ	4		2	2		4
家庭	生活デザイン	4	1	2			3
情報	情報の科学	2				情報技術基礎で代替	
普通科目小計			19	15~19	10~20		44~58
工業	工業技術基礎	2~4	3				3
	課題研究	2~6			3	総合的な学習の時間を代替	3
	実習	4~21		3	2		5
	製図	2~12	2	2	m 4		4~8
	情報技術基礎	2~4	2			情報の科学を代替	2
	建築構造	2~6		e 3	k 2		0~5
	建築構造設計	2~8		d 2	g 2		0~4
	建築法規	1~4			j 2		0~2
	建築施工	2~5		b 2	i 2		0~4
	建築計画	2~8		c 2	h 2		0~4
	測量	2~6		d 2	g 2		0~4
	土木施工	2~6		b 2	m 4		0~6
	土木基礎力学	2~8		c 2	j 2		0~9
	土木構造設計	2~4		e 3	k 2		0~2
	社会基盤工学	2~4			i 2		0~2
◎都市工学	2~6	3				3	
◎都市防災	2~6			h 2		0~2	
工業科目小計			10	10~14	9~19		29~43
科目合計単位数			29	29	29		87
総合学習	科学技術と私	3				課題研究で代替	
特別活動	ホームルーム	3	1	1	1		3
合計単位数			30	30	30		90

【注1】 同じアルファベットの中から1科目選択する

【注2】 普通教科「情報」は情報技術基礎で代替する

【注3】 「総合的な学習の時間」は「課題研究」で代替する

平成31年度教育課程(案)

神戸市立科学技術高等学校

平成31年度入学生

【科学工学科】

教科	科目	標準 単位	1年	2年	3年	備考	合計
国語	国語総合	4	2	2			4
	現代文A	2			2		2
	国語表現	2			c' 2		0~2
地理歴史	地理A	2	2				2
	世界史A	2		2			2
公民	現代社会	2			2		2
数学	数学Ⅰ	3	3				3
	数学Ⅱ	4		4			4
	数学Ⅲ	5			b 6		0~6
	数学A	2	2				2
	数学B	2		b 2	c 2		2
理科	生物基礎	2		2			2
	生物	4			b' 4		0~4
	物理基礎	2	2				2
	物理	4			b' 4		0~4
	化学基礎	2	2				2
化学	4			b' 4		0~4	
保健体育	体育	7~8	2	3	2		7
	保健	2	1	1			2
	◎スポーツトレーニング	2		c 2			0~2
	◎スポーツマネジメント	2			c 2		0~2
	◎スポーツバイオメカニクス	2			c 2		0~2
芸術	音楽Ⅰ	2	a 2				2
	美術Ⅰ	2	a 2				2
	書道Ⅰ	2	a 2				2
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	3				3
	コミュニケーション英語Ⅱ	4		3	2		5
	英語表現Ⅰ	2			2		2
家庭	家庭基礎	2	2				2
	◎スポーツ栄養	2		c 2			0~2
情報	情報の科学	2				情報技術基礎で代替	
普通科目小計			23	19~21	16~20		60~62
工業	工業技術基礎	2~4	4				4
	課題研究	2~6			3	総合的な学習の時間を代替	3
	実習	4~21		3	3		6
	情報技術基礎	2~4	2			情報の科学を代替	2
	工業技術英語	2~4		2	c 2		2~4
	◎理数工学Ⅰ	2~6		b 5			0~5
	◎理数工学Ⅱ	2~6			b 3		0~3
	◎科学工学	2~6		c 3	c 3		0~6
	◎都市防災	2~6			c' 2		0~2
工業科目小計			6	8~10	9~13		25~27
科目合計単位数			29	29	29		87
総合学習	科学技術と私	3				課題研究で代替	
特別活動	ホームルーム	3	1	1	1		3
合計単位数			30	30	30		90

【注1】 「a」の中から1科目選択する

【注2】 「b」4科目と「b'」1科目か「c」8科目と「c'」1科目かどちらかを選択する

【注3】 普通教科「情報」は情報技術基礎で代替する

【注4】 「総合的な学習の時間」は「課題研究」で代替する

平成31年度教育課程

神戸市立神港橋高等学校

【みらい商学科】		平成31年度以降入学生									
教科	科目	標準 単位数 (必修は必修)	1年	2年		3年		履修する 単位数の 合計			
				会計 類型	情報 類型 システム開発系 システム活用系	会計 類型	情報 類型 システム開発系 システム活用系				
国語	国語総合	4	4					4			
	現代文B	4			3			6			
	国語表現	3					2(選択1)	0~2			
	古典A	2					2(選択2)	0~2			
地理歴史※1	世界史A	2	2					2			
	日本史A	2	*		2			0~2			
	日本史B	4			2		2(選択2)	0~4			
公民	現代社会	2					2	2			
	◎時事問題	2					2(選択2)	0~2			
数学	数学 I	3	3					3			
	数学 II	4			2		2	4			
理科	科学と人間生活	2	2					2			
	生物基礎	2			2			0~2			
保健体育	体育	7~8	2		2		3	7			
	保健	2	1		1			2			
芸術※2	音楽 I	2			2			2			
	美術 I	2	*		2			2			
	書道 I	2			2			2			
外国語	コミュニケーション英語 I	3	4					4			
	コミュニケーション英語 II	4			4		2	6			
	英語表現 I	2					2	2			
	◎e-challenge I	1	1					1			
	◎e-challenge II	2					2(選択2)	0~2			
	◎総合英語研究	2					2(選択1)	0~2			
	◎英語探究	2					2(選択3)	0~2			
	◎英語総合	2					2	2			
◎リテラシー	◎リテラシー I	1	1					1			
	◎リテラシー II	1			1			1			
	◎リテラシー III	1					1	1			
	◎リテラシー IV	1					1	1			
普通教育に関する各教科の単位数の計			20		19		17~23	56~62			
音楽	ソルフェージュ	2~8					2(選択2)	0~2			
	◎教育音楽	2					2(選択3)	0~2			
美術	ビジュアルデザイン	2~10					2(選択2)	0~2			
	◎総合造形	2					2(選択3)	0~2			
書道	◎生活の中の書	2					2(選択2)	0~2			
	◎総合書道	2					2(選択3)	0~2			
福祉	◎福祉総合	2					2(選択3)	0~2			
	◎福祉総合	2					2(選択3)	0~2			
商業	ビジネス基礎	2~6	2					2			
	課題研究	2~6					3	3			
	総合実践	2~8					2(選択2)	0~2			
	マーケティング	2~6			2		2(選択2)	0~2			
	商品開発	2~6			3			0~3			
	広告と販売促進	2~6					2(選択1)	0~2			
	ビジネス経済	2~6					2(選択1)	0~2			
	経済活動と法	2~6					2(選択1)	0~2			
	簿記	2~8	4					4			
	財務会計 I	2~8		6			2(選択1)	2~6			
	財務会計 II	2~6				4		0~4			
	原簿計算	2~8		3			2(選択3)	0~3			
	管理会計	2~6					2(選択3)	0~2			
	情報処理(社会と情報を代替)※3	2~8	4					4			
	ビジネス情報	2~8		2	4			2(選択4)			
	電子商取引	2~6				3		0~3			
	プログラミング	2~8			4			0~4			
	ビジネス情報管理	2~6					4	0~4			
	◎簿記探究	3			3			0~3			
	◎キャリア実践※4	6						6(選択2+3+4)			
	◎商業時事	2					2(選択1)	0~2			
	◎秘書実務	2					2(選択2)	0~2			
	◎VBAプログラミング	2					2(選択3)	0~2			
専門教育に関する各教科の単位数の計			10		11		7~13	28~34			
特別活動	ホームルーム		1		1			3			
	総合的な探究の時間		1		1		1	3			
	自立活動※5		1(選択)		1(選択)		1(選択)	0~3			
合計			32~33		32~33		32~33	96~99			

◎印は、学校設定教科もしくは学校設定科目。
 *印は、いずれかの科目を選択。
 2年次には3種類の類型に応じた類型選択群(計11単位)と、普通教育に関する科目の選択群(地歴選択(2単位)、芸術選択(2単位))、
 3年次には選択1(2単位)、選択2(2単位)、選択3(2単位)、選択4(2単位)の選択科目群とそれぞれの類型・コースによる選択科目を配置する。
 ※1 教科「地歴」の必修科目は、1年次(「世界史A」、2年次(「日本史A」または「日本史B」)を履修する。
 なお、「日本史B(4単位)」を選択する場合は、2年次、2年次の選択科目で共に「日本史B」を選択する。
 ※2 教科「芸術」の必修科目は、2年次(「音楽 I」、「美術 I」、「書道 I」のうちいずれか1科目)を選択する。
 ※3 教科「情報」の必修科目「社会と情報」は、教科「商業」の「情報処理」の履修をもって代替する。
 ※4 「キャリア実践(6単位)」を選択する場合は、選択2、選択3、選択4のすべてで「キャリア実践」を選択する。
 ※5 自立活動はコーディネータとの面談等で認められた場合のみ選択可とする。

平成31年度 教育課程

神戸市立 須磨翔風 高等学校

【総合学科】

平成31年度入学生

教科・科目		標準 単位数	1 年次	2 年次	3 年次	合 計
国語	国語総合	4	4			9
	現代文B	4		2	3	
地理・歴史	世界史A	2		● 2	○ 2	4～8
	世界史B	4		● 4	● 2	
	日本史A	2		● 2	○ 2	
	日本史B	4		● 4	● 2	
	地理A	2		● 2	○ 2	
	地理B	4		● 4	● 2	
公民	現代社会	2	2			2
数学	数学I	3	3			5
	数学A	2	2			
理科	物理基礎	2	▼2	▼2		6
	化学基礎	2	2			
	生物基礎	2	▼2	▼2		
	地学基礎	2		▼2		
保健体育	体育	7～8	3	3	2	10
	保健	2	1	1		
芸術	音楽I	2	■ 2			2
	美術I	2	■ 2			
	書道I	2	■ 2			
外国語	コミュニケーション英語I	3	3			13
	コミュニケーション英語II	4		4		
	コミュニケーション英語III	4			4	
	英語表現I	2	2			
家庭	家庭基礎	2	2			2
情報	社会と情報	2	2			2
選択科目				16～18	18～20	34～38
計			30	32	31	93
産業社会と人間	キャリアプランニングI	2	2			2
総合的な探究の時間	人間関係	1	1			4
	キャリアプランニングII	1		1		
	キャリアプランニングIII	1			2	
特別活動	ホームルーム		1	1	1	3
	ボランティア(学校外の学修)		0～1	0～1	0～1	△0～2
	自立活動(I・II・III)	(※1)	0～1	0～1	0～1	0～3
合計			34～36	34～36	34～36	◇102～107

1年次・・・芸術は■を付した3科目の中から1科目選択。理科は▼を付した2科目の中から1科目選択。
2年次・・・地歴は●を付した6科目の中から1科目選択。B科目を選択した場合は3年次も継続履修。
理科は●を付した3科目の中から1科目選択。
3年次・・・地歴Aは○を付した3科目の中から1科目選択。

ただし、世界史は必修。(3年次はA科目のみ、B科目は2年次からの継続履修)

ボランティアの△0～2については年間1単位で在籍中に最大2単位まで修得可能

合計単位数の◇102～107については、ボランティアが△0～2のため、最大の合計修得単位数が107となる

(※1)の標準単位数は1年あたり1～7単位

科目群別 選択科目一覧 (平成31年度入学生)

科目群	教科	選択科目		
		2年次	2・3年次	3年次
国際・文化	国語	古典B(4) ◎自己表現A(2) ◎現代文探究A(2)	古典A(2)	◎古典B探究(2) ◎自己表現B(2) ◎日本文学史(2) ◎古典A探究(2) ◎現代文探究B(2)
	地歴	世界史B①(4) 日本史B①(4) 地理B①(4)	世界史A(2) 日本史A(2) 地理A(2)	◎世界史B②(2) ◎日本文化史(2) ◎世界文化史(2) ◎日本文化史(2) ◎世界文化史(2) ◎日本史B研究(2) ◎日本史B研究(2) ◎地理B研究(2)
	公民	政治・経済(2) 倫理(2)	—	◎公民科目研究(2) ◎時事問題(2)
	外国語	◎スピーキングA(2) ◎応用英語読解研究A(2) ◎基本英語読解研究A(2) ◎スタンダード・ライティング(2) 英語表現II①(2)	異文化理解(2) ◎初級ハングル(2)	英語表現II②(2) ◎スピーキングB(2) ◎応用英語読解研究B(2) ◎基本英語読解研究B(2) ◎アドバンスト・ライティング(2)
科学・環境	数学	—	数学II(4) 数学B(2)	数学III(4) ◎数学I A探究(2) ◎数学II B探究(2) ◎数学III探究(2) ◎数学演習I A(2) ◎教養数学(2)
	理科	物理基礎(2) 生物基礎(2) 地学基礎(2)	物理(4) 生物(4) 化学(4)	◎物理実験研究(4) ◎化学実験研究(4) ◎生物実験研究(4) ◎物理基礎実験研究(2) ◎生物基礎実験研究(2) ◎化学基礎実験研究(2) ◎地学基礎実験研究(2)
福祉・健康	保健体育	◎競技スポーツ(2) ◎個人スポーツ(2)	—	◎専門スポーツ(2) ◎福祉スポーツ(2)
	家庭	子どもの発達と保育A(2) ◎生活文化研究(2) ◎スポーツ栄養(2)	—	栄養(2) ◎生活環境(2) 子どもの発達と保育B(2)
	福祉	—	社会福祉基礎(2) コミュニケーション技術(2) ◎福祉住環境(2)	◎介護基礎(2) ◎レクリエーション学(2)
経営・情報	情報	情報デザイン(4)	情報メディア(2)	情報の表現と管理(2)
	商業	簿記(4) 原価計算(2) 情報処理(2)	◎観光基礎(2)	財務会計I(4) マーケティング(2) 経済活動と法(2) 課題研究(2) ビジネス情報(2) 電子商取引(2) ◎秘書実務(2)
教育・人間	芸術	音楽II(2) 美術II(2) 書道II(2) ソルフェージュI(2)	—	ソルフェージュII(2) ビジュアルデザイン(2) 器楽(2) 絵画(2) ◎楽の書(2) ◎実用の書(2)
	教育	◎教育入門・体験(2) ◎校内教育実習プログラム(2)	—	◎教育問題の理解と発信(2)
その他		自立活動II(1)		自立活動III(1)

注1 ①及び②を付した科目(地歴B、英語表現)は両方を履修すること。

注2 ◎は学校設定科目、()は単位数を表示している。選択条件の詳細についてはシラバスを参照。

資料2 第1回 WWL フォーラム授業指導案

グローバルスタディーズⅡC【GSⅡC】学習指導案

神戸市立葺合高等学校

授業者 下村 勲

村上 ひろ子

アイザック トンブルソン

- 1: 日時 令和2年1月30日(木) 第6限
 2: 場所 神戸市立葺合高等学校 地歴公民教室
 3: 対象 国際科2年生グローバルスタディーズⅡC 選択者(男子2名女子7名 計9名)
 4: 科目について

グローバルスタディーズⅡCは、地歴公民科教諭、英語科教諭とALTの3名が担当する科目内連携の学校設定科目である。生徒が複眼的な視野を育成し、社会の問題解決を目指して、主体的に学び考える日本語と英語による授業を展開している。

5: 本時の目標

本時まで「逆転投票シミュレーション」「地球帝国皇帝・総選挙」「インドの高校生との協働学習」など様々な取り組みを通じて政治・経済・環境・人権・教育に関する諸問題をテーマに取り上げ、考察してきた。本時はその中でも現代の子供達が普段の遊びとして実施している ※“人狼ゲーム”風にする「政策論争」を通じて新たな諸問題を取り上げ、理解を深め、自分の意見を持ち、考察していくなかで、政治を見極める力を身につける。その際、これまで同様、日本語だけでなく英語でも自分の意見をまとめ、さらに論争することで両言語の表現力をより身につけることも本時の目標とする。また、特に本時は議論するテーマに関係する内容を前回の授業において講義しているので、その材料を議論の中で使用し、表現することも目標の1つである。

※人狼ゲーム風の「政策論争」について

生徒に「良い政治家」「悪い政治家」「悪い秘書」を一人ずつ、そして多数の「有権者」の立場を割り振り、それぞれの立場からある政策について論争した上で、最後に有権者が「悪い政治家」を見抜き、指摘する。良い政治家はあくまで有権者のための政策を主張し、悪い政治家はある狙い(下心)を持って持論を展開する。悪い秘書は有権者のふりをしながら悪い政治家をサポートする。

6: 指導内容

	生徒の活動	教師の動き	指導上の留意点	Neo MAKS
[導入] 10分	・本日の政策と役割の確認 ・政策課題を理解し自分の意見を整理する	・本日の政策を発表し、良い政治家、悪い政治家、悪い秘書、有権者を確定させ、本人に通知する	・簡潔に説明	
[展開] 4分 6分 7分 2分 10分	・2人の政治家により演説を日本語と英語でおこなう(1人2分) ・有権者が意見を日本語と英語で述べる(1人1分) ・それぞれの政策に対する質問や意見を日本語と英語で述べる	・司会進行と計時を行う ・政治家2人に政策を述べさせる ・有権者には賛否を表明してその理由を述べさせる ・挙手した生徒に質問や意見を述べさせる ・政治家2人に政策を述べさせる	・指導者はALTに交替する ・時間が来ると合図する ・積極的に議論するよう働きかける ・発言の順番は逆になるようにする	14 610
[総括] 3分	・教師のコメントを聞く ・本日の授業の「ふりかえりレポート」を記入する(政策論争が最終回となるため、いままでの政策論争授業全体のふりかえりも記入する)	・有権者VS悪い政治家、で勝敗を判定すると共に、予測されたねらいを使って問題点を簡単に整理し告げる ・本日の政策課題や生徒の取り組み、生徒の意見についてコメントする	・時間が足りなければ、次の授業までの宿題とする	

WWL 事業で育成を目指す Neo MAKS(12 の力)

- 『Mind』 1 物事を多面的に見る力 2 他者の痛みを理解しサポートする力
 3 多様性の中で協働する力『Attitude』 4 経験と知識を融合させる力
 5 リーダーシップを取り責任をもって調整する力
 6 柔軟性に富んだ問題解決力
 『Knowledge』 7 自国や他国の文化・歴史に関する深い知識と理解 8 科学的知識を活用する力『Skills』
 9 ICTを主体的に使う力 10 コミュニケーション力
 『Neo』 11 普遍的正義感 12 新しい価値観を創造する

家庭基礎 学習指導案

1：日時 令和2年1月30日（木）6限 14：00～14：50

2：会場 神戸市立葺合高等学校調理実習室

3：対象 神戸市立葺合高等学校 1年9組生徒（40名）

4：指導者 神戸市立葺合高等学校 伊知地 薫、松本 真波

5：題材名 食と環境

題材と目標 食生活を営むことで起こる環境への影響について知り、環境に配慮した食事について基礎的・基本的な知識を身につけると共に、自己の現在、将来の食行動に結びつける力を養う。

6：生徒観

生徒は調理実習など食に関する学習への意欲は高い。一方で4月に行ったアンケートによると、半数以上の生徒が「自分の食事を用意することはほとんどない」と答えている。また同じアンケート結果で「食生活と世界経済、環境とのつながりを理解しているか」との問いに「理解している」と答えた生徒は、3分の1ほどである。以上の点から、生徒の食生活は自立しているとは言いがたい状況である。本授業では食生活行動を自分のものとしてとらえる力、環境に配慮した食生活を実践するための力を養うことを目的としたい。

7：題材の評価基準

食と環境への 関心・意欲・態度	思考・判断・表現	知識・理解
食と環境のつながりについて関心を持って学習活動に取り組もうとしている。	自己の現在・将来の食行動のあり方について考えることができる。	食と環境とのつながりについて理解し、基礎的、基本的な知識を身につけている。

技能については食生活分野の他の題材で評価する。

8：本時の学習展開

	具体的学習活動	指導・支援・評価	Neo MAKs
導入 (5分)	5人で1つの班を作り、着席する。 班で、提示された8種の献立から環境への配慮がされ、なおかつ食べたいと思う献立はどれか協議する。 選んだ献立の主要食材産地について協議し、予測を立てる。	8種の献立と主な食材を明示した資料を用意する。「環境への配慮がされた」「食べたい」の二つの観点から1種の献立を選ぶよう指示する。 献立カードに書かれた食材のうち、主要産地が書かれていない1種類のみ産地を予測するように伝える。	⑩コミュニケーション力

展開1 (15分)	導入で行った主要食材産地予想の正解を確認する。 フードマイレージについて知る。 選択した献立のフードマイレージを計算する。 他の献立も含めてフードマイレージの高い順に予測を行う。答えを聞き、フードマイレージについての理解を深める。フードマイレージが高い献立にはどのような特徴があるのかを話し合う。	資料集 P125 を用いてフードマイレージについての説明を行う。 主要産地に外国が多いことを伝える。 選択した献立の食材重量と輸送距離からフードマイレージを計算する方法について説明する。 それぞれの献立のフードマイレージを伝える。マイレージが高い献立と低い献立の違いについて説明する。	⑧科学的知識を活用する力
展開2 (5分)	食が環境に与える影響について図る指標、食糧廃棄問題について知る。	フードマイレージ、バーチャルウォーター、ライフサイクルアセスメント、食品ロスについて説明する。	①物事を多面的に見る姿勢
展開3 (20分)	自分の食生活について振り返り、取り組める食行動について考え、食行動改善案を付箋に記す。班員に付箋を渡し、発表してもらおう。 取り組みやすさや環境への影響について検討し、時間軸と効果軸の記されているボードのどこに付箋を貼るべきか話し合いながら作業を進める。	説明を聞いた上で、普段の食生活において環境への負荷をかけている行為を軽減できる行動は何か、考えるよう促す。 行動を付箋に記し、班員で共有するよう指示する。取り組み内容を検討後、「私の食行動宣言」を記すよう伝える。	⑥柔軟性に富んだ問題解決力 ⑩コミュニケーション力
まとめ (5分)	完成した班の「取り組める食行動」を参考に、「私の食行動宣言」を記す。 発表を行う。	取り組み内容を検討後、「私の食行動宣言」を記すよう伝える。 評価食と環境とのつながりについて理解し、自己の現在・将来の食行動のあり方について考えることができている。（「食行動宣言」、ワークシート）	⑥柔軟性に富んだ問題解決力

情報の科学 学習指導案

神戸市立葺合高等学校
 授業者 高橋 義人
 尾久土 美紀
 宍戸 美津子

- ・オリジナルゲーム制作（3時間）・・・本時はその第1時間目
- ・Wordでの取扱説明書作成および、ゲーム実施による相互評価（1時間）

9. 本時の指導内容

	生徒の活動	教師の活動	留意点
導入 7分	・ホワイトボードに書かれたことをノートに書く。	・オリジナルゲームを作る上での「ノルマ」を板書する。 (1)スコアの導入 (2)オリジナルキャラクターを最低1つは作成 (3)ゲームオーバーの導入 ・提出まで本時を含めて3時間であることを確認する。	・評価に対する考え方も同時に伝えておく
展開 3分 35分	・Scratch上のファイル保存機能を作り、自分の学籍番号を含んだファイル名で保存する。 ・ゲーム作成書を元に、自由作成をする。 ・インターネットの解説サイトやScratchのチュートリアルファイルから作成のヒントを得る。	・提出用ファイルを作成させる。 ・机間巡視をし、進捗状況の確認をする。 ・生徒からの質問をうける。	・生徒の質問に対し、自ら解決するように導く ・ファイルの上書き保存を促す。
終了 5分	・ファイルを上書き保存する。	・上書き保存の方法を再確認したうえで、実行させる。 ・次回予告	

1. 日時

令和2年1月30日（木） 第6校時

2. 場所

神戸市立葺合高等学校 第1コンピュータ室（本館3F）

3. 対象

1年1組（国際科）40名

4. 科目について

「情報の科学」は学習指導要領での教科「情報」の科目として、本校では現行カリキュラムがスタートして以来、開講をしている。教科「情報」としての教育目標は、情報社会を構成する一員として、社会の情報化の進展に主体的に対応できる能力と態度を育成することであり、科目「情報の科学」では、問題解決を行うために情報と情報技術を効果的に活用する学習活動やそのために必要となる科学的な考え方を身に付けさせ、さらに情報社会を支える情報技術の役割や影響の理解及び情報モラルを身に付ける学習活動を重視している。

5. 本時の学習内容についての背景

現代社会において、今やコンピュータのない世界は考えられず、世界中ではコンピュータでできることや仕組みを理解することが必須スキルになっている。それは文系・理系などという古典的なグルーピングにとらわれず、すべての人が持つべきスキルと考えられつつある。日本でも新学習指導要領で小学校からのプログラミング教育が話題となっているが、プログラミング教育は学際的要素を多く含んだものと考えられている。

6. 本時までの習得内容

対象クラスは、2学期に「問題解決のためのコンピュータ活用」という単元の中の「問題解決のための手段」で『アルゴリズムとプログラミング』を習得した。その中では、アルゴリズムとフローチャートの基本と、VBA（※1）によるプログラミングを習得した。（※1 VBA: Visual Basic for Applicationsの略。Microsoft Officeシリーズに搭載されているプログラミング言語）

7. 本時の教材について

小学校のプログラミング教育でも利用されることが予想される、プログラミングツール「Scratch（スクラッチ）」を用いる。ScratchはMITメディアラボが開発したプログラミング言語学習環境で、複雑なプログラミング言語の文法が書けなくとも、準備された「ブロック」を正しく配置することだけで直感的にプログラムを作ることができる。

8. 学習計画（計10時間）

- ・スクラッチの紹介と基本操作習得（1時間）
- ・サンプルプログラムによるゲーム作成初級編（1時間）
- ・サンプルプログラムによるゲーム作成中級編（1時間）
- ・サンプルプログラムによるゲーム作成上級編（2時間）
- ・オリジナルゲーム作成のための計画書作成（1時間）

資料3 課題研究 令和元年度第2学年課題研究テーマ

カテゴリ・タイトル・要旨

環境	<p>Culling of Pets in Japan 日本におけるペットの殺処分</p> <p>この研究においては、最初に用語の定義と一般社会と動物福祉制度の関係を示し、殺処分率と譲渡率における兵庫県および他県の平均との比較をした。次に、殺処分量、殺処分率、譲渡量、譲渡率を示し、広島が殺処分ゼロを達成した理由と、シェルター崩壊など殺処分ゼロのリスクについて説明した。そして、兵庫県と広島県のどこに問題があるのかを示し、1)飼育についての講義の義務付け 2)NPOへの財政支援の2つの解決策を提示する。</p>
環境	<p>Saving Abandoned Dogs in Japan 日本の捨て犬を救うために</p> <p>日本には「捨て犬」が多い。新しい飼い主が見つからない場合、それらの犬は殺処分されてしまう。昨年、日本で8362匹の犬が処分されたことから、日本の捨て犬の殺処分率の高さがうかがえる。私たちは、殺処分される前に新しい飼い主への譲渡を増やすことに焦点を当て、より多くの日本人にペットを飼う際の選択肢として、「譲渡」があることを伝え、それを身近に感じてもらえるよう「BHAP(人と犬の間に橋を架けるプロジェクト)」を提案する。</p>
経済	<p>Economic Sustainability of the New National Stadium 新国立競技場の経済的持続可能性</p> <p>今年、この国で東京オリンピックが開催される。沢山の外国人観光客がこの国に集まり、経済はより一層成長を遂げることが予想される。しかし、この競技場は、オリンピック後の明確な使用用途が決まっておらず、この競技場にかけられた多額の建設費を回収できるかが懸念となっている。そこで、本研究では競技場周辺に商業施設を集め、スポーツと娯楽が一体となったエンターテインメントエリアを形成して、オリンピック後の持続的な経済効果を狙うことを提案する。</p>
健康	<p>How Women's Sense of Beauty Affects the Onset of Anorexia 女性の美意識と拒食症</p> <p>拒食症は、疾患者本人のみならず次世代へ深刻な影響を及ぼす。本研究では、主要な要因のうち、社会文化的要因に着目した。現代社会では、痩せ礼賛の傾向があり、多くの女性が不要な痩身願望を持っている。ダイエットの開始が拒食症発症の一因となるため、「美」の基準に変化を起こす必要を感じた。そこで、日本、西洋における「美」の基準、ファッションの歴史を見る事で変化的起因を探り、現代社会に応用するためのヒントを得た。</p>
教育	<p>Improving the Educational Situation of Sub Saharan Africa サハラ以南の小学校の教育状況の改善</p> <p>サハラ以南では教育が遅れており、小学校の中途退学者の割合が世界平均より大きい。その事実を知り、私たちは、教育の基礎となる小学校に着目し、“どうすればサハラ以南の小学校の中途退学者数を減らせるか”という課題で研究をしている。サハラ以南では初等教育を受けた教師の割合が約半数であり、それがこの原因の一つではないかと考え、日本にその地域の教師を招き、日本の教育システムを知ってもらうというプログラムを提案する。</p>
人権	<p>The Gender Gap of Soccer in Japan 日本サッカー界における男女格差</p> <p>日本のサッカー界においては、男女で数多くの格差が見られる。しかしその多くは資金の差によって生まれているものである。そのため、女性のサッカー界における現状を改善するには人々の女子サッカーへの関心が鍵になると考えた。日本国内で女子サッカーを盛り上げるためには何ができるだろうか。「競技人口の増加」、「日本でのW杯開催」、「選手による地域参画システム」などの観点から、問題の解決策を導き出す。</p>
人権	<p>Returning to Society after Childbirth for Women in Japan 妊娠・出産後の女性の社会復帰</p> <p>日本では労働力人口が減少しているにも関わらず依然として妊娠、出産を機に仕事を辞める女性は少なくない。第一子出産前後で継続して就業している女性の割合はほとんど変化していないという報告もあるなど、まだ十分な状況ではない。乳幼児をもつ母親を対象に行ったアンケートを通し、会社と連携のとれた保育所や託児所の設置が女性のワーク・ライフ・バランスを促進する上で重要なのではないかと考えた。そこで、本研究では政府が行う企業主導型保育事業を参考にした託児所の設置を提案する。</p>
教育	<p>The Political Participation of Young People 若者の政治参加</p> <p>昨今の日本では、投票率の低下に代表されるように、若者の政治参加の減少が社会問題となっている。この研究では、そもそもなぜ若者の政治参加が希薄になっているのかを、先行研究や先行調査の結果を使い分析した。それをもとに、少年期、青年期における政治参加の経験の場の欠如が、大きな影響を与えているのではないかと仮説を立てた。その仮説から、若者の政治参加促進の効果的な方策として、学校と地方自治体の連携による、実用的な提案の構築を目指す“実践的な子ども議会”を提案する。</p>
経済	<p>How to Improve Young Generation's Way of Thinking about Fashion? 若者のファッションに対する意識をどう変えるか</p> <p>近年、ファストファッションの増加により、環境問題や労働問題が深刻な問題になっている。そこで、私たちは若者のファッションに対する意識について調べた。若者は安く流行性のあるファストファッションを好む傾向にあるが、彼らはファストファッションの問題点について知らないことが分かった。このことから、本研究ではファストファッションの問題点を若者に伝え募金という形で若者がファストファッションの問題に関わることでシステムを提案する。</p>
経済	<p>Increasing the Entrepreneurship of Japanese Youth 日本での若者による起業を増やすためには</p> <p>グローバル化が進んだ現代社会において、世界的に若者が起業した企業が世界市場を席巻している。また、起業は経済に多くの利点がある。しかし、日本においては若者の起業は他の先進国に比べてあまり活発でなく、日本経済の持続的な発展にブレーキをかけている。私たちはこの問題の原因の一つである大学教育に焦点を当て、大学教育のクオリティを評価する新しい指標を用いることを提案する。</p>
健康	<p>Depression ~ Current Situation in Japan ~ 日本におけるうつ病の近況</p> <p>近年、日本では総人口のうち、13人に1人がうつ病であるといわれている。そこで、日本におけるうつ病の現況についてインターネットで調べ、分析し、さまざまな視点から問題点が何かを考えた。そのうえで専門家の方にインタビューをし、今日利用されている支援法の中から効果的なものを探し、その中から一つ、リワークシステムという労働者の職場復帰支援システムを導き出した。</p>

健康	<p>The Current Situation of Japanese Young People's Suicide 日本の若者の援助希求能力の低さと自殺率の関連性</p> <p>本研究では若者の自殺率の高さを問題視している。日本では様々なサービスの提供により、その全体数は減少してきたが、少子高齢化により母体となる若者の人数が減っているにも関わらず、自殺率は横ばいである。つまり若者の自殺は増加していると結論づけた。</p>
人権	<p>Sports Participation of LGBT people in Japan 日本におけるLGBTのスポーツ参画</p> <p>近年、世界だけでなく日本でのLGBTの認知度は高まりつつあるがスポーツ業界におけるLGBTへの理解度は未だ低く、競技者にとって大きな壁が存在する。競技者本人の意思通りの性別で参加できない原因としてはまず、指導者のLGBTへの理解度の低さが挙げられる。また、更衣室で男性か女性の選択をしなければならないことが挙げられる。これらを解決するために指導者が知識を深めるための方策や、更衣室に個室を設けることを提案する。</p>
人権	<p>“Visualization” of TITP and Role of Local Community 外国人技能実習制度の「見える化」と地域の役割</p> <p>近年、外国人技能実習制度における労働問題、人権侵害が多く報道されている。私たちはこの制度の多方面からの分析や専門家へのインタビューを通して、技能実習制度における実習生への支援体制に問題があるのではないかと考えた。そこで、技能実習制度の「見える化」をテーマとして地域における実習生支援に焦点を置き、「学生地域協議会」の設置を提案する。これは、地域と技能実習制度の新たな連携モデルの構築することによって問題解決につながる第一歩となるだろう。</p>
教育	<p>The Mistranslations on Public Documents 公文書における誤訳</p> <p>昨今、様々な国際問題がニュースを騒がせているが、誤った翻訳によって引き起こされたものの存在を知っているだろうか。公文書を英和翻訳する際に起こる誤訳は、時にたった一語でも大きな問題に発展しうる。本研究では、誤訳が起こる背景的要因やそれらが及ぼす各所への影響を調べるべく、「共謀罪」・「サンフランシスコ平和条約」の二つを中心として、誤訳に関する情報を収集・分析し、そこに潜む政治的な意図に迫った。</p>
健康	<p>Support for Teenage Mothers Who Do Not Take Prenatal Care 十代の未受診妊婦への支援</p> <p>今日、多くの十代女性が思いがけず、妊娠してしまうということが起きている。また、様々な面で未熟である十代妊婦は、知識の欠如等からその多くが妊娠に気が付かない、または、気づいても親に打ち明けることができず、未受診妊婦になるリスクが成年女性と比べて高くなっている。そこで私たちは、問題の根源にある性に対する知識不足を改善することを目的とし、啓発ポスター及び冊子の作成、高校生NPOによる出張授業の実施を提案する。</p>
人権	<p>Disability Athletics 障害者スポーツ</p> <p>近年、障害者スポーツの競技人口は年々増えてきているが、まだすべての障害者が簡単にスポーツを出来る環境になったわけではない。スポンサーを持っていないチームはスポーツをするために必要な義手や義足などの費用や遠征の費用などを自分自身で負担しなければならず、それが障害者スポーツをする人にとって大きな負担となっている。そこで私たちは障害者スポーツのチームがスポンサーを持つためにSNSを使い、より多くの人に障害者スポーツについて知ってもらうことを提案する。</p>
健康	<p>Stress Management of High School Students 高校生のストレスマネジメント</p> <p>長年、若者の自殺は日本で大きな問題となっている。現代の高校生は悩みを一人で抱え込む傾向にあり、この現状を改善させることが自殺防止に繋がると考えられる。現在、日本の高校にはスクールカウンセリング制度があり、生徒が相談しやすい環境づくりを進めているが、実際にはこの制度がうまく機能していないケースが多々ある。本研究では、若者の相談状況を改善し自殺を減らすために、この制度の有効活用のための方策を提案する。</p>
経済	<p>The Reality of Clothing Donation and Japanese People's Interest 洋服寄付に対する関心が日本の寄付システムにどう影響するか</p> <p>近年、日本では洋服の寄付に対する関心が他国に比べて低く、寄付活動を行うNPOは、寄付金の回収が少なく赤字が続いていた。スタディーツアーの参加者が少なく延期が続いているなど、さまざまな問題を抱えている。寄付量の多いアメリカと日本を比べながら研究を進めると、寄付に関する知識不足も問題であることがわかった。そこで私たちは日本の洋服の寄付に対する関心と知識を増やすために、延期され続けてきたJRCCのスタディーツアーを高校で宣伝し、参加者数を増やすことを提案する。</p>
環境	<p>Providing Evacuation Information to Support Foreign Tourists 外国人観光客にどのように避難情報を提供するか</p> <p>近年、日本の外国人観光客数は増加の傾向がみられる。しかし、過去の震災のデータによると、震災時に母国語でのアナウンスや情報の発信が行われておらず、地震を体験したことがない外国人観光客が情報不足に陥ったとある。日本語がわからなくても震災時に情報を確実に受け取るために、観光客一人ひとりの言語を選択する多言語対応緊急インターネットサービス、居住者たちによるボランティア活動を提案する。</p>
人権	<p>Refugee Support 難民支援</p> <p>近年、難民問題は深刻化しているにもかかわらず、数々の先進国による彼らへの援助は増加するどころか減少しているのが実態である。日本は経済面での援助は多いが、難民の受け入れには消極的であり、国民の難民に対する意識も低いことが特徴である。本研究では、国民に難民の過酷な現状を伝え支援の輪を広げるためにメディアの利用を提案する。メディアの影響力は難民支援に大きな力をもたらすだろう。</p>
人権	<p>Returning to Society after Childbirth for Women in Japan 出産後の女性社会復帰</p> <p>近年、妊娠または出産をきっかけに育休や産休を取ることは当たり前となっている。しかし、その長期休み明けに職場での人間関係、働き方の変化などが理由で離職し社会復帰ができない女性が多い。企業側も育休を取りやすくするなど改革を行っているが、まだ十分とは言えない状況である。そこで、本研究では出産後の女性がより社会で活躍できるようになるため、既存システムの活用または新たなシステムを作り出すことを提案する。</p>

健康	<p>Mental Health Risks of Elderly Survivors Caused by Losing their Houses 住宅を失った高齢の被災者における心の問題</p> <p>2011年に発生した東日本大震災は多くの被害をもたらした。8年たった現在でも、度重なる引越しが精神的苦痛となり、今なお心の問題を抱える人たちがいる。とりわけ高齢者はほかの世代と比べると震災からの回復が遅く、新たなコミュニティを形成するのも難しく、災害公営住宅で孤立してしまう人もいる。そこで私たちは高齢の被災者がインターネットを活用し、家族や知り合いだけでなく児童・生徒ともコミュニケーションをとることを提案する。</p>
人権	<p>The Influence of Mass Media on Conflict 報道の紛争への影響</p> <p>世界で最も多くの犠牲者を出したコンゴ民主共和国の紛争や現状は、新聞には年に二度ほどしか取り上げられず、多くの人に知られていないために支援も僅かの涙ほどしかない。近年、メディアは同情を煽るようなニュースを多く取り扱い、難しい関係を端的に述べ、問題を簡略化することで視聴者の獲得を図っている。世界問題を知ることの重要性や、正しい情報を見分けるための力を義務教育で育てることを提案する。</p>
環境	<p>The Effect of Ocean Plastic on Marine Worms 海のプラスチックが多毛類に与える影響</p> <p>近年、マイクロプラスチックをはじめとする海のプラスチック汚染が深刻な問題となっている。現在、プラスチックが人体に及ぼす影響は明らかにされていない。しかし、魚が口にするような小さな多毛類の体内に多量のマイクロプラスチックが含まれている事は明らかである。海の生物と私たちの将来の安全を守るために、プラスチックの生産量を減らし、私たち自身は今あるものを長く使う努力をする事を提案する。</p>
人権	<p>Bullying of LGBT Students in School in Japan 日本国内におけるLGBTの生徒へのいじめについて</p> <p>昨今、ジェンダー問題への関心が世界中で高まっている。今日の日本においてLGBTという言葉の意味を知っている人の割合は増えているにも関わらず、それに対する偏見はまだ健在している。いじめの大きな原因として、LGBTに関する知識の不足や見た目の違いが浮かび上がった。海外での実例をもとに私たちは学校でのLGBT教育の徹底化により同性愛への偏見をなくし、制服制度の廃止によるトランスジェンダーの心の負担を軽減することを提案する。</p>
健康	<p>Improving Community Support for Children's Cafeteria in Hyogo Prefecture 地域でできる兵庫県の子ども食堂の改善</p> <p>様々な理由で孤食に苦しんでいる子どもを助ける施設の一つとして子ども食堂がある。子ども食堂とは子どもが無料または低額で食事のできる場所である。その数は年々増加している中で近くの食堂に行きやすくなってきたが、運営するための財政的な問題をはじめ、孤食や貧困問題を抱えている子どもたちが来ることができないといった問題がある。私たちはこの問題の解決策として、予納なしでの参加と地域でバザーやお祭りを開催しその利益を子ども食堂に寄付することを提案する。</p>
人権	<p>Domestic Violence in Front of Children 面前DVによる被害待児支援の充実のために</p> <p>近年、DV被害者が増加している中、それに伴い新たな児童虐待の形として面前DVが問題視されている。しかし、この問題は世間あまり浸透していない。面前DVにより、児童たちは精神的に大きなダメージを受けるものの、法律によりDVによる直接的な被害者として認められていないため、十分な援助が受けられていないのが現状だ。そこで今回私たちは、児童養護施設のシステムの改善により、被害待児のケアの充実を図ることを提案する。</p>
人権	<p>Better Labor Environment for Disabled People 障がい者のためのより良い労働環境</p> <p>現在日本では、障がい者の労働環境や雇用が、問題として挙げられている。法律で定められた障害者の法定雇用率はあるが、それを達成している企業は少ない。そこで、自宅からでも働くことができるシステム、「テレワーク」を私たちは推奨する。また、福祉支援の進んでいるアメリカには、「障害を持つアメリカ人法(ADA)」がある。日本でも、他国を参考に法律を改善すれば、障がい者がより多くの社会参加の機会を得て、より良い労働環境が実現するだろう。</p>
教育	<p>Better Support for JSL Students in KOBE 神戸市のJSL生徒への日本語教育支援</p> <p>“JSL(Japanese Second Language) students”と呼ばれる日本語を第2言語とする生徒は、神戸市に432人、全国では4万人以上在籍していると報告されている。在日外国人の増加に伴い、文部科学省や神戸市教育委員会も日本語支援対策を行ってはいるが、全ての生徒に十分な支援が行き届いていないという現実がある。彼らの将来のために必要な日本語教育が受けられるように、実際に日本語教室でボランティアとして活動している私たちの視点から、問題解決に向けて提案する。</p>
健康	<p>How to Improve QOL for Single Senior Citizens in Kobe City 神戸市独居高齢者におけるQOLの向上</p> <p>近年、神戸市における独居高齢者は増加しており、大きな社会的問題に発展している。我々は、様々な調査やインタビューを通じて、彼らが社会的役割を失い、いつも寂しさを感じ、著しくQOLが低下していることがわかった。そこで、早急に社会福祉施設やサービスを改善すること、生きるモチベーションを感じるための新しい仕組みを構築すること、そして独居高齢者と地域間の新しいコミュニケーションを実現するために市役所に新しい部署を設置することを提案する。</p>
環境	<p>Food Waste from Convenience Stores in Japan 日本の食品ロス問題と消費者の意識改革</p> <p>近年、日本では食品ロスが深刻な社会問題となっている。食品ロスには、事業から出る事業系食品ロスと各家庭から出る家庭系食品ロスがある。この研究では事業系食品ロス、その中でも私たちにとって身近な存在であるコンビニエンスストアからの食品ロスに焦点を当てた。研究を通して、食品ロスの大きな原因のひとつは消費者の意識の低さだと分かったため、この研究では消費者の意識を改善するための、わかりやすく行動に移しやすい解決策を提案する。</p>
教育	<p>The Studying Behavior of University Students in Japan 日本の大学生の勉強習慣の現状</p> <p>日本の大学生は世界で一番勉強しないとも言われ、実際のその自主勉強時間は一日平均1時間にも及ばない。しかしグローバル時代の今日、企業の多国籍化が進み、日本の大学生は就職活動において海外の優秀な学生との競争を避けられなくなる。つまり社会に出るまでの4年間は本来とても重要な期間であるはずなのだ。私たちはこの問題の原因を追究し、近い将来大学生になる高校生の立場から現状を向上させる提案をする。</p>

健康	<p>Initiatives to Encourage Citizens' Well-Being: A Case Study of Kobe and New York 市民の幸福保持における地方行政の役割 神戸・ニューヨークの調査より</p> <p>近年うつ病患者の数は3億人に達しており、その影響で離職する労働者や、国の経済負担の増加がみられ、深刻な問題である。一方、現段階で行政が行っているサービスは精神疾患後のケアにのみ重点を置いている。本研究は、精神疾患を患わないために幸福を保持することに焦点を当て、神戸市民が利用できるSNSアプリ「MY CONDITION KOBE」に精神疾患対策の情報や医療ケアサービスを導入し普及させることを提案する。過度なストレスを自覚することが、幸福保持につながると思っている。</p>
人権	<p>Better Working Conditions for People Who Suffer from Depression うつ病に優しい職場環境を</p> <p>今日、日本でうつ病患者は増加し、2017年時点で約90万人がうつ病を発症している。うつ病を抱えながら、多くの人が働いているのにも関わらず、企業においてうつ病患者へのサポートは十分ではない。ストレスチェックの使用状況は効果的に機能しておらず、さらにはうつ病患者とのコミュニケーションも希薄である。本研究では、うつ病患者やうつ病患者と働く人々にとってより働きやすい職場環境の形を作ることを提案する。</p>
教育	<p>English Education Inequality in Japan 日本の英語格差について</p> <p>グローバル化が進む現在、英語は世界の人々を繋ぐ必要不可欠な道具として存在している。しかし日本の英語教育は決して最先端のものとは言えないと共に、地域の間で英語力の格差も問題となっている。格差について調べていく過程で教師が生徒の英語力に大きく関係するのではないかと考えに至り、研究を進めることとした。そこで私たちは先生用のアプリを開発し、映像英辞書の作成、海外研修制度の導入を提案する。</p>
環境	<p>Bleaching and Extinction of Sekisei Coral 石西珊瑚の白化と絶滅</p> <p>近年、サンゴの白化が世界的に問題になっている。白化とは、サンゴと共生している褐虫藻がサンゴ内から脱出してしまうことでサンゴが白くなる現象で、日本では石西珊瑚礁に大きな被害がでている。赤土や生活排水の環境基準以上の排出が主な原因である。生活排水においては下水処理施設の普及率がほかの県に比べて少ないことがわかった。そこで私たちはグリーンベルトの設置と下水処理設備の環境改善を提案する。</p>
健康	<p>Health Risks of Transportation Truck Drivers 物流業界の長距離ドライバーの健康問題</p> <p>今日、日本で早急に対策するべき問題のひとつとして、労働者の過労問題がある。特に、運送業界は全産業で最も脳疾患・心臓疾患の労災補償申請件数も多く、非常に深刻な問題である。物流業界は他と比べて労働時間が長く、その要因のひとつに荷物の積み込みの際にスムーズな連携がとれず、荷待ち時間が発生してしまうことがあげられる。この研究では、ITシステムを利用したトラック予約受付システムの認知を広げるため、物流業界で働く人々に向けたガイドラインの制作を提案する。</p>
健康	<p>Community Support for the Housebound Elderly 閉じこもり高齢者のための地域支援</p> <p>近年閉じこもり高齢者が日本で増え続けている。閉じこもりは廃用症候群、そして寝たきりにつながり、結果的に死亡率が2倍以上高くなる。外出時の費用、体の疲れ、移動手段への不安、外出する目的がないという理由で閉じこもりがちになる高齢者のためにSchool Meal Projectを提案する。高齢者を高校に招待し、ボランティアの高校生と昼食をとることを通じて高齢者の健康を増進するとともに双方の交流の場を作る。</p>
健康	<p>Teenagers' Suicide in Japan 日本における青少年の自殺</p> <p>様々な対策によって鎮静され、「いじめ問題」という見出しをニュースで見ることが少なくなった。それに伴い青少年の自殺への世間の意識は水面下で寂滅する現状に至る。然しながら高学歴社会との癒着が強まっているこの日本では、いじめ問題だけでなく、様々な理由で自殺へと追い込まれる青少年の数に増加の傾向が見られる。多様化する自殺の要因とそれに相対する解決策を、他国のモデルにも則って提示していく。</p>
教育	<p>Internet Life without Fear of Leaking Personal Information 個人情報漏洩に配慮したインターネットライフ</p> <p>インターネット利用が急速に加速した現代において、個人情報の漏洩は世界中で深刻な問題となっている。私たちはインターネットの知識が乏しい17歳以下の子供にターゲットを絞り調査した結果、意識の低さと詐欺コンテンツの多さに原因を限定した。その解決のため家庭でのインターネットへの意識の向上を図る親同伴の講習会を開くと同時に子供のインターネット利用時間の削減を目的にまず学校で読書の機会を増やすことを提案する。</p>
人権	<p>The Needs of Foreign Workers and Difficulty of Living in Japan 外国人労働者の働く環境と必要性</p> <p>近年、日本の人口は減っていて、高齢者の人口が増えている。もしこの状況が続けば労働者と高齢者の割合のバランスが崩れるため、日本政府は外国人労働者を日本の国力低下防止のために雇う必要がある。また、外国人労働者と日本人との間に点在する言語や文化の壁がありそれも問題になっている。私たちの課題はなぜ日本は外国人労働者にとって住みにくいのか、となぜ日本は外国人労働者を必要とするのかである。解決策として、日本人と外国人労働者の住まいを隔離しない、言語の壁をなくせるよう教育の制度を整えることを提案する。</p>
健康	<p>Mental Health of High School Students in Japan 高校生の心の健康</p> <p>思春期にあたる高校生は、進路、人間関係などの様々な悩みを抱えているのにも関わらず、多くのひとがインターネットでの情報に頼っている。また、相談できずに問題を悪化させることも多い。そこで、高校生が一日の大半を過ごす学校での相談環境を整えることが急務である。この研究では、現在の学校でのカウンセリングシステムの改善案やSNSを活用した相談を提案する。</p>

SAVING ABANDONED DOGS IN JAPAN

Submitted by
2102 Aoi Akamatsu

Partial Fulfillment of the Course
Requirement in

GS (Global Studies) IIB

Submitted to:
Ms Basia Karpinski

Fukiai High School
Kobe City
February, 2020

ABSTRACT

The purpose of this research is to discover how to make adopting abandoned dogs as pets become more common. In Japan, there are many abandoned dogs which have a very high possibility of being culled. In order to prevent this, increasing the number of transferred dogs may be effective. However, the current transfer rate is very low and this style of pet ownership is uncommon. Information for this research was obtained from online reports from the Japanese government and publicly-accessible research papers. The results highlighted that, although there are some obstructions, the actions of animal shelters can be the key to encouraging more people to have an interest in abandoned dogs and to adopt them.

INTRODUCTION

In Japan, there are many abandoned dogs. They are defined as dogs which do not have owners because they are thrown away or unsold in pet shops. They are called 捨て犬(*suteinu*) in Japanese. In fact, although the number of abandoned dogs has been declining in recent years, there are still some people who abandon their dogs because of personal reasons. When dogs are abandoned, they are mostly kept in animal shelters. Unfortunately, they cannot stay there until death, as there is limited available space and maintenance costs create a time limit. In public animal shelters organized by the government, one week after being collected, if new owners are not found, those dogs will be culled.

In fact, in Japan, the number of culled dogs was 7687 (the Ministry of Environment, 2018). In contrast, no dogs were culled in Germany (the situation of killed dogs and cats in foreign countries, 2014). This is because there are big animal shelters called “Tierheim” where more than 90 % of abandoned dogs are adopted as pets every year (PEDGE, 2016). This result clearly shows the significance of adopting abandoned dogs as pets. It is called “transfer”. In order to prevent dogs from being culled, the increase of transfer has an extremely important role. Therefore, this research focuses on the way to increase the transfer which is still uncommon in Japan.

This research was conducted with a question of “How can adopting abandoned dogs as pets become more common in Japan?” The purpose is to identify what obstructions people have to adopting abandoned dogs as pets, and how those obstructions can be relieved, with the end goal of preventing more abandoned dogs from being culled. This paper will highlight widespread public concerns and provide suggestions for ways to encourage more people to adopt abandoned dogs.

METHODOLOGY

This research was based on quantitative information gathered online, such as that provided by the Japanese government and public-access research papers. The data of the number of culled dogs was from the government and that of people’s opinions was from public-access research paper. To find more progressive solutions successful examples in some areas in Japan and in other countries

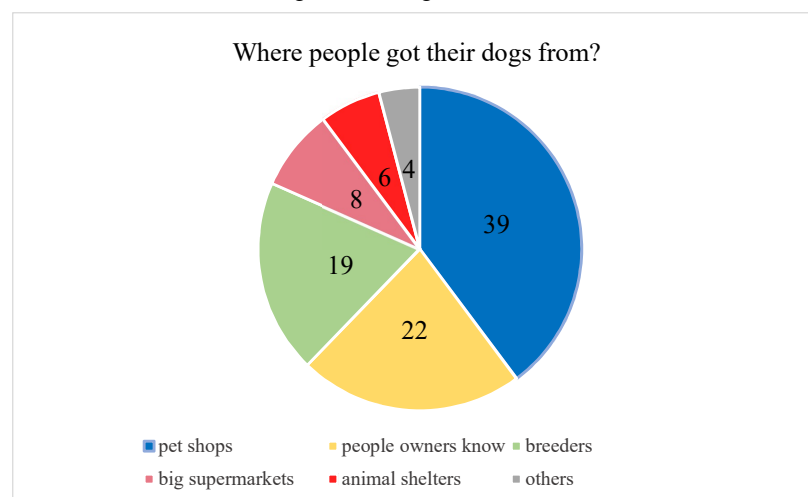
were used as references.

DATA AND ANALYSIS

1. The current situation of transfer of abandoned dogs

To clarify the problem, the first point of focus is the current situation of transfer of abandoned dogs in Japan. The data below is taken from 平成27年度家庭飼育動物(犬・猫)の飼育者意識調査 (Survey of owners awareness of domestic animals (dogs and cats), 2015).

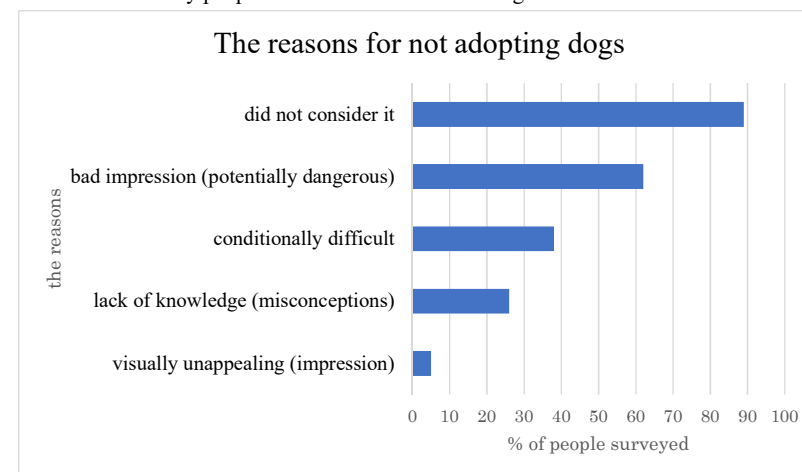
Figure 1: Current method of obtaining domestic dogs



(平成27年度家庭飼育動物(犬・猫)の飼育者意識調査, 2015)

From this data, it was revealed that only 6% of people got dogs from animal shelters while 39% did from pet shops, 22% did from people who the owners knew, 19% did from breeders and 8% did from big supermarkets. This shows that the choice to adopt abandoned dogs as pets is not common in Japan.

Figure 2: The reason why people did not have abandoned dogs



(横浜商科大学, 2017)

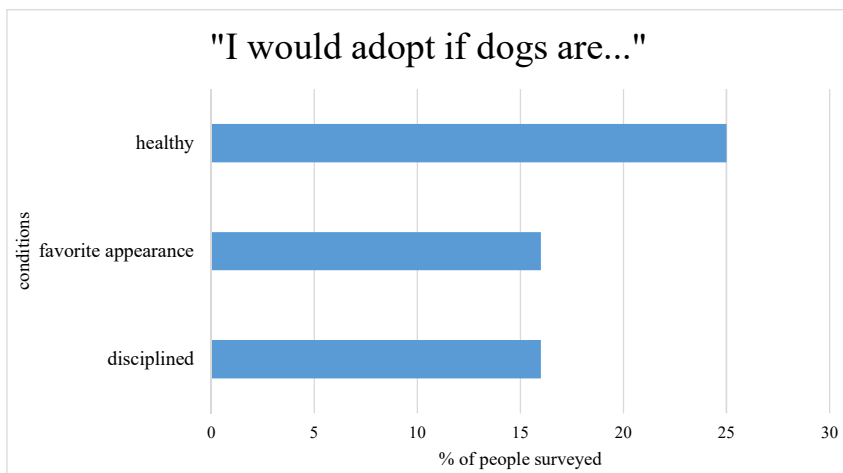
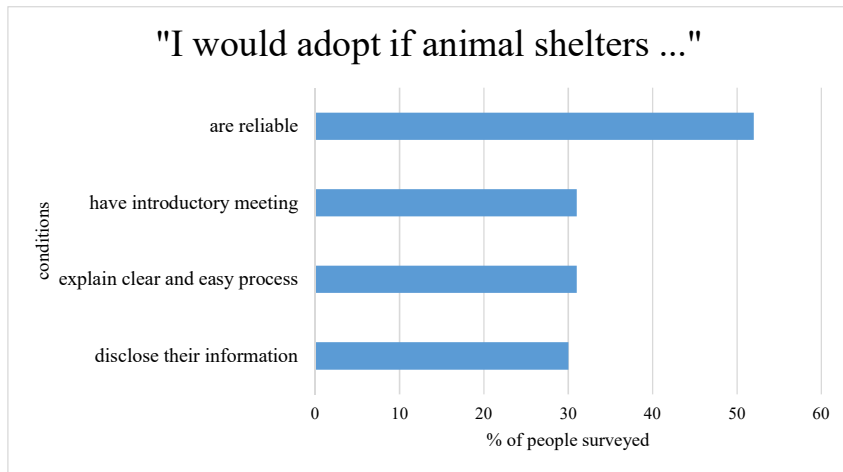
Of the surveyed individuals, about 90% people did not even consider adopting dogs from a shelter. Moreover, more than 60% of people had a bad impression of abandoned dogs. The other reasons people gave were: they had difficulty accepting or meeting the conditions of adoption, did not have enough knowledge of the process to adopt them or take care of them well, or did not like their appearance. This shows that many people do not consider adoption as an option, and even those that do face many obstructions.

Therefore, in Japan, the choice to adopt abandoned dogs as pets is not common and many people have some concerns about doing so.

2. The factors to be improved

The second point of consideration is factors people hope to be improved before they adopt abandoned dogs. The graphs below show the desired points of improvement of animal shelters and abandoned dogs.

Figure 3: Factors of adopting abandoned dogs as pets



(横浜商科大学, 2017)

From these graphs, it is revealed that the main factors to be improved are animal shelters and dogs. In terms of animal shelters, more than half of people said that they would adopt abandoned dogs as pets if the animal shelter was reliable. Also, about 30% of people desired to have introductory meetings where they would be able to see and interact with a lot of abandoned dogs, and receive enough explanation about the adoption process, and to be able to acquire information easily from animal shelters via their website or through magazines.

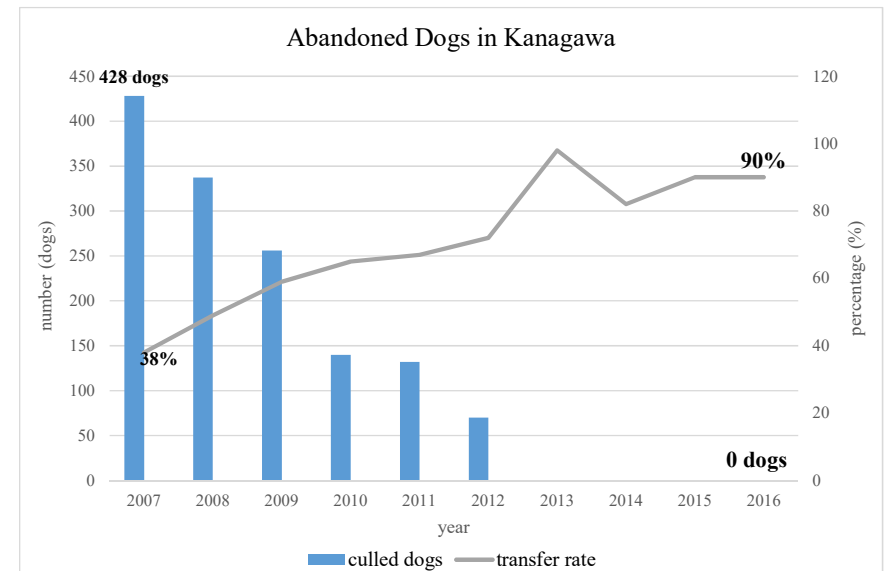
Additionally, in terms of abandoned dogs, around a quarter of people answered that if dogs were healthy, disciplined, and aesthetically pleasing, it would persuade more people to adopt them. Also, to manage abandoned dogs is one of the jobs animal shelters do, which means these changes could be achieved through an animal shelter's improvement.

Overall, it was found that animal shelters are the most important factor to be improved to encourage more people to adopt abandoned dogs as pets.

3. Current measures in Japan

Finally, it is important to look at the current measures in Japan and how other prefectures can increase their transfer rate. As a model of a successful prefecture, Kanagawa became well known recently for its success not only in having a high transfer rate but also in consequently having no culled dogs. These data below are taken from 平成29年度動物保護センター事業概要 (the business outline of the animal protection center, 2017) administrated by Kanagawa Prefecture.

Figure 4: Abandoned dogs in Kanagawa

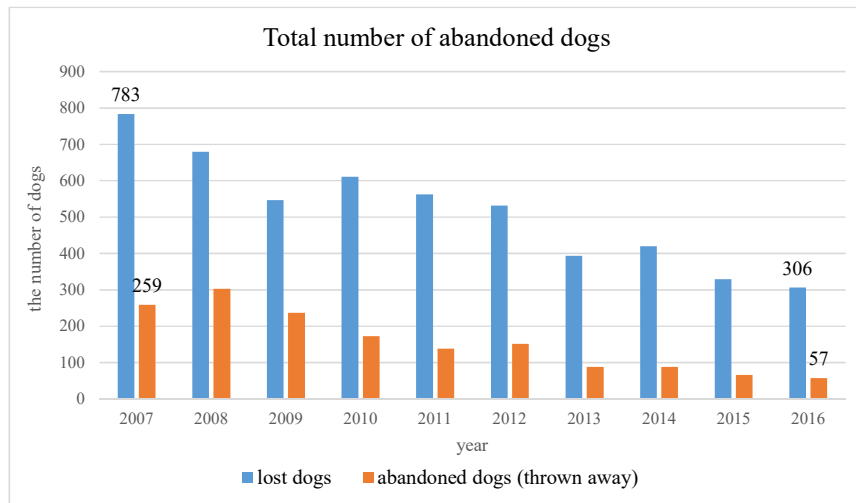


(Kanagawa Prefecture, 2017)

This data shows that although the number of culled dogs was 428 and the transfer rate was 38% in 2007, no dogs were culled and 90% of dogs were adopted in 2016. It can also be said from this data that there is a negative correlation between the transfer rate and the number of culled dogs. This means the more transfer rate increase, the less dogs are culled.

In addition to this, this data below shows the total decreased number of abandoned dogs in Kanagawa from 2007 to 2016.

Figure 5: Total number of abandoned dogs in Kanagawa



(Kanagawa Prefecture, 2017)

This data shows that less and less people in Kanagawa have thrown away their dogs in recent years. From this data, it can be found that the total number of abandoned dogs in Kanagawa has been declining.

Overall, it shows that the more transfer increased, the less dogs were culled and the less people threw away their dogs. Kanagawa has succeeded in all these three fields. According to PEDGE, the reason of the success is that the animal shelters are very clean and there are so many volunteers. Moreover, they often hold introductory meetings. Therefore, it can be concluded that what animal shelters in Kanagawa have done strongly contributed to this success.

DISCUSSION

The pieces of data mentioned above give some ideas about the current situation of the transfer of abandoned dogs, the factors to be improved and what has been done in Japan so far.

First, as mentioned in the data and analysis, only 6% of people have abandoned dogs now and about 90% do not consider this alternative in the first place. People also have bad impressions of abandoned dogs and some concerns, mostly due to lack of knowledge about animal adoption. Thus,

it was revealed that adopting abandoned dogs as pets is uncommon in Japan. On the other hand, some data showed that there are some things animal shelters can do that can be improved to increase the number of people who adopt abandoned dogs. Finally, as it was stated in data and analysis, animal shelters in Kanagawa, one of the prefectures with a high transfer rate, has many volunteers, well cared for facilities and regular introductory meetings, which answer the concerns about adopting abandoned dogs that people have. Other prefectures and potentially all of Japan has the possibility to succeed like Kanagawa did.

In sum, the improvement of animal shelters must be key to make adopting abandoned dogs as pets more common in Japan. To be specific, they should have volunteers, well-maintained facilities and regular introductory meetings. Adopting abandoned dogs would decrease the number of dogs thrown away and, overall, to make the number of dogs killed in Japan zero.

SUGGESTIONS / RECOMMENDATIONS

The suggestion is for animal shelters organized by the Japanese government. There are two main suggestions.

1. Regular Introductory Meetings at Public Halls

Firstly, having more introductory meetings regularly will increase the number of people who will become interested in abandoned dogs. Public halls are a good place for these meetings because they are located in almost every region and are places where all generations can easily visit. Each municipality can take some abandoned dogs to public halls and hold an introductory meeting once every week or two weeks. Specifically, people can enjoy interacting with abandoned dogs by petting, taking them for walks and feeding them. People can also adopt abandoned dogs as their pets if they like them. The expected result is that by actually watching and interacting with abandoned dogs, some of the negative misconceptions visiting people hold of abandoned dogs will fade.

2. Cleaning Projects at Animal Shelters

There are examples that many people participate in some volunteer work for the local community such as cleaning projects. In the same way, animal shelters in each region can recruit volunteers with the "Cleaning Project at Animal Shelters" initiative. This project has a unique system. First, animal shelters prepare stamp cards which people can get stamped by working as volunteers, and they can win prizes according to the number of stamps that they collect. This stamp card system will be effective especially for children who love these kinds of interesting games, so that this project will be able to involve more volunteers.

It is expected that although at first, children would participate in this project just to collect stamps, they will gradually become interested in the abandoned dogs which they always see during cleaning. Of course, not only children, but also high school students, adults, elderly, and so one would be welcome to participate.

The actual purpose of this project is to make facilities clean and well-cared for, which is a concern of adopting abandoned dogs as pets that people have. It means that cleaning facilities will increase the number of people who will visit animal shelters and increase the transfer of abandoned dogs.

Overall, the Japanese government, each municipality, has the responsibility to put effort towards holding regular introductory meetings at public halls and conducting clean projects at local animal shelters. These two suggestions will be the key to make the alternative of adopting abandoned dogs as pets more common in Japan.

CONCLUSION

In Japan, there are many abandoned dogs which have a very high possibility of being culled. However, it became clear through this research that the current transfer rate is not enough to save all abandoned dogs, and the option to adopt instead of buy is not well-known. In order to protect these dogs, it is important to increase the transfer rate of abandoned dogs. It was also found that there are some obstructions which prevent people from adopting abandoned dogs as pets such as having a bad impression or lack of knowledge. On the other hand, most people admit that they would adopt abandoned dogs if animal shelters are improved and suit their needs. Therefore, the suggestion focused on animal shelters, in order to increase the number of people more who have an interest in abandoned dogs and will adopt them as their pets.

It was suggested that the Japanese government put more effort into having regular introductory meetings at public halls and cleaning projects at local animal shelters. These two suggestions will improve overall shelter welfare and people's awareness toward this problem.


However, there are limitations to this research. Animal shelters are often located in mountains so they are far away from schools or houses. Even when people got their interest in abandoned dogs after joining an introductory meeting at public hole, some people might give up to be volunteers at animal shelters due to the long distance. Thus, the success of both these suggestions is strongly related with the location of animal shelters.

For the above reasons, it is also necessary to focus on each prefecture individually and find a specific solution as further research.

This research was conducted with the aim that one day Japan will have no culled dogs. I strongly believe that the result of this research will make the alternative of adopting abandoned dogs as pets more common in Japan.

REFERENCES

- Kanagawa prefecture. (2017, June). 平成29年度動物保護センター事業概要 [the business outline of the animal protection center, 2017]. Retrieved from February 6, 2019 from: http://www.pref.kanagawa.jp/documents/19391/1157257_4095291_misc.pdf
- Japanese government. 平成27年度家庭飼育動物(犬・猫)の飼育者意識調査 [the survey of owners awareness of domestic animals (dogs and cats), 2015]. Retrieved from February 6, 2019 from: http://nichiju.lin.gr.jp/small/ryokin_h27/index2.html#page120
- PEDGE, ipet Insurance CO., Ltd. (2016, July 21). 神奈川動物保護センターの全て [All about Kanagawa animal protection center]. Retrieved from February 6, 2019 from: <https://pedge.jp/interview/kanagawa-center1/>
- PEDGE, ipet Insurance CO., Ltd. (2016, July 25). ティアハム〜ペット先進国ドイツの保護事情 [“Tierheim” the situation of Germany, the advanced country of pets]. Retrieved from February 6, 2019 from: <https://pedge.jp/reports/tierheim/>
- The Ministry of Environment Government of Japan. (2017). 平成29年度犬・猫の引き取り及び負傷動物の収容状況 [the situation of collection of dogs, cats and injured animals, 2017]. Retrieved from February 6, 2019 from: https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/statistics/dog-cat.html
- Friends Of Shelter Dogs And Cats. (2014, November 16). 諸外国における犬猫殺処分をめぐる状況 [the situation of killed dogs and cats in foreign countries]. Retrieved from February 6, 2019 from: <https://www.inunekooendan.com/environment>
- Yokohama Syoka university associate professor Iwakura seminar × Public interest incorporated association animal donation. (2017). 協同アンケート調査 HOGO animal future project [Cooperation questionnaire research HOGO animal future project]. Retrieved February 6, 2020 from: <https://www.animaldonation.org/anidone/wp-content/uploads/2019/10/animalwelfare-summit-2.pdf>



Saving dogs adoption in Japan

2102 Aoi Akamatsu 2125 Chiako Tsukiyama
Kobe Municipal Fukiai High School

Introduction

Japan


Abandoned dogs : 26031

Killed : 8362

Transferred


(survey of consciousness of domestic animals (dog, cat) in 2015)

Research Question


How can adopting abandoned dogs as pets become more common? 

Methodology

Interview
Animal shelter (Osaka ARK)

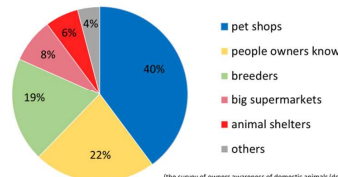


Internet
Government website



Data and Analysis

People got their dogs from ...

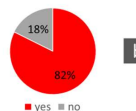


(the survey of owners awareness of domestic animals (dogs and cats), 2015)

Having abandoned dogs in Japan is not common.

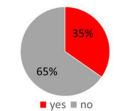
The percentage of people ...

who know about adoption of abandoned dogs



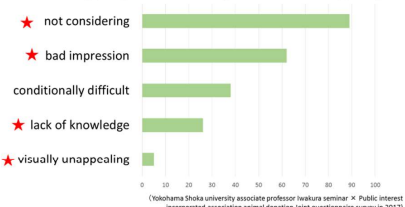
but

who have been to animal shelters and transfer meeting



Though people recognize this option, they do not adopt abandoned dogs.

Reasons why people did not adopt abandoned dogs as pets



(Yokohama Shoka university associate professor Iwakura seminar × Public interest incorporated association animal donation joint questionnaire survey in 2017)


★ reasons are connected with people's consciousness

Suggestion and Conclusion

Bridge between Human and Abandoned Dogs Project (BHAP)



- ① **Furusato tax payment**


Donate money to animal shelter



➔

Bonus: Raise public awareness


- ② **Interaction event**
 - Visiting lecture
 - Petting farm



Interest and knowledge will increase

➔

Many people will adopt abandoned dogs

➔

The transferred rate will increase

➔

Killed dogs will decrease

References

Survey of consciousness of domestic animals (dog, cat) in 2015, 平成27年度家庭飼育動物(犬・猫)の飼育者意識調査, from http://nichiju.lin.gr.jp/small/ryokin_h27/index2.html

Yokohama syoka university associate professor Iwakura seminar × Public interest incorporated association animal donation joint questionnaire survey in 2017, 横浜商科大学准教授岩倉ゼミ × 公益社団法人アニマルドネーション共同アンケート調査, from <https://www.animaldonation.org/anidone/wp-content/uploads/2019/10/animalwelfare-summit-2.pdf>

ABSTRACT

The purpose of this research is to discover how to reduce the number of people with anorexia caused by their unnecessary desire to become thin. Recently, anorexia is known as a health problem which can cause serious health consequences and may even result in death. Though people tend to take anorexia as unrelated issue for them, there is a possibility for people of all ages, genders, and races to develop the illness. Researchers show that women's unnecessary dieting can lead to anorexia, but dieting culture is badly spreading. Information for this paper was obtained from online articles, books and research papers. Additionally, interviews were carried out with clinical psychologist, Konoyu Nakamura. Also Hiromi Oyama who is a curator at Kobe Fashion Museum cooperated with this research. The result highlighted how women's sense of beauty is developed to change the standards of what is considered thin. In order to prevent people suffering from anorexia, it would be needed to raise people's awareness about anorexia and create a society which accepts the diverse sense of beauty.

INTRODUCTION

Eating disorders are a serious health problem worldwide. Anorexia is an eating disorder which makes people feel abnormal fear of being fat and causes them to stop eating. There are more than 2.6 million people suffering from anorexia and the number is growing. Japan also has more than 75,000 patients with anorexia. 90% of them are women including teenagers (Our World in Data, 2016). Modern Japanese society places excessive value on thinness (Yoshiko Nishizawa, 2006). According to the Nikkei newspaper (2019), among advanced countries, Japan has the largest number of women with dangerously low BMI. Experts are concerned about women's desire to become thin since it can lead to anorexia.

The health risk of anorexia are osteoporosis, irregular menstruation and mental illness. Moreover, it can also cause premature birth (Ministry of Health, Labor and Welfare, 2018). That is to say, anorexia negatively affects not only the person themselves but also the subsequent generations (Nobuo Kirriike, 2016). In recent years, some countries are trying to take measures to solve the issue. Japan founded organizations such as Japan Association for Eating Disorders to approach the problem. However, they are not enough and effective solutions since they are not known widely (Konoyu Nakamura, 2019). Therefore, it is necessary to extend the awareness about anorexia and get rid of women's desire to become thin to the whole people.

The purpose of this research is to identify the way to reduce the number of women with anorexia and focus on women's desire to become thin. Therefore, the research question is "What can be done to reduce the number of women with anorexia caused by their unnecessary desire to become thin".

HOW WOMEN'S SENSE OF BEAUTY AFFECTS THE ONSET OF ANOREXIA

Submitted by
2114 Shiina Kowata

Partial Fulfillment of the Course
Requirement in

GS (Global Studies) IIB

Submitted to:
Ms Mari Osaka

Fukiai High School
Kobe City
February, 2020

METHODOLOGY

The information in this research was collected from online articles, books, research papers and expert interviews. Online articles were used to acquire basic data about the current situations and main causes of anorexia. Books and research papers were used to gather exclusive information referring to the relations between anorexia and women's desire to become thin. Two expert interviews were conducted both in March 2019 to know how women's sense of beauty influences their drive for thinness. The first one was an interview with a clinical psychologist, Ms. Konoyu Nakamura working for Japan Society for Eating Disorder, and it was carried out at Otemon University. The second one was given to a curator, Ms. Hiromi Oyama at Kobe Fashion Art Museum. The information from these was used to analyze the problem and to seek solutions to reduce the number of women becoming "anorexic".

DATA AND ANALYSIS

In this section, basic information about current situations and the causes of anorexia, women's desire to become thin, and current measures are summarized.

1. Basic Information about Anorexia and Its Problems.

i) Definition of Anorexia

Anorexia is an eating disorder characterized by weight loss (or lack of appropriate weight gain in growing children); difficulties maintaining an appropriate body weight for height, age, and stature; and, in many individuals, distorted body image (NEDA, 2018).

To be diagnosed with anorexia according to the DSM-5, the following criteria must be met:

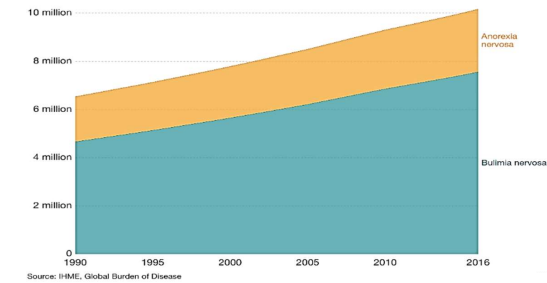
1. Restriction of energy intake relative to requirements leading to a significantly low body weight in the context of age, sex, developmental trajectory, and physical health.
2. Intense fear of gaining weight or becoming fat, even though underweight.
3. Disturbance in the way in which one's body weight or shape is experienced, undue influence of body weight or shape on self-evaluation, or denial of the seriousness of the current low body weight.

Even if all the DSM-5 criteria for anorexia are not met, singular still be present.

ii) Present Situations

Figure 1

The Number of Patients Suffering from Anorexia in the World

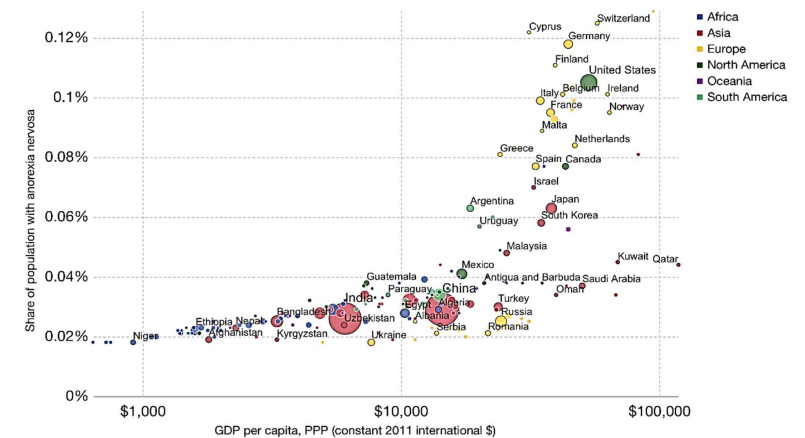


(Our World in Data, 2016)

The number of anorexia patients in the world is more than 2.6 million people and the number has been increasing (Figure 1). Even in Japan, there are more than 75,000 patients with anorexia (Our World in Data, 2016). Though anorexia can affect people of all ages, genders, sexual orientations, races, and ethnicities, 90% of patients are women including teenagers (Ministry of Health, Labor and Welfare, 2019).

Figure 2

The Rate of Anorexia Patients Comparing with Countries' GDP



CC BY

(Center for Discovery, 2018)

Anorexia is often seen in advanced countries (Marhaaya Nishizono, 2001). As figure 2 shows, the countries with high GDP such as United States, Japan, and Germany have higher number of anorexia patients than that of countries with lower GDP.

iii) Main Causes of Anorexia

Anorexia is caused by three factors: social and cultural factors, psychological factors, and biological factors.

1. Social and Cultural Factors

Much attention has been placed on society and its promotion of a culture of thinness or “the ideal body,” often amplified through media and social networks. Many with anorexia report experiencing harsh and extreme criticism related to their weight and appearance (Walden, 2019). Though dieting is not a direct cause of anorexia, start of it can be a significant change of physical condition and lead to developing anorexia (The Harvard Gazette, 2009)

2. Psychological Factors

There can be a strong correlation between anorexia and specific personality traits, including perfectionism, obsessive-compulsiveness, rigidity and vulnerability to peer pressure (Walden, 2019).

3. Biological Factors

Anorexia is often biologically inherited and tend to run in families. Recent research suggests that inherited biological and genetic factors contribute approximately 56% of the risk for developing anorexia (American addiction centers, 2019).

v) Problems Caused by Anorexia

There have been many studies about health problems caused by anorexia. The Center for Discovery found that:

The long-term health risks of Anorexia on a person’s health can be brutal. Even before the physical effects of this eating disorder become apparent, it begins to attack nearly every system in the human body. Anorexia has the highest mortality rate of all mental health disorders. As many as 20 percent of the people who suffer from anorexia will eventually die from it. And the longer a person suffers from

anorexia, the greater their risk of dying becomes. Because some of the complications that come with anorexia can last a lifetime, the timeline for detection, intervention, and treatment can be crucial for recovery.

Moreover, anorexia is considered to be a serious problem which negatively affects the next generation’s health. In cases of severe anorexia, patients may never regain normal menstrual cycles. If women with anorexia become pregnant before returning to a normal weight, risks include increased incidences of miscarriage, cesarean section, and postpartum depression. Her child is at risk of low birth weight and birth defects (Healthy place, 2017). Also, anorexia can cause many other health problems such as constipation, osteoporosis, and vigilance (Nobuo Kiriike, 2016).

2. Women’s Desire to become thin

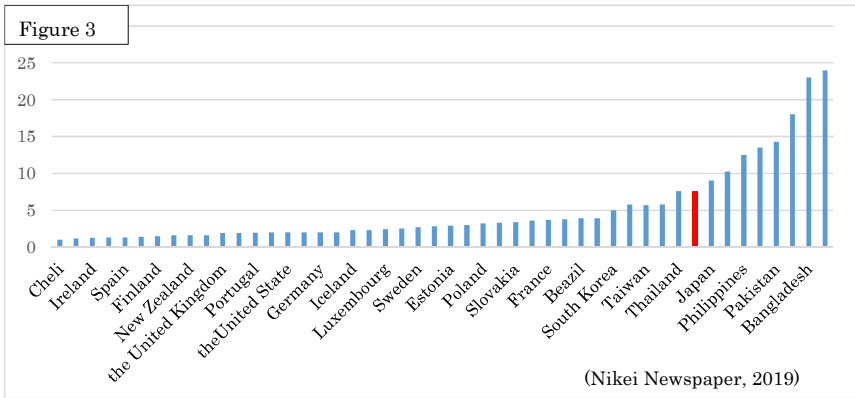
i) Definition about the person who is “thin”

In this research, Body Mass Index (BMI) are used to define “thin” person. Body Mass Index is a key index for relating weight to height. Abbreviated BMI. Based on the criterion of BMI, underweight is a BMI of less than 18.5 (Ministry of Health, Labor and Welfare, n.d). Therefore, a person who is “thin” refers to the person whose BMI is under 18.5.

ii) Present situations

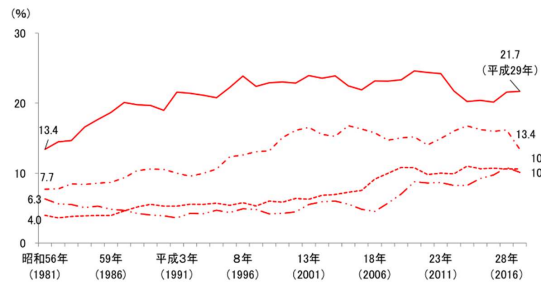
Currently, women’s desire to become thin is known as a serious problem. Japan has the largest number of women who are too thin among advanced countries (Figure 3) (Nikkei newspaper, 2019).

International comparison of the percentage of women who are too thin



In addition to this, the number of women with low BMI is increasing in Japan (Figure 4) (Ministry of Health, Labor and Welfare, 2016). Moreover, the average intake calories of modern Japanese women are less than that of women having lived after WW II (Figure 5) (Yoshihara Food Stock Company, 2016). Though people are living the age of gluttony, one of five young women are suffering from malnutrition (Nikkei Newspaper, 2019).

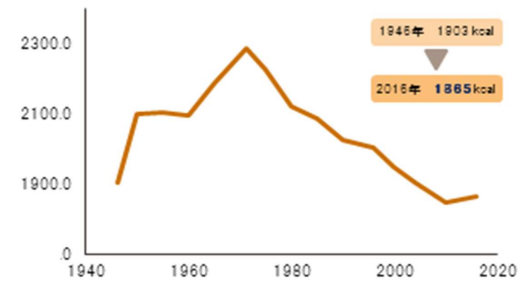
Figure 4 Transition of the Number of Women whose BMI are less than 18.5



(Ministry of Health, Labor and Welfare)

Figure 5

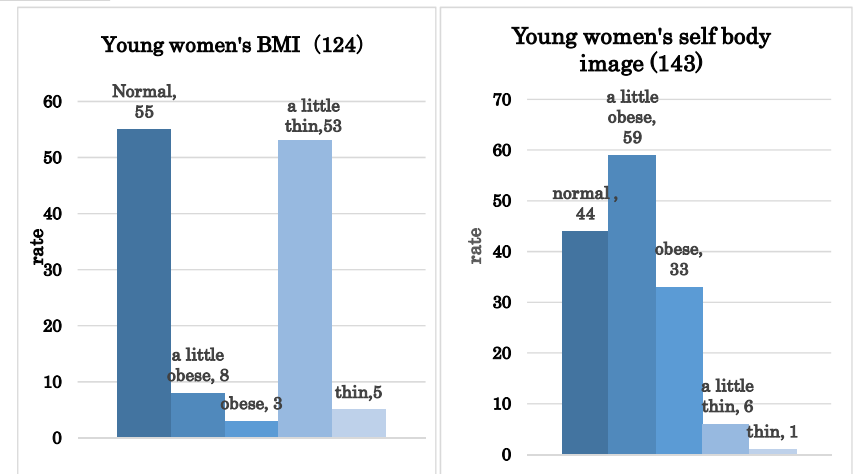
Women's Intake of Calolies



(Yoshihara Food Stock Company, 2016)

One research conducted with 146 young women clearly shows women's desire to become thin (Figure 6). According to the research, most of women's BMI are "normal" or "a little thin" and less people are "a little obese" or "obese". However, many of them evaluate themselves "a little obese". This shows many Japanese young women have wrong image about their weight and have dissatisfaction about their body image (Konoyu Nakamura, 2014). Furthermore, the survey of public health and nutrition shows that more than half of women are planning to lose their weight even though they are average weight (Ministry of Health, Labor and Welfare, 2008). These researches show that Japanese young women tend to have a desire to become thin and dieting culture is spreading among them.

Figure 6



(Otemon University, 2011)

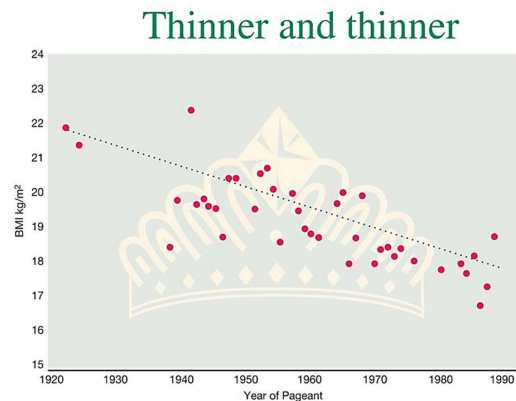
iii) Causes of women's desire to become thin

In modern Japanese society, there is a culture which admires thin women. One of the reasons people think skinny body is beautiful is the effects of western culture. Since Japanese people have started wearing clothes which have high exposure degree, people became to think such clothes suit thin people and they look more beautiful than people with normal or healthy weight (Konoyu Nakamura, 2016). Also, it is said that since many models and actresses from western countries are seen on the TV or simply in advertisements, Japanese women are fascinated by their body image with small face, long and slender arms and legs (Konoyu Nakamura, 2019).

Figure 7 shows BMI of Miss America from 1920. Though BMI was higher than 20 in 1950, the number became lower every year. In 1990s, the graph shows that the women who is too thin were selected as Miss America. Moreover, American model organization reported that 31% of fashion models have anorexia or other eating disorders and 64% of models have been told to lose their weight (Yamada Mental Clinic, 2019). Researchers show that this tendency of fashion industry and people with influence create local people's sense of beauty what is considered thin (Konoyu Nakamura, 2016). Thus, fashion industry can cause to create the dieting culture.

Figure 7

Miss America's BMI (Rubinstein & Caballero, 2000)



Since globalization progresses, many models from other countries are appearing on advertisements. Especially in Japan, western models are often hired to advertise clothes. With

this globalization of consumer culture and the development of mass media, people's way of thinking was standardized and people became to have the similar sense of beauty (Tyou Kyou, 2001) Besides, one study reported by Grabe S, Ward LM, Hyde JS (2008) showed that mass media can make people have negative thoughts about their body or think thin body is more beautiful. In this way, "thin body" globally became a standard of women's beauty (Konoyu Nakamura, 2014).

3. Current Measures

i) Present Actions for the Problem in Japan

- Establishment of Associations and Organizations

There is some associations and organizations for eating disorders. Japan Associations for Eating Disorders and Japan Society for Eating Disorders are some of them. Japan Association for Eating Disorders is working on supporting activities for patients of eating disorders and enlightenment activities to making more people have correct knowledge about eating disorders (Japan Association for Eating Disorders, 2018). Also, Japan Society for Eating Disorders published the guideline about eating disorders and is trying to improve academic research about eating disorders (Japan Society for Eating Disorders, 2018).

- Movement of Magenta Ribbon

This movement started to enlighten the problem of eating disorders not only to the people involved but also to common people. Creating the society where all people including the eating disorders patients can live comfortably is the aim of this movement (Ehime Support for Eating Disorders Organization, 2018).

ii) Present Actions for the Problems in Other Countries

- Establishment of Associations and Organizations

As a representative association, there is National Eating Disorders Association (NEDA) This association supports people with eating disorders and their families. Also, the association is working hard to prevent people from getting eating disorders (NEDA, 2019).

- Reformations of Fashion Industry

Fashion models have often died because of anorexia or other eating disorders caused by their strong desire of becoming thin. Also, many researchers emphasized the negative impacts of skinny fashion models on ordinal women (Yamada Clinic, 2019). Therefore, some countries which are famous for their fashion such as France, Italy, and the USA started to make rules or restrictions of hiring fashion models with low BMI.

DISCUSSION

In the data and analysis sections, it became clear that the seriousness of women's excessive desire to become thin and unnecessary diet which lead to developing anorexia. Also, the interviews and surveys mentioned above showed how women's sense of beauty are developed and how it can affect women's body image.

Recent research shows that anorexia is strongly related to dieting and it is one of the main causes of the onset of anorexia. Therefore, reducing the number of women who go on unnecessary diets could prevent people from developing anorexia.

Japan has a dieting culture and thin standards are spreading among young women. The reason why they tend to place excessive value on thinness is the effects of mass media, fashion industry, and influencers such as models and actress. Since they have strong influence on women's sense of beauty, they can shape women's body image. Thus, women's sense of beauty would be changed if those industry and people with influence create new tendency of accepting diverse figures.

Anorexia became more well-known than before worldwide. Some countries such as France and Italy decided to make restrictions of hiring fashion models with the low BMI. Legal actions can strongly affect mass media and fashion industry, so this change was a significant idea. However, in Japan, there is not any action for this issue by the government. In order to reduce the number of women who go on unnecessary diet, it is necessary for the government to take actions.

As these facts show, it is necessary for the government, fashion industry, and mass media to grasp the problem of women's desire to become thin in order to reduce the number of Japanese women who go on unnecessary diets. The government and fashion industry should restrict terms of models' employment and mass media need to recognize that they can create

women's wrong body image. However, it might be difficult to motivate them to take action because of economic reasons. Therefore, individuals need to raise their awareness about anorexia and the seriousness of unnecessary diets. It is necessary for people to create a trend which emphasizes the importance of accepting diverse body images.

SUGGESTIONS / RECOMMENDATIONS

1. The Government and Mass Media

The first suggestion is for the Japanese government and mass media. As the discussion part mentioned, regulating the employment of models with low BMI is significant. It is because they can create women's unhealthy body image. Therefore, the government should prohibit fashion industry and mass media from employing models with BMI under 18.5. When legal actions are taken, models seen in the mass media will be diverse, and this will also change women's ideal body image affected by mass media. In addition to this, mass media must specify the digitally altered pictures of models in order to avoid women's wrong understanding about models' body image.

2. Individuals

The second suggestion is for Japanese people, especially for the young generations. Legal actions and modifications by mass media seem to be the most effective ways to change women's ideal body image and desire to become thin. However, without improvement of people's awareness about the seriousness of anorexia and dieting, those actions would not be taken. Therefore, new programs for individuals will be proposed as a suggestion of this research. This proposal should be shared with young people, especially those who are interested in fashion.

In the program, people can receive lectures about fashion and problems such as eating disorder and dieting. Also, they will have chances to talk with fashion designers and create new designs accepting diversity of women's figures. The aim of this project is to make people understand how women's desire to become thin are related to fashion and think about ideal way of future fashion industry. Moreover, by sharing the activities with other people through SNS, this program and problems of anorexia, dieting, and the role of fashion will be socially known. This project would start in small-scale, but when more people find the significance of taking actions toward these problems, the activities will further expand. This will also be a good reason for the government and mass media to make change on a national scale.

CONCLUSION

This research was conducted on this question: “What can be done to reduce Japanese women developing anorexia caused by their unnecessary desire to become thin”. Anorexia is a serious health problem which negatively affects not only the person themselves but also the next generations. It is difficult for people to recover from anorexia when they once develop the illness. Therefore, preventing people from developing anorexia is significant.

Through the research, it became obvious that anorexia is strongly related to unnecessary dieting. Current research shows that Japanese people tend to have an excessive desire to become thin. Experts mention the importance of removing their desire because of the risk of anorexia. Dieting culture is driven by women’s sense of beauty, and it became clear that mass media and influencers such as models and designers have a strong impact on it. There are some countries which take legal actions against employing models with low weight since they have great influence on people. However, almost no effective measure has been done for this problem in Japan.

In the suggestion part, two suggestions were made to improve the situation. One was restricting the employment of models with BMI of under 18.5. Legal action can strongly affect the fashion industry. Eventually, models seen in mass media will be diverse, and this will also change women’s ideal body image. Second was developing a new program to raise Japanese people’s awareness about anorexia and the seriousness of unnecessary dieting. This program will target students who are interested in fashion.

In this research, it also became evident that men’s values to women’s body image also affects women’s sense of beauty. However, this research didn’t mention this point since it was too complicated to approach.

As a further research, economical background of dieting culture should be focused. Knowing the reason Japanese government does nothing for this problem would be very important to improve the situation.

The final goal of this research is reducing the number of people suffering from anorexia by creating a society which accepts diversity of people’s figures. The cooperation of government, companies and individuals would enable to accomplish the goal.

REFERENCES

- BBC NEWS (2006) Italy pact to stop skinny models. Retrieved on March 27, 2019 from <http://news.bbc.co.uk/2/hi/europe/6204865.stm>.
- BBC NEWS (2012) Israel passes law banning use of underweight models. Retrieved on March 27, 2019 from <https://www.bbc.com/news/world-middle-east-17450275>.
- DANISH FASHION CHARTER ETHICAL (2015) DANISH FASHION ETHICAL CHARTER. Retrieved on March 27, 2019 from <http://danishfashionethicalcharter.com>.
- Developing Eating Disorders (2016) Eating Disorders Overview. Retrieved on March 27, 2019 from <https://developingeatingdisorders.wordpress.com/blog/>.
- Garner, DM. Garfinkel, PE. Schwartz, D. Thompson, M. (1980). Cultural expectation of thinness in women. *Psychol Rep*,47,483-491
- Grabe, S. Ward, LM. Hyde, JS. (2008). The role of the media in body image concerns among women: a meta-analysis of experimental and correlational studies. *Psychology Bull*,134(3),460-476
- Grace Holland. Marika Tiggemann (2016). A systematic review of the impact of the use of social networking sites on body image and disordered eating outcomes. *Body Image*,17,100-110
- Jasmine Fardouly. Lenny, R, Vartanian. (2015). Negative Comparisons about one’s appearance media the relationship between Facebook usage and body image concerns. *Body Image*,12,82-88
- LIBRARY (2012) Israel: Restrictions on Depiction of Underweight Models in Commercials. Retrieved on March 27, 2019 from <http://www.loc.gov/law/foreign-news/article/israel-restrictions-on-depiction-of-underweight-models-in-commercials/>.
- Martin, J. Tovée. (1997). Supermodels: stick insects or hourglasses? *THE LANCET*, 350(9089), 1474-1475.
- NEDA (National Eating Disorders Association) (2019) ABOUT US/OUR WORK. Retrieved on March 28, 2019 from <https://www.nationaleatingdisorders.org/about-us/our-work>.

Rubinstein & Caballero (2000) ABNORMAL PSYCHOLOGY IN A CHANGING WORLD, NINTH EDITION. Retrieved on March 25, 2019 from <https://slideplayer.com/slide/14955596/>.

The Harvard Gazette (2009) Fijian girls succumb to Western dysmorphia. Retrieved on March 1, 2019 from <https://news.harvard.edu/gazette/story/2009/03/fijian-girls-succumb-to-western-dysmorphia/>.

Vandereycken, W. Deth, R. (1994). From Fasting Saints to Anorexic Girls-The History of Self-Starvation-. New York: New York University Press

William, Bennett. (1982). The Dieter's Dilemma: Eating Less and Weighing More. New York: Basic Books

WISCONSIN NEWS (2008) Sweeping analysis of research reinforces media influence on women's body image. Retrieved on March 28, 2019 from <https://news.wisc.edu/sweeping-analysis-of-research-reinforces-media-influence-on-womens-body-image/>.

World Health Organization (1995) Body mass index – BMI. Retrieved on March 28, 2019 from <http://www.euro.who.int/en/health-topics/disease-prevention/nutrition/a-healthy-lifestyle/body-mass-index-bmi>.

参考文献

愛媛県摂食障害支援機構 (2018) 「マゼンタリボン活動について」
<https://www.magentaribbon.net/マゼンタリボン運動について/>, (閲覧日:2019年3月28日)

井上章一 (1995) 『美人論』 朝日新聞社

井上輝子・上野千鶴子・江原由美子 (1995) 『日本のフェスズム7 表現とメディア』 岩波書店

加藤周一 他 (2007) 『改訂新版 世界大百科事典』 平凡社

切池信夫 (2016) 『拒食症と過食症の治し方』 講談社

切池信夫 (2001) 『みんなで学ぶ過食と拒食とダイエット—1000万人の摂食障害入門—』 星和書店

厚生労働省 (1998) 「知ることからはじめよう みんなのメンタルヘルス」
https://www.mhlw.go.jp/kokoro/speciality/detail_eat.html, (閲覧日:2019年3月26日)

厚生労働省 (2003) 「平成15年国民調査・栄養調査結果の概要」
<https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/eiyouchosa2-01/index.html>, (閲覧日:2019年3月28日)

厚生労働省 (2006) 「妊産婦のための食生活指針 —『健やか親子21』推進検討会報告書—」
<https://www.mhlw.go.jp/houdou/2006/02/h0201-3a.html>, (閲覧日:2019年3月28日)

厚生労働省 (2008) 「平成20年国民調査・栄養調査結果の概要」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2018/03/08/1360938_04.pdf, (閲覧日:2019年3月27日)

厚生労働省 (2016) 「平成27年度国民調査・栄養調査結果の概要」
<https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-10904750-Kenkoukyoku-Gantaisakukenkouzoushinka/kekkagaiyou.pdf>, (閲覧日:2019年3月28日)

厚生労働省 (2017) 「平成29年国民健康・栄養調査結果の概要」
<https://www.mhlw.go.jp/content/10904750/000351576.pdf>, (閲覧日:2019年3月12日)

厚生労働省 (2019) 「若い女性の『やせ』や無理なダイエットが引き起こす栄養問題」
<https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/food/e-02-006.html>, (閲覧日:2019年3月26日)

国立がん研究センター (2011) 「肥満指数(BMI)と死亡リスク」
https://epi.ncc.go.jp/can_prev/evaluation/2830.html, (閲覧日:2019年3月27日)

西園マーハ文 (2001) 「摂食障害と心因—摂食障害の『原因』の再構築」 飛鳥井望編 『こころの科学』 95. pp.64-69 日本評論社

ジョージ, V. (2012) 『美女の歴史』 (後平瀧子訳) 藤原書店

鈴木裕也 (2014) 「社会的要因から見た摂食障害」『心身医学』54(2). pp. 154-158

摂食障害治療支援センター設置運営事業 (2019) 「摂食障害情報ポータルサイト 一般の方」 <http://www.edportal.jp/sp/index.html>, (閲覧日:2019年3月31日)

張競 (2001) 『美女とは何か』 晶文社

辻惟雄監 (1999) 『こんなに楽しい江戸の浮世絵—江戸の人はどう使ったか』 東京美術

中村このゆ (2011) 「摂食障害者と青年男女のボディイメージ、ダイエット体験、摂食態度、ジェンダー観」『追手門学院大学心理学部紀要』5. pp. 61-74 追手門学院大学

中村このゆ (2014) 『まっ、いっか！摂食障害—当事者のまなざしから—』 晃洋書房

NIKKEI STYLE (2019) 「危険なダイエットの末路 20代女性に広がる栄養失調」
<https://style.nikkei.com/article/DGXMZO39454300X21C18A2000000/>, (閲覧日:2019年3月26日)

西沢義子 他 (2006) 「大学生のダイエット行動とボディ・イメージ・性役割観との関連」『日本看護研究学会雑誌』24. pp.57-62 日本看護研究学会

日本生活習慣病予防協会 (2016) 「女性の『痩せ願望』が危険な拒食症をまねく」
<http://www.seikatsusyukanbyo.com/calendar/2016/009023.php>, (閲覧日:2019年2月28日)

日本生活習慣病予防協会 (2016) 「摂食障害の最新情報 女性の『やせ願望』が危険な拒食症をまねく」
<http://www.seikatsusyukanbyo.com/calendar/2016/009023.php>, (閲覧日:2019年3月26日)

日本摂食障害協会 (2019) 「摂食障害アクションデイ」
<https://www.jafed.jp/world-eating-disorders-action-day/>, (閲覧日:2019年3月28日)

日本摂食障害学会 (2019) 「学会紹介」 <http://www.jsed.org/about.html>, (閲覧日:2019年3月28日)

日本肥満学会肥満症診療ガイドライン作成委員会編 (2016) 『肥満症診療ガイドライン2016』 ライフサイエンス出版

パケ, D. (1999) 『美女の歴史』 (木村恵一訳) 創元社

兵庫県青少年本部 (2019) 「人材教育 ひょうご青少年社会貢献活動認定事業」
<http://www.seishonen.or.jp/business/jinzai/92/>, (閲覧日:2019年3月29日)

兵庫県青少年本部 (2019) 「ひょうご青少年社会貢献活動認定制度」
<http://www.seishonen.or.jp/business2/nintei2014.pdf>, (閲覧日:2019年3月29日)

フリー株式会社 (2016) 「女子高生・女子大生を対象とした『流行に関する意識調査』」 <https://www.furyu.jp/news/2016/08/gtl39.html>, (閲覧日:2019年3月28日)

ポーラ文化研究所 (2019) 「伝統化粧の完成 江戸時代—8 江戸時代のメーク&トレンド<白(白粉化粧)>」
<https://www.po-holdings.co.jp/csr/culture/bunken/facial4/21.html>, (閲覧日:2019年3月31日)

牧野有可里 (2006) 『社会病理としての摂食障害—若者を取り巻く痩せ志向文化—』 風間書房

水島広子 (2011) 『ダイエット依存症』 講談社

山田メンタルクリニック (2019) 「世界の痩せすぎモデル規制の経緯と日本」
<http://nanba-nagata.com/medical/eatingdisorders/overweight/>, (閲覧日:2019年3月27日)

吉沢食糧会社 (2016) 「以外と知られていない 日本人の摂取カロリー事情」
<https://flour-net.com/health/tour/entry-26.html>, (閲覧日:2019年3月12日)

若桑みどり (2001) 『皇后の肖像—昭憲皇太后の表象と女性の国民化』 筑摩書房



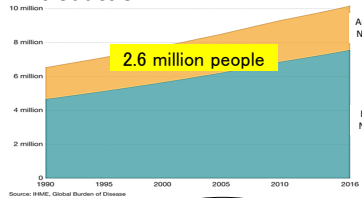
How Does Women's Sense of Beauty Affects the Onset of Anorexia?

W201908-1

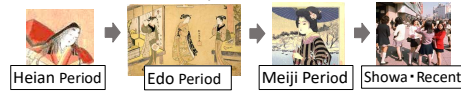
Kobe Municipal Fukiai High School

Nayu Inokuma
Shiina Kowata

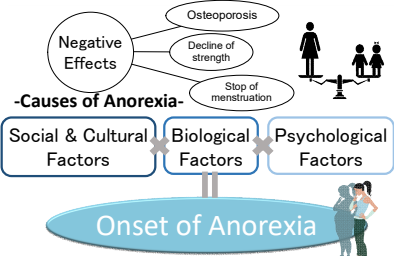
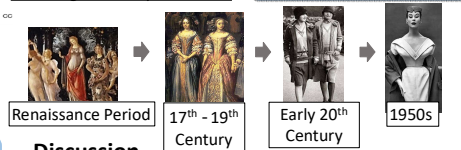
Introduction



2-1 Change of Beauty in Japan



2-2 Change of Beauty in the West



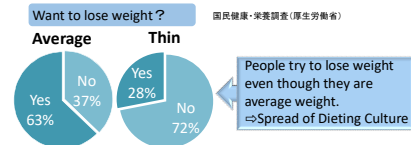
Research Question

What can be done to reduce Japanese women's unnecessary desire to become thin?

Methodology

Data and Analysis

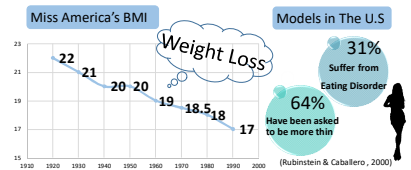
1-1 Dieting Culture



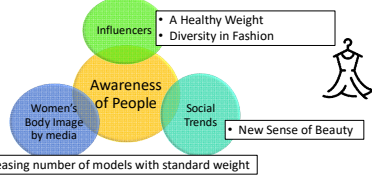
1-2 Women's Desire to Become Thin



1-3 The Standards of beauty in Society

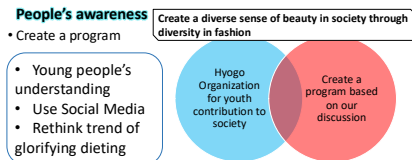


Discussion



Suggestion

Individual



Media

Change the standard of beauty

- Reduce the number of women who want to lose weight

Government and Fashion Industry

Make regulations and laws

- Outlaw models below 18.5 BMI
- Create a punishment for images that are edited without notification

References

- 塩原 優美 (2002) 「みながで学んだ健康と美しさ」(2002) 女性の健康入門 - 1 健康と美容
- 厚生労働省 (2002) 「平成14年度国民健康・栄養調査結果の概要」
http://www.med.go.jp/compendium/a_menu/evaluation/eval_01_01/eval/eval02/02030303_04.pdf
- 厚生労働省 (2015) 「若い女性のやせや痩せに関するダイジェスト」(厚生労働省) (2015) <http://www.health.go.jp/information/food/dk-02-0000.html>
- 国立がん研究センター (2011) 「肥満指数(BMI)と死亡リスク」(http://gan.ncc.go.jp/kan_sen/evaluation/0300.html)
- シムラシ、(2012) 「美女の歴史」(後学堂) (東京) 講談社
- 中村のり子 (2016) 「まっ、いっせー！ 摂食障害 - 摂食障害の存在から - 臨床心理学」
- 高橋 千鶴子 (2015) 「摂食障害の歴史 - 摂食障害の歴史」(東京) 講談社
- 日本摂食障害協会 (2015) 「摂食障害アクションプラン」(<https://www.jfed.jp/world-eating-disorders-action-plan/>)

資料4 葦台高等学校 取組一覧表

A 高度な学び 大学・企業・国際機関等との連携授業 生徒対象

No	日時	場所	対象生徒	講師 使用言語 (日・英)	内容
1.	5月9日(木) 6・7限	フェニックス ホール	2年国際科 80名	WHO 神戸センター所長 サラ ルイーズ バーバー博士 (英)	“Forefront of Global Health”
2.	6月27日(木) 7限	フェニックス ホール	1年全員 360名	日本銀行協会 (日)	「キャッシュレス社会」
3.	7月12日(金)	フェニックス ホール	2・3年国際科生徒 全員 160名 1年国際 科・普通科希望 28名 来訪者 98名	大阪大学特任教授 川嶋天津夫先生 (英)	“How to Be an Innovative Global Citizen”
4.	8月22日(木)・ 23日(金) 10:00~15:00	JICA 関西	1年 20名	JICA 関西 後藤田菫子氏・廣瀬麻衣氏 JICA 研修員 10名 (ウガンダ、エチオピア、ガンビア、コンゴ、ジンバブエ、タンザニア、ナイジェリア、ベナン、モザンビーク、ザンビア) (英・日)	JICA 関西でのインターンシップ 海外からの研究員との交流、身近な課題から SDGs を考える
5.	9月5日(木) 1・2限	フェニックス ホール	1年国際科 80名	神戸市外国語大学教授 野村和宏先生 (英)	「英語スピーチとプレゼンテーションの技法」
6.	9月5日(木) 3限	物理室	2年普通科 5組 44名	大日本住友製薬 神戸支店 吉川和博氏・生石麻優子氏 (日)	「科学技術と人の幸せ」
7.	9月5日(木) 7限	フェニックス ホール	1年全員 360名	兵庫県立尼崎小田高等学校教諭 小林哲先生 (日)	「探究活動とは？」
8.	9月12日(木) 1.2.3限	フェニックス ホール	2年普通科 1限 2・8・9組 2限 2・3・4・5組 3限 2・6・7組	神戸市外国語大学教授 野村和宏先生 (英)	「英語スピーチとプレゼンテーションの技法」
9.	10月3日(木) 6・7限	体育館	1年全員 360名	NPO 赤ちゃん先生 (日)	赤ちゃんとのふれ合いを通して自己肯定感を高め、幼い命への関わり方を考える
10.	10月4日(金) 5・6限	フェニックス ホール	1年国際科 80名 5限 1・1 6限 1・2	卒業生 同志社大学グローバル地域文化学部4年生 才木理恵氏 関西学院大学文学部心理学科4年生 藤井美晴氏 (日)	「留学で実際に感じた日韓の考え方の違い〜日本と韓国は本当に仲が悪いのか」「日本xインドネシアxチョコレート〜フェアトレードへの挑戦」
11.	10月10日(木) 5・6限	フェニックス ホール	1年国際科 80名 5限 1・1 6限 1・2	関西学院大学 教育学部准教授 岩坂二規先生 (日)	「グローバル社会と子ども」
12.	10月31日(木) 7限	フェニックス ホール他	2年 360名	兵庫国際交流会館関係の台湾からの大学院生 7名	台湾課題研究の内容について分野別意見交換
13.	11月5日(火) 5・6限	フェニックス ホール	2年国際科 80名 5限 2-1 6限 2-2	神戸市外国語大学教授 野村和宏先生 (英)	課題研究に対する評価・アドバイス
14.	11月7日(木) 7限・放課後	フェニックス ホール・コン ピュータ室	1年全員 360名 2年有志 4チーム	兵庫教育大学大学院教授 西岡伸紀先生 (日)	「リスクマネジメント」 課題研究に対する評価・助言
15.	11月14日(木) 6・7限	フェニックス ホール	2年国際科 80名	神戸市外国語大学准教授 中嶋圭介先生 (英・日)	課題研究に対する評価・助言

16.	12月11日(水) 12日(木)16日 (月)17日(火)	フェニックス ホール	1年 360名 各日 2~3組ずつ	ダウン症の子供を持つ親の会代表 (日)	「障がいのある子どもを育てる環境」
17.	12月18日(水) 3・4限	フェニックス ホール	1年生国際科 80名	神戸市外国語大学准教授 中嶋圭介先生 (日)	『課題研究のホップ・ステップ・ジャンプ』
18.	12月19日(木) 3・4限	フェニックス ホール	1年普通科 280名	神戸市外国語大学教授 野村和宏先生 (英)	「英語スピーチとプレゼンテーションの技法」
19.	12月20日(金) 午前	フェニックス ホール	1年全員 360名	NPO 法人 DEAR ME 代表 西側愛弓氏	「私たちが生きる地球と、世界と、ファッションと」
20.	12月20日(金) 5・6限	フェニックス ホール 他	1年全員	13 講座開講 アシックス、田辺三菱製薬、UCC、フェリシモ、神戸新聞、神戸市水道局・建設局、理化学研究所、Future Code BYCS、学が会、NPO 子供支援団体等	探究の日 プログラム
21.	2月7日(金) 14日(金)5限	CALL3	2年国際科 GS2C 選択者	神戸市外国語大学教授 大石高志先生	現在のインドとインド文化
22.	2月12日(水) 13日(木)	フェニックス ホール	1年 360名 各日 2~3組ずつ	神戸市社会福祉協議会 (日)	認知症サポーター養成講座
23.	2月18日(火) 19日(水)	フェニックス ホール	1年 360名 各日 2~3組ずつ	神戸女子大学 社会福祉学部 (日)	子ども福祉の現状と課題
24.	3月4日(水) 13:30 ~ 15:30 [コロナウイルス 感染症感染拡大 抑止のため中止]	GS ルーム	2年有志 15名 1年有志 5名	アテネオ・デ・マニラ大学教授 ジェイール コルネリオ先生 (英)	2020 International conference 準備・Discussion の練習
25.	3月5日(木) 8:40~10:10 [中止]	フェニックス ホール	1年 国際科 80名	アテネオ・デ・マニラ大学教授 ジェイール コルネリオ先生 (英)	“SDGs in the Philippines” (仮題)
26.	3月5日(木) 10:30~11:20 [中止]	フェニックス ホール	1年 普通科 280名	アテネオ・デ・マニラ大学教授 ジェイール コルネリオ先生 (英)	“SDGs in the Philippines” (仮題)
27.	3月5日(木) 13:00~14:00 [中止]	フェニックス ホール	2年 課題研究助言	アテネオ・デ・マニラ大学教授 ジェイール コルネリオ先生 (英)	課題研究に対する助言
28.	3月5日(木) 14:30~16:30 [中止]	CALL 1	フィリピンフィールド ツアー参加者 16名	アテネオ・デ・マニラ大学教授 ジェイール コルネリオ先生 (英)	課題研究に関する助言、フィリピンに関する質疑応答
29.	3月6日(金) 8:30~9:20 [中止]	GS ルーム	2年課題研究助言	アテネオ・デ・マニラ大学教授 ジェイール コルネリオ先生 (英)	課題研究に関する助言、
30.	3月9日(月) 13:00~14:30 [中止]	GS ルーム	フィリピンフィールド ワーク参加者 16名	神戸大学国際文化学部教授 ティモシー グリア先生 (英)	フィリピンフィールドワークツアーの助言

B 協働創造活動・課題研究発表 (コンテスト) (校外内)

有志生徒参加

No.	日時	場所	参加者	コンテスト・発表会	内容	12の力
1.	4月13日(土) 10:00~18:00 4月14日(日) 9:30~15:30	大阪大学 豊中キャンパス	国際科 3名発表 優秀賞 個人の部 3年堀越 チームの 部 2年木幡・猪熊	大阪大学国際公共 政策コンファレンス	国際的なキャリア形成やリーダーシ ップ、難民問題などについての講演やパ ネルディスカッション、課題研究の発 表	1,4,6,7,9,10
2.	4月15日(月) 1限	大会議室	国際科 3年 GS3C 44名	スウェーデン フ ェニックス高校ブレ コンファレンス	2019International Conference に向け て分野別 Discussion	1,3,4,5,10
3.	4月16日(火) 5・6限	フェニックス ホール	国際科 2年 GS2B 5限 2-1 6限 2-2	スウェーデン フ ェニックス高校ブレ コンファレンス	スウェーデンの文化・スポーツ・福祉 課題についての質疑応答	1,3,7,10
4.	4月16日(火) 7限	フェニックス ホール	国際科 1・2・3年	スウェーデン フ ェニックス高校	スウェーデンの文化・ルシア紹介	1,7,10
5.	4月25日(木) 7限	フェニックスホ ール GS ルー ム	国際科 全学年 240 名 発表者 12名	フィリピンフィー ルドワーク報告	フィリピンフィールドツアーで学んだ こと・課題についての報告会 (英)	1,4,6,7,10
6.	7月11日(木)	葦合高校	全学年国際科生徒 全員 240名 普通科 希望者7名 部活動 演技生徒 45名	2019 KOBE International Conference at Fukiai	開会式・「教育」「環境」「健康」「人権」 「持続可能性」について海外姉妹校の 生徒 10名と発表・意見交換	1,3,4,5,6,9, 10,12
7.	7月12日(金)	葦合高校	国際科全員 普通 科希望者 計250名	2019 KOBE International Conference at Fukiai	基調講演会・課題研究ポスター発表・ ファイナルプレゼンテーション	
8.	7月24日(水) ~8月3日 (土)	オーストラリ ア	20名(国際科2年14 名普通科5名 国際 科1年1名)	夏季海外研修	Westbourne G.Sへ課題研究発表、意見 交換・提言	1,3,4,7,10
9.	7月24日(水) ~9月1日 (日)	オーストラリ ア	国際科 2年 薬山・ 川本	夏季6週間交換研 修	Westbourne G.Sへ SGH 課題研究発 表、体験授業	1,3,4,6,7,9, 10
10.	7月26日(木) ~27日(金)	関西学院大学 西宮キャンパ ス	国際科 2年 4名 国際科 1年 5名	高校生国際交流の 集い 2019	高校生、留学生、大学生がグループデ ィスカッション、文化体験などを通し て交流	1,3,4,5,6,7, 9,10
11.	8月17日(土) ~24日(土)	ベトナム	国際科 2年 4名 梶原・赤松・桜井・ 藤原	イオン1%アジア ユースリーダーズ プログラム	アジア9か国の高校生が集まり、「食生 活の考察と改善点の提案」についての 意見交換	1,3,5,6,7,9, 10,12
12.	9月6日(金) 14:00~14:50	CALL2&4	国際科 3年 GS3C 選択者 44名	文部科学省による WWL 視察	International Conference の 振り返 り、活動計画、mini lesson “AI” につ いて	3,4,5,6,8,9, 10,
13.	*9月11日(水) 消印		1年 63名	JICA 国際協力高 校生エッセイコン テスト(日)	1600字以内	1,4,6,7,10, 11

14.	9月19日(木) 6・7限	フェニックス ホール	国際科 2年 GS2B	オーストラリア Westbourne Grammar School とブレコンファレン ス	社会問題のプレゼンテーション WGSのトピック「サンゴ礁の白化」「高 校生活」 意見交換 5テーマ10課題 「キャッシュレス社会」「野生動物との 共存」「若者の肥満」「政治教育」「働き 過ぎ社会」	1,3,4,5,10
15.	9月21日(土) ~28日(土)	アメリカ シアトル	2年3名(国際科2 名 吉田・河瀬 普通科1名小西)	2019年度神戸市 立高校生シアトル 派遣プログラム	シアトル・神戸両市の友好を深め、生 徒たちの国際理解を深め、国際性を養 う	1,3,4,5,7,10
16.	10月1日(火) 12:00~13:00	灘浜グラウンド	2年2名 国際科 川本 普通科 白木 1年1名国際科福家	ラグビーワールド カップ交流会	ラグビー アイルランドナショナルチ ームと小学生との交流会における英語 と日本語の司会を担当	1,3,4,5,10
17.	10月2日(水) 13:45~14:25	明親小学校	2年2名 国際科 島崎 普通科 白木 1年2名 国際科 小野寺 福家	ラグビーワールド カップ交流会	ラグビー スコットランドナショナル チームと小学生との交流会における英 語と日本語の司会を担当	1,3,4,5,10
18.	10月2日(木) 15:15~15:40	フェニックス ホール	国際科 2年 4名 梶原・赤松・桜井・ 藤原	イオン1%アジア ユースリーダーズ プログラム報告会	アジア9か国の高校生の会議「食生活 の考察と改善点の提案」についての報 告	1,2,3,4,5,6, 7,8,9,10,12
19.	10月7日(月) 16:00-16:30	大開小学校	国際科 2年 1名川本 1年 4名 内田・西村 田中・吉田	ラグビーワールド カップ交流会	ラグビーカナダナショナルチームと小 学生との交流会における英語と日本語 の司会を担当	1,3,4,5,10
20.	10月10日(木) 10:00-11:00	こうべ小学校	国際科 2年 1名島崎 普通科 2年 1名 白 木 国際科 1年 2名 小野寺・福家	ラグビーワールド カップ交流会	ラグビー南アフリカナショナルチ ームと小学生との交流会における英語と日 本語の司会を担当	1,3,4,5,10
21.	10月31日(木) 6限	CALL1・2・3	国際科 2年 80名 GS2B	米 ベルビュー市 高校教員3名来校	教員に課題研究の説明と意見交換	1,4,6,7,10
22.	11月15日(金) 16日(土)	関西学院大学 三田キャンパ ス	口頭発表 国際科 1年上原・渡辺 2年桜井・吉田、木 幡 見学1年13名	関西学院大学 リサーチフェア	国際問題などの課題研究口頭 発表 奨励賞 2年吉田・桜井「外国 人技能実習制度の『見える化』と地域 行政」 審査基準 独創性、サーベイ、 内容、方法論、論理性、形式	1,4,6,10
23.	11月16日(土) ~22日(金)	スペイン バルセロナ	口頭発表 国際科 2年白井	World Data Viz Challenge 2019	都市の課題解決にデータを生かす観点 でデータの可視化を基盤とした発表を する。先進事例を学ぶ視察ツアーに参 加	1,3,4,8,9,10
24.	11月20日(水)	神戸市立神港 橋高等学校	3年国際科 8名	道徳の時間	研究発表の通訳参加	1,3,4,5,10
25.	12月8日(日)	KIITO	口頭発表 2年 4名 国際科 3年 3名・2 年 8名・1年 7名 普通科 3年 3名 2年 1名	神戸フォーラム	多文化共生フォーラム キックオフブ レゼンテーション	1,3,4,5,6,7, 10,12
26.	12月15日(日)	神戸市外国語 大学 大ホー ル	1年国際科 23名	全国大学生マーケ ティングコンテスト (MCJ) 見学	テーマ：新たな書く(描く)文化の創 造 ナガサワ文具	1,4,6

27.	12月15日(日) 9:00~16:00	大阪 YMCA (肥後橋)	ポスター発表2年生 3チーム6名 助成 金プロジェクト1年 生1名 2年生1名 見学1年生8名 2年生2名	“One World Festival for Youth!” 2019	ポスターセッション・課題研究発表 助成プロジェクト ブース展示 優秀賞2年 藤川・藤原、 須多・古川 セミファイナリスト人気投票1位 2 年幅・大柳	1,3,4,6,7,10, 12
28.	12月17日(火)	台中市立台中 第一高級中学	2年国際科 80名	課題研究発表プレ コンファレンス	口頭発表、ディスカッション文化交流	1,3,4,7,9,10
29.	12月22日(日)	東京国際フォー ラム	国際科2年 木幡・ 猪熊	全国高校生フォー ラム	ポスターセッション 審査委員長特別賞	1,3,4,6,7,10, 12
30.	12月22日(日) 9:00~17:00	甲南大学 岡 本キャンパス 大阪 YMCA (肥後橋)	ポスター発表 1年8チーム 1年2 チーム 見学者 名1年 34名	リサーチフェスタ	ポスターセッション・課題研究発表 ビッグデータ賞 2年 中島・中川	1,4,6,7,10, 12
31.	12月26日(木) 12:30~16:30	フェニックス ホール・GSル ーム・CALL教 室	口頭発表 ポスター発表 議論・報告 運営	WWL等課題研究 交流発表会	横浜サイエンスフロンティア高校・神戸 市立科学技術高校・六甲アイランド高 校・神港橋高校・須磨翔風高校・県立 御影高校・県立神戸高校・他 参加高校 生147名、教員55名	1,3,4,5,6,8, 10,12
32.	1月11日(金)	大坂教育大学 附属平野校舎	ポスター発表 1年4名	SGH 課題研究発 表会	ポスター発表・口頭発表	1,4,6,7,10
33.	*1月26日 (日)		国際科1年1名 2年1名	関西 SDGs ユー ス・アイデアコン テスト	2030年までの世界を変えるための17 の目標「SDGs」の実現をめざす未来を 担う若者のためのアイデアコンテスト	1,4,6,10
34.	1月30日(木) 5~7限	フェニックス ホール他	1・2年生約200名 3年10名	第1回 WWL フォ ラム	公開授業・課題研究発表会・WWL 1 年次取組発表	1,3,4,6,7,8, 9,10
35.	2月11日(祝) 9:30~16:00	神戸ファッシ ョンマート	ポスター応募3年3 名2年6チーム 1年3チーム 見学1年5名	大阪大学 国際問 題を考える日	基調講演、国際問題に関する研究の実 践発表・ポスターセッション・パネル ディスカッション ポスター発表 最優秀賞 3年 永井・永澤・渡邊桃	1,4,6,10
36.	3月13日(金) ~23日(月) [コロナウイ ルスのため中止]	アメリカサマ ミッシュ高校	2年生 国際科 滝口・須多	サマミッシュ高校 への短期研修	サマミッシュ高校短期研修	1,3,4,7,10
37.	3月18日(水) ~21日(土) [中止]	フィリピン マニラ	1年16名	フィリピン フィールドワーク	マニラ バヤタス地区 聞き取り調査 アテネオ大学訪問、意 見交換、アクセス・ユニカセ他	1,2,3,4,5,6, 7,10
38.	3月21日(土) 10:00~17:00 [中止]	関西学院大学 西宮上ヶ原キ ャンパス	英語口頭発表 2年桜井・吉田 英語ポスター発表 2年 猪熊・木幡	WWL・SGH × 探究甲子園	高校生による課題研究の口頭・ポスタ ー発表・グループディスカッション	1,4,6,7,8,9, 10
39.	3月22日(日)	中垣宅	2年7名 1年1名	The Global Enterprise Challenge	提示された課題に対し解決策として英 語で事業プラン・動画プレゼンテーシ ョンをチームで提出する競技	1,3,4,5,6,8, 9,10,12

C. 英語・外国語関係 コンテスト・発表会など(日程・詳細は要確認) 有志生徒参加 教員引率 *投稿締切日

No	日時	場所	参加者	コンテスト発表会名	タイトル	結果
1.	*7月31日 (水)	ホテルヘリテ イジ	2年国際科3名 角田、畑 フォルシュテー ト	PDWC2020 高校生パー ラメンタリーディベ ート世界交流大会	1「16歳未満の子にソーシャルメディア を禁止するべきかどうか」肯定・否定の どちらかで紙上ディベート (A4 1枚) 2 志望動機動画 (参加者全員出演、各約 30秒程度) を YouTube に限定公開でア ップロード	
2.	8月7日(水) ~8日(木)	ホテル フク ラシア大阪ベ イ	2年国際科 4名 梶原、角田、 須田、畑	全国高校即興型英語デ ィベート合宿・大会	論題は、毎回ディベート開始15分前に 発表 論題は8つ 論題1: All P.E. classes should be outsourced at elementary and junior high schools. 論題2: The number of classes taught by teachers should be reduced by half at high schools and universities, by introducing e-learning. 論題3: Mandatory paternity leave should be introduced. 論題4: NHK should be scrambled. 論題5: Gender and age should be removed in school application forms. 論題6: Companies should encourage employees to wear a skirt at work. 論題7: People should have a microchip implant in their own bodies. 論題8: Companies should introduce the four-day workweek system.	授業の部: 優 勝 角田、畑 ベストディベ ーター賞 梶原 ベスト POI賞
3.	*8月13日 (月) 必着	地区予選: 関 西学院大学 本選: 青山学 院大	国際科1年 福家	第68回チャール杯争 奪全日本高等学校英語 弁論大会	内容自由、5分以内スピーチ原稿および 録音	
4.	*8月23日 (金) 消印	上智大学	国際科1年 カールソン	ジョンニッセル杯 英語弁論大会	“What YOU Can Do Today for Tomorrow”4分以上5分以内スピーチ原 稿および録音	
5.	*9月2日 (月) 消印	京都ノートル ダム女子大学	国際科2年 梶 原	第9回英語スピーチコン テスト	内容自由、5分以内スピーチ原稿	
6.	*9月5日 (水) 17:00		国際科1年 中島	第11回IIBCエッセイコ ンテスト	「私を変えた身近な異文化体験」501語 以上700語未満	
7.	9月7日(土)	暮合高等学校	国際科2年 梶原・中川 国際科1年井本	第34回兵庫県高等学校 英語スピーチコンテス ト市大会	内容自由	優勝井本、 2位中川 3位梶原
8.	*9月9日 (月) 必着	姫路獨協大学	国際科2年 白 井・小島	第32回 姫路獨協大学 高校生英語スピーチコ ンテスト	内容自由、4分以上5分以内スピーチ原 稿および録音	
9.	*9月11日 (水) 必着		1校あたり10編 まで	第58回全国高等学校生 徒英作文コンテスト	1年: A Meal I Will Never Forget (250 ~500語) 2・3年: A Japanese Tradition I Want To Share (301~600語)	
10.	*9月12日 (金)		1学年5篇まで	第22回兵庫県高校生英 文エッセーコンテスト	1年: “A present that made me happy” (350~400語) 2・3年: “What should we do to change our society for the better?” (350~400語)	

11.	10月6日 (日)	関西学院大学	国際科1年 福家	第68回チャーター杯争 奪全日本高等学校英語 弁論大会 西日本大会	内容自由、5分以内スピーチ原稿および 録音	4位福家
12.	10月6日 (日)	姫路獨協大学	国際科2年 白 井・小島	第32回 姫路獨協大学 高校生英語スピーチコ ンテスト	内容自由、4分以上5分以内スピーチ原 稿および録音	
13.	10月13日 (日)	兵庫県学校厚 生会館	国際科2年 梶原・中川 国際科1年 井本	第34回兵庫県高等学校 英語スピーチコンテス ト神戸支部大会	内容自由 5分	優勝梶原 2位中川 4位井本
14.	10月13日 (日)	京都ノートル ダム女子大学	国際科1年梶原	第9回英語スピーチコン テスト	内容自由 5分以内	
15.	10月26日 (土)	尼崎小田高等 学校	国際科2年 赤松・須多・ 梶原・中川	第14回全国高校生英語 ディベートコンテスト 兵庫県予選会	日本国は、残業も含めた週あたりの最長 平均労働時間を(EUに習い)48時間に 制限すべきである。是が非か。	優勝 赤松・須多・ 梶原・中川
16.	11月2日 (土)	明石市民会館	国際科2年梶 原・中川 1年 井本	第34回兵庫県高等学校 英語スピーチコンテス ト兵庫県大会	内容自由 5分	優勝1部井本 2部梶原
17.	11月16日 (土)	加古川東高等 学校	国際科1年 江 川 2年木幡	第22回兵庫県高校生英 文エッセーコンテスト	1年生 2・3年生それぞれに当日与えら れた題について書く。	優秀賞 江川
18.	11月16日 (土)	青山学院大学	国際科1年 福家	第68回チャーター杯争 奪全日本高等学校英語 弁論大会 全国大会	内容自由 5分以内	
19.	11月16日 (土)	上智大学	国際科1年 カールゾン	ジョンニッセル杯 英語弁論大会	“What YOU Can Do Today for Tomorrow”4分～5分スピーチ	
20.	11月23日 (土)	神戸商工会議 所イベントホ ール	国際科1年 毛 東	神戸日米協会 第27回 高校生英語暗唱大会 予備選考会	Tina SeeligがStanford's Online High School の卒業式で行なったスピーチ “Who Will Hold Your Story?”	予選通過
21.	11月下旬		国際科1年	第58回全国高等学校生 徒英作文コンテスト	1年:A Meal I Will Never Forget	入選 1年茨木
22.	12月8日 (日)	奈良県社会福 祉総合センタ ー	国際科2年梶原 1年井本	近畿高等学校英語スピー チコンテスト	内容自由 5分	2位梶原
23.	12月25日 (水) 26日 (木)	共愛学園高等 学校・前橋国 際女子大学	国際科2年 梶原・赤松・ 須多・中川	第14回全国高校生英語 ディベートコンテスト	日本国は、残業も含めた週あたりの最長 平均労働時間を(EUに習い)48時間に 制限すべきである。是が非か。	全国7位 梶原・赤松・ 須多・中川
24.	1月26日 (日)	神戸ポートビ アホテル	国際科1年 手束	神戸日米協会 第27回 高校生英語暗唱大会 最終選考会	平沢和重氏が東京オリンピック招致のた めに行ったスピーチ	
25.	2月9日(日)	神戸市外国語 大学	国際科2年 赤松・須多・ 矢野萌・中川	第13回兵庫県高校生英 語ディベートコンテス ト	日本国は、残業も含めた週あたりの最長 平均労働時間を(EUに習い)48時間に 制限すべきである。是が非か。	3位 赤松・ 須多・矢野 萌・中川
26.	2月9日(日)	国立オリンピ ック青少年セ ンター	国際科2年 梶原	全国高校生英語スピー チコンテスト	内容自由 5分	全国4位梶原

D 学校行事他 12の力を育てる活動 (生徒会・すぎな会・GSS 他による国際・社会貢献活動も加える)

No	日時	場所	参加者	行事	内容	12の力
1.	4月5日(金)	葺合高校 和室	茶道部生徒 国際科 6名 普通科24名	春のお茶会	国境なき医師団に寄付 11と併せて7,766円	2,7,10
2.	4月7日(日) 5月5日(日) 6月2日(日) 7月7日(日) 9月1日(日) 11月3日(日) 1月5日(日) 2月1日(日)	ブルーバレイ	すぎな会 国際科9名 普通科8名	特別養護老人ホームへ の訪問	紙芝居の披露、お話し相手	2,3,7,10
3.	4月12日(金) 13日(土)	神戸市立自然の 家	1年全員360名	1年合宿	オリエンテーション合宿	1,3,5,10
4.	4月16日(火) 7限	フェニックスホ ール	全学年国際科240名	国際科地域別集会	居住地域に分かれて学校生活 や勉強についての不安などの 相談	1,3,5,10
5.	4月27日(土) 13:30-15:30	神戸市外国語大 学	国際科1年8名	兵庫県ユニセフ協会主 催 国際理解講座	「国づくりは子どもたちの未 来から」YouMe Nepal代表者 ラッドさん講演	1,2,7,11
6.	5月11日(土) 5月12日(日)	JR三ノ宮駅・住 吉駅 JR三ノ宮駅	すぎな会国際科6名 普通科2名 国際科2名 普通科4名	あしなが学生募金活動	あしなが学生募金 春の募金 活動	2,10
7.	6月3日(月) ～8日(土)	葺合高校カフェ テリア	TFT 定食276食 TFT サラダ260 食(1学期)	Table for Two	校内食堂にてTable for Twoの メニュー導入	2,4,7
8.	6月5日(水)	WHO神戸セン ター	GSSC health チーム 8名	International Conference での発表 への助言	WHO 医務官 茅野龍馬先生へ のインタビューと発表への助 言「青少年の鬱について」	1,2,12
9.	6月7日(金) 8日(土)	葺合高校	GSS 1・2年 22名	募高祭	課題研究のポスター発表 海外研修・WWLポスター説明	4,7,10
10.	6月8日(土)	葺合高校	国際科 フィリピン フィールドワーク参 加者12名	募高祭 リカの作品販 売ソルト・パヤタスへ の募金 フィリピンフ ィールドワークの報告	特定非営利活動法人ソルト・パ ヤタスへ ¥40,458を募金	1,2,3,5,7,10,
11.	6月8日(土)	葺合高校 和室	茶道部生30名(国 際科6名 普通科24 名)	募高祭	国境なき医師団に寄付 1と併せて7,766円	2,10
12.	6月8日(土)	葺合高校 本館 二階ホール	すぎな会 22名 (国際科9名 普通科13名)	募高祭	特定非営利活動法人テラ・ルネ ッサンスへ¥22,850、古着段ボ ール箱6箱を寄付	2,10
13.	6月16日(土) 9:00~16:30	葺合高校	国際科1・2年生 GSS9名	オープンキャンパス	中学生への学校紹介、体験授業 案内補助、葺合高校の魅力紹介	5,10
14.	6月22日(土)	コープこうべ生 活文化センター	国際科1年4名	兵庫県ユニセフ協会主 催 国際理解講座	「ISは終わったのか」 アジアプレス 玉木英子氏	1,2,7,11
15.	6月22日(土)	神戸市外国語大	国際科1年、2年計	JUEMUN2019(日本	各国の大学生による模擬国連	1,3,7,10

	10:30～ 13:00～	学	29名	大学英語模擬国連大会) 高校生模擬国連ツアー	会議を見学	
16.	6月22日(土)	神戸市外国語大学	国際科1年8名	G20 ユースサミット～Think Locally Act Globally～	国際機関・NPO のブース展示の見学	1,3,7,10
17.	7月20日(土) ～8月30日(土)	アメリカ アメリカ タンザニア ニュージーランド フィンランド イタリア カナダ カナダ カナダ フランス	国際科2年梶田 国際科2年谷川 国際科2年成田 国際科2年加藤 国際科2年木幡 国際科2年前田 普通科2年森内 国際科2年榎木 国際科2年須多 国際科2年園田	トビタテ!留学 JAPAN 日本代表プログラム	アカデミックテイクオフ語学 7/20～8/10 スポーツテニス 7/21～8/10 国際ボランティア 教育 7/21～8/3 アカデミックショート 語学 CA 7/27～8/22 プロフェッショナル福祉 8/2～24 アカデミックテイクオフ 語学ファッション 8/4～24 アカデミックショート 観光業 8/4～8/24 アカデミックテイクオフ ホテルマネジメント 8/4～24 国際ボランティア 動物保護 8/12～30 アカデミック 2018年8月～ 2019年7月	1,4,6,9,10, 12
18.	7月23日(火) ～26日(金)	宮城県石巻市 名取市 福島県飯館村	国際科1年2名 2年8名 普通科1年6名 2年5名 計21名	4校合同東北ボランティア	被災地域の方々との交流、東北福祉大学生との交流、現地の視察	1,2,3,4,5,6, 7,8,10,11
19.	7月23日(火) ～24日(水)	神戸大学 武庫川大学 武庫川女子大学 附属高校	普通科2年2名	科学交流合宿 in 武庫川	各大学での実験・実習及びディスカッション・プレゼンテーション	1,3,4,6,8,10
20.	7月25日(木) 9:00～17:00	神戸大学	普通科2年1名	神戸大学高大連携特別講座	神戸大学各学部の公開発表・授業の参加	1,3,4,6,8,10,
21.	7月24日(水) 25日(木) 26日(金)	西灘保育所・ 倉石保育所・ 神若保育所・ 鈴蘭台南町保育 所・住吉むつみ 保育園・原田児 童館・ふかえ虹 こども園・オリ ンピア都こども 園・ディサーピ スあかね雲	国際科1年3名普通 科1年1名 国際科2年1名 普通科2年5名 普通科3年1名	福祉体験学習(ワーク キャンプ)	保育施設、介護施設・児童館などでの職業体験	1,2,3,4,5,6, 10

22.	7月27日(土) ～8月1日(木)	神戸大学 甲南大学 兵庫県立大学 関西学院大学	普通科1名	ROOT-国際的科学技術 人材育成挑戦プロ グラム	ROOT-国際的科学技術人材 育成挑戦プログラムへの参加	1,3,4,6,8,10
23.	7月28日(日)	都賀川	すぎな会3名 国際科2名 普通科1名	都賀川水難事故犠牲者 を偲ぶ会	都賀川水難事故犠牲者を偲ぶ 会への参加	1,2,3,10
24.	7月28日(日) 8月3・13・23・ 24日 9月15・23日 11月2・3日 1月11日	神戸大学他	2年普通科1名	ROOT プログラム参 加	研究を行う上で大切なこと・最 新の科学について学ぶ	1,3,6,8,9,10
25.	7月29日(月) ～30日(火) (1泊2日)	神戸市立自然の 家	1年87名(国際科40 名普通科47名) 神戸市 ALT 21名 教員5名	イングリッシュサマ ーセミナー	Native Speaker と2日間を共 に過ごし、生きた英語を学び、 コミュニケーションの楽しさ を感じ、異文化への理解や関心 を高める。	1,3,4,5,7,10
26.	7月30日(火) 31日(水) 8月1日(木)	ディサービスあ おたに・東灘在 宅福祉センター	国際科2年1名普通 科2年1名	福祉体験学習(ワーク キャンプ)	保育施設、介護施設・児童館な どでの職業体験	1,2,3,3,4,5, 6,10,
27.	8月1日(木) 10:00～12:00	暮合公民館	1・2年国際科・10名 普通科10名	小学生への英語活動の 支援「英語で遊ぼう!先 生は高校生」	小学生に英語に親んでもら う活動の企画・運営	1,2,3,4,5,10
28.	8月2日(金) ～5日(月) (3泊4日)	神戸市内施設訪 問 市役所・ホ ームステイ	2年国際科2名 普通科1名	韓国・大邱広域市 青 少年親善協力交流事業	大邱広域市の中高生を神戸市 で受け入れ、交流事業を行う	1,2,3,4,7
29.	8月5日(月) 6日(火)7日 (水)	大慈ほまれ幼保 連携型認定こど も園・瀬戸保育 所・渦森台保育 所・東部在宅障 碍者福祉センタ ー・シルバース テイあじさい	国際科2年2名 普通科2年2名 普通科3年1名	福祉体験学習(ワーク キャンプ)	保育施設、介護施設・児童館な どでの職業体験	1,2,3,4,5,6, 10
30.	8月5日(月) 8月6日(火) 8月8日(木) 10:30～16:30	神戸学院大学 ポートアイラン ドキャンパス	5日普通科1名 6日普通科3名 8日普通科1名参加	高校生のための薬学体 験講座	薬学を学ぶのに必要な知識の 習得、及び実験・実習を行う。	1,3,6,8,10
31.	8月6日(火) 13:00～17:00	JICA 関西	国際科1年4名	第16回多文化共生の ための国際理解教育・ 開発教育セミナー	分科会①～③・クロージング	1,2,4,10
32.	8月9日(金) ～12日(月) (3泊4日)	韓国・仁川広域 市	国際科2年4名	韓国・仁川広域市青少 年姉妹都市交流事業	神戸市の中高生を仁川広域市 に派遣し交流事業を行う	1,2,3,4,7
33.	8月11日(日) 13:00～17:00	関西学院大学梅 田キャンパス	国際科2年2名	「自然災害に伴う人道 危機の現在」脅威に立 ち	自然災害と人道危機に関する 勉強会	1,2,3,4,6,10

				ち向かう OCHA と JICA の活動		
34.	8月19日(月) 23日(金) 26日(月)	中央区社会福祉協議会	すぎな会 1年国際科2名	子どもの居場所ボランティア講座	子どもの居場所勉強会、子どもの学習支援体験、振り返りワークショップ参加	1,2,3,4,10
35.	8月21日(水) 8月22日(木)	聾合高等学校 お茶室	普通科5名 茶道部生徒(国際科4名 普通科16名)	オープンハイスクール	中学生の理科体験授業で実験のアシスタントを行う。 中学生・保護者へのお呈茶	1,2,3,4,6,8,10
36.	9月6日(金) 9月7日(土) 9月8日(日)	バンドー青少年科学館	普通科6名	青少年のための科学の祭典	小中学生に対して実習。実験を行い、原理を説明する。	1,2,3,4,6,10
37.	9月17日(火) 放課後	聾合高校 フェニックスホール	1年2年有志4名	インタビュー 助言	Ronya Somesan 氏にタンザニアでのボランティア活動について伺う	1,4,6
38.	9月27日(金) 16:15~17:00	兵庫障害者職業センター	国際科2年5名	インタビュー助言	カウンセラー 新谷正樹氏に「鬱病患者の再就職」についてインタビュー	1,4,6
39.	10月5日(土) 8:30~12:30	聾合高校	国際科1・2年生 GSS 7名	オープンキャンパス	中学生への学校紹介、体験授業案内補助、聾合高校の魅力紹介	5,10
40.	10月7日(月) 16:45~19:00	神戸市精神保健福祉センター	国際科2年3名 白井・矢野・福西	インタビュー 助言	精神科医北村先生・保健師上中係長に神戸市の鬱病の現状と対策について聞く	1,4,6
41.	10月14日(月)	中央区社会福祉協議会	すぎな会 国際科2年1名	支え合いミーティング	中央区ボランティア団体との意見交換会	1,2,3,4,10
42.	10月19日(土) 13:00~15:00	コープ神戸健保会館	国際科1年2名	2019ユニセフセミナー	『子どもの権利とSDGs』 帝塚山大学法学部教授 吉末洋文氏	1,2,4,10
43.	10月20日(日) 10月27日(日)	JR三宮 JR住吉	普通科2年3名、1年3名(JR三宮) 国際科1年3名(JR住吉)	あしなが学生募金活動	あしなが学生募金 秋の募金活動	2,10
44.	11月1日(金)	WHO神戸センター	国際科2年5名	インタビュー 助言	WHO 医務官 茅野龍馬先生へのインタビューと発表への助言「メンタルヘルス」	1,4,6
45.	11月1日(金)	神戸大学	国際科2年2名	インタビュー 助言	神戸大学法学部 斎藤善久先生にインタビュー外国人技能実習生の現状と法律について	1,4,6
46.	11月中旬	聾合高校 食堂	TFT 定食 138食・スープ 59食・サラダ(2学期) 412食	TABLE FOR TWO	校内食堂にて Table for Two のメニュー導入 GSS によるメニュー提案・広報活動	2,4,7
47.	11月24日(日)	兵庫国際交流会館	なぎなた部8名	留学生会館文化祭	武道・なぎなたを演技を留学生に紹介	1,3,7,10
48.	12月6日(金)	神戸市社会福祉協議会	国際科2年2名	インタビュー 助言	地域支援部 くらし支援課課長 鎌田あかね氏	1,4,6
49.	12月7日(土) 13:30~16:00	コープ神戸健保会館	国際科1年2名	兵庫県ユニセフ協会主催 国際理解講座	拓殖大学教授 甲斐信好先生 ジャーナリスト 大津司郎氏による講演「ワタシとアフリカ」	1,4,6

50.	12月8日(日) 14:00~16:30	KIITO ギャラリー	国際科3年3名、 2年8名、1年7名 普通科3年3名、 2年1名	2019神戸コミュニティフォーラム	神戸の共生社会について キックオフプレゼンテーション ファシリテーターを担当	1,2,3,4,5,6,7,10,12
51.	12月25日(水)	わくわく脳の浜ひろば地域福祉センター	国際科1年2名 普通科1年3名	クリスマス カレーランチ会 ボランティア	脳の浜の小学生、高齢者との交流	1,2,3,5,6
52.	12月28日(土)	神戸大学 日越友好協会	国際科2年2名	インタビュー 助言	神戸大学法学部 斎藤善久先生にインタビュー 日越友好協会にインタビュー	1,4,6
53.	1月11日(土)	バンドー青少年科学館	普通科2年5名	科学のつどい	小学生へ実習・製作を行い、科学への興味を持たせる	1,2,3,4,6,8,10
54.	1月31日(金) 16:30~17:30	中央区社会福祉協議会	国際科2年2名	インタビュー 助言	中央区引きこもり高齢者の支援の現状について	1,4,6
55.	2月5日12日 19日(水)7日 14日21日(金)	聾合高校 食堂	TFT 定食 166食 サラダ 136食(3学期)	TABLE FOR TWO	校内食堂にて Table for Two のメニュー導入 2年食物選択者によるメニュー提案・広報活動	2,4,7
56.	2月8日(土)	青陽東養護学校	国際科1年1名 普通科1年2名	せいやうフェスティバルボランティア	青陽東養護学校の文化祭の手伝い	1,2,3,5
57.	2月15日(土) 11:00~13:15	龍池地域福祉センター	国際科1年1名 2年2名	中央区社会福祉協議会 高齢者支援活動への参加	地域高齢者支援活動活動取材 ボランティア	1,2,3,4,5
58.	2月15日(土) 13:30~15:00	兵庫モスク	国際科2年2名 3年4名	モスクの見学・ムスリムの女性と懇談	「モスクでお茶会」見学ツアー	1,2,3,7
59.	3月6日(金) 13:00~15:00 [中止]	聾合高校フェニックスホール・各教室	1年全員 360名	インターナショナルデイ	神戸市 ALT 52名を招き、国際理解のワークショップ、日本文化の紹介	1,2,3,4,5,6,7,10
60.	3月9日(月) 15:00~17:00 [中止]	神戸三宮 さんちか夢広場	国際科2年4名 1年4名	自殺防止街頭啓発活動	神戸市精神保健福祉センター上中係長と一緒にカードなどを配付する	1,2,3,4,5,10
61.	3月14日(土) 10:00~15:00 [中止]	コープこうべ生活文化センター	有志	ユニセフのつどい	ユニセフの水・衛生支援の現場の姿 平和を願う絵本『アネモネ戦争』	1,2,4,10

E 教員研修講座 (大学・企業・NPO との連携)

教員対象

No	日時	場所	対象	講師 使用言語(日・英)	内容
1.	8月8日(木) 9:00~12:00	聾合高校	拠点校 WWL 推進委員他、共同実施校教員	兵庫教育大学大学院教授 西岡伸紀先生	リスクマネジメントの考え方 学校設定教科「学際」他新設科目 共同実施校との連携の計画
2.	8月30日(金)	聾合高校	全教員	京都女子大学非常勤講師 石原純先生	職員研修 課題研究
3.	3月9日(月) 13:30~15:30	聾合高校	拠点校 WWL 推進委員・国際交流担当	神戸大学教授 グリア ティモシー ショーン先生	Society 5.0を見据えた国際交流
4.	3月30日(月)	聾合高校	神戸市立高等学校英語科教員	東京学芸大学 准教授 白倉里美先生	「アクティブラーニングにおけるパフォーマンステストの実践と評価」

F 他校の研究発表会に参加

No	日時	場所	参加者	内容
1.	6月28日(木)	横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校	大野校長・村上教諭	WWL連携について 横浜サイエンスフロンティア高等学校における取組について
2.	8月7日(水)	神戸国際展示場	大野校長・福岡主事・中野主事・茶本教諭・金生教諭	令和元年度スーパーサイエンスハイスクール生徒研究発表会 講演 ポスター発表
3.	8月9日(金)	スイスホテル南海大阪	秋山教諭	島根県立出雲高等学校「普通科高校における全校指導体制での課題研究の推進」
4.	11月9日(土)	JICA 地球広場	石田教諭・長谷川伸教諭	第4回 国際協力・ソーシャルビジネス アジアカンファレンス
5.	11月23日(土)	東京学芸大学附属高等学校	仲村教諭	教科横断的な視点からの教育活動の改善
6.	2月5日(水)	啓明学院高等学校	秋山教諭	SGH 報告会 (「学術研究」発表会)
7.	2月7日(金)	姫路市市民会館	今池教頭	兵庫県立姫路西高等学校 ひょうごスーパーハイスクール課題研究発表会
8.	2月8日(土)	大阪府立千里高等学校	秋山教諭	学習成果発表会「千里フェスタ」
9.	2月9日(日)	神戸大学附属中等教育学校	大野校長・仲村教諭・茶本教諭・秋山教諭・阪田教諭・川上教諭・峯教諭・林美教諭	「授業研究会」「SGH 第5年次報告会」
10.	2月14日(金) 15日(土)	筑波大学坂戸高等学校	村上教諭・伊知地教諭	第1回 WWL 研究大会・第23回総合学科研究大会
11.	2月15日(土)	高槻中学校・高等学校	秋山教諭	第4回アクティブラーニング公開研究会
12.	2月22日(土)	金沢大学附属高等学校	妹尾教諭・坂井教諭	第1回 WWL 研究大会・第29回高校教育研究協議会
13.	3月17日(火) [中止]	広島県立国泰寺高等学校	金生教諭・藤井教諭	令和元年課題研究成果発表会兼 WWL 拠点校・協働校・連携校合同発表会
14.	3月17日(火) [中止]	横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校	妹尾教諭・川上教諭	課題研究発表会
15.	3月20日(祝) [中止]	東京都立南多摩中等教育学校	谷口教諭・井本教諭	WWL 拠点校 成果発表会

G 文部科学省主催の連絡協議会

No	日時	場所	参加	講師 使用言語(日・英)	内容
1.	6月29日(金) 10:00~17:45	筑波大学文京校舎	大野校長・村上・福岡主事	文部科学省調査官他 幹事校管理機関	「令和元年度 第1回 WWL・SGH 連絡協議会」 文部科学省より行政説明 テーマ別分科会

H 教員による外部への研究発表会・報告会

No	日時	場所	会合名	内容	発表者 出席者
1.	6月29日(金) 10:00~17:45	筑波大学文京校舎	文部科学省主催 2019年 第一回 WWL 連絡協議会	「新しい価値観を創造するグローバルリーダーの育成」神戸市の取組発表	大野校長・村上教諭・福岡主事 全国 SGH 校 28名

2.	10月23日(水)	国立オリンピック記念青少年総合センター	全国高等学校教育改革研究協議会	選択協議会 C 「世界で活躍できるトップレベルの人材の育成」	今池教頭
3.	1月30日(木)	暮合高校フェニックスホール	第1回 WWL フォーラム 報告会	WWL コンソーシアム構築支援事業 概要説明・拠点校・共同実施校の取組	福岡主事、今池教頭、清家教頭、渡辺教頭、村上教諭、千葉教諭 他
4.	2月11日(祝)	六甲アイランドファッションマート	国際問題を考える日	ランチョンセミナー 探究活動の取り組み「WWL 拠点校としての取組」	茶本教諭

I 新聞・雑誌・テレビなどのメディア取材・掲載記事

No	発行日	雑誌新聞名	タイトル
1	7月15日(月)	神戸新聞 朝刊	『暮合高生 環境や人権 英語で議論 アメリカなど海外の高校生と』
2	7月15日(月)	国際開発ジャーナル 50号	[大阪大学] 国際公共政策コンファレンスを開催 急速に進むグローバル化の中で若き人材を育成
3	8月28日(水) 8月29日(木)	NHK 18:30~、20:45~ サンテレビ 16:00~ 神戸新聞	東北ボランティア 報告会
4	10月2日(水)	神戸新聞 読売新聞	ラグビー アイルランドナショナルチームと神戸市立西灘小学校生徒の交流イベントの司会・通訳
5	10月2日(水)	NHK 18:30~、20:45~	ラグビー スコットランドナショナルチームと神戸市立明親小学校生徒の交流イベントの司会・通訳
6	10月8日(火)	毎日新聞 J COM デイリーニューズ 17:00, 21:30, 23:00	ラグビー スコットランドナショナルチームと神戸市立明親小学校生徒の交流イベントの司会・通訳
7	2月1日(土)	神戸新聞 朝刊	先進的取り組み授業公開 「暮合高でフォーラム 生徒の自主研究発表も ~ 政策について英語と日本語で話す生徒ら」

J WWL(SGH) 関連来校者受け入れ

No	日時	来校者	内容
1	5月7日(火)	神戸親和女子中学校高等学校 副教頭 勝山元照氏、 副教頭 森上展宏氏、教諭 森啓二氏	SGH の取組、国際交流の取組
	6月19日(水)	富山県立南砺高等学校 英語科教諭 土田俊輔氏、石黒佳奈氏	国際科の取組、SGH の取組、国際交流の取組
2	7月17日(水)	中華人民共和国 東北師範大学付属中学校校長 Yang Jingyun 氏 他4名 通訳1名 親和学園理事長 山根耕平氏 他1名 計7名	SGH、課題研究の取組説明
3	7月11日(木)・12日(金)	生徒保護者・大学教員・SGH・WWL 拠点校教員・学校関係者・教育委員会関係者他 98名	2019 KOBE International Conference at Fukiai
4	9月6日(金) 13:30~16:00	文部科学省初等中等教育局高等学校改革推進室 室長 安彦広奇氏、同参事官(高等学校担当) 付 高橋 宏児氏 神戸市教育委員会教育次長 住谷照雄氏、同学校教育部長 藤原政幸氏、同高校教育担当課長 蔵本朗氏、 同指導主事 福岡浩明氏	授業視察 GS3C 2019 International Conference を振り返って、16の力 Mini-lesson "Artificial Emotional Intelligence" WWL の取組の説明

5	10月23日(水) 13:15~16:00	兵庫県立国際高等学校 英語科教諭 高木公一氏他2名	授業視察(COMA,時事英語) 英語科の取組
6	11月27日(水) 12:30~15:30	石川教育総合研修センター 馬場智子基本研修課長 長谷部美紀教諭(県立大聖寺高等学校)、旭有香教諭(県立小松高等学校)、伊藤圭子教諭(県立小松明峰高等学校)、大川真希子教諭(県立寺井高等学校)	授業視察(COMA, C 英語 I、C 英III)施設見学、国際科の取り組み
7	12月2日(月)	広島国泰寺高等学校(WWL 拠点校) 英語科教諭 森崎雅彦氏	授業視察(情報と科学、C 英語 I、家庭基礎(講演) 施設見学、WWLの取組
8	1月30日(木) 14:00~16:30	兵庫県播磨高等学校 国際理解推進部長・英語科主任 西崎義久氏 英語科教諭 北本とし子氏、上田園恵氏	WWL フォーラムの見学、国際交流、海外留学について
9	1月30日(木) 14:00~16:50	生徒保護者・大学教員・WWL 校教員・学校関係者・教育委員会関係者他 60名	令和元年度 WWL フォーラム

K WWL 運営指導委員会・検証委員会

No	日時	場所	会合名	内容	発表者 出席者
1.	10月15日(月) 15:30~17:00	聾合高校応接室	令和元年度 第1回 WWL 運営指導委員会	令和元年度の取組 課題	教育委員会・運営指導委員・WWL 委員(共同実施校代表を含む) 15名
2.	1月30日(木) 16:50~17:40	聾合高校大会議室	令和元年度 第2回 WWL 運営指導委員会	令和元年度取組の振り返りと来年度の方向性	教育委員会・運営指導委員・WWL 委員(共同実施校委員を含む) 19名
3.	2月7日(金) 17:00~18:30	神戸大学	令和元年度 第1回 WWL 検証委員会	令和元年度 WWL 取組の検証 課題	検証委員・教育委員会・聾合高校 検証委員 7名

資料5 文部科学省葺合高校視察記録

1 授業視察

日時： 令和元年 9月 6日（金）6校時（14:00～14:50）

場所： CALL2 & CALL4

対象： 3年 1組 & 2組 44名（男子11名 女子33名）

指導教諭： 板倉 直人、茶本 卓子、村上 ひろ子、Basia Karpinski、Sam Ramdani

内容：

- ・2019 KOBE International Conference at Fukiai の分野別討議の振り返り。
- ・International Conference で提案した今後の活動の計画についての討議、発表。
- ・新しいトピック「A.I.」の導入。

2 神戸市が取り組むWWL事業に対する質問・指導助言

日時： 15:00～16:50

場所： 応接室

文科省出席者：

文部科学省初等中等教育局視学官、高等学校改革推進室 室長 安彦 広斉氏

文部科学省初等中等教育局参事官（高等学校担当）付 担当 高橋 宏児氏

神戸市出席者

神戸市教育委員会 教育次長 住谷 照雄

神戸市教育委員会 学校教育課長 内藤 康史

神戸市教育委員会 高等教育担当課長 蔵本 朗

神戸市教育委員会 指導主事 福岡 浩明

神戸市立葺合高等学校 校長 大野 毅

教頭 今池 康

教諭 村上 ひろ子

茶本 卓子

校長より神戸市立高等学校の説明

1. パイロット・スクールとしての普通科総合選択制高等学校の創造
2. 神戸らしい国際高等学校の創造 葺合高等学校 国際科 設置
3. 都市型専門教育を実現する高等学校の創造）総合学科高等学校の創造
4. 多様な教育機会を提供するインテリジェント・スクールの創造（昼間部・夜間部）

令和元年葺合高等学校がWWLコンソーシアム構築支援事業の拠点校として全国10校に選ばれ、1年目として取組をしている。

国際科選択科目 GSIIC 2単位

校長が作成した図でGSIICの説明をした。

（話の内容）

・GSIIC（国際科選択科目）地歴公民教員 英語科教員 ALTによる英・日2カ国語チーム・テーチングの積み上げの科目 英語、地歴公民、国語の教科横断的に生徒の資質・能力的に力を身に付け思考力・判断力・表現力を伸ばしていく。

- ・KOBE International Conference at Fukiai が7月11日（木）12日（金）に行なわれた様子（参加校：本校、スウェーデン、アメリカ、オーストラリア、フィリピン、台湾）
- ・本時は、生徒が姉妹校の生徒たちとKOBE International Conferenceで行なったプレゼンテーションとディスカッションの振り返りをする。

（質疑応答）

文部科学省： コンファレンスの参加は葺合高校だけか？共同実施校は参加しないのか

葺合高校： 今回は葺合高校だけの参加。将来は参加するように働きかけたい

文部科学省： これからも継続してこのような会議を開いていくのか？

教育委員会： 予定をしている。更に共同実施校の参加も考え、より大きな会議にしていきたい。

教育委員会： 東京国際フォーラムの参加校は、葺合高校と科学技術高校。

葺合高校： 12月26日（木）本校で共同実施校や近隣の高校、横浜サイエンスフロンティア高校とWWL等課題研究交流会を実施する。

文部科学省： フォーラムで計画段階であるが、英語でディスカッションするリーダーを呼びかけたい。葺合高校に手を挙げて欲しい。

教育委員会： 委員会から質問が3つ、お願いが1つある。

質問1 必修科目がWWLに伴い学際的学校設定科目を設定するが、卒業科目として認定できるか。

文部科学省： 詳細を見て判断する。

教育委員会： 申請書、シラバスを提出しているが、、、

文部科学省： できるだけ早く返事をする。

教育委員会： 質問2 予算案 節の執行について、節をまたいで執行してもよいか。

文部科学省： 増える分、減る分 それぞれの上限20パーセント以内であるならよい。

教育委員会： 質問3 東京フォーラムは、台湾の生徒も参加可能か？交通費は自腹でも参加させたい。

文部科学省： あくまでも日本の事業として行っているの、理解していただきたい。

- 教育委員会： お願いとして、東京フォーラムは英語を使用しなければならないか、日本語でさせて欲しい。
- 文部科学省： 英語でお願いしたい。Q&Aは日本語でもよい。
- 文部科学省： WWLの委員はどんな方々？
- 教育委員会： 大学教授、アシックス、神戸市国際局など高度な学びの有識者に依頼している。カリキュラムアドバイザーとして兵庫教育大学西岡伸紀先生、評価及び検証委員として神戸大学准教授 山下晃一先生に依頼している。西岡教授には、共通課題であるリスクマネジメントに関するアドバイスをいただく。
- 文部科学省： フィリピンフィールドワークを今後どのように運営していくか。授業にも単位として認めるのか、1年生は時期が早々すぎないか。
- 葺合高校： SGHに戻りどのようなフィールドワークを今後どのようにしていくか、検証していく。普通科の生徒も機会を与える。
- 葺合高校： この時期が課題研究の第一歩であり、課題研究の動機づけになる。2年生実施だと部活動にも影響がある。
- 文部科学省： 最大限に効果があるようにカリキュラムを組む。生徒任せでもなく、主体的な学びにするために、教員が仕掛けをつくる。皆がアジアを知ることは大切なこと。持続が可能なプログラムになることを希望する。
- 文部科学省： 文系が学ぶ面での工夫をしているか。大学進学を視野に入れている授業、カリキュラムであるが、大切なことは大学進学後の学びである。WWL コンソーシアム構築支援事業は高校教育を解決する大切なテーマがある。未来の活躍する人材と文理融合の学びが大切である。
- 葺合高校： 文理融合の大切さを感じている。

資料6 WWL 運営指導委員会の記録

第1回 WWL 運営指導委員会の記録

日時：令和元年10月15日 15：30～16：50

参加者：WWL 運営指導委員	浅野 良一（兵庫教育大学大学院教授）
	金居 光由（神戸新聞社 阪神総局長）
	伊藤 卓郎（株式会社アシックス事業管理チーム マネジャー）
	丹沢 靖（神戸市市長室国際部国際課長）
	和田 直樹（神戸市立友が丘中学校長）
葺合高校関係職員	大野 毅（校長）、今池 康（教頭）、村上 ひろ子（国際科長）
	茶本 卓子（教諭）仲村 智子（教諭）
共同実施校関係職員	橋口 徹（科学技術高等学校 教頭）
	清家 豊（神港橋高等学校 教頭）
	渡邊 孝子（須磨翔風高等学校 教頭）
	千葉 章世（科学技術高等学校 教諭）
神戸市教育委員会	蔵本 朗（学校教育部高校教育担当課長）、福岡 浩明（学校教育課指導主事）

令和元年度 WWL コンソーシアム構築支援事業の取組について

【管理機関より】

本年度文部科学省は、WWL コンソーシアム構築支援事業全国10拠点校の1つとして葺合高校を選出した。生徒の頑張りはもちろんのことであるが、先生方のご努力、ご指導と綿密なご準備があつてのことだと思っている。葺合高校を事業拠点校として、事業共同実施校の科学技術高校、神港橋高校、須磨翔風高校が、横浜サイエンスフロンティア高校を含めた海外の連携校と共に事業を行っており、12月26日に予定されている WWL 合同課題研究発表会に向けての取組を進めて頂いていることに感謝したい。運営指導委員の皆様には、SGH に引き続き WWL においても運営指導委員をお引き受けいただいたことに、感謝している。本日は協議、報告を含め7月に開催された「2019 KOBE Internation AL Conference at Fukiai」等について、運営指導委員の皆様から様々なご助言をいただき、本会が実りあるものとなることを願っている。

【WWL コンソーシアム構築支援事業の取組】

WWL コンソーシアム構築支援事業全国10拠点校の1つとして葺合高校を選出された。2014年から2018年までSGHの経験を活かし、更なる充実した取組を事業共同実施校と実施したい。拠点校として WWL の事業役割として下記の事項を挙げる。

- (1) 文理融合を踏まえた拠点校の学際的なカリキュラム・マネジメントの構築
- (2) 事業共同実施校とのネットワーク作り
- (3) 大学・企業・自治体・国際機関等との連携を基盤とする社会に開かれた高度な学びのネットワークの構築
- (4) 事業共同実施校・国内外の連携校と実施する協働グローバル創造事業（ワールド・ワイド・コンファレンス）に向けての準備
- (5) 超未来型グローバルリーダーに必要な資質12のカ「Neo MAKS」による評価及び検証
- (6) 学際的科目の設定に加え、複数の科目で教科間連携テーマ（Risk:リスク）を設定し、計画・実践していく。共同実施校との共通テーマでもあり、課題研究発表会においても共有される。

【2019 KOBE Internation AL Conference at Fukiai の取組】

- ・生徒の3年間の取組の集大成として実施している。

- ・SDGsより「教育」「健康」「経済」「人権」「持続可能性」の5つの分野を設定し、各自興味のあるテーマで課題研究を行っている。

- ・海外姉妹校の生徒とはインターネット等を利用し、前もって意見交換を行っている。

- ・今年度は、全体会は国際科から枠を広げて2、3年普通科及び1年普通科希望者も参加している。

- ・ポスター発表では20点の発表を行った。必ずしも英語の使用にこだわるのではなく、内容を重視し日本語での発表でも可とした。

- ・今年度のサミットのテーマ「地球市民による持続可能な発展のための草の根活動」をさらに深めるため、5つの分野に分かれて発表を行い、最終プレゼンテーションに向けて分野別会議・代表者会議でディスカッションを行った。

- ・最終プレゼンテーションでは各分野からの発表・質疑を行った。

【WWL 等合同課題研究発表会にむけての取組】

- ・須磨翔風高等学校は、キャリアプランニングという授業が3年間あるので、生徒全員が3年間で何度も発表を行っているため、プレゼン能力は高い。今後 WWL の取組を進めるにあたり、生徒達には授業の中でテーマ設定等の取組を通して、レベルの向上に努めて生きたい。

- ・科学技術高等学校本校は、工業高校であり、「ものづくり」が課題研究のテーマであるため、WWL のテーマである「RISK MANAGEMENT」との連携が課題である。都市工学科では防災士を養成する「都市防災」という学校設定科目があり、この教科は他科の生徒も多く受講しており、この教科で学んだことを、自分の科の課題研究等で生かしていくことができる。本日は12月高校生フォーラム発表における担当教員が出席しているので、お話をさせていただきます。

- ・「ものづくり」の観点から4月から9月まで模型を作成して、実際に水害対策しているかどうかの違いを可視化して、その模型を使用して、高校生が小学生に説明するという課題研究を行っている。10月に啓発活動として、神戸市青少年科学館において、総合治水展に参加して、止水対策の重要性や防災への取組向上の重要性について300人以上の前で発表した。今回の経験を生かして、次の発表に繋げて生きたい。「自助」「共助」「公序」という言葉を切り口に、命の大切さを学ばせていきたい。また2年生段階から意識付けをしっかりとさせて、3年生の課題研究に生かす取り組みも行っている。

- ・東京フォーラムにおいて、発表は英語で行う準備をしているが、質疑応答が課題であり、例えば葺合高校の生徒の力を借りる等の連携が出来ればよいと考えている。

- ・神港橋高等学校は開講当初より、「地域とどのように連携していくか」を探究しているが、ファッション、募金活動、観光、食品ロス、少子高齢化等テーマが多くありすぎて、教師側の課題研究に対する理解不足も含めて、現在は調べ学習の域を出ていない。12/26合同課題研究発表会では、2チーム出場するが、地域に伝わる民話を掘り起こして、絵本にする取組を発表予定である（伝承の中には地域の防災に関する話として、例えば「高取山」は津波による浸水被害で、山までタコが押し上げられたことから、「タコ取り山」と呼ばれていた等）。また減災カレンダー作成の取組についても発表予定である。

【協議・質疑】

- ・「答え」に辿り着けなくても、「問い」を立てることが大切だと、西岡伸紀カリキュラムアドバイザーから助言を受けた、たとえ「着地」に失敗しても、生徒が、ワクワクするような体験を広げていくことが大切だと考えている。

- ・「RISK MANAGEMENT」を共通テーマにしたことはとてもよい。

- ・WWL に取組むには、教える教員と取組む生徒の覚悟が必要。

- ・9月に文科省の視学官が来校し、授業を見学した後の話し合いの中身は、教育委員会の努力や他の学校との連携強化する必要性や、カリキュラム開発、今後神戸市としての取組（ふるさと納税等）についての話が主であった。少人数から大人数へ（工業、商業、総合学科等）と広げた事業例は他にないが、市立8高校全体に広がれば面白

- い（六甲アイランド高校はSSHで入れないが）。一番の課題は、取組に対する教員の意識を向上させることである。
- ・「災害対策をどのように生徒に伝えて、生徒自身がどうアクションを起こすか」が、高校生にとって、課題になるのではないかと。
 - ・全国学力・学習状況調査において、今年度初めて「話す力」も問われたが、正答率が低かった。今までは知識を問う形式だったが、今後は作り出す力が問われる教育が必要であり、グローバルリーダーと一般生徒との差（支える生徒の育成）が課題になる。グローバルリーダーを支える生徒の育成については、WWL共同実施校の生徒の課題と言ってもよい。英語だけではなく、日本語のディベート力を向上させるために、多くの教科で実践する必要があるのではないかと。
 - ・全国学力・学習状況調査において、今年度初めて「話す力」も問われたが、正答率が低かった。今までは知識を問う形式だったが、今後は作り出す力が問われる教育が必要であり、グローバルリーダーと一般生徒との差（支える生徒の育成）が課題になる。グローバルリーダーを支える生徒の育成については、WWL共同実施校の生徒の課題と言ってもよい。英語だけではなく、日本語のディベート力を向上させるために、多くの教科で実践する必要があるのではないかと。
 - ・NIEの活用が、課題研究テーマ発見に役立つ。しかも複数の新聞を比較することも大切であり、校内の目立つところに掲示することを習慣づけると、生徒達の課題発見に対する意識が深まり、成績向上にも繋がるという文科省からのデータも出ている。例えば今回の台風19号の被害が、自分の居住地域に発生したらという問いにつながり、科学技術高校の防災士の取組が生きてくる。来年は阪神大震災から25年経過という節目の年であるので、「防災兵庫モデル」というものをつくるべきである。また余談にはなるが、今回のラグビーWCにおける、グローバル教育に対するインバウンドの効果も絶大であったが、外国人への防災情報はどうするべきかという課題も設定できる。つまり課題研究の情報源として、新聞は最適であり、新学習指導要領にも対応可能である。
 - ・WWLの取組案を見て、これだけの事業を行っていることに頭が下がる思いを持っている。ラグビーWCにおいて、暮合高校の生徒が小学生との交流会の司会をされたことを聞いたが、11/17神戸マラソン前日に、外国人選手の歓迎セレモニーを小学校で行うが、その通訳の手伝いもお願いできたら有難い。今後も地域密着のASICSであり続けるので、東京オリンピック、ワールドマスターズ、大阪万博等今後のスポーツイベントと絡めて、課題研究の情報（英語ボランティア等）等も提供可能である。
 - ・今年も12/8 KIITOで開催する多文化フォーラムへの、暮合高校生徒の協力に感謝している。WWLでは「RISK MANAGEMENT」が共通テーマと聞いているが、市役所はリスクテーマの宝庫であり、活用すればテーマ発見に繋がる可能性がある。高校生を含めた若い方々には、行政にはない新鮮な発想があると市長も高く評価している。行政と学生がお互いに深め合い、それが実践に繋がればよいのではないかと。
 - ・今回の10拠点校を見ると、そんなに英語力が高いという印象は持っていない。しかしWWLはSGHよりも大変そうだというのが率直な感想だ。市立高校全体がスクラムを組んで、少しでも前に進めることが大切であり、それが「市立高校の見せ場」でもあると考える。頑張ってください。

【意見・助言等】

- Q：「RISK MANAGEMENT」を共通テーマにしたことはとてもよい。暮合高校はSGHと違い、普通科まで広げること、神戸市立高校3校を共同実施校にしたこと、連携校を海外姉妹校と横浜サイエンスフロンティア高校にしたこと等を含めた大事業に対する「人・モノ・カネ」、そして、教える教員と取組む生徒の覚悟を聞かせてほしい。
- A：確かに今までの国際科だけの少人数ではないので、取組に対する覚悟はあっても実力差はある。
- A：私は暮合高校の教頭として、SGHの初年度の対応をしたが、WWLとの違いを感じている。9月に文科省の視学官が来校し、授業を見学した後の話し合いの中身は、教育委員会の努力や他の学校との連携を強化する必要性や、カリキュラム開発、今後神戸市としての取組（ふるさと納税等）についての話が主であった。少人数か

ら大人数へ（工業、商業、総合学科等）と広げた事業例は他にないが、市立8高校全体に広がれば面白い（六甲アイランド高校はSSHで入れないが）。一番の課題は、取組に対する教員の意識を向上させることである。

- A：神港橋高校は4年目の新しい商業高校であり、生徒達は商業を学びに入学している。教員、生徒共にWWLの取組に対する覚悟はまだないが、課題研究を切り口に今後広げていく予定である。
- A：文科省からの委託金として、初年度は1千万委託されているが、次年度の金額は、今年度の取り組みの成果次第である。またSGHと支出方法が大きく違う（例えば生徒海外研修については、交通費のみ等）ので、文科省に一つ一つ確認しながら行っているが、文科省WWL担当者が10月1日付けで突然異動になった。WWLは拠点校ではなく、管理機関（教育委員会事務局）が主導しなければならないが、教育委員会事務局に関しても、昨年高校籍の主事は4名だったが、今年度は1名減で対応していることもあり、厳しい状況にある。一方で今年度は神戸市とDOCOMO、ASICSが事業連携協定を締結した中で、共同実施校の科学技術高校が「KOBEスマートランニングサービス」で、スポーツデータのIT教育活動を行っており、その成果を姉妹都市であるバルセロナ市にて開催される、国際連携ワークショップにて発表することになった。その際暮合高校の生徒も発表することとなり、WWLの理念である「文理融合」と合致する取組に発展している。

Q：今回はSGHと違い、英語が前面に出ていないが、この件についてはどうか。

A：今後高校生フォーラムを含めた発表の場において、英語発表は当たり前になっている。

Q：本日は共同実施校の担当である、教頭先生が参加されているので、今までの取り組みと12月の合同課題研究発表会にむけての取組についてお話しください。

A：須磨翔風高校は、キャリアプランニングという授業が3年間あるので、生徒全員が3年間で何度も発表を行っているため、プレゼン能力は高い。今後WWLの取組を進めるにあたり、生徒達には授業の中でテーマ設定等の取組を通して、レベルの向上に努めて生きたい。

A：本校は工業高校であり、「ものづくり」が課題研究のテーマであるため、WWLのテーマである「RISK MANAGEMENT」との連携が課題である。都市工学科では防災士を養成する「都市防災」という学校設定科目があり、この教科は他科の生徒も多く受講しており、この教科で学んだことを、自分の科の課題研究等で生かしていくことができる。本日は12月高校生フォーラム発表における担当教員が出席しているため、お話をさせていただきます。

A：「ものづくり」の観点から4月から9月まで模型を作成して、実際に水害対策しているかどうかの違いを可視化して、その模型を使用して、高校生が小学生に説明するという課題研究を行っている。10月に啓発活動として、神戸市青少年科学館において、総合治水展に参加して、止水対策の重要性や防災への取組向上の重要性について300人以上の前で発表した。今回の経験を生かして、次の発表に繋げて生きたい。「自助」「共助」「公序」という言葉を切り口に、命の大切さを学ばせていきたい。また2年生段階から意識付けをしっかりとさせて、3年生の課題研究に生かす取り組みも行っている。

A：東京フォーラムにおいて、発表は英語で行う準備をしているが、質疑応答が課題であり、例えば暮合高校の生徒の力を借りる等の連携が出来ればよいと考えている。

A：神港橋高校は開講当初より、「地域とどのように連携していくか」を探究しているが、ファッション、募金活動、観光、食品ロス、少子高齢化等テーマが多くありすぎて、教師側の課題研究に対する理解不足も含めて、現在は調べ学習の域を出ていない。12/26合同課題研究発表会では、2チーム出場するが、地域に伝わる民話を掘り起こして、絵本にする取組を発表予定である（伝承の中には地域の防災に関する話として、例えば「高取山」は津波による浸水被害で、山までタコが押し上げられたことから、「タコ取り山」と呼ばれていた等）。また減災カレンダー作成の取組についても発表予定である。

第2回 WWL 運営指導委員会の記録

日 時：令和2年1月31日 17:00～17:50

参 加 者：SGH 運営指導委員	浅野 良一（兵庫教育大学大学院教授）
	金居 光由（神戸新聞社 阪神総局長）
葺合高校関係職員	伊藤 卓郎（株式会社アシックス事業管理チーム マネジャー）
	丹沢 靖（神戸市長室国際部国際課長）
共同実施校関係職員	和田 直樹（神戸市立友が丘中学校長）
	大野 毅（校長）、今池 康（教頭）、村上ひろ子（国際科長）
神戸市教育委員会	茶本 卓子（教諭）仲村 智子（教諭）
	橋口 徹（科学技術高等学校 教頭）
	清家 豊（神港橋高等学校 教頭）
	笠谷 忠幸（神港橋高等学校 教諭）
	渡邊 孝子（須磨翔風高等学校 教頭）
	千葉 章世（科学技術高等学校 教諭）
	蔵本 朗（学校教育部高校教育担当課長）、福岡 浩明（学校教育課指導主事）

【WWL 1年間の成果と課題】

（管理機関より）

SGH 事業で高校生国際会議「四大陸サミット」を開催してきたが、WWL 事業においても「インターナショナル・コンファレンス」を実施し、2年後集大成として開催予定である「ワールドワイドコンファレンス」に向けての協力をお願いしたい。昨年12月22日（日）に東京で開催された全国高校生フォーラムでは、拠点校葺合高校、共同実施校科学技術高校、連携校台中一中がポスターセッションを行った。拠点校、共同実施校、連携校がそろって発表した神戸市の取組に対する評価は高く、審査委委員長特別賞を受賞した。

【協議1】令和元年度の取組の振り返りと、来年度の方向性について

（管理機関）

成果としては、葺合高校がSGHで培ってきたノウハウを生かしながら、拠点校と共同実施校の協同事業として、神戸市の姉妹都市バルセロナ市への生徒派遣、神港橋高校での「道徳の日」などで共同事業を展開できた。特に、全国高校生フォーラムにおいて、葺合高校、科学技術高校、海外の連携校である台中第一高級学校が参加発表し、合同チームとして審査員特別賞を受賞できた。また、「第1回 WWL 等課題研究交流発表会」においては、共同実施校・連携校だけでなく、近隣の高等学校からも多数の参加を得て、WWLを介したALネットワークを構築することができた。そしてSGH事業「四大陸サミット」に続き、インターナショナルカンファレンスを開催できた。一方課題としては、高校生へ高度な学びを提供する仕組み（ALネットワーク）を、より大きく、強固にすること、大学からの単位認定を推進すること、WWL 特例を利用した、文理融合を踏まえたカリキュラムマネジメントを編成することです。以上が成果と課題になります。

（葺合高校）

成果としては、共同創造活動がSGH事業以上に展開できた。生徒満足度が高い。今までは葺合高校だけアンケートを取っていたが、今年度は参加した他校の教師や生徒も調査した結果をフィードバックしていきたい。課題は高度な学びの部分で、文科省は大学における学びを高校生に提供し、単位認定等の仕組みを作りなさいとしているが、そ

れが難しい。大学の先生方からの講義やワークショップは充実したものとなっているが、単位認定を生徒が求めているとは感じられない。文科省の考えとのGAPがある。

（科学技術高校）

当初は生徒だけでなく、教員もどうしてよいかわからなかったが、成果としては工業高校で英語が苦手な生徒たちが、全国高校生フォーラムにおいて英語で発表をして、結果として審査員特別賞を受賞できたことが生徒の自信に繋がった。課題としては、教員が意識改革をして、WWL等の新しい取組に対してより積極的に取り組むことであり、また生徒の英語に対する苦手意識をなくしていくことです。

（神港橋高校）

学校内で課題研究するにあたり、教員の専門分野の違いがあると指導ができない部分があるので、例えば商業の生徒が工業の先生の助言を受ける。工業の生徒が葺合の英語の指導を受けるといった拠点校、共同実施校の壁を越えた指導がより活発になれば、さらに高度な学びに発展するのではないかと

（神港橋高校）

「道徳の日」の取組において、「震災」をテーマとして、外国語で災害を知らせる放送に対して、どのような行動を起こすかを発表した。葺合高校の生徒が8名参加したことで新たな発見もあり、深い学びにつながった。現在「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」に手を挙げているが、今実践していることの幅を広げる中で、他の学校との交流を継続していきたいので、今後も勉強させていただき、それを学校に持ち帰りたいと思います

（須磨翔風高校）

総合学科は普通科と専門学科とシステムが大きく違い、専門学科が100科目あるので、本校は主に授業の中味を深めた探究活動を実践（高校生が小学生に英語を教える、生徒が教案を作って授業を行う等）しているが、より深めるという意味でWWL共同実施校として参加している。探究活動を行うにあたり、次年度からは教員と生徒全員に『探究メソッド』を持たせる。注意する点として、「マジックワード」に惑わされないように注意しながら、総合学科としての特色を生かして学びを深めていきたい。本校もWWL等課題研究交流発表会に参加したが、本日葺合高校と科学技術高校が共同で「バルセロナ研修」の発表をしている姿を見て衝撃を受け、学校同士の交流の必要性を再確認した。また本校教員、生徒から楽しかったという感想を耳にして、今まで学校内で完結していたが、外に踏み出すという点で、次年度に向けて新たな第一歩が踏み出せたと感じている。（交流しながら視野を広げていきたい）

【協議2】 第1回運営指導委員会で提起された課題についてのその後について

- ・カリキュラムマネジメント（特に教科横断）
- ・教員の意識改革
- ・共同実施校との連携「Risk MANAGEMENT」についてはいかがでしょうか。

（管理機関）

WWLに採択されるにあたり、共同実施校教員からのハレーションが一番懸念されたが、若手教員が協力的であったことに助けられた。今後もWWLを通して、生徒→若手教員→ベテラン教員と良い変化が連鎖していけばよいかなと考えている。

（科学技術高校）

機械工学科、電機情報工学科、都市工学科、科学工学科の4科があるが、教科横断を行おうという雰囲気は若い教員の中に見出すことができるが、それをチームにしていくことをしなければ、次のステップに進めない。現状は

単発と言わざるを得ない。

(神港橋高校)

具体的にカリキュラムマネジメントが進んでいるというところまでは到達していないが、道徳教育を推進する中で、総合的な探究の時間で取り組んでいる「答えのない問い」に対して、アクティブラーニングを用いて生徒にアプローチすると、生徒は自分の意見を聞いてもらうことに喜びを感じている。それを体験した先生方が普段のHR、授業でも同様の実践を行うようになった。そういった部分をカリキュラムマネジメントに活かしていかなければならないだろうと感じている。

(須磨翔風高校)

今は授業改善に取り組んでいる。パフォーマンス評価については昨年から取り組んでおり、行事の精選も行っている。

(葦合高校)

「Risk」を社会問題として大きく捉えて、できるだけ多くの学校に参加して頂いている。「Risk」にはマイナスイメージがあるので、西岡カリキュラムアドバイザーに講演して頂き、社会問題全般というスタンスは取りつつ、解決策の一つとして「Risk MANAGEMENT」を視野に入れたい。

【運営指導委員会より】取組に対する評価、アドバイスや支援のあり方に関するご感想・ご意見等

- 多くの学校が集ったコンソーシアム構築は画期的なことである。また本年度姉妹都市バルセロナとの交流は、国際課としてもありがたい。次年度は姉妹都市ブリスベンとは35周年、韓国仁川市とは10周年になるので、これに関しても記念行事を行う予定なので、何らかの協力等お願いしたい。

- 10年前とは様変わりした高校の授業を見て、驚いている。中学校でも「自分の意見を論理立てて相手に伝える」ということは行っているが、高校入試が前提となった授業展開をしているので自由度が少なく、「なぜそのような意見になるのだろうか」という問いを深める部分がない。とはいえ今後は変化が求められるであろう。

- 葦合高校、科学技術高校合同の「バルセロナ研修」のプレゼンが大変良かった。日本語を使用した発表を行うことは、葦合高校普通科のためになり、学校全体の底上げになる。拠点校と共同実施校4校違った特色が混ざり合うことで、取組内容が良くなっている。引き続き NIE（新型コロナウイルス等最新のニュースの活用）を大切にしてほしい。スポーツ界では15~20歳の活躍が顕著であり、その原因を皆で話し合うことや、生徒をその気にさせることは大切である。「みんなで仲良く楽しく」盛り上がる授業を目指してほしい

- 日本語と英語による政策論争の授業において、役割を決めて英語と日本語を1分間ずつ行っていることが興味深く、50分間の授業が速く感じた。台湾研究とバルセロナ研修は、現地を訪問したことが宝物である。高校生なので仕方がない部分はあるが、内容面では突っ込みどころ満載である。今後は質問者を設定しても良いので、「質問する力」をつけてほしい。するとそれが臨機応変に「答える力」につながる。また今年からゴールドenspoots イヤーが始まっているが、オリンピックに向けて、多くの国のチームが神戸でもキャンプを行う。ラグビーWC同様に、交流をするべきである。

- 拠点校、共同実施校がそれぞれに蓄積した材料で発表交流することで、各校の持ち味（特色）が明確になる。今回の取組は1人が100歩ではなく、100人が2歩というイメージで、面積でいえば、かなり力がついている（裾野が広がった）。生徒の成長のために今後も他校等との交流とコンテストへの参加は大切である。

意識改革については2ルートあり、若い教員がその気になって校内で動きを作り、ベテランが巻き込まれていく方法と、生徒に刺激を受けて、教師が変わることである。

大阪府では北野高校が採択されているが、橋本前知事（市長）がTOP10校を強引に交流させた。なんでも最初は無理やりやるしかない

生徒の満足度が高まったことは良いことである。成果を取組ごとに「NEO MAKs」に照らし合わせて達成度をチェックし蓄積していくことも大切である。生徒がどのように変容していくか周りにもアピールし、生徒にも自信をつけさせたい。取組の内容を、なるべく公の場で行うことが大切であり、その発表のパフォーマンスを評価してほしい。連携のメリットとしては、教員も変化できることである。

本日皆さんの話を聞いて、初年度の取組は結論として、順調にはスタートできており、上昇気流の不安定さを乗り越え、安定気流に乗りつつある（墜落はもうありえない）と考えて、自信をもって取組を押し進めてほしい。

- 今年度の取組は本日をもって終了し、今後は報告書の作成と次年度の計画を文科省に提出するという流れである。4月当初、WWL採択にあたり、市立高校校長の協力はすんなりと得られたが、教頭先生方、担当の先生方が大変な思いをされて、ハレーションもあったのではないかと拝察いたしますが、市立高校それぞれの特色の花を咲かせる一つの契機としてWWLがあると考えている。SELHI、SGHは単独事業であったが、WWLは連携を組むことで今までとは違う効果が出てきた。特に12月26日WWL等課題研究交流発表会では、県立、私立も参加し、終了後の達成感は大きいものであった。生徒は確実に変わりつつあるが、教員にはまだ温度差があり、少しずつやっていくしかない。新学習指導要領では様々な人と協働して学びに向かう力を求められているので、WWL事業を通して、市立高校全体の底上げができればよいと考えており、来年度も運営指導委員の皆様のご協力をお願いするとともに、教育委員会、先生方からのご協力もお願いする。

資料7 WWL 検証委員会の記録

第1回 WWL 検証委員会の記録

日時：令和2年2月7日 17：00～18：30

参加者：検証委員	山下 晃一（神戸大学教授）
葺合高校関係職員	大野 毅（校長）、山内 紫乃（教頭）、村上 ひろ子（国際科長）
	仲村 智子（教諭）
神戸市教育委員会	蔵本 朗（学校教育部高校教育担当課長）、福岡 浩明（学校教育課指導主事）

1. WWL 構築支援事業検証委員会開催要綱の説明

2. 【文部科学省 WWL 事業採択に関する総合所見】説明

（評価された点）

- ・神戸市教育委員会のこれまでの、資源、強み、国際的な地域社会、SGH の経験を最大限に活かし、グローバル人材育成と組織能力強化にむけたWWL コンソーシアム構築支援事業に対する姿勢と実施能力を評価する。
- ・神戸市の特色ある市立高校とも共同実施を行うため、互いに補い合えるところも大いにある。
- ・全体を足すと、対象となる生徒数はかなり多くなるのも効果的である。
- ・社会との繋がりも考慮に入れ、成果発表会などもそのような視点から計画されている。
- ・大学や企業なども取り込み、先進的な計画となっている。
- ・SGH の成果を踏まえ、グローバルリーダーの資質・能力が明確にされており、それに応じたAL の構築が計画されており高く評価する。
- ・生徒一人ひとりのグローバル人材としての成長を捉えて、さらなる成長を支える教育を期待する。
- ・教育委員会が主導し、従来のSGH の取組を発展させる形で計画が練られていて、事業を進めやすい下地ができている。
- ・今までのSGH の経験を踏まえつつ、発展させている。連携の点から見ると、更に発展させる計画となっていて、その実現可能性も高い。
- ・神戸市の体制を十分に取り入れ、NPO 等の連携もあり、優れた計画である。
- ・SGH の取組で構築されたグローバルリーダー像が、MAKS でまとめられており大変わかりやすい。
- ・「リスク」を切り口にして学習者が問題を認識する取組が大きく評価できる。
- ・既に神戸市が進めている大学との互換制度などを活用していく方向性が評価できる。

（課題とされた点）

- ・事業共同実施校及び事業連携校（国内外のどちらも）の役割も取組内容も明確ではないことから、この点を明確にする必要がある。
- ・高等学校においては、文理のいずれもバランスよく学ぶ環境を整えることで、個々生徒の資質・能力を伸ばしていくことが重要である。
- ・本事業を実施する際には、いずれの学年・コースにおいても、文系・理系を問わず、数学科、理科、地理歴史科、公民科等の幅広く、様々な教科を履修できるような教育課程の編成を行うこと。
- ・今後世界展開していくうえで、Neo MAKS のS "Skills" を言語力としている点を再考する必要がある。
- ・協力機関が多岐にわたるため、具体的な連携計画が必要である。

（以上の評価と課題を踏まえた令和元年度の取組について説明した）

3. 令和元年度事業実施計画について説明（管理機関・拠点校）

4. WWL 事業における教育課程の特例に関する取組の説明

- ・WWL 事業終了後も運用することを鑑み、持続可能な教育課程を編成する必要がある。次年度も西岡カリキュラムアドバイザーの指導も仰ぎながら、事業終了後も学校設定科目として運用できる編成を考える必要性を説明。

5. 第1、2回運営指導委員会の内容報告

- ・管理機関、拠点校、共同実施校の取組報告に対して、運営指導委員からの指導助言等を報告。

6. 協議・質疑

- ・「Neo MAKS」12 の力は、1年で伸びるとは考えにくい。共同実施したところにはアンケート回答を求めているが、共同実施校にどこまで求めるのか考えないといけない。
- ・「Neo MAKS」12 の力を伸ばすためには、具体的に生徒のエピソードを入れながら発信していくことが大切である。
- ・生徒は、自分に必要な力（Neo MAKS 12）を自分で選びとっている。人の役に立ちたいと思っている生徒は多い。
- ・「Neo MAKS」12 の力のうち、「Neo」①普遍的正義感 ②新しい価値の創造をどのように伸ばせばよいのか難しいが、知らなかったことを知ることや、求めようとするからこそ価値があるのではないだろうか。
- ・研究開発1年間の実績は、これまでの蓄積の成果であり、目に見える形に残して結果が出ている。
- ・生徒へアンケートを実施すると、生徒は控え目に回答するものであり、生徒の力が伸びたという実感を教師が持てるのがよい。
- ・アンケートの結果から、下がったところは気にしないでよい 7月～12月で数字が上がっているところに目を向ければよい。7月～12月に変化を求めることは難しい。
- ・国際科は、アンケート記述には国際会議やフィールドワークを記入するが、普通科は、文化祭や部活動と記述し、科によって経験の違いがあるのではないか。
- ・生徒の変化が教師の生きがいとなり得るため、気づきのチャンスをより積極的に教師が出していくことが必要。
- ・先生方に12のMAKSのスキルをきちんと理解してもらうこと必要である。
- ・SGH のノウハウが生かされた点としては、課題研究の方法やディスカッションの進め方を3年生が1年生に教えることで、運営がスムーズになったことがあげられる。学年を越えて縦のつながりを持たせるために、意図的にイベント等は1～3年生を幅広く募集した。
- ・学年を越えて先輩が教える良い効果があり、高校教育の原点となっている。
- ・初年度となった今年度は、SGH からの交流のある学校が、12月に行われた交流会に参加することで、輪が広がり刺激になった。
- ・1年目の難しさとしては、当初はどのように進めてよいか分からず心配されたが、結果としては拠点校、共同実施校が連携した取組を実施できたのではないかと。
- ・事務局との連携は、毎回校長会で報告している。
- ・SGH は、英語が主体だったのが、より普通科にも広がっていった。
- ・教師側が、海外の生徒が来る意味はどこにあるのかなど、英語となるとシャットダウンをしてしまうこともあるが、英語で行う意義もある。教員研修を行っていく必要性もある。
- ・葺合高校普通科生徒、共同実施校生徒が発表することを鑑み、英語と日本語を折衷することも視野に入れるべき。
- ・「リスクマネジメント」を共通のテーマとし、当初より、社会問題や「学際国語」で「災い」を扱っている。
- ・「リスク」は、ポジティブな理念あり、教育にはリスクマネジメント入れないといけない。
- ・今まで以上に多くの教員を巻き込んだことは、評価できると思う。
- ・外部・市民への発信をどうしていくのが課題となる。
- ・教師の自己満足は、他者満足になる。自信を持って事業に取り組んで欲しい。

資料8 メディア報道

葦合高生 環境や人権 英語で議論

神戸 環境や人権に関する問題を海外の高校生と英語で議論するイベントがこのほど、神戸市中央区野崎通1の葦合高校であった。生徒約50人が5カ国・地域にある姉妹校の高校生10人と話し合い、解決方法を提案した。

アメリカなど海外の高校生と外国人の生徒らの質問を受ける葦合高校の生徒たち(右)＝神戸市中央区野崎通1

法を提案した。アメリカワシントン州ワシントン州の生徒を招き、環境「人権」「教育」「健康」「持続可能性」の4テーマで話し合った。

人権問題は、インタネット上のいじめ問題について議論。台湾の生徒は従来のいじめの比較をしながら、生徒が道徳心を失った責任を話した。オーストラリアの生徒は対策として「いじめがあった場合に罰金や退学処分を提案。日本の生徒はいじめを予防する問題意識が大切」とが原因になっていると指摘した。

同校国際科3年の宮内優菜さんは「私はまだまだできる解決策を、同世代の外国生徒との話し合いで見つけた」と話した。(川村恵巳)

頑張れ アイルランド代表 児童ら交流

ラグビー・ワールドカップ(W杯)日本大会で、3日に神戸市で行われるアイルランド対ロシア戦を前に、アイルランド代表チームが1日、灘区グラウンド(神戸市東灘区)で市立西灘小の6年生と交流した。

この日は、選手がチームエンブレムのクローバーのイラストが入ったキーホルダーやピンバッジをお土産として児童らに手渡し、一つ一つにサインした。児童らは「頑張って」「ファイト」などと声を掛けて、拍手で選手らを送り出した。

通訳を務めた葦合高2年の日本修平さん(17)は「世界トップレベルのチームとの交流の機会になれてうれしい」と話した。

この日は、海外メディアもアイルランド代表チームを密着取材した。

選手の迫力にびつくり アイルランド代表と交流

ラグビー・ワールドカップ(W杯)日本大会で、3日に神戸市で行われるアイルランド対ロシア戦を前に、アイルランド代表チームが1日、灘区グラウンド(神戸市東灘区)で市立西灘小の6年生と交流した。

この日は、選手がチームエンブレムのクローバーのイラストが入ったキーホルダーやピンバッジをお土産として児童らに手渡し、一つ一つにサインした。児童らは「頑張って」「ファイト」などと声を掛けて、拍手で選手らを送り出した。

通訳を務めた葦合高2年の日本修平さん(17)は「世界トップレベルのチームとの交流の機会になれてうれしい」と話した。

この日は、海外メディアもアイルランド代表チームを密着取材した。

協働グローバル事業：インターナショナル・カンファレンス (7月15日 神戸新聞)

選手のパス 迫力に感激

スコットランド代表選手らと交流した市立明親小の児童ら

スコットランド代表選手らと交流した市立明親小の児童ら

明親小の児童らとスコットランド代表選手ら

明親小の児童らとスコットランド代表選手ら

協働グローバル事業(ラグビーワールドカップ)：アイルランドナショナルチームと神戸市立西灘小学校生徒の交流イベントの司会・通訳(10月2日 神戸新聞(上上) 読売新聞(上下))

スコットランドナショナルチームと神戸市立明親小学校生徒の交流イベントの司会・通訳(10月8日毎日新聞 左)

FLASH

開会式表彰式

審査委員長特別賞(文部科学広報第243号)

審査委員長特別賞(文部科学広報第243号)

審査委員長特別賞(文部科学広報第243号)

先進的取り組み授業公開

葦合高でフォーラム 生徒の自主研究発表も

政策について英語と日本語で話す生徒ら

葦合高でフォーラム 生徒の自主研究発表も

政策について英語と日本語で話す生徒ら

協働グローバル事業：全国高校生フォーラム 審査委員長特別賞(文部科学広報第243号)

AL ネットワーク：「葦合高でフォーラム 生徒の自主研究発表も ～ 政策について英語と日本語で話す生徒ら」(2月1日神戸新聞 朝刊)



令和元年度 WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム

構築支援事業 研究報告書 第1年次

発行日 令和2年3月

発行者 神戸市教育委員会